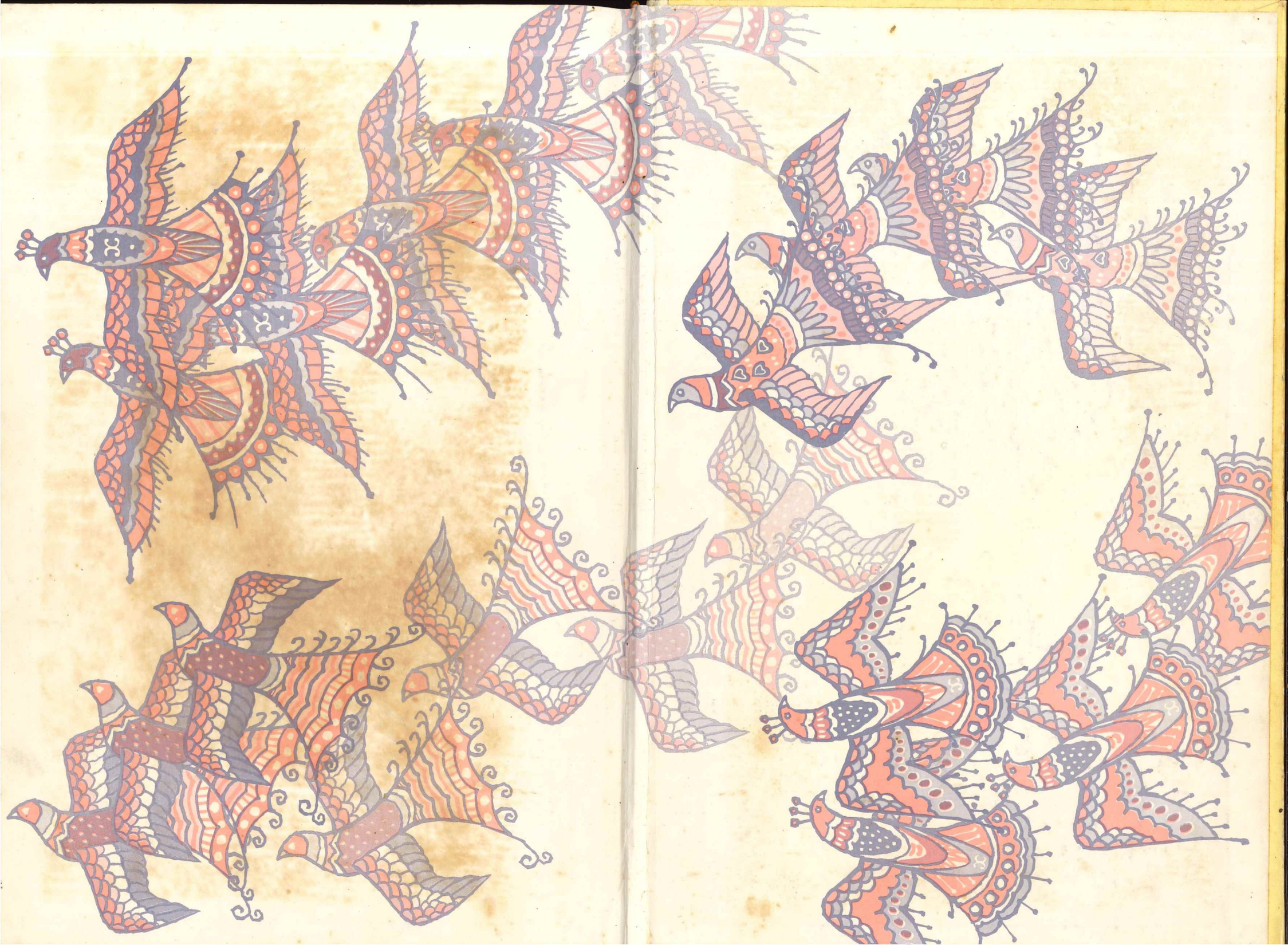
少年少女
世界の文学

宇宙戦争
シャーロック・ホームズの冒険

7

河出書房

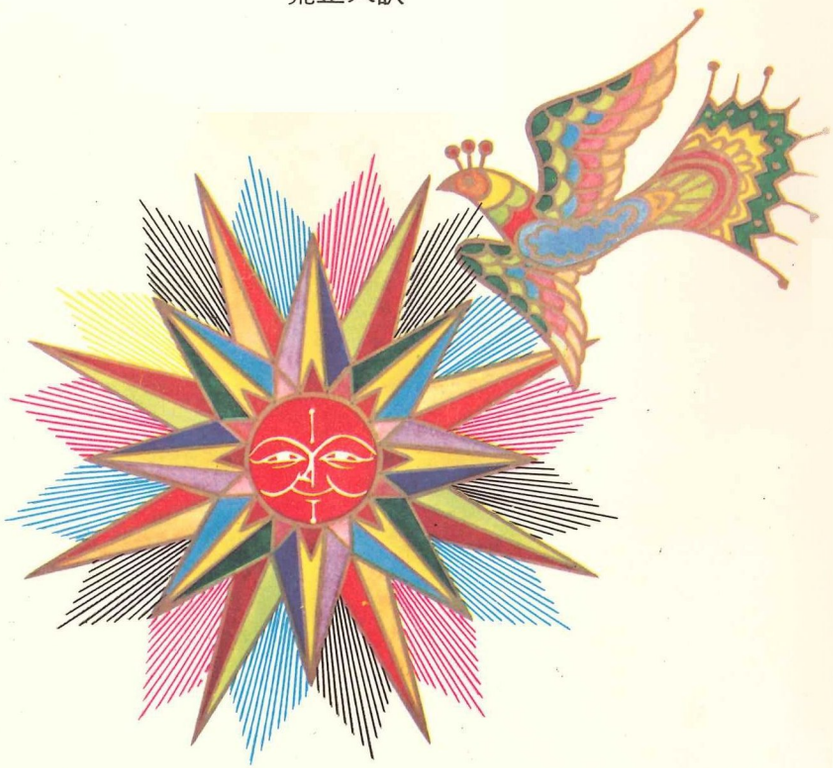


少年少女世界の文学

7

シャーロック・ホームズの冒険
宇宙戦争

C・ドイル
阿部知二訳
H・G・ウエルズ
荒正人訳



河出書房

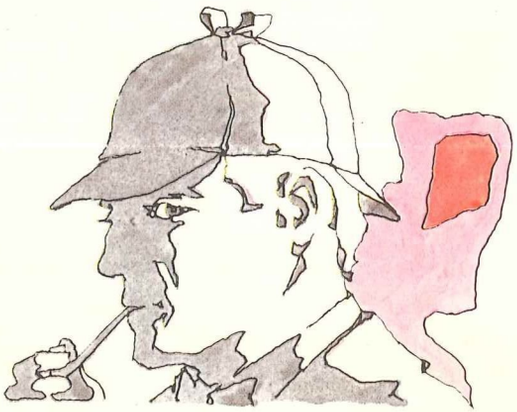
少年少女世界の文学 7

もくじ

責任編集

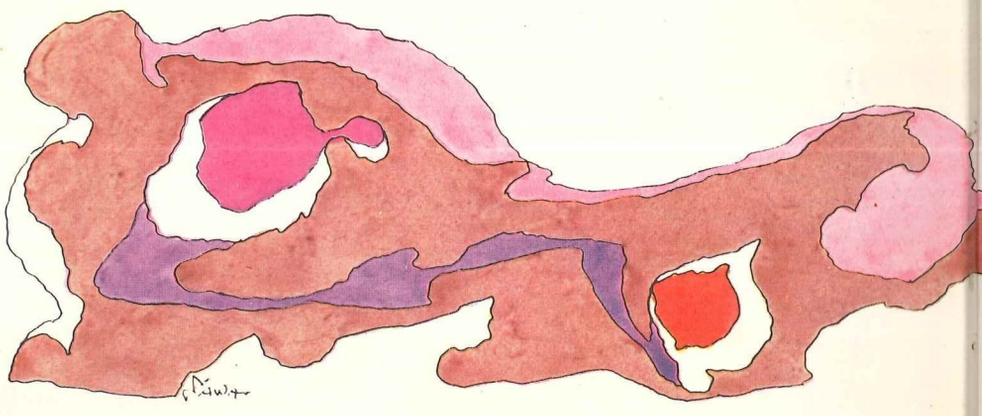
福原麟太郎
川端康成
阿部知二
桑原武夫
犬養道子

装幀
沢田弘



シャーロック・ホームズの冒険……C・ドイル　阿部知二訳……9

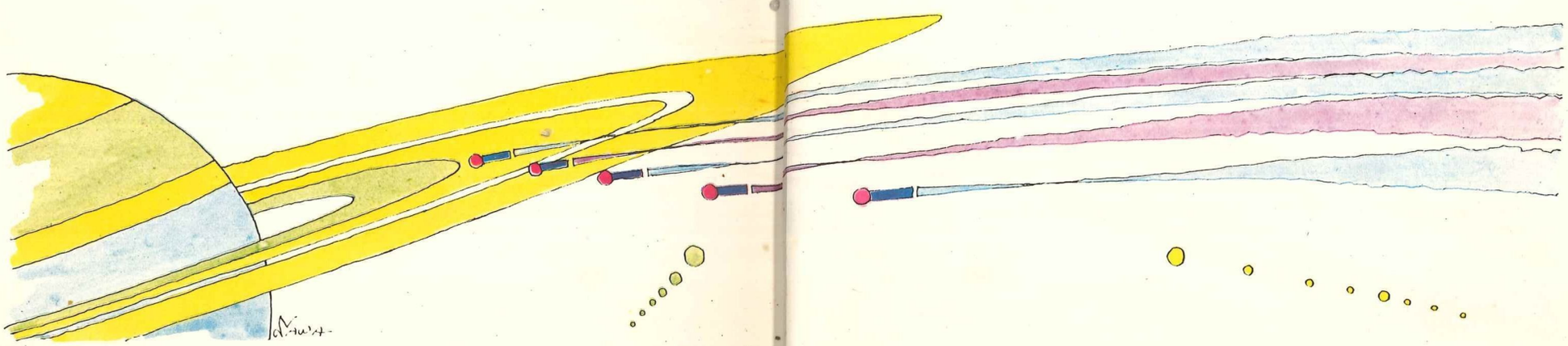
ホームズとわたし……11
赤毛連盟（あかげれんめい）……12
五このオレンジのたね……38
青（あお）いルビー……58
まだらのひも……80
あき家事件（やじけん）……109
海軍条約事件（かいぐんじょうやくじけん）……130
技師（ぎし）の親指（おやゆび）……164



宇宙戦争……H・G・ウエルズ　荒正人訳……185

第一部　火星人来（かせいじんき）たる

1　戦争（せんそう）の前夜（ぜんや）……187
2　流星（りゅうせい）の落下（らっか）……193
3　砂（すな）とり場（ば）で……197
4　円筒（えんとう）ひらく……200
5　熱線（ねっせん）……204
6　チョバム通（どお）りのみな殺（ごろ）し……210
7　家（いえ）にたどりつく……212
8　金曜日（きんようび）の夜（よる）……215
9　戦闘開始（せんとうかいし）……216



10 あらしのなかで …… 221
11 窓ぎわで …… 226
12 あいつぐ破壊 …… 231
13 牧師とであう …… 239
14 ロンドンで …… 243
15 黒い毒ガス …… 249
16 ロンドン脱出 …… 253
17 水雷艇の活躍 …… 256

第二部　火星人の支配

1 火星人の足もとで …… 262
2 くずれた家からのぞく …… 268
3 とらわれの日々 …… 276
4 牧師の死 …… 281
5 しずけさ …… 285
6 五日間におこったこと …… 288
7 パトニー丘の男 …… 291
8 死の都ロンドン …… 306
9 ふみにじられた土地で …… 313
10 エピローグ …… 317

● 解説
名探偵シャーロック・ホームズ ……長沼弘毅 322

シャーロック・ホームズの冒険

C・ドイル
阿部知二訳

さし絵

シャーロック・ホームズの冒険
新井苑子

宇宙戦争
川上十郎

●まえがき

たとえば、みなさんの目の前に、見も知らない人が立ったとします。みなさんは、その人が、むかしなにをしていたか、いまはなにをしているか、どこからやってきたか、というようなことが、ひと目でわかりますか？

みなさんは、そんな手品みたいなことはできやしない、というでしょう。

ところが、この物語の主人公である、名探偵シャーロック・ホームズには、それができるのです。ホームズは、そういうことを、あてずっぽうにやってのけるのではありません。ふつうの人なら見のがしてしまうような、こまかなところに目をつけて、それらをすじみちたててむすびつけることによって、正しいこたえを見つけだすのです。

ホームズの親友ワトスンは、ホームズのすることをしょっちゅう見ていますが、いまさらのようにかんしんしてさけびます。

「あざやかな推理だ。長い長い推理の糸が、はじめからおわりまで正しくつながっている。」

名探偵シャーロック・ホームズの物語は、十九世紀のすえに書かれてからいまにいたるまで、かぞえきれないほど多くの読者をひきつけてきました。

みなさんも、ここにえらびだされた六つの傑作によって、推理小説のおもしろさを、心ゆくまで味わってください。

阿部知二

ホームズとわたし

わたしは、ワトスンといって、職業は医者である。一八七八年に学位をとったのち、軍医になって、インドに派けんされた。そして、なんどか戦争にも参加しているうちに負傷し、おまけに腸チフスにかかってしまったが、あぶなくいのちをとりとめ、ひさしぶりでイギリスにもどってきた。

しばらく開業もせずにぶらぶらしていたが、友人の紹介で、ベーカー街二二一番地Bにやすい下宿を見つけ、その友人の知りあいの男といっしょに住むことになった。その男というのが、シャーロック・ホームズだったのである。

ホームズは、見かけからしてふうがわりだった。背は、一メートル八十センチあまりもあるが、やせているので、なおさら高く見えた。射るようにするどい目と、高いワシ鼻のせいで、顔ぜんたいが、きびしくぬけめのないかんじだった。あごは、四角くはって、意志がつよそうに見えた。

はじめのころ、わたしは、ホームズの職業がわからなかった。化学の実験をねっしんにやっていたが、それもふつうの化学者のすることとはまるでちがっていて、衣服についた小さなしみが人の血であることを証明するとか、たばこの灰からそのたばこの種類をあてるとかいうことばかりだった。

そのうちに、ホームズ自身の説明でわかったのだが、ホームズは、しろうと探偵だった。つまり、警察のもてあましているような事件や、関係者が警察ざたにしたくない事件ととりくんで、それらを解決してやるのが、しごとだったのだ。

ふたりで住むようになってまもなく、わたしは、ホームズのしろうと探偵としてのすぐれたうでまえを、じっさいに見せつけられた。

それいらい、わたしはすっかりホームズのファンになってしまい、ホームズが事件の調査にのりだすたびに、そのあとにくっついてまわって、ちょっとしたてつだいをした。

こうして、わたしは、ホームズの活やくを、ながいこと見てきた。そして、それらの事件について、くわしいメモがとってある。これから、そのうちのいくつかをお話ししよう。

赤毛連盟

去年の秋のある日、わたしがシャーロック・ホームズをたずねてみると、ホームズは、がっしりして、髪の毛のもえるように赤い、中年の紳士と、ねっしんに話しこんでいた。じゃまをしたわびをいってひきさがろうとすると、ホームズは、いそいでわたしをひきとめて、心からいった。

「ワトスンくん。いいときにきてくれた。」

「お話しちゅうらしいから、となりのへやでまっていてもいいが。」

「それにはおよばないさ。ウィルスンさん、こちらは、ワトスンくんです。これまでぼくがあつかった事件で、しごとあいてになり、協力者になってくれた人ですが、あなたの問題でも、おおいにはたらいてくれるだろうと思います。」

赤毛の紳士は、いすから腰をうかせて、かるくあいさつした。

「そこの長いすにかけたまえ。」

ホームズはわたしにむかってそういって、自分もひじかけいすにゆったりとすわり、両手の指さきをあわせた。これは、ホームズが、なにかものを考えるときにする、いつものくせである。

「けさは、このジェイベズ・ウィルスンさんがわざわざこられて、ある話を聞かせてくださったが、ちかごろにないふしぎな話になりそうだ。いまうかがったかぎりでは、この事件が犯罪かどうかも、まだぼくにはいえないのだが、事件のなりゆきをみると、これは、ぼくのいままで耳にした話のなかで、もっともかわっているのだ。

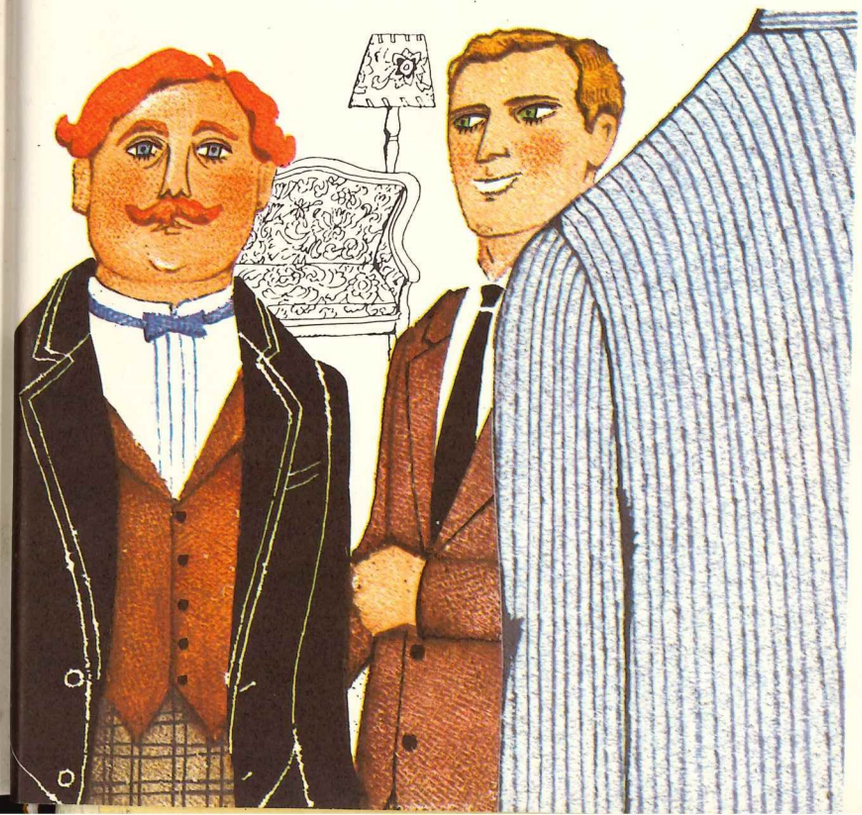
ウィルスンさん、おそれいりますが、もういちど、はじめから話してくださいませんか。ワトスンくんは、はじめのところを聞いていませんし、それに、ぼくもまた、お話がじつにふしぎな性質をもっているものですから、ぜひあなたの口から、こまかなてんまでお聞きしたいのです。ぼくは、たいていのばあい、事件についてざっと話を聞いただけで、ほかの似た事件を参考にして、見当をつけることができます。だが、こんどの事件は、ぼくの知っているかぎりでは、ほかに類のないものです。」

その赤毛の紳士は、とくいそうに胸をはり、オーバーの内ポケットから、一まいのしわだらけの新聞をとりだした。頭をつきだし、ひざの上で新聞をひろげて広告欄に目をおとしていたが、そのあいだ、わたしはこの紳士をよく観察し、ホームズのまねをして、その服装や態度から、なにかを読みとろうとしてみた。

しかし、観察でわかることは、あまりなかった。この客は、でっぷりふとって、もったいぶったかんじのする、どこにでもありふれたイギリス商人というだけだ。服装は、すこしだぶついた灰色のチェックのズボンに、あまりきれいとはいえない黒いフロックコートを着ている。そばのいすに、すりきれたシルクハットと、色あせた茶色のオーバーとがかけてあった。しかし、いくらながめてみても、目につくのは、もえるように赤い髪の毛と、顔にあらわれたくやしそうな表情とだけである。

シャーロック・ホームズは、わたしがなにをしていたかを目ざとくみてとり、わたしがといただすようなまなざしをおくると、微笑しながら頭をふった。

「この人は、むかし手しごとをしたことがあり、かぎたばこがすきで、秘密結社フリーメーソンの会員だ。それからシナにいたことがあり、またちかごろ、かなりたくさんの書きものをしたことはわかるが、それ以上のことについては、ぼく



はなにもおもいつかない。」

ウィルスン氏は、これを聞くとおどろいて、いすからとびあがり、人さし指で新聞をおさえたまま、ホームズをじっとみつめた。

「ホームズさん、いったい、なんだってそんなことがわかるんですかい。たとえば、わしが手しごとをしておったことが、どうしてわかります？　しょうじきのところ、それにちがいはない。わしは、船大工から身をおこしたんですわい。」

「あなたの手ですよ。右手が左手よりひとまわり大きい。あなたは、右手をつかうしごとをしてこられました。それで、筋肉が発達しているのです。」

「ほう、それじゃ、かぎたばこやフリーメーソンのほうは、どうしてわかりました？」

「どうしてわかったかを、いちいち説明するのは、頭のいいあなたには、かえって失礼になるでしょう。それにあなたは、弧とコンパスとの胸かざりピンをつけてますが、それはフリーメーソンのきびしい規則にそむくものです。」

「ああ、なるほど、これはうっかりしていました。だが、書きものをしたというのは？」

「右手のそでぐちが十センチばかり光っていて、左手の、机にひじをつくあたりのところに、つるつるのつぎがあたっていますが、それを見れば、たくさん書きものをしたとしか考えようがありません。」

「なるほど、だが、シナのほうは？」

「右の手首のすぐ上に、さかなのいれずみをしていられますが、それは、シナにいかなければできません。ぼくは、いれずみの研究もすこしはしてみましたし、その方面のことでは、本も書いております。そのように、さかなのうろこを美しい淡紅色にそめる技術は、シナだけのものです。そのうえ、時計のくさりにぶらさがっているシナの貨幣をみると、あなたがシナにいったことはあきらかです。」

ウィルスン氏は、大わらいをした。

「びっくりしましたわい。はじめは、すばらしい術でもあるのかと思ったが、聞けば、けっきょくなんでもないことですな。」

ホームズがいった。

「ワトスンくん、説明などしたのは、まずかったと思うよ。ことわざにも『わからないことは、なんでもえらいように思われる。』というからね。ウィルスンさん、広告が見つかりましたか。」

ウィルスン氏は、ふとい赤い指で広告欄のまんなかをさしながらこたえた。

「はい、ありました。ここです。これがことのはじまりです。自分で読んでくれませんか。」

わたしは、新聞をうけとって読んだ。広告文は、つぎのとおりである。

『赤毛連盟につげる――この連盟は、アメリカ合衆国ペンシルベニア州、レバノンの故イジーキア・ホプキンズ氏の遺言にもとづいてつくられたもので、連盟員は、ほんの形ばかりのしごとをするだけで、週四ポンドを支給される権利をもつ。その連盟員に、あきがひとつできた。心身ともに健全で、二十一歳以上の赤毛所有者は、すべて応募の資格がある。月曜日、十一時、フリート街ポープス・コート七番地、連盟事務所内ダンカン・ロス氏まで、本人がちょくせつもうしこむこと。』

わたしは、このふしぎな広告を二ど読みかえして、さけんだ。

「いったい、これはなんだろう？」

ホームズはクスクスとわらい、じょうきげんのときのくせで、いすにかけたままからだをゆすった。

「こいつは、どこにでもころがっているという話ではない。さあ、ウィルスンさん、大いそぎで、あなたご自身の事情と、家庭の状態、それから、この広告があなたの身の上におよぼした影響について話してくださいませんか。ワトスンくん、きみは、とりあえず新聞の名まえや日付けをメモしてくれたまえ。」

「一八九〇年の四月二十七日のモーニング・クロニクル紙だ。ちょうど二か月まえだ。」

「けっこう。では、ウィルスンさん。」

ウィルスン氏は、ひたいの汗をふいて話しはじめた。

「わしは、中心区の近くのコーバーグ広場で小さな質屋をひらいております。商売といいましても、そう手広くやってるわけじゃないんでして、そのうえに、ちかごろは、おもわしくなくて、その日暮らしがやっとのことです。いぜんは、番頭のふたりもおいていましたが、いまでは、たったひとりやとっているだけです。そのひとりにはらうだけのもうけもあぶないのですが、さいわいなことに、本人の番頭が、しごとをおぼえればよいというので、よその半分の給金できてくれ

ていますんで。」

ホームズはたずねた。

「そのかんしんな青年の名は、なんといいますか？」

「ビンセント・スポールディングというんだが、青年とはいえませんね。あれの年は、見当がつかんです。だが、ホームズさん、番頭としちゃ、こんなに気のきいたやつはおりませんな。もっと出世して倍の給金をとるくらいは、あれにはすぐできますな。だがまあ、本人がまんぞくしているなら、なにもいれ知恵することもない。」

「ごもっともです。標準以下の給金で番頭をやとえるのだから、なんともけっこうな話ですな。このごろでは、人をつかうには、そうはいきませんから。あなたの番頭さんも、新聞広告に負けないくらいかわっているといいたいですね。」

「だが、あの男にもわるいくせがあります。あんな写真気ちがいが、世間にいますかな。たまにいそがしいときにも、カメラをもちだしてパチパチとっては、それから、ウサギが穴にもぐりこむみたいにして、地下室で現像をするんですわ。それが、あれのきずですかな。まあ、だいたいのところ、よくはたらいてくれます。悪いやつじゃないです。」

「いまでも、お店にいるのでしょうな。」

「おります。あれと、かんたんな台所しごとやそうじをしたりしてくれる十四になる小むすめと——わしの家はこれだけです。というのは、わしは家内にさきだたれて、子どもはいませんので、わしたち三人は、ひっそり暮らしています。

そのわしたちをえらいめにあわせたのは、この広告です。八週間まえのきょう、スポールディングのやつが、この新聞をもって、店におりてきていいますには、

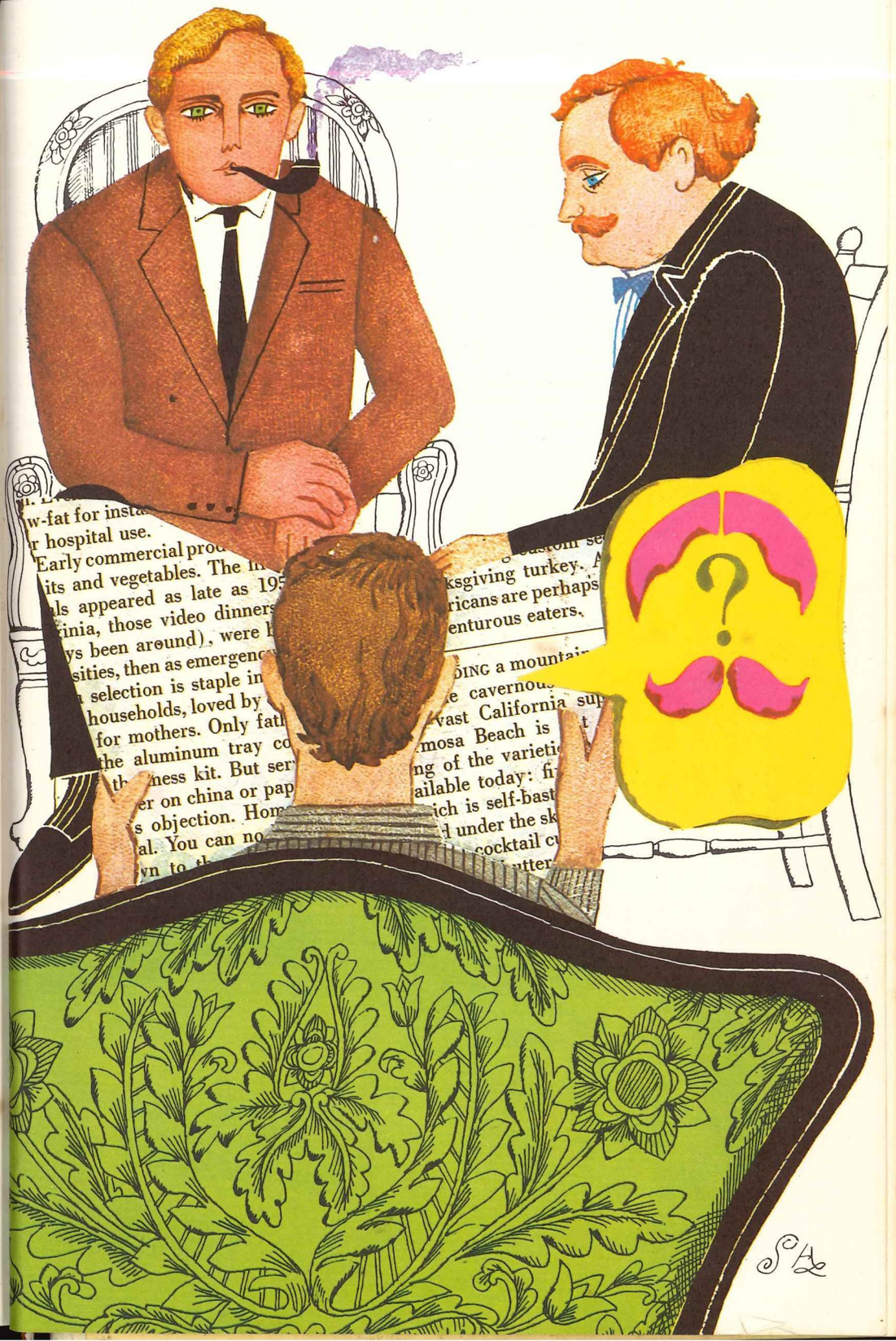
『ウィルスンのだんな、わたしも髪の毛が赤かったらなあ。』

『どうしてだ？』

『なにね、赤毛連盟にまたあきができましてね、そこにはいれたら、だれでも小金持ちになれるんですよ。わたしの髪の色さえ赤かったら、このしごとにとびついて、もうけてやるんだがなあ。』

『ほう、それはなんだね？』

わしは、身をのりだしてたずねたです。わしは、一日じゅう家にばかりいます。なにしろ、商売がら、外にでかけるのでなくて、客のほうからきてくれるんですからね。わしは、よく何週間もぶっつづけで、家のしきいをまたがんことがあるんです。そんなわけで、世間のようすにうとくて、ニュースというと、いつも聞き耳をたてるんですわ。



番頭は、目をまるくしてたずねました。
『だんなは、まだ、赤毛連盟の話を聞いたことはないんですかい？』
『知らんなあ。』
『へえ、そいつはふしぎだなあ。だんなは、ぴったり応募資格があるんですよ。』
『そうしたら、なにかいいことでもあるんかい？』
『まあ、一年に二百ポンドぽっちのことですがね、しごとは楽だから、商売のじゃまにはならんでしょう。』
というぐあいで、わしが、これは耳よりな話だとのり気になったのは、あたりまえでしょうな。なんといっても、ここんところ商売がさっぱりなもんで、一年に二百ポンドもべつの収入があると聞けば、ありがたいですからな。
『その話をくわしく聞かせてくれんか？』
番頭は広告を見せました。
『だんなが自分で読まれたらわかるですけどね、連盟にひとつ席があいて、くわしいことをといあわせる紹介さきがここに書いてあります。なんでも、アメリカの百万長者のイジーキア・ホプキンズとかいう老人が、この連盟をつくったそうです。この男はひどい赤毛で、それで、髪の毛の赤い人にすっかり同情してしまいました。それで、死んだとき、遺産管理人に大きな財産をあずけて、その利子をつかって、自分とおなじ赤毛の男に気楽なしごとをふりあててくれ、と遺言したんですよ。わたしが聞いた話では、金ばらいはよくて、しごとはとても楽だってことでさあ。』
『だけど、志願してくる赤毛の男は、何万とおるだろう。』
『だんなが考えるほどはおらんですね。というのはね、応募者はロンドンの者だけということにかぎってあるし、それに、おとなでなければだめなんです。このアメリカ人は、若いとき、ロンドンをふりだしに出世したから、なつかしいこの町に恩がえししたいんだそうですよ。それからまた、赤毛といっても、うすいのや、黒みがかったのはらくだいで、ほんとうに火みたいに赤い毛でなきゃいかんのです。ウィルスンのだんな、もし、もうしこまれるのなら、ちょっとそこへ顔をだせばいいんですよ。だけど、たかが二、三百ポンドの金で、だんながわざわざでむかれることもないですね。』
ところで、ごらんのとおり、わしの髪の毛はみごとなまっかですから、このことで競争するなら、だれにも負けんつもりです。スポールディングは連盟のことにくわしいようだから、役にたつかもしれんと考えて、その日は店を早くしめて、いっしょに広告にでていた番地のところへいきました。
ところで、ホームズさん、二どとあんなながめは見られんでしょうな。北から南から、東から西から、髪の毛に赤みのある男という男が、広告を見て、中心区めがけてやってきていたんですわ。フリート街は赤毛の人波で息がつまりそうで、ポープス・コートは、まるでオレンジ売りの車みたいでした。たったいちどのこの広告に、ロンドンじゅうからこんなたくさんの人があつまってくるとは、たまげてしまったですわ。
わら色、レモン色、オレンジ色、れんが色、赤茶色、ねん土色、ありとあらゆる色の赤毛です。だけど、スポールディングもいったように、ほんとうに火みたいに赤い毛の男は、そうおらなかったですよ。
こんなたくさんの人間が順番をまっているのを見たとき、わしひとりなら、がっかりしてあきらめるところだったけど、番頭は、いうことをきかなかった。ならんでいる人をおしたり、ひっぱったり、ついたりして、人ごみのなかをぬけ、連盟の事務所にのぼる階段のきわまで、わしをつれていった。階段にはのぞみをかけてる者と、がっかりしておりてくる者と、二つの列ができていました。わしたちはできるだけようりょうよくその列にわりこんで、とうとう事務所にはいりました。
ホームズは、うながすようにいった。
「じつにおもしろい。どうぞ、つづけて話してください。」
「事務所のなかには、木のいすが二つと、松の木のテーブルのほかにはなにもなく、わし以上にまっ赤な髪の毛の小男がテーブルのむこうがわにすわっていました。男は志願者がひとりひとりはいってくると、きまったように二こと三こといって、その男をらくだいさせるようなあらさがしをします。このちょうしでは、とおるのは、とてもむずかしそうでした。ところが、わしの番がまわってきたとき、その小男はいままでの者をあつかうときとちがって、ひどくあいそがよくなって、わしたちがなかへはいると、こっそり話ができるように、入り口の戸をしめたです。
番頭が、口ぞえしてくれました。
『ジェイベズ・ウィルスンさんです。連盟のおしごとをしたいと希望していられます。』
あいての男はこたえました。
『ほう。これはこれは、うってつけの人です。いままで、こんなにすばらしい赤毛を見たことはありませんな。』

それからその男は、一歩うしろにさがって、首をかしげ、きまりわるいほど、わしの髪の毛をじろじろ見ました。そうしていきなり、つかつかと歩いてくると、わしの手をにぎって、大きな声でいいました。

『おめでとう。合格です。それなら問題はありません。しかし、ねんにはねんをいれて用心せねばならんです。失礼ですが。』

といったかとおもうと、両手でわしの髪の毛をつかんで、ひっぱりました。わしはいたさのあまり、悲鳴をあげました。すると、男は手をゆるめてくれました。

『おや、なみだがでましたな。なるほど、まさにもうしぶんなしだ。だが、われわれは用心しなければならんのです。というのは、いままでかつらで二ど、染毛で一どだまされましてね。靴屋のろうをつかった話もあるぐらいで、あさましいことです。』

それから、この男は窓のところへいって、合格者はきまったとどなりました。がっかりしたうなり声が下からわいてきて、それから、人だかりはおもいおもいの方向へちっていき、赤毛の男といえば、わしとその管理人とだけになりました。

その男は名のりました。

『ダンカン・ロスともうします。わたしも赤毛連盟から年金をうけている者です。ところで、ウィルスンさん、結婚しておられますな。ご家族は？』

家族はない、というと、その男の顔色がかわったのです。

『こまったな。それは重大問題だ。この連盟は赤毛の人間を保護するだけじゃなしに、子孫の繁栄をはかるためにあるのです。あなたが独身だとは、まったく悲しむべきことです。』

ホームズさん、このことばを聞いて、わしもがっかりしましたわ。やれやれ、やっぱりらくだいしたかと思ったのです。ところが、ロスは、二、三分考えたすえにいいました。

『まあいいでしょう。ほかの人のばあいなら、この欠点だけでらくだいです。しかし、あなたのようにこんなすばらしい毛をもっておられる方には、われわれもゆずらなければなりません。あなたは、いつからしごとにかかることができますか？』

『さあ、それがちょっとこまるんですが、わしには店がありますので。』

スポールディングが、よこからいいました。

『おお、そんなことはいいじゃありませんか、ウィルスンのだんな。わたしが、かわってやりますよ。』

わしはたずねました。

『勤務時間はどのくらいでしょうか？』

『十時から二時までです。』

ところで、ホームズさん、質屋の商売は、たいてい夕方だけで、とりわけいそがしいのは、給料日のまえの木曜と金曜です。ですから、朝からちょいと金もうけにいくのは、たいへん好つごうです。それに、番頭はよい男で、どんなことがおこっても店をまかせておけます。

『それなら好つごうです。で、給料は？』

『一週間四ポンドです。』

『そしてしごとは？』

『しごとといっても、ほんの名ばかりですが、時間ちゅうは事務所にいてもらわねばなりません。もし職場をはなれると、あなたは永久にこの地位をうしないます。遺言には、はっきり書いてあるのです。時間ちゅう一歩でも外へでられると、規則違反になります。』

『一日にたった四時間ですから、外出などはいたしません。』

『病気でも、用事でも、そのほかどんな事情でも、いいわけはたちません。とにかく、事務所にいるか、首になるかですぞ。』

『で、しごとは？』

『大英百科辞典をうつすのです。そこの本棚に第一巻があります。インクと、羽ペンと紙とは自分もちですが、このテーブルといすとは用意しておきます。あした、こられますか？』

『まいりますとも。』

『それでは、ジェイベズ・ウィルスンさん、きょうは、これでおひきとりください。あなたが幸運にもこのすばらしい地位につかれたことを、かさねてお祝いします。』

ロス氏はおじぎをして、わしをおくりだしました。わしは番頭と家にかえったのでしたが、なにをいってよいのやら、またなにをしてよいのやら、さっぱり見当がつきません。それほど、わしは自分の幸運によろこんだわけでした。

それから、一日じゅう、その朝のできごとばかり考えたもんですが、夜になると、また元気がなくなりました。というのは、どのような目的でこんなことをするのか、わからんけれども、どう考えてみても、この話は、みんな、ひとのわるいいたずらか、さぎにちがいない、と思えたからです。いったい、どこのだれが、こんな遺言をするもんだろうか。大英

百科辞典をうつすなんて、子どもだましみたいなしごとに、だれがこんな大金をはらうもんだろうか。わしは、とてもほんきにできなかったんです。

スポールディングは、あれやこれやとわしをはげまそうとしたが、わしは、寝るときまでに、すっかりあきらめてしまいました。だけど、あくる朝になると、ともかくようすをみにでかけようと決心しました。それで、小びんのインクと、羽ペンと、紙を七まい買って、ポープス・コートへいったわけでした。

びっくりしましたな。いや、うれしかったですな。ばんじ、きのうの話のとおりです。机がおいてあって、ダンカン・ロスさんは、わしがしごとにとりかかるのをみとどけにきていました。そして、わしにAの字からうつしはじめさせておいて、でていったんですが、そのあとでも、しごとぶりをみるために、ときどきかえってきました。

二時になると、もうかえってよいといって、書いたまい数を見て、おせじにほめてくれて、わしがでていくとドアのかぎをかけました。

それからは、まい日おなじようなことでしたよ、ホームズさん。そして土曜日になると、ロスさんがやってきて、一週間ぶんとして一ポンド金貨を四まいくれました。そのつぎの週も、またそのつぎの週も、そのとおりでした。まい朝、わしは十時に出勤して、二時にかえります。ロスさんは、そのうち、朝にいちどだけしかこなくなり、しばらくすると、ぜんぜん顔をみせなくなりました。だけど、もちろん、いつくるかわからんですから、わしは、へやから一歩もでる気にはなれなかったですわ。なにしろ、わりのよいしごとだし、わしにむいていたですから、これを手ばなすようなあぶないまねはできはしません。

こんなちょうしで八週間たちました。わしはAではじまることばをせっせと書いていって、もうひと息でBのところへはいれるところまできました。紙代も、そうとうつかいましたよ。ひとつの棚が、わしの書いた紙であらかたいっぱいになりました。そのときです。とつぜん、しごとがおじゃんになったんですわ。」

「おじゃんになったとは？」

「そうなんで。それも、けさになってからのことです。いつものように十時に出勤してみると、ドアがしまってかぎがかかっていて、ドアのまんなかに小さな四角いボール紙が、ぴょうでとめてありました。これが、それです。自分で読んでみてください。」

ウィルスン氏は、びんせんぐらいの大きさの白いボール紙をさしだした。それには、つぎのように書いてあった。

『赤毛連盟は解散する　一八九〇年十月九日』

シャーロック・ホームズとわたしは、このそっけない声明書とウィルスン氏のくやしそうな顔をじっとみつめているうちに、事件のこっけいさにたまらなくなって、ついに、ふたりでふきだしてしまった。

ウィルスン氏は、火のような髪の毛のはえぎわまで顔をまっかにして、さけんだ。

「なにがそんなにおかしいのですかい。わしをわらうばかりで、ほかになにもできんのなら、よそへいきます。」

ホームズは、なかば腰をうかせたウィルスンをおしもどして、大声でいった。

「まあ、まあ。こんな事件はぜったいに手ばなしませんよ。じつにおもしろくて、かわっています。しかし失礼ながら、ちょっと、こっけいなてんもありますよ。それから、あなたはどうされましたか？」

「そりゃ、びっくりしましたね。どうしてよいのかさっぱりけんとうがつかず、あの建物のなかにある事務所をたずねまわってみたんですが、だれもそのことについて知っている者はいません。さいごに、一階に住んでいる家主のところへいって、赤毛連盟はどうなったのかとたずねてみると、そんな連盟など聞いたことはないといいます。では、ダンカン・ロス氏とはどのような人物かとたずねますと、そんな名まえははじめてだという。

わしはいいました。

『四号室の紳士ですよ。』

『ええと、それでは、髪の毛の赤い人ですな。』

『そうです。』

『ああ、あの人なら、ウィリアム・モリスといって、弁護士ですよ。新しい事務所ができるまで、まにあわせに、わたしの家のへやにはいっていたんですよ。きのうひっこしましたですがな。』

『じゃ、どこへいったらあえますか？』

『そうだね、あの人の新しい事務所へでもいかれたら、どうですか。番地はきいておいてある。そう、セント・ポール寺院の近くにあるキング・エドワード街一七番地です。』

というわけで、ホームズさん、わしは、さっそく、おしえられた場所へでかけていきました。ところがついてみると、なんと、ひざあてをつくる工場があるだけでして、そこの人は、みな、ウィリアム・モリスもダンカン・ロスも、そんな名まえは知らないというんです。」

ホームズはたずねた。

「ふーむ。それからどうしました？」

「家へもどって、番頭に相談してみました。しかし、あの男も役にはたたなかった。まってれば、そのうち手紙でもきますよ、というだけです。しかし、それじゃおもしろくないですよ。あんなしごとがふいになろうとしてるのに、ただぼんやりしてるわけにはいかんです。それでわしは、かねがね、あんたが相談あいてもない気のどくな人間をしんせつに助けられるということを聞いたもんだから、まっすぐ、かけこんできたわけですわ。」

「それはいいことでした。あなたの事件は、ひじょうにめずらしいものです。ぼくとしては、よろこんで、ひとつ、首をつっこんでみるつもりです。お話をうかがっていると、これは、見かけによらぬ重大な結果になるかもしれません。」

「そうですよ、重大ですよ。わしは、一週間四ポンドふいにしたんだ。」

「いや、あなた個人としては、このふしぎな連盟に苦情をいわれる理由はないようですな。それどころか、あなたは、大英百科辞典のAのところにでている項目について、くわしい知識をえたわけですし、そのことをべつにしても、いままでに、だいたい三十ポンドほどの金をもうけられたはずです。あなたは、一セントの損もしておられませんよ。」

「それはそうです。だけどわしは、あの連中をあらいだして、正体をつかんで、それから、あんないたずらをどういう目的でやったのか知りたいんですよ。それに、じょうだんにしちゃ、金がかかりすぎてまさあ。なにしろ三十二ポンドもつかったんだから。」

「そういうてんについては、こちらでできるだけほねおって、しらべてあげますよ。そのまえに、ウィルスンさん、二、三おききしたいことがあります。さいしょ、あなたにその広告のことをおしえた番頭は、いつごろからお店にきていますか？」

「あのひと月ばかりまえからです。」

「どういうふうにしてきたのですか？」

「広告をだしたら、やってきました。」

「広告に応募したのは、その人ひとりでしたか？」

「いや、十二、三人です。」

「どういうわけで、その男をえらびましたか？」

「人あたりがよくて、そのうえ、やすい給金でくるといったもんで。」

「それで、そのビンセント・スポールディングというのは、どんな人相ですか？」

「小がらで、きびきびしていて、三十はこしているのに、顔にひげがありません。ひたいに、酸のやけどの白いはん点があります。」

ホームズはかなり興奮したようすで、いすにすわりなおした。

「そんなことだろうと思っていた。その男の耳に、耳輪の穴があいていませんか？」

「ありますよ。子どものころに、ジプシーに穴をあけられたんだそうで。」

「その男は、まだお店にいますか？」

「おりますとも。たったいま、わかれてきたところです。」

「それで、あなたのるすちゅうでも、商売に精だしていますか？」

「べつに心配することはないですよ。午前ちゅうは、ほとんど用事もないですわ。」

「よくわかりました、ウィルスンさん。では、一、二日のうちに意見をお話しできると思います。きょうは土曜だから、月曜日までには解決するでしょう。」

客がかえっていったあと、ホームズはいった。

「どうだ、ワトスンくん、きみは、いったいどう思うかね？」

「さっぱり見当がつかない。じつに、ふしぎな事件だ。」

「この事件は、早くかたづけなければならないよ。」

「これからどうしようというんだ？」

「たばこをすいながら考えよう。まず、パイプで三ぷくぐらいはかかる問題かね。五十分ほど、話しかけないでくれたまえ。」

ホームズは、いすの上でからだをまげ、やせたひざをワシ鼻のさきまでもちあげて、黒い陶器のパイプを鳥のくちばしのように口からつきだしたまま、目をとじた。やがて、わたしはホームズが眠ったと思って、自分もうつらうつらしはじめた。そのときとつぜん、ホームズは結論がついたかのように、いすから立ちあがり、パイプをマントルピースの上にの

せた。

「午後から、セント・ジェイムズ・ホールで、名バイオリニストのサラサーテが演奏するよ。どうだろう、ワトスンくん、診察のあいまに、二、三時間ひまがつくれるかね？」

「きょうは、あいているんだ。」

「じゃ、帽子をかぶってきたまえ。はじめに中心区へよっていくつもりだから、どこか、とちゅうで昼食にしよう。」

わたしたちは、とちゅうまで地下鉄でいき、それからすこし歩くと、ウィルスン氏の店のあるコーバーグ広場についた。そこは、わびしくおちぶれたような町で、小さなあき地のまわりには、すすけたれんが建ての二階家が、ならんでいた。そのかどの家に、質屋のめじるしの金メッキの玉が三つと、『ジェイベズ・ウィルスン』と書いた看板とがでていた。

ホームズは、その前に立ちどまって、首をかしげ、目をほそめて、あたりをながめまわした。それから通りをゆっくりと歩き、またその町かどへひきかえして、家いえのようすをするどく観察した。さいごに質屋の店さきまでもどり、敷石道の石をステッキで二、三ど力いっぱいたたいてから、ドアのところにあゆみよってノックした。

すると、すぐにドアがあいて、目はしのききそうな、ひげをきれいにそりあげた若い男があらわれた。

「どうぞ、おはいりください。」

ホームズはいった。

「いや、ちょっと、ストランド街へいく道をおたずねしたいのですが。」

「三つめのかどを右へ、それから四つめを左へまがりなさい。」

番頭は、てきぱきこたえてドアをとじた。ホームズは、あゆみさりながらいった。

「すばしこいやつだ。ぼくの考えでは、あの男はロンドンじゅうで四番めのすばしこいやつだ。そして、大胆不敵ということでは、たぶん三番めだろうな。あいつのことは、ぼくもまえからすこし知っているのだよ。」

「ウィルスンの番頭は、赤毛連盟の事件にふかい関係があるにちがいない。それでわかった。きみが道をたずねたりしたのは、やつの顔を見たかったからだね。」

「あの男を見たかったんじゃない。」

「では、なんだい？」

「やつのズボンのひざだ。」

「なにか見つかったかい？」

「予想どおりだ。」

「きみはなんだって、道をたたいたんだい？」

「ね、ワトスンくん、いまはおしゃべりをしているときじゃないよ。観察するんだ。ぼくたちは敵地にふみこんだスパイだよ。コーバーグ広場については、だいたいわかった。こんどは、ここと背中あわせの道を偵察しよう。」

裏町のコーバーグ広場から町かどをひとつまわってでた道は、裏町にくらべると、絵の裏表ぐらいのちがいがあった。でていく車、はいる車で、車道はふさがり、歩道は、いきかう人の波で黒くなっている。美しい商店やどうどうたる事務所が軒をならべている。これが、あのみすぼらしい裏町と背中あわせになっているとは、どうしても信じられない。

ホームズは町かどに立ちどまって、軒なみにながめながらいった。

「さあ、この町の建物のならびをおぼえておこう。ロンドンについて正確な知識をもちたいというのが、ぼくの道楽なのだ。ええと、たばこ屋のモーティマ商店に、新聞の売店、シティ・アンド・サバーブ銀行のコーバーグ支店、野菜料理店に、マックファーレン会社の馬車製造所の倉庫か。これで、この区画がきれてつぎへうつるんだね。さあ、ワトスンくん、ぼくたちのしごとはおわったから、こんどは、気ばらしにいこう。サンドイッチに、コーヒーを一ぱい飲んで、それからバイオリンの国へいくのだ。」

ホームズは音楽ずきで、自分でも演奏や作曲をする。その午後じゅう、ホームズは、ステージ前の席にすわって、幸福そうに、音楽にあわせて長いほそい指をうごかしていたが、その静かな微笑やものうげな目は、名探偵ホームズにはふさわしくないものであった。

しかし、ホームズは、いく日もいすにぐったりともたれて、作曲したり古い本を読んだりしていたかとおもうと、にわかに、あのすばらしい推理力がわきおこってくるのだ。この日の午後も、わたしはホームズが音楽のとりこになっているのをみて、いまにホームズが大活やくをはじめるだろうと思った。

ホールをでると、ホームズはいった。

「ワトスンくん、もちろん、すぐかえるつもりだろうね。」

「うん、それでもいいよ。」

「ぼくは、ちょっとのあいだ、手をはなせない用事がある。コーバーグ広場の事件は重大だ。」

「どういうわけで、重大なのかね？」

「だいそれた犯罪をたくらんでいるやつがいる。しかし、それをふせぐだけの時間はあるだろう。だが、きょうが土曜日だということで、すこしばかり問題はむずかしくなりそうだ。今夜、手をかりるかもしれないよ。」

「何時に？」

「十時なら、まにあうだろう。」

「十時にベーカー街へいっているよ。」

「それでよろしい。それから、ワトスンくん、ちょっと危険かもしれないから、軍用ピストルをポケットにしのばせておいてくれたまえ。」

ホームズは手をふり、くるりと背をむけると、たちまち人ごみのなかにすがたをけした。

わたしは、自分が他人よりにぶいとはけっして思っていないのだが、ホームズのあいてをしていると、いつも自分のおろかしさをかんじて、ふさいでしまう。こんどのことでも、ホームズとおなじ話を聞き、おなじものを見てきたのだが、ホームズが事件について、これまでのことだけでなく、これからおこることまで、すでにはっきり見とおしているらしいのに、わたしには、なにもわかっていないのだ。

馬車でケンジントンの家にかえるとちゅう、わたしはすべてのことを考えてみた。今夜の冒険はなにを意味し、なぜピストルを用意しなければならないのか？　どこへいって、なにをするのか？　ホームズがほのめかしたところでは、あの質屋ののっぺりとした番頭は危険な悪者で、ふかいたくらみをいだいているらしい。しかしわたしは、このなぞをとくことをあきらめた。夜になれば、なにもかもはっきりするだろう。

わたしが家をでたのは、九時十五分すぎで、ホームズの家につくと、玄関さきには二台の二輪馬車がまっていた。へやにはいってみると、ホームズはふたりの男とねっしんに話していた。そのひとりは、かねて知りあいのジョーンズ警部だった。もうひとりのほうは、やせて背が高く、しずんだ顔つきの人で、ぴかぴかするシルクハットを手にし、じょうとうのフロック・コートを着ていた。

ホームズはわたしを見ると、棚から狩猟用のむちをおろして、いった。

「ワトスンくん、警視庁のジョーンズくんは知っているだろう。こちらはメリウェザさんで、夜の冒険に参加されるのだ。」

ジョーンズ警部は、もったいぶっていった。

「ワトスンさん、また力をあわせてやりましょうよ。ホームズさんは、えものを狩りだされるのがじょうずでしてね、わたしは、そのえものをおいつめてしとめる犬ですよ。」

メリウェザ氏がむっつりいった。

「つかまえてみたら、カリ一わだったというようなことになってもらいたくないですな。」

ジョーンズ警部は、きっぱりいった。

「あなたは、ホームズさんを信用されてだいじょうぶです。この人には、とくべつの方法がありましてね。これまでも、本職の警察より、真相を正しくつかんでいたことがなんどもあります。」

「ジョーンズさん、あなたがそうおっしゃるのなら、だいじょうぶですね。しかし、わたしはトランプの三番勝負ができなくてざんねんです。土曜日の夜にトランプをしないのは、二十七年ぶりです。」

ホームズはいった。

「まあ、いまにごらんなさい。今夜のあなたの勝負には、たかいかけ金がかかっていますよ。しかも、はらはらする勝負です。メリウェザさん、あなたのかけ金は三万ポンドですよ。ジョーンズくん、きみは、かねてからねらっていた犯人をつかまえられるわけだ。」

「ジョン・クレーは、殺人、ぬすみ、にせ金づかい、にせ金づくり、なんでもしています。まだ若いのですが、悪事にかけては、その道のしたたか者でして、わたしは、ロンドンじゅうのどの悪党よりも、こいつに手錠をかけてやりたいのです。

このジョン・クレーってやつは、すごい男です。祖父は王族出の公爵で、本人もイートンからオクスフォード大学へいきました。指さきのきく男で、頭もきれます。いつでも、たちまわったあとだけがのこっていて、本人の居所ははっきりしないのです。わたしも、なが年おっかけまわしましたが、まだ、その顔を見たことがありません。」

「今夜こそは、きみに紹介してあげられると思うよ。ジョン・クレー先生には、ぼくも一、二どかかわりあってね、きみの説のように、やつは、たしかにこの道の第一人者だよ。しかし、もう十時すぎだから、出発の時間だ。きみたちふたりは、前の馬車にのってください。ぼくとワトスンくんとは、うしろの車にのります。」

馬車にのってからながいこと、ホームズは、だまったまま

座席にふかぶかとよりかかり、その日の午後の音楽会で聞いた曲を口ずさんでいた。

やがて、ホームズがいった。

「もうすぐだよ。前の車のメリウェザという人は銀行の重役で、この事件にちょくせつ関係があるのだ。それからジョーンズくんは、本職のしごとではかんぜんなばかだけど、悪い男ではない。大きなとりえがひとつある。勇かんなことにかけてはブルドッグのようで、いったんつかまえたらはなさないことは、ザリガニのようだ。さあ、ついたよ、前の車のふたりが、まっているだろう。」

そこは、けさきた、おうらいのはげしい大通りだった。わたしたちは馬車をかえして、メリウェザ氏の案内でせまい路地をぬけ、通用門をくぐった。内部には、短いろうかがあり、そのさきに鉄の門があった。それをあけて、石のまわり階段をおりていくと、そのつきあたりが、また、いかめしい柵になっていた。メリウェザ氏はそこで立ちどまって、手さげのカンテラをつけ、それから、まっ暗な土のにおいのする通路をおり、第三のドアをあけて、地下室とも穴ぐらともつかないへやにはいった。そのまわりの壁ぎわには、かごや大きな箱がつんであった。

ホームズは、カンテラを高くあげて、あたりを見まわしながらいった。

「上から襲撃される心配はありませんね。」

「下からだって、だいじょうぶです。」

メリウェザ氏はそういって、ステッキで床にしきつめてある敷石をたたいたが、おどろいて顔をあげた。

「おや、なんだか、うつろな音がする。」

ホームズは、きびしくいった。

「もうすこし静かにしていただかないとこまります。わたしたちの計画がだめになってしまいます。すみませんが、あの箱の上にすわっていてくれませんか。」

もったいぶったメリウェザ氏は、むっとした顔をして、かごの上に腰をおろした。ホームズは床にひざをつき、カンテラをかざして、敷石と敷石のあいだのすきまを虫めがねでくわしくしらべはじめたが、二、三秒でまんぞくしたように立ちあがって、虫めがねをポケットにしまった。

「まだ、すくなくとも一時間はある。あのお人好しの質屋が寝こむまでは、悪党どもは、なにもできないからね。しかし、寝たとなれば、すぐさまやってくるよ。しごとを早くすればするだけ、にげる時間が多くなるのだから。ワトスンくん、ここはロンドン一流の大銀行の中心区支店の地下室だ。ロンドンきってのむこうみずな悪党が、いまこの地下室に目をつけている。メリウェザさんは取締役だから、そのわけを説明してくださるだろう。」

メリウェザ氏は、ひくい声でこたえた。

「それは、フランス金貨のためです。われわれは、数か月まえ、資金をふやすことになって、フランス銀行からナポレオン金貨三万まいを借りいれました。その金貨は、封をきる機会がないままに、この地下室でねむっているのです。わたしの腰かけているかごのなかに、鉛板でつつんだナポレオン金貨が、一かご二千まいずつはいっています。これだけの金貨を一支店がもつのはめずらしいことで、重役たちも、この問題を心配しています。」

ホームズがいった。

「ごもっともです。さあ、ぼくたちも、いまのうちに手はずをきめておきましょう。一時間以内に事件のやまがくると思います。それまでは、このカンテラにおおい板をかけておかねばなりません。」

「やみのなかですわっているのですか？」

「しかたがありません。敵の準備がそうとうすすんでいますから、あかりをつけておくのは危険です。それでまず、ぼくたちの配置をきめておきましょう。ずぶといやつらですから、こっちがふいをついても、用心していないとけがをしますよ。ぼくは、このかごのうしろにかくれますから、あなたは、そちらへかくれてください。それから、ぼくが敵にあかりをむけたら、すばやくとびだしてください。もし、やつらが発砲でもすれば、ワトスンくん、えんりょしないで撃っていいよ。」

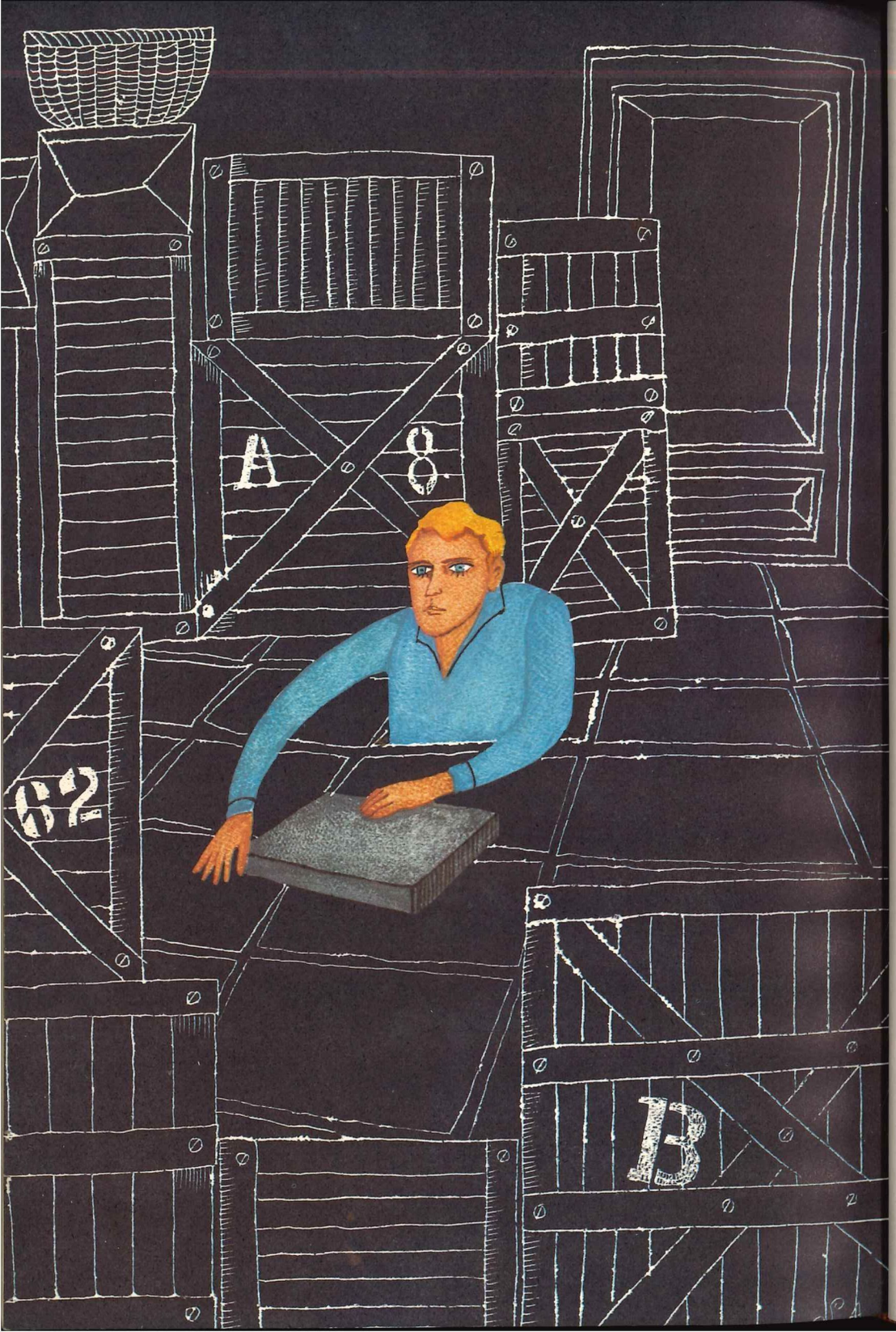
わたしはピストルの撃鉄をおこして、身をひそめている木箱の上においた。ホームズはカンテラの前におおい板をおとして、あたりをまっ暗にしてしまった。わたしは、期待と不安で神経がたかぶっていたので、ふいに暗くなった穴ぐらの、しめっぽい空気をおも苦しくかんじた。

ホームズがささやいた。

「にげ道はたったひとつだ。建物のなかをぬけて、コーバーグ広場にでる道だけだよ。ジョーンズくん、たのんだように手配してくれただろうね。」

「おもてには、警部と巡査ふたりをはりこませました。」

「では、穴はすっかりふさいだことになる。あとは静かにまつだけだ。」



じつになが かった！　あとでホームズと話しあってわかったように、そのあいだは一時間と十五分しかなかったのだが、わたしには、もう夜がおわって、朝日がのぼりはじめているように思われた。身うごきすることさえひかえていたので、手足がつかれて、棒のようになった。

神経がはりつめて、耳がするどくなっていたので、大男のジョーンズのおもおもしい息づかいと、メリウェザ氏のため息のようなかぼそい息づかいとを聞きわけることさえできた。わたしのかくれているところは、箱ごしに床の方向にむいていた。と、とつぜん、ひとすじの光が目をうった。

はじめは、敷石の上に鬼火のように一点きらめいただけだった。だが、それがしだいにのびて、黄色い光のすじになった。それから、なんのさきぶれもなく、音もたてないで、床にさけめができ、そこから女のように白い手があらわれて、床をまさぐった。一分か、あるいはもうすこしたっただろうか、ふいにその手がきえ、あたりは、またもとのやみにもどった。

しかし、手が見えなくなったのもいっしゅんのことで、もののさけるはげしい音がして、大きな白い石が一まいはねおこされると、ぽっかりと四角い穴が口をあけ、カンテラの光がながれでた。すると、その穴から目鼻だちのはっきりした若わかしい顔がうかんできて、あたりをするどく見まわした。男は穴の両わきに手をかけて、からだを肩まであらわし、それから腰まであらわし、かたひざをふちにかけた。そしてつぎのしゅんかんには、穴のかたわらに立ち、あとからでてこようとするなかまをひきあげた。なかまは、さきの男とおなじように小がらで、顔はあお白く、髪の毛はまっかだった。

「だいじょうぶだ。」

「のみとふくろとは、もっているだろうな。」

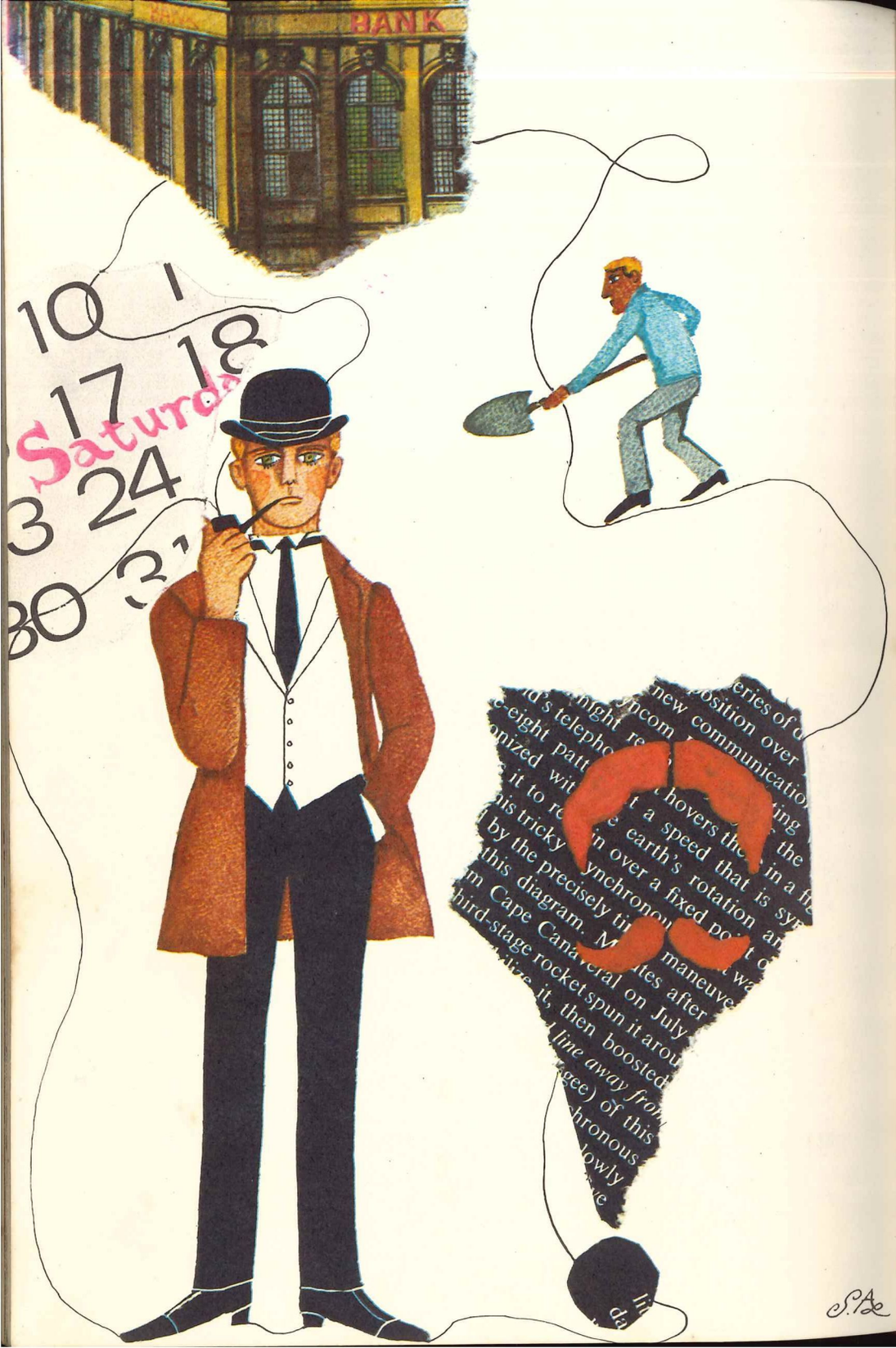
さきの男がひくい声でいったが、たちまち、あわててさけんだ。

「おや、いけねえ。アーチ、とびこめ、早くせんとしばり首にされる！」

シャーロック・ホームズがとびだし、あやしい男の首ったまをつかんだのだ。なかまのほうは穴にとびこんだが、ジョーンズに上着のすそをつかまれ、服がビリビリやぶれる音がした。ピストルの銃身がちらっと光ったとたん、ホームズのむちがつよく手首をうち、ピストルが床の敷石におちて、ガチリと音をたてた。

ホームズが、おだやかにいった。
「むだだよ、ジョン・クレー。もう、にげる道はないのだ。」
あいては、ひじょうにおちついていった。
「そうらしい。だが、おれのなかまはにげたようだな。服のはしだけのこしたがね。」
「三人が、おもてでまっているよ。」
「ふむ。うまくやったらしいな、ほめてやるよ。」
「こっちこそ、きみにかんしんしているのだ。赤毛連盟のおもいつきはすてきだった。」
そのとき、ジョーンズがいった。
「なかまにも、すぐあえるさ。穴へおちこむのは、おれよりあいつのほうがうまそうだ。手をだせ。手錠をはめてやる。」
手錠がはまると、犯人はいった。
「おまえのきたない手でさわらないようにしろ。おまえは知らないだろうが、おれの血管には、王室の血がながれているのだ。だから、おれにものをいうときには、『とのさま。』とか『おそれいりますが。』とかいってもらいたい。」
ジョーンズは目をむき、クスクスわらいながらいった。
「はい、それでは、おそれいりますが、馬車のしたくもできましたから、とのさまには階段をおのぼりください。警察までご案内いたします。」
「よろしい。」
ジョン・クレーは、おちついた態度でいうと、わたしたち三人にかるく一礼してから、刑事に護衛されて静かに立ちさった。
わたしたちがそのあとについて地下室をでたとき、メリウェザ氏がいった。
「ほんとうに、ホームズさん、わが銀行は、あなたにどのようにお礼をもうしあげ、また、なにをおむくいすればよいのかわかりません。あなたは、これまで聞いたこともないほど大胆不敵な銀行強盗の計画をみごとにかぎつけて、犯人をとりおさえられたのです。」
ホームズはいった。
「ぼくは、ジョン・クレーにおかえしをしてやらねばならぬことがあったのです。こんどの事件のためにすこし金をつかいましたが、それは、銀行のほうではらってくださると思います。しかし、それ以上のことはいりません。いろいろなてんで、じつにめずらしい経験をしましたから、もう、たっぷりむくいられているわけです。」

夜明けまえ、ホームズは、ベーカー街の家で、ウィスキー・ソーダを飲みながらわたしに説明した。
「赤毛連盟のふしぎな広告や大英百科辞典をうつさせた目的が、あまりりこうでない質屋を、まい日、何時間か店からつれだすためだということは、はじめからはっきりしていた。その手段がじつにかわっていたが、じっさいのところ、あれほどのてはおもいつけないだろう。もちろん、頭のきれるジョン・クレーが、共犯者の髪の毛を見ておもいついた名案にちがいない。質屋をおびきだすのに一週間四ポンドの給料が必要だったが、何千ポンドというかけをしているのだから、そのくらいはなんでもないさ。
それで、広告をだして、ひとりの悪党がいちじ的に事務所を借り、クレーが質屋に応募させるようにしむけ、まい朝、かくじつに店をるすにさせることに成功したのだ。ぼくは、番頭がふつうの給料の半分できた話を聞いたときから、なにかふかい理由があるとわかっていた。」
「しかし、その理由を、どうしてさぐりあてたのだい？」
「あのおやじの商売は小さいし、店には、こんなてのこんだ策略をめぐらしたり、あれほど金をかけたりするほど値うちのあるものなど、ありはしない。そうすると、問題は、店の外にあるのだ。では、いったい、それはなんだろうか？　ぼくは、ふと、番頭が写真ずきで、口実をつけては地下室にはいっていく、ということを思いだした。地下室だ！　そこにこそ、このこんがらかった問題をとく手がかりがある。
それからぼくは、このふしぎな番頭について質問してみたが、ぼくのあいてが、ロンドンきってのりこうで大胆な悪党だとわかった。ジョン・クレーが地下室でなにかたくらんでいる――数か月もぶっつづけで、まい日、何時間かをそのしごとにあてている。なんだろうか？　どこかほかの家へトンネルをほっているとしか考えられない。
きみといっしょに現場を見にいったとき、ここまでは、すでに推理していたのだ。あのとき、ぼくはステッキで敷石道をたたいて、きみをおどろかせたね。トンネルが店の前のほうへほられているか、それとも、裏のほうへか、たしかめてみたかったのだ。前ではなかった。それから、ぼくはベルを鳴らしたが、ぼくののぞんでいたように、番頭がそれにこたえてでてきた。
ぼくとあの男とは、まえに二、三ど、小ぜりあいをしたおぼえがあるけれど、おたがいに顔を見あわせたことはない。あのときも、ほとんど顔は見なかった。知りたかったのはひ



ざがしらだ。きみも、あいつのひざがひどくすりきれて、よごれていたのに気がついたろう。何日も穴をほっていた証拠だよ。

のこるてんは、ただひとつ、やつらがなにをめあてにほっているかということだった。そこで、町かどをまわってみてシティ・アンド・サバーブ銀行が質屋と背中あわせになっているのをみつけ、これで問題が解決したと思ったよ。音楽会のあと、きみは馬車でかえったが、ぼくは警視庁へいき、それから銀行の取締役をたずねていった。そして、きみの見たとおりの結果になったのだ。」

「やつらが、今夜しごとをするとは、どうしてわかったのだ？」

「それはね、やつらが赤毛連盟の事務所をとじたのは、ウィルスンが店にいてもじゃまにならなくなった証拠だろう。いいかえれば、トンネルが完成したのだ。しかも、できたならば、いっこくも早くしごとをする必要があるはずだ。発見されるおそれもあるし、金貨がよそへうつされることもあるからだ。それにまた、土曜日がもっともつごうがいい。というのは、逃亡するのに二日のゆとりがあるからだ。こうしたわけで、今夜やるにちがいないとにらんだのだ。」

わたしは、心からかんしんした。

「あざやかな推理だ。長い長い推理の糸が、はじめからおわりまで正しくつながっている。」

ホームズは、なまあくびをしていった。

「おかげで、たいくつしのぎができたよ。ああ、だが、また、たいくつがおそってくる。ぼくは平凡な生活からのがれようと、たえず努力しているのだ。しかし、こうした事件があるので、いくらか助かるのだが。」

「そして、きみは、人類の恩人だ。」

ホームズは肩をすくめた。

「まあ、けっきょく、そうかもしれんが、フランスの大小説家フローベールが、女小説家のジョルジュ・サンドに書きおくったことばがある。『人はむなしく、芸術こそすべてだ。』とね。」

五このオレンジのたね

この事件は、ひどくめずらしい内容をもち、おもいがけない結果をたどった。そのなかの二、三のてんについては、どうにも説明がつかず、そのてんだけは、永遠になぞとしてのこるだろう。

それは一八八七年九月のすえのことで、秋分のあらしが、いつもの年よりいっそうつよくふきあれていた。風が一日じゅうつづき、雨がはげしく窓をたたいていて、大都市ロンドンのまんなかにいても、自然の威力がせまってくるのを、あらためてかんぜずにはいられなかった。夕方になるにつれて、あらしはますますはげしくなり、風は煙突のなかで、子どものようになきわめいたり、すすりあげたりしていた。

シャーロック・ホームズは、ふきげんな顔で炉のそばに腰をおろして、犯罪記録の対照索引をつけているし、わたしは、炉の反対がわにすわり、海洋小説に読みふけっていたが、しまいには、おもてのあらしのほえたける声が、本のなかにまじりこんできて、はげしくなった雨のしぶく音が、大きくくだける波のとどろきのように思われてきた。わたしは、妻がおばの家に四、五日とまりにいったので、そのあいだ、またベーカー街の古巣にまいもどっていたのである。

わたしは、ふと顔をあげてホームズを見ながら、話しかけた。

「おや。たしかに、ベルが鳴っているね。こんな晩に、いったいだれがきたのだろう？　きみの友だちかな？」

「ぼくの友だちといえば、きみひとりだよ。ほかの人にあそびにこいといったこともないよ。」

「では、事件の依頼人かな？」

「そうだとすれば、重大な事件だね。こんなあらしの日に、しかも、こんな時分になってたずねてくるとは、よくよくのことだよ。だが、きっと、家主のおかみさんのところへ、むかしなじみでもきたんだろう。」

だが、シャーロック・ホームズのこの予想は、あたらなかった。ろうかに足音がして、ドアをノックする音が聞こえたのである。ホームズは長い手をのばして、ランプを自分のそばからのけ、客のすわるいすのほうにむけながらいった。

「どうぞ。」

はいってきたのは、せいぜい二十二歳になるかならないくらいの若い男で、身だしなみもよく、服装もととのっていて、態度は、どことなくすっきりとして、上品だった。水のしたたる傘や、ぬれて光るレインコートから、外のあらしがどんなにはげしいものかがわかった。青年はランプのきらめきをうけて、おずおずとあたりを見まわしていたが、顔はあおざめ、目は、うれいにしずんでいた。大きな不安に心をいためているらしい。

青年は、金ぶちの鼻めがねをかけなおしながらいった。

「どうもすみません。ごめいわくでなければいいんですが。せっかくやすんでおいでのところへ、こんなかっこうでとびこんできたりして、すみません。」

ホームズは、いった。

「傘とレインコートとを、こちらへおだしください。ここへかけておけば、すぐかわきますよ。南西部のほうからいらしたんですね。」

「そうです。サセックスのホーシャムからまいりました。」

「あの地方どくとくの、ねん土とチョークとのまじったどろが、あなたの靴のさきにもついていますよ。」

「ご意見をうかがいにまいったのですが。」

「おやすいご用です。」

「ご名声はうかがっています、ホームズさん。タンカビル・クラブのいかさま事件で、ブレンダガスト少佐を助けられたときのお手なみを、少佐が話してくださいました。」

「ああ、あれですか。少佐は、トランプでいかさまをしたという、無実の罪をうけられたのですよ。」

「あなたの手にかかれば、解決しない事件はないと、少佐はおっしゃっていました。」

「すこしおおげさですね。」

「失敗されたことがないと聞きました。」

「いや、四かい失敗していますよ。——あいてが男のときに三かい、女のときに一かい。」

「成功なさった数にくらべれば、問題ではありません。」

「まあ、だいたい成功しているといえますがね。」

「では、ぼくのばあいも、だいじょうぶですね。」

「さあ、いすを火のほうへよせて、あなたの事件をひとわたり聞かせてください。」

「じつは、それが、ひどくかわっています。」
「ここへくる事件は、みなそうですよ。ここは特別裁判所とでもいったようなものですから。」
「しかし、それにしても、ぼくの一家につづいておこった事件ほど、ふしぎでわけのわからない事件には、あなたも、まだ、であっておられないと思いますが。」
「ぼくの好奇心をそそりますね。では、はじめから順をおって、おもなできごとを聞かせてもらいましょう。そうすれば、もっとたいせつだと思われるてんを、あとでおたずねできます。」
青年はいすをよせると、ぬれた足を火のほうにのばした。
「ぼくの名まえは、ジョン・オープンショーといいます。しかし、ぼくが判断したところでは、このおそろしい事件は、ぼく自身とはあまり関係のないところからおこっているのです。といいますのは、これは、先代からひきつづいている事件ですので、事情をおわかりいただくためには、むかしにさかのぼってお話ししなければなりません。
はじめにもうしあげておきますが、祖父にはふたりのむすこがあって、兄はイライアス、ぼくの父になる弟のほうが、ジョーゼフといいました。父は、イングランド中部のコベントリに小さな工場をもっていましたが、自転車の発明につれて工場をひろげました。オープンショーのながもちタイヤの特許をとりましたからで、のちにはそれを売って、そうとうな財産をもって楽隠居ができるくらいに成功しました。
おじのイライアスのほうは、青年時代にアメリカにわたって、フロリダで農場を経営していましたが、それでかなり成功したと、聞いています。そして南北戦争のときには、南軍のジャクスン将軍の軍隊にはいってたたかい、のちにはフッド将軍のもとで、大佐にまで昇進しました。
しかし一八六五年に南軍の総司令リー将軍が降伏しますと、また、農場にかえって、そのご、三、四年そこで暮らしていました。それから一八六九年か七〇年ごろにヨーロッパにかえってきて、イングランド南部のホーシャムの近くの、小さな地所を買いとって、そこに住むようになりました。
おじはアメリカでひじょうな財産をつくっていましたが、英国にかえってきました。その理由は、黒人をひどく毛ぎらいして、黒人たちに選挙権をあたえる、共和党の政策が、気にいらなかったのだということです。かわり者で、短気で気があらく、また、たいへん交際ぎらいな人でした。ホーシャムの近くに、何年も住んでいましたが、そのあいだに、いち

ども町へでかけたことがないくらいです。家のまわりには庭や畑があり、そこでよく運動をしていましたが、何週間もぶっつづけで、へやにひきこもっていることも、めずらしくありませんでした。ブランデーをたくさん飲み、たばこもずいぶんふかしましたが、人とあうのがいやで、友だちがなくてもへいきでした。弟にさえしたしみをもちません。

しかし、ぼくだけはその例外で、たしかに、おじにかわいがられていました。はじめてあったのがぼくの十二、三歳のころでしたから、そのためかと思います。

たしか、一八七八年のことで、おじがイギリスにかえってきてから、八、九年めでした。おじは父にたのんで、ぼくを自分の家にひきとりましたが、自分なりのやりかたでやさしくしてくれました。酒を飲んでいないときには、ぼくをあいてに、すごろくや将棋をするのがすきで、また、召使いや、でいりの商人にたいしては、ぼくを代理人にしたてましたので、ぼくは十六歳になるころには、家事がとりしきれるようになっていました。かぎもぜんぶあずかり、すきなところへいってすきなことをすることができました。

しかし、これには、ひとつだけ、ふしぎな例外がありました。おじは、屋根裏にあるがらくたべやにしじゅうかぎをかけていて、そこへは、ぼくだけでなく、だれもぜったいにいれないのです。

ぼくは子どもで好奇心がありましたから、かぎ穴からのぞいてみたこともありますが、こんなへやにつきものの古トランクや、なにかの包みなど、ありふれたものがごちゃごちゃつまっているのが見えただけでした。

一八八三年の三月でしたが、ある朝のこと、外国の切手をはった一通の手紙が、食卓のおじの皿の前におかれていました。おじの家はぜんぶ現金ばらいですし、交際している人もありませんから、手紙がくるのはめずらしいことです。おじは、それをとりあげながらいいました。

『インドからだな。ボンディシェリのけし印だ。いったいなにごとか。』

そして、いそいで封をきりました。すると、なかから、かわいた小さいオレンジのたねがばらばらと五つこぼれでて、皿の上におちました。

ぼくはそれを見ておもわずわらいましたが、おじの顔を見たとたんに、わらいはひっこみました。くちびるはだらりとなり、目はとびだし、顔は灰色になっています。そしてふるえる手に、まだ封筒をもったまま、じっと見つめているので

す。やがて、おじは、しぼるような声でさけびました。

『K・K・Kだ。ああ、とうとうおれも罪のむくいをうける日がきたか。』

ぼくもさけびました。

『どうしたんですか、おじさん。』

『死だ。』

おじはこういったなり、テーブルを立ってへやへひっこんでしまいましたから、のこされたぼくは、ただ、おそろしくてふるえるばかりでした。

封筒を手にとってみますと、おりかえしの内がわの、のりをつけるすぐうえのところに、Kの字が三つ、赤インクでらんぼうにかかれています。そのほかには、かわいたオレンジのたねが五つはいっているだけで、なにもありません。おじのあの身の毛もよだつような恐怖は、なんの理由によるのだろうか？

食事をやめて、二階へあがっていきますと、階段のとちゅうで、おじが、あのがらくたべや用のものにちがいない、さびた古いかぎをかた手にもち、もういっぽうの手には、銭箱のようなしんちゅうの小箱をもっておりてくるのと、ばったりでくわしました。

『なんとでもしやがるがいい。おれは、まけちゃいないぞ。』

おじは、ひとりでののしっていましたが、ぼくを見ていいました。

『メアリにいって、わしのへやに火をいれさせてくれ。それから、ホーシャムのフォーダム弁護士にきてもらうように。』

いわれたようにしました。弁護士がきたときに、ぼくもへやへよばれました。そこには火があかあかともえていて、紙をもやしたらしくて、火床にはふわふわした黒い灰のかたまりができていました。その横には、さっきのしんちゅうの箱が、ふたをあけて、からのままおいてありましたが、見ると、おどろいたことに、そのふたにも、朝、封筒で見たのとおなじ、Kの字が三つならんでいました。

おじはいいました。

『ジョン、わしの遺言書の証人になってほしい。わしはこの地所を、弟であるおまえの父にゆずろうと思う。したがって、そのつぎには、おまえが相続することになる。この土地をぶじにたもっていけるようならば、まことにけっこうなことだ。だが、もしそれができないようなら、わるいことはいわぬから、悪魔みたいな敵に、きまえよくやってしまうのだぞ。

こんな、得になるか損になるか知れぬ財産をゆずらなければならぬのは、わしとしてもざんねんだが、しかし、いまのところ、事情がどう変化するかわからぬのだ。さあ、フォーダムさんがしめされる場所に、サインするのだ。』

ぼくが、指示どおりにサインしますと、弁護士はその紙をもってかえりました。むろんこのふしぎなできごとは、ぼくの心にこびりつきました。いろいろ考えてみましたが、なんのことか、まったく見当がつきません。それでいて、えたいのしれないおそれが、あとにのこっていたのです。しかし、それも日がたつにつれてうすらぎ、まい日がなにごともなく、平凡にすぎるようになりました。

ただ、おじだけは、むかしとかわっていました。酒の量がますますふえて、まえよりいっそう人ぎらいになっていました。ほとんど一日じゅう、自分のへやにとじこもって、なかからかぎをかけていましたが、たまにあらわれるかとおもうと、気ちがいのようになって、家の外までとびだし、ピストルを手に、庭じゅうをあばれまわって、『おれはなにものもおそれないぞ。悪魔がこようと、なにがこようと、ヒツジのようにおりにとじこめられたりはせんぞ。』などとわめきちらすのでした。

しかし、この気ちがいじみた発作もおさまってしまうと、もとのように、あわててへやへかけこんで、かんぬきをさし、かぎをかけて、とじこもってしまうのでした。ぼくはそういうときのおじの顔を見たことがありますが、寒い日でも、まるで洗面器から顔をあげたばかりのように、汗でぬれて光っていました。

ホームズさん、たいくつでおこまりになったことと思いますが、このながたらしい話も、おしまいになります。

ある晩、おじは、いつものように酒にくるったようになって家をとびだしたまま、もどってきませんでした。さがしにいってみますと、庭の下にある、青いあぶくのういた小さな池で、うつぶせになって死んでいました。らんぼうをうけたあともなく、わずか、六十センチほどのふかさの池ですし、陪審団は、おじのふうがわりな性質から考えて、自殺と判断しました。

しかしぼくは、おじが、ひどく死をおそれていたのを知っていましたから、そんなところへ、わざわざ、死ぬためにいったなどということを、なかなか信じることはできませんでした。でも、この事件は、これでおわりということになって、わたしの父は、地所と、銀行にあった約一万四千ポンドの預金とを、相続しました。」

ホームズが口をはさんだ。

「ちょっとまってください。あなたのお話は、これまで聞いたことがないほど、異常なものになりそうです。おじさんが手紙をうけとられたのはいつで、自殺と思われるような死に方でなくなられたのはいつですか？」

「手紙がきたのは一八八三年の三月十日で、死んだのはそれから七週間めの五月二日の夜です。」

「わかりました。どうぞさきを話してください。」

「父はホーシャムのやしきを相続すると、ぼくの要求をいれて、いつもかぎのかかっていた屋根裏べやをくまなくしらべました。あの、しんちゅうの箱がありましたが、なかみはすっかりなくなっています。ふたの内がわには、はり紙がしてあって、その紙の上には、Kの字が三つ、下には『手紙、控え、受領書、名簿』と書いてありました。おじがやきすてた書類は、これでだいたい見当がつきます。

屋根裏べやには、このほかにたいして重要なものはありませんでしたが、おじのアメリカ生活につながりのある書類や手帳が、ばらばらになって、山のようにでてきました。なかには南北戦争当時のものもあって、おじがよく義務をつくして、勇かんな軍人としてのひょうばんをとっていたことをしめすようなものもありました。また、主として政治に関係したものもありましたが、これは、戦争の混乱につけこんで北部からやってきたながれ者たちをあいてにして、おじが大きなはたらきをしたためです。

父がホーシャムに住むようになったのは、一八八四年のはじめでした。それからよく年の一月までは、まったくぶじな日がつづいたのでしたけれども、新年をむかえて、まだ四日めの朝、いっしょにテーブルについていますと、父がふいに大きなさけび声をあげました。みると、かた手には、いまあけたばかりの封筒をもち、もうひとつの手は大きくひらいて、てのひらに、かわいたオレンジのたねを五つのせているのです。

父はふだん、ぼくがおじのうけとった五つのオレンジのたねの話をしますと、でたらめだといってわらっていたのですが、おなじことが自分の身におこると、さすがにきみがわるくて、おびえてしまったようです。

『ジョン、こ、これは、どうしたわけだろう？』

ぼくの心は、なまりのようにおもくなりました。

『K・K・Kです。』

父は、封筒のなかをしらべてさけびました。
『うん、そうだ。ここにそう書いてあるぞ。だが、そのうえのこれは、どういうことだろうか？』
ぼくは、父の肩ごしにのぞきこんで読みました。
『書類を日時計の上におけ、と書いてありますね。』
『書類とはなんだ？　それに、日時計というのは？』
『庭にある日時計のことでしょうね。ほかにありません。しかし、書類というのは、おじさんがやいてしまったものでしょう。』
父は、元気をふるいおこしていいました。
『ふむ、ここは文明国だ。こんなふざけたことがあってたまるか。手紙は、いったいどこからだしているんだ。』
ぼくはけし印を見てこたえました。
『スコットランドのダンディーからです。』
『ふとどきしごくないたずらだ。このわしが日時計や書類と、なんの関係があるんじゃ。こんなばかなことに、いちいちかまっておられるものか。』
『ぼくだったら、さっそく警察にとどけますが。』
『わざわざ警察までむいて、わらわれてくるのか。まっぴらじゃ。』
『では、ぼくにいかせてください。』
『いや、ならぬ。こんなばかばかしいことでさわぐのは、ゆるさぬ。』
父は、ものすごくがんこですから、これ以上あらそってもしかたがありません。しかし、ぼくは不吉な予感にすっかりおびえて、うろうろしていました。
手紙がきてから三日めに、父は、ポーツダウン丘の要塞司令をしている、むかしなじみのフリーボディ少佐をたずねにでかけました。家にいなければ、それだけ危険がすくないように思われましたから、ぼくは、父がでかけるのにさんせいでした。ところが、じつは、それがまちがいだったのです。父がでかけてから二日めに、少佐から、すぐこい、という電報がまいりました。父はあの付近いったいにほられている、ふかいチョーク穴のひとつにおち、頭がい骨をくだいて、気をうしなってたおれていたのでした。
ぼくはすぐかけつけましたが、父はいちども意識を回復せずに、そのままなくなりました。フェアラムへでかけて、夕方、かえるとちゅうだったらしいのです。父はその土地に不案内なうえ、チョーク穴に柵がしてありませんでしたから、陪審団は、すぐに、『事故死』の評決をくだしました。ぼく

は、父の死んだときの状況をたんねんにしらべてみましたが、他殺をほのめかすようなものは、なにも見つかりません。らんぼうをうけたあとも、足あともなく、ぬすまれたものもありません。近くを見知らぬ人間が歩いていたのを見た人もいませんでした。
しかし、それでも、ぼくの心には、どうしても不安がのこったのです。かえって、父はおそろしい悪だくみで殺されたにちがいないと思いました。
こういう、うすきみわるいなりゆきで、ぼくが相続人になりました。どうして処分してしまわなかったのかと思われるでしょうが、ぼくの考えでは、われわれにふりかかった災難は、おじの身の上にからまるものだから、べつの家にこしたからといって、危険がへるものではないと思われたのです。
父がさいごをとげましたのは、一八八五年の一月で、それから二年八か月がぶじにすぎました。そのあいだ、ぼくは、ホーシャムで幸福な生活をおくっていましたから、このぶんなら、一家にかかるのろいもとけて、おじや父の代ですんでしまったわけになるのだ、と思いはじめました。しかし、ぼくのあまい考えは、すこしはやまりすぎたようでした。というのは、きのうの朝、父の身にふりかかったのとおなじかたちをとって、おそろしいまえぶれがやってきたのです。」
青年は、チョッキのポケットから、しわになった封筒をとりだすと、テーブルのほうをむいて、その上に五この小さいかわいたオレンジのたねをおとした。
「これがその封筒です。けし印はロンドンで、東局区内になっています。なかは、父がうけとった手紙とおなじものです。『K・K・K』そしてその下に、『書類を日時計の上におけ。』と書いてあります。」
「それで、きみはどうしましたか？」
ホームズはたずねた。
「なにもしていません。」
「なにもしない？」
青年は、きゃしゃな白い両手のなかに、顔をうずめた。
「じつをいいますと、ぼくはどうしていいかわからないのです。まるで、ヘビにじりじりせめられるウサギのようなかんじなのです。抵抗しようのない、むじひな悪魔の手につかまってしまって、どんなに前を見すかして、用心ぶかくしても、助からないような気がします。」
シャーロック・ホームズはさけんだ。
「いやいや、きみは、すみやかに行動しなければ、やられて

しまいますよ。あきらめているときではありません。」
「警察にはとどけました。」
「それで？」
「事情を話すと、わらわれました。どうやら警部は、手紙がぜんぶいたずらで、おじや父の死は、陪審員のいうように、まったくの事故死であり、手紙とは関係ないと判断したようすです。」
ホームズは、こぶしをあげてふりまわした。
「あきれはてたおろかさだ！」
「それでも、ぼくの家の見はりに、警官をひとりよこしてくれました。」
「今晩も、きみといっしょにきているのですか？」
「いえ、家を見はれという命令ですから。」
ホームズは、また気ちがいのようにこぶしをふりまわした。
「なぜ、きみはここへきたんですか？　いや、なぜ、もっと早くこなかったんですか？」
「知らなかったものですから。じつは、きょう、はじめてブレンダガスト少佐にうちあけますと、あなたのところへいくようにすすめられたのです。」
「手紙がきてから、もう二日もたっています。もっと早くて、をうつべきだったんだ。いま見せてくださったもののほかに、なにか資料はないでしょうか？　手がかりになりそうな、ちょっとしたものでも？」
「ひとつあります。」
オープンショー青年は、こういいながら、上着のポケットをさぐると、色のあせた青い紙をとりだして、それを机の上にのせてつけくわえた。
「おじが書類をやいた日に、灰のなかにやけのこっていた紙のはしが、これとまったくおなじ色だったのです。この一まいは、おじのへやの床におちていたのですが、たくさんのなかから一まいだけぬけおちて、やかれずにすんだのではないでしょうか。
『たね』という字がでてきますが、あとの文句は、たいして役にたつとも思えません。ぼくの見たところでは、ひみつの日記のきれはしのように思えます。字は、まちがいなくおじのものです。」
ホームズがランプをうごかしたので、わたしもいっしょにのぞきこんだ。その紙のかたがわはぎざぎざになっていて、ノートからはがれたものであるとわかった。上に、一八六九

年三月としるされていて、その下に、つぎのような、なぞめいた文句がならんでいた。

四日　ハドスンくる。主張はかわらない。
七日　マコーリ、パラモアおよびセント・オーガスティンのジョン・スウェインにたねをおくる。
九日　マコーリさる。
十日　ジョン・スウェインさる。
十二日　パラモアをたずねる。ばんじつごうよし。

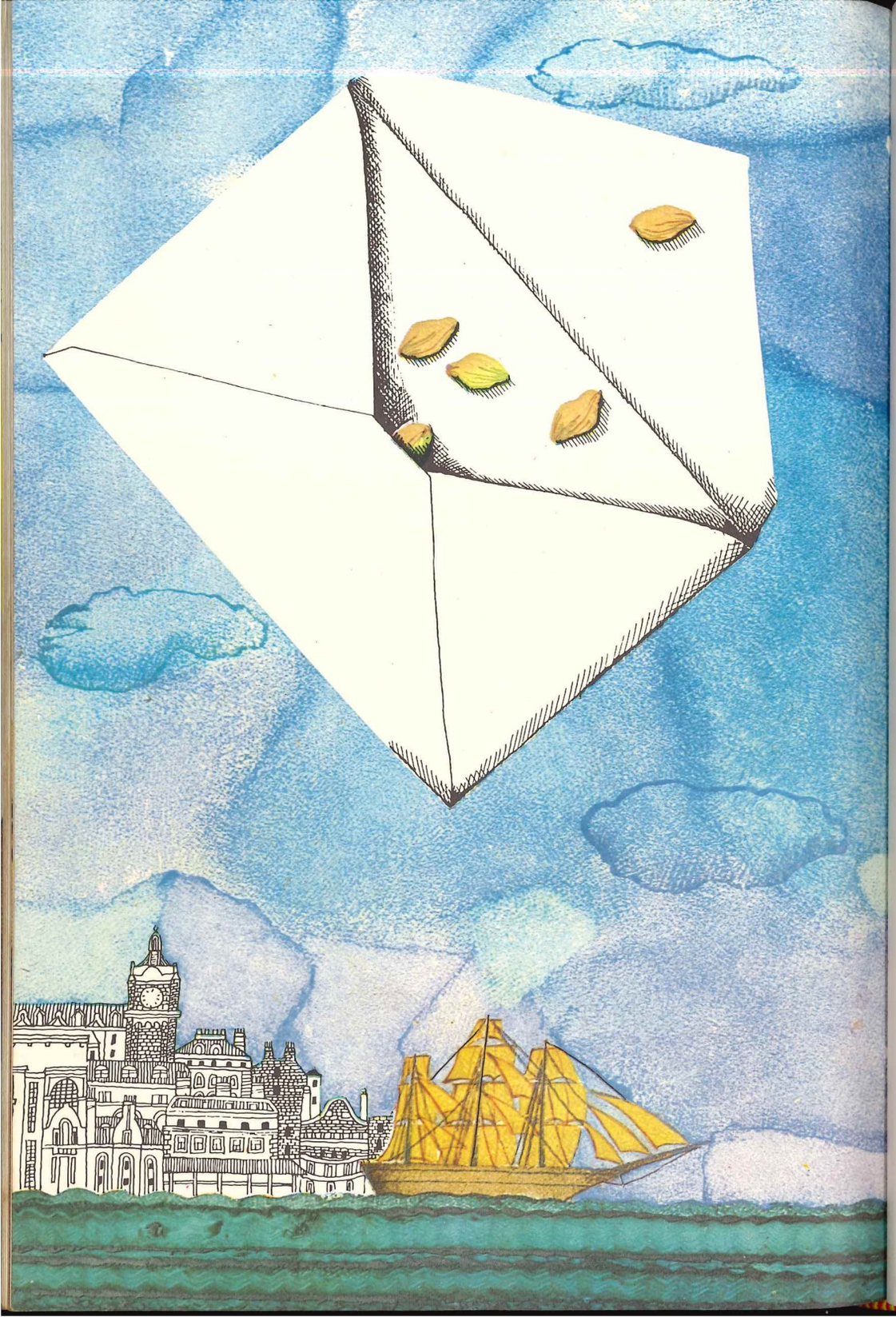
ホームズは、紙をたたんで客にかえしながらいった。
「ありがとう。さあ、これで、もう、すこしもぐずぐずしていられません。お話の内容をここでしらべているひまもありませんよ。きみはこれからすぐかえって、行動をおこしてください。」
「なにをすればいいのですか？」
「することはただひとつです。すぐしなければいけません。まず、見せてくださったこの紙を、そのお話のしんちゅうの箱にいれるのです。それから、ほかの書類は、おじがぜんぶやいてしまったから、これ一まいしかのこっていないと書いた紙きれを、いっしょに箱のなかへいれなさい。あいてが、よくなっとくするように、じょうずに書かないといけませんよ。そして、それがすんだら、すぐ指定どおりに日時計の上に箱をおだしなさい。わかりましたか？」
「よくわかりました。」
「いまのところは、復しゅうをしようとか、そんなことを考えてはいけません。それは、法律の力でできることだと思うのです。しかし、いまは敵がすでにあみをはっているのですから、こちらもあみをはっていかねばなりません。それにはまず、あなたの身にふりかかりそうな、目の前の危険をとりのぞくことがだいいちです。なぞをといたり、悪人たちをこらしめたりするのは第二段階です。」
青年は立ちあがって、オーバーを着ながらいった。
「ありがとうございます。あなたは、ぼくにいきかえったような希望をあたえてくださいました。かならず、おしえていただいたようにいたします。」
「一刻もたいせつなのです。それから、なによりもまず、身のまわりに気をつけてください。きみの身におそろしい危険がせまっているのは、たしかなのですから。どういうふうにしてかえりますか？」

「ウォータールー駅から汽車で。」
「まだ九時まえだ。人どおりがかなりあるから、まあ、心配ないでしょう。しかし、いくら用心しても、しすぎるということはありません。」
「ぼくは武器をもっています。」
「それはけっこうです。ぼくはあすから調査をはじめます。」
「では、ホーシャムにきてくださいますか？」
「いや、なぞのもとはロンドンにあります。ぼくは、こちらにいて、それをつきとめます。」
「では、箱を日時計の上にだした結果を、お知らせかたがた、一両日ちゅうに、またおたずねいたします。ご忠告はまちがいなくまもります。」
青年は、あく手をもとめてわかれをつげた。おもてでは、あいかわらず風がふきすさび、雨がしぶきをあげて窓をたたいていた。このふしぎでおそろしい物語は、あれくるう自然のなかから、あらしにふきよせられる海草のように、わたしたちのところへとびこんできて、いままた、あらしにはこびさられたかのように思えた。
シャーロック・ホームズは、しばらくだまったままうつむいて、もえさかる火を見つめていた。それから、パイプに火をつけると、いすの背にふかくもたれて、つぎつぎに天じょうにあがる、たばこの青い煙をながめはじめた。
ホームズは、やっと口をきった。
「ワトスンくん、ぼくたちの経験でも、こんな奇怪な話は、はじめてだと思うよ。」
「そうだな、『四人のサイン』につぐ事件だろう。」
「そうそう、あれはとくべつだったね。それにしても、こんどのジョン・オーブンショーという青年のほうが、あのときのショルトー一家よりも、もっとおそろしい危険のなかを歩いているようだよ。」
「すると、きみはもう、危険がどういうものか、はっきり知っているのかい。」
「危険の性質はわかっている。」
「すると、どういう事件だい。このK・K・Kというのは、なにものだろうか？　そして、なぜあの不幸な一家ばかりつけねらっているのだろうか？」
シャーロック・ホームズは、目をとじて、ひじをいすの腕にのせると、指さきをつきあわせた。
「すぐれた推理家というものは、さまざまの意味をふくむ、ひとつの事実をしめされると、そこにいたるまでのひとつづきのできごとを、ことごとく推察するだけでなく、さらにまた、その事実から発展していく将来の結果も、みな見とおせるものだ。
われわれは、まだ結論をしっかりつかんでいないが、それは推理によってのみ、ひきだせるものなのだ。だが、そのためには、わかった事実をのこらず活用するだけの力をもたなければならないし、それにはまず、あらゆる知識をあらかじめもっていることが必要となる。これはむずかしいことだが、自分のしごとのうえに必要だと思えるかぎりで、あらゆる知識を身につけるのは、不可能ではない。ぼくのばあいにしても、その努力をしてきた。
ところで、今晩もちこまれた事件だが、こういう問題にはわれわれの知識をぜんぶとりだしてくる必要がある。すまないが、その棚から、アメリカの百科辞典のKの字のぶぶんを、とってくれないか。ありがとう。さあ、これから状況判断によって、どういうことがひきだされてくるか、見てみよう。
オーブンショー大佐が、アメリカをさったのは、なにかはっきりした理由があったにちがいない。人間は、あの年ごろになると、なかなか習慣をかえにくい。しかもあの大佐は、気候のよいフロリダをすてて、わざわざイギリスのかたいなかにはいり、ひとりぼっちの生活をはじめたのだ。イギリスにかえってから人づきあいをひどくさけていたのをみると、だれかを、あるいは、なにごとかを、おそれていたのだと思われる。
このことから、大佐がアメリカをさったのは、そのだれか、または、なにごとかをおそれたためだと、仮定することができる。では、なにをおそれたかということについては、大佐やその相続人たちがうけとったおそろしい手紙から、おしはかるよりしかたがない。きみは、三通の手紙のけし印に注意したかい？」
「さいしょのは、インドのポンディシェリ、つぎのはスコットランドのダンディーで、さいごのは、ロンドンだった。」
「ロンドンの東部だ。それからなにかひきだせないか？」
「みんな港だね。差出人は船にのっているのだろう。」
「みごとだ。すでにひとつ手がかりができた。差出人が船にのっている男だというてんは、まちがいなさそうだ。つぎに、べつの方向から考えてみよう。ポンディシェリから手紙をだしたばあいは、脅迫状がついてから殺人がおこなわれるまでに、七週間のあいだがあいている。ダンディーのばあい

は、わずか三、四日だ、ここからなにか想像できないか？」
「旅の距離の長さによる。」
「だが、手紙もおなじ距離のところからきているのだよ。」
「そういわれるとわからないな。」
「すくなくとも、手紙の主がのっている船は、帆船らしいということがわかる。そいつは、使命をおびて出発するまえに、あのあやしい脅迫状をおくりだしていたらしい。ダンディーのばあいには、手紙がきたのと実行とのあいだが、ごくわずかしかあいていない。ポンディシェリのばあいも、そいつが、もし汽船にのっているなら、手紙とほとんど同時にすがたを見せたはずだ。だが、じっさいには、七週間おくれている。手紙をはこんできた郵便船のほうが、手紙の主がのっていた帆船より、速いために、それだけずれたのだろう。」
「そうかもしれないね。」
「そうかもしれないどころか、ほぼ確実だよ。だから、こんどのばあい、事態がきわめてさしせまっているのがわかるだろう。それでこそ、オープンショー青年に用心するように、すすめたのだ。殺人は二どとも、手紙の主が手紙をだしたところから、こちらへ旅行してくるだけの日数をおいて、そのあとすぐ、おこっている。だが、こんどのばあいは、ロンドンからだしているのだから、一刻もぐずぐずできない。」
わたしはさけんだ。
「そりゃたいへんだ。だが、いったいなんのために、こんなひどいことをするのだ。」
「オープンショー大佐のもっていた書類が、その帆船にのっている者たちにとって、生死にかかわるほどたいせつなのだろう。ぼくは、どうみても、数人いるものとにらんでいる。ひとりでは、検死の陪審団をあざむけるほどたくみに、二どとも、殺人をおかせるものでない。おそらく、三、四人はいて、みなわるがしこく、大胆なやつらにちがいない。そしてやつらのほしい書類が、だれの手にあるとしても、かならず手にいれるつもりでいるのだ、ここまでくれば、K・K・K・Kというのが個人の頭文字ではなくて、ある団体の称号だというのが、きみにもわかるだろう。」
「だが、どんな団体だろう？」
ホームズは、からだを前にのりだし、声をひそめていった。
「きみは、まだ、キュー・クラックス・クランについて聞いたことはないかい？」
「ないね。」

ホームズは、ひざの上で、辞典のページをめくると、すぐ見つけて読みはじめた。
「ここにあったよ。
『キュー・クラックス・クラン――銃のうち金をおこすときの音に、なんとなくにているところからつけられた秘密結社の名。このおそろしい秘密結社は、南北戦争後、南部諸州の旧軍人のいちぶによってつくられたもので、たちまち全国にひろまり、各地に支社をおくにいたった。おもに、黒人有権者をおどしたり、結社の政治上の主張にはんする者をころしたり、国外に追放したりするのをしごととした。
結社が、暴行をおこなうときには、まず、あいてに警告をはっするのがつねである。ある地方では、カシの小枝、またある地方では、メロンやオレンジのたねを目標の人物におくる。この警告をうけた者は、自分の主張をすてるむねを、おおやけに声明するか、国外に逃亡するかしなければならない。もしこれにさからうと、かならず殺され、しかもその方法は、ふしぎで、おもいがけないものであった。結社の組織はかたく、また、実行の方法が組織的であったから、警告にさからって死をまぬがれた者もなく、また、犯人がつきとめられたこともないという。この結社は、数年間、つよい勢力をふるったが、一八六九年、ふいに解散した。しかし、そのごも、おなじ種類の団体があちこちに発生している。」
ホームズは、辞典を下におきながらいった。
「これでみると、結社がふいに解散したのは、オープンショー大佐が、アメリカから書類をもってひきあげてきたのとおなじ時期だから、関係があるとみてよさそうだ。大佐とその一族がしつこくつけねらわれているのも、ふしぎではない。名簿や日記は、K・K・Kの首領たちにかんするもので、それをぜひ、とりもどそうというのだろう。」
「すると、さっき見たあの紙きれが――。」
「そうだと思う。たしか、三人にたねをおくったと書いてあったが、あれはつまり、結社が警告をはっしたという意味なのだ。つぎにふたりがさったとあったのは、国外ににげたことで、三人めの人間を訪問したというのは、きっと殺したことを意味するのだ。ねえ、ワトスンくん、ぼくたちはひょっとすると、暗黒の世界にいくらかでもメスをいれることができるかもしれないよ。そして、ジョン・オープンショーは、ぼくのいったようにするいがいに、助かる道はないだろう。」
つぎの朝は、すっかり晴れ、太陽はうすもやをとおして、ものやわらかなかがやきをみせていた。わたしがおりてみる

と、ホームズは、もう、朝食をとりはじめていた。
「さきに失礼しているよ。きょうはオープンショー青年の事件で、ひじょうにいそがしいだろうと思ったのでね。」
「どういう行動にでるのだい？」
「さあ、それは、さいしょにしらべたことの結果しだいだ。けっきょくは、ホーシャムにいくようになるだろう。」
「さいしょにそこへいかないのかい？」
「いや、中心区からはじめる。ちょっとベルを鳴らしてくれたまえ。女中がきみのコーヒーをもってきてくれるよ。」
コーヒーをまっているあいだに、わたしはテーブルから、まだたたんだままの新聞をとって、目をとおしはじめた。ふと、ある見出しが目について、わたしはぞっとした。
「おい、ホームズくん、もうまにあわないぜ！」
ホームズは、コーヒー茶わんを下におきながらいった。
「そんなことではないかと思っていたんだ。どういう方法でやられたのだ？」
その声は、静かだったが、つよくショックをうけていることはあきらかだった。
「オープンショーという名まえと『ウォータールー橋付近の悲劇』という見出しとが目についたんだ。読んでみよう。
『さく夜、九時から十時までのあいだに、H署のクック巡査は、ウォータールー橋付近で勤務ちゅうに、助けをもとめるさけび声と、水のはねる音とを聞いた。数人の通行人も、協力したが、おりからのあらしと暗さのため、救助はまったく不可能であった。しかし警報によって、水上警察署が出動し、死体ひきあげには成功した。身もとは、服のポケットにあった封筒によって、ホーシャム市近くに住むジョン・オープンショーという青年紳士とわかった。終列車にのるつもりで、ウォータールー駅にいそぐとちゅう、まったくの暗やみのために道をあやまり、川蒸気船つき場から足をふみはずしたものと思われる。死体には、暴行のあともなく、おもいがけない災難であると、考えられる。』」
わたしたちは、しばらくだまっていた。ホームズは、いままでに見たこともないほどしずみ、どうようしていた。
「ぼくのほこりも傷つけられた。こうなれば、もう、ぼく自身としてほうっておけない問題だ。このいのちがあるかぎり、かならずこのギャング団をとらえてやる。せっかくたよってきたのに、かえりにむざむざ死なせてしまうとは。」
ホームズは、いすから立ちあがると、あおざめた顔を赤くして、神経質に細長い両手をにぎりあわせたりはなしたりしながら、興奮をおさえきれないように、へやのなかをいったりきたりしはじめた。
「悪がしこい悪魔どもだ。どのようなやりかたで、そんな場所におびきだしたんだろう？　河岸通りは駅へでる道すじじゃない。橋の上は、あんなあらしの晩でも、人どおりは多いのだから。よし、ワトスンくん、さいごにはどちらが勝つか見ていてくれ、ぼくは、これから外出だ。」
「警察へゆくのか？」
「いや、ぼくが警察のかわりにはたらくのだ。」
わたしは、その日ずっと、本職の医者のしごとのほうがいそがしくて、ベーカー街にひきあげたのは、夜になってからだった。ホームズは、まだかえっていなかった。十時ちかくになって、つかれたあおい顔をしてはいってきた。そして、すぐ食器棚のところへいくと、パンをちぎって、ぐいぐい水でながしこみながら、むさぼるように食べはじめた。
「腹がへったのかい？」
「うえ死にしそうだ。食べるのをわすれていた。朝からなにも食べていない。」
「それで、しゅびよくいったかい？」
「このてのひらのなかに、やつらをにぎっている。オープンショー青年のかたきをうつのは、とおいことではないぞ。ねえ、ワトスンくん、こんどはこっちから、やつらにあの悪魔的なあいことばをおくってやろうじゃないか。」
「えっ、なんだって。」
ホームズは、戸棚からオレンジをとりだしてこまかくわり、テーブルの上にたねをしぼりだした。そしてそれを五つひろって封筒のなかへいれ、封筒のおりかえしの内がわに『ジョン・オープンショーの代理シャーロック・ホームズ』としるした。封をして、おもてには『米国ジョージア州サバナ港、帆船ローン・スター号船長、ジェームズ・キャルフーン殿』とあて名を書いた。
そして、クスクスわらっていった。
「船が港にはいると、これがまっているんだ。やつはこれを見て、夜も眠れなくなるぞ。オープンショーとおなじような運命が予告されたと、かんじるだろう。」
「そのキャルフーン船長というのは、何者だね？」
「一味の首領だよ。ほかのやつらもやっつけるが、まず首領からだ。」
「どういう方法でつきとめたのだい？」
ホームズは、ポケットから日付けや名まえをいっぱい書き



こんだ大きな紙をとりだした。

「きょう一日がかりで、船舶登録簿と古い新聞のつづりで、一八八三年の一月から二月のあいだにボンディシェリに寄港した船の、そのごのうごきをしらべた。この二か月のあいだに報告されているトン数の大きい船は、三十六あった。そのなかで、ローン・スター号というのが、すぐぼくの目にとまった。というのは、ロンドンから出港となっていたが、この船の名は、アメリカのどこかの州の別名だからね。」

「テキサスだろう。」

「さあ、そこまではおぼえていなかったし、いまも自信がない。とにかくアメリカ系の船にちがいないとみたのだ。つぎに、ダンディー港の記録をしらべてみると、ローン・スター号が一八八五年の一月に寄港しているとわかったから、うたがいは確信にかわった。それからこんどは、ロンドン港に現在停泊ちゅうの船をしらべてみた。」

「すると？」

「ローン・スター号は先週入港していた。さっそく、テムズ川のアルバート・ドックへかけつけたところ、けさ、引き潮にのって、サバナ港にむけてかえりの航海に出発したとわかった。」

「そこで、これからどうするんだい？」

「なに、もうつかまえたもおなじだよ。ぼくのしらべたところでは、船員のなかでほんとうのアメリカ人は、船長とふたりの航海士だけだった。ほかは、フィンランド人とドイツ人だ。そしてこの三人のアメリカ人は、さく晩そろって上陸している。船の積荷をした沖仲仕がおしえてくれたよ。さあ、これで、あの帆船がサバナ港へつくころには、この手紙が郵便船でとどいているだろう。また、むこうの警察へは、ロンドンで殺人をおかしたうたがいで、三人のアメリカ人をとりおさえてほしいという連らくがついているはずだ。」

だが、人間のたてた計画は、どんなにすぐれていても、どこかにぬかりがあるものだ。ジョン・オーブンショー殺害の共犯者たちは、オレンジのたねをうけとらず、ホームズに追跡されているのを、永久に知らない運命にあった。あの年の秋のあらしは、いつになくながく、はげしかった。わたしたちは、サバナ港から、ローン・スター号のニュースがはいるのを、ながいあいだまちわびたが、ついに、なんの知らせもなかった。そのごやっとわかったことは、大西洋のはるか沖あいで、ローン・スター号とほりつけたボートの船尾材のかけらが一まい、波間にただよっていたという事実だった。

青いルビー

クリスマスがすんで、二日めの朝のことだったが、わたしはお祝いをいうつもりで、友人のシャーロック・ホームズをたずねた。ホームズはむらさき色のガウンを着て、ソファによりかかり、右手のとどくところにパイプかけをひきよせ、そのすぐそばに、たったいままでしらべていたらしいしわくちゃの新聞を山のようにつみあげていた。寝いすの横に木のいすがあり、いすの背のかどには、手ずれしてあちこちひびのはいっているおんぼろの山高帽子がかけてあった。いすの上に虫めがねとピンセットがおいてあるところをみると、その帽子は、検査するためにいすの背にかけてあるにちがいない。わたしはいった。

「しごとちゅうかい？　おじゃましたようだね。」

「いや、どうして。研究の結果を議論するあいてができてうれしいよ。」

ホームズは、親指で古帽子を指さしてつづけた。

「こいつはごくつまらない事件だけれど、こんなものでも、しらべてみれば興味もわいてくるし、おしえられるところもあるものだね。」

わたしはいすにすわって、もえさかる火に手をかざした。霜のひどい、窓に氷の花の厚くはった日である。わたしは口をきった。

「では、どこの家にでもありそうなこの帽子には、なにか、おそろしい物語がひめられているのだね。それできみは、この帽子を手がかりに、なぞをといて、なにかの犯罪をあばこうというのだろう。」

ホームズは、わらいながらこたえた。

「いや、ちがう。犯罪とは無関係だよ。このロンドンには、せまい土地に、四百万人もの人間がおしあいへしあいして生きているのだから、犯罪事件があとをたたないわけだけれど、犯罪に関係がなくて、しかもふしぎな小事件も、ぞくぞく生まれてくるのだ。そう、こんどの小事件も、たしかに犯罪と関係がない。きみは配達夫のピータースンを知っているかい？」

「うん、知っている。」

「この帽子は、あの男がひろってきたんだ。持ち主はわからない。きみ、この帽子をただのおんぼろ帽子と考えないで、頭をはたらかせてほしいね。それで、この帽子がここへきたいきさつを、まず話しておこう。この帽子は、クリスマスの朝、よくふとった一わのガチョウといっしょにここへきたのだ。ガチョウのほうは、いまごろ、たしか、ピータースン家で、あぶられているはずだよ。いきさつはこうだ。

あのピータースンは、きみも知っているようにしょうじき者だが、クリスマスの朝四時ごろ、どこかでつつましくあそんだあとで、家にかえろうと、トテナム・コート通りにさしかかったんだ。ガス灯のあかりで前を見ると、白いガチョウを肩にかついだ背の高い男が、すこし千鳥足で歩いている。グッジ街のかどにさしかかると、この千鳥足の男と数人のよたもののとのあいだにけんかがはじまった。よたもののひとりが男の帽子をたたきおとしたので、男は身をまもろうとしてステッキを頭の上にふりあげたが、そのとたんに、うしろのショーウィンドーをわってしまった。

ピータースンは、この見ず知らずの男をよたものからすくいだしてやろうと、かけだしたが、男のほうは、窓ガラスをわってはっとしたところへ、巡査のような制服を着た男がかけてくるものだから、ガチョウをほうってにげだし、トテナム・コート通りの裏につづいている、迷路のようなせまい町へきえてしまった。

いっぽう、よたもののほうも、ピータースンのすがたを見て、にげてしまったから、ピータースンはひとりで戦場を占領し、そのうえ、このおんぼろ帽子と、クリスマス用として、もうしぶんないガチョウとをぶんどってきたというわけだ。」

「で、それを持ち主にかえしたんだな。」

「いや、きみ、そこが問題なんだよ。ガチョウの左足には、たしかに、『ヘンリー・ベーカー夫人へ』と書いたカードがむすびつけてあるし、帽子の裏にも、H・Bという頭文字が読める。だが、ロンドンじゅうには、ベーカーという人が何千人といるし、ヘンリー・ベーカーでも何百人といるから、そのなかのひとりに、おとし物をかえすのは容易ではない。」

「では、ピータースンはどうしたのだい？」

「ぼくがどんなにつまらない事件にでも興味をもつと知っているから、クリスマスの朝、ここへ帽子とガチョウとをとど

けてきたのだ。ガチョウも、けさまでのこしてあったが、こんなに寒いというのに、早く食べないといたんでしまいそうなようすがみえてきた。それで、ひろい主のピータースンが、ガチョウの使命をはたさせてやろうと、それをもってかえり、クリスマスのごちそうを食べそこなった紳士の帽子は、ぼくがまだあずかっているというわけだ。」

「新聞広告は、でていないのか？」

「でていない。」

「じゃ、どこのだれか、手がかりもないのだね？」

「推理でわかるだけだよ。」

「この帽子からか？」

「そうさ。」

「じょうだんだろう。こんな古いやぶれ帽子から、いったいなにがわかるのだい？」

「ここに虫めがねがある。ぼくのやり方をきみは知っているだろう。この帽子をかぶっていた紳士の人となりについて、ひとつ、きみの推理を聞かせてくれないか。」

わたしは、そのぼろ帽子を手にとって、ひっくりかえしてみた。ありふれた丸型の、黒い山高帽子で、つかいふるしたために、ひどくいたんでいた。裏布は赤い絹だが、それも、すっかり色あせている。製造元の名まえはないが、ホームズのいったように、かたがわにH・Bと頭文字がなぐり書きされている。つばには、とめひもをとおす穴があるが、ゴムひもはついていない。ひびわれがきていて、ひどくほこりっぽく、しみがいくつかつき、また、その色のかわったぶぶんに、インクをぬってごまかそうとしたあとも見えた。わたしは、帽子をホームズにかえした。

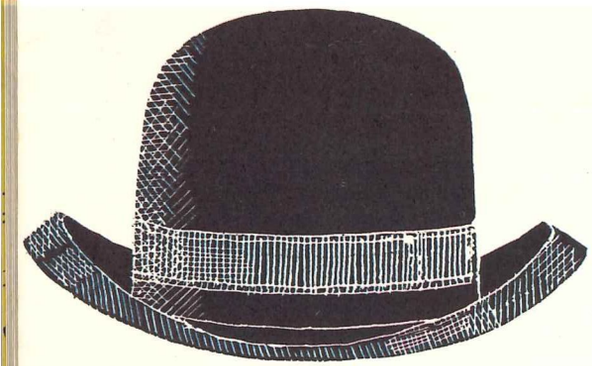
「ぼくには、なにもわからない。」

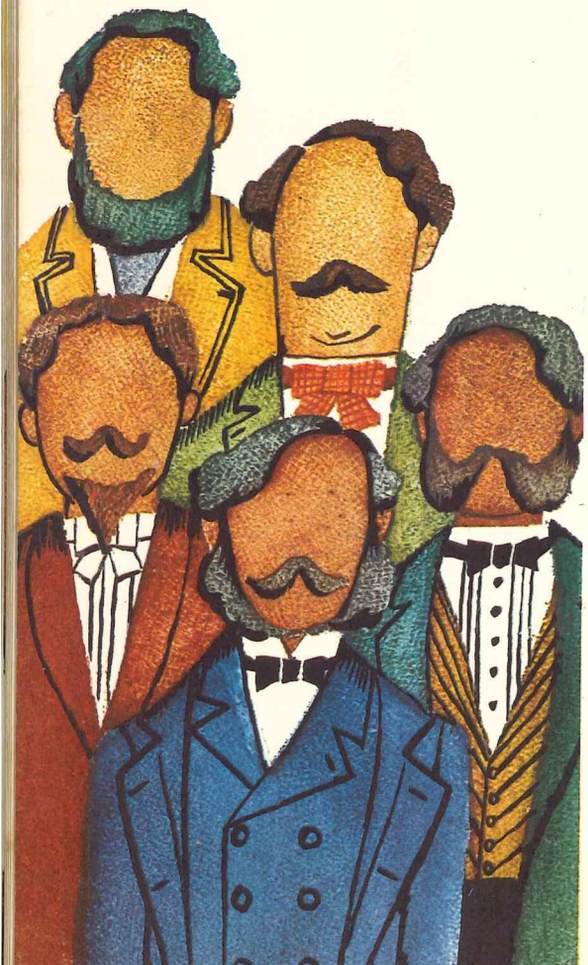
「いや、ワトスンくん、きみの目にもすっかり見えているんだ。だが、きみは、目で見たものから推理しない。」

「では、きみは、この帽子から、どんな結論をひきだしたのだい。」

ホームズは帽子をひろいあげると、帽子をじっとながめてからいった。

「帽子が古すぎてよくわからないが、それでも二、三のてんでは、まちがいない推理ができるし、そのほかにも、十ちゅう八、九の、たしかな推理ができそうだ。まず、これを見ただけで、この持ち主がひじょうにかしこい男で、また、いまはおちぶれているが、二、三年まえには、かなりゆたかだったということがわかる。むかしは用心ぶかかったが、いまは





それほどでもなくて、道義心もゆるみだしているようだ。落ちめになったために、たぶん、酒を飲むくせでもついたんだな。細君がこの男を愛さなくなっていることはたしかだが、それは、そのせいだろう。」

「よくもそんなでまかせをいえるな。ホームズくん。」

ホームズは、わたしのことばにかまわなかった。

「しかし、まだあるていど、ほこりをもっている。すわりしごとをしていて、めったに外出せず、ひじょうに運動不足で、年ごろは中年、半分白くなった頭を二、三日まえに刈ったばかりで、ライム入りのクリームをぬっている。いじょうの事実は、この帽子からはっきり推理できるね。それから、この男の家には、ガスがひいてないということもいえそうだ。」

「それこそじょうだんだろう、ホームズくん。」

「じょうだんなものか。これだけ結論をいってやって、どうしてそうなるのかわからないのかい。」

「そりゃ、ぼくが大ばかだということは、まちがいなしだがね。だが、それにしても、しょうじきなところ、きみの頭には、ついていけない。たとえば、この男がかしこいというのは、どうしてわかるのだい？

ホームズはこたえるかわりに、その帽子を自分の頭にひょいとのせた。それは、すっぽりひたいをかくして、鼻の上でとまった。

「こんなに頭の大きい男なら、なかみもそうとうだろう。」

「では、おちぶれたというのは？」

「この帽子は、三年まえに買ったものだ。つばがひらたくて、さきのこう巻いているのは、当時の流行だ。これは高級品だろう。ほら、リボンはあや絹だし、裏もじょうとうだよ。三年まえにこんなぜいたくな帽子が買えて、しかも、それいらい帽子を買っていないのだから、落ちめであるにちがいない。」

「なるほど、たしかにそのとおりだな。だが、用心ぶかいとか、道義心がゆるみだしたというのは？」

シャーロック・ホームズはわらって、指さきで、とめひもをとおす小さな金輪に手をふれた。

「用心ぶかいというのは、これだよ。こういうものは、帽子には、はじめからついてはいない。この男が買うときに、帽子が風にとばされないようにつけさせたのだから、かなり用心ぶかいと考えられる。だがこのとおり、ひもがきれたのに、つけかえようとしていないところをみると、さいきんは、なげやりになってきた、たしかな証拠だ。また、インクをぬって、帽子のしみをかくそうとしているから、すこしはほこりがのこっているのだろう。」

「たしかに、お説ごもっともだな。」

「そのほかのてん、たとえば頭が半分白くなった中年の男で、さいきん髪を刈ったばかりで、ライム入りのクリームをつかっているというのは、裏地の下のほうをよくしらべればわかることだ。虫めがねで見ると、床屋のはさみできれいに刈った短い髪の毛が無数に見える。しかも、見たところべとべとしていて、ライム入りクリームのにおいがしている。それから、このほこりは、よく見ると、おうらいの灰色のざらざらした砂ぼこりではなくて、家のなかにある茶色の綿ぼこりだからね。この帽子は、一日じゅう、ほとんど家のなかにかけてあるのだろう。しかも内がわに汗のしみが見えるのは、この男がひどい汗かきで、したがって、からだの訓練ができていないということになる。」

「だが、細君にあいそをつかされているというのは？」

「この帽子は、もう何週間もブラシをかけていない。もし、きみの帽子に一週間ぶんのほこりがつもっていて、しかも、奥さんが、そのまま きみを外出させたとすれば、奥さんにきらわれだした証拠だよ。」

「だが、この男は、ひとり者かもしれないよ。」

「いや、この男は仲なおりのしるしに、細君へガチョウをもってかえろうとしたのだ。鳥の足についていたカードをおぼえているだろう。」

「きみには、なんでもわかるんだね。だが、この家にガスがひいてないという推理は、いったいどこからきたのだ？」

「あぶらろうそくのしみも、一つか二つなら、ぐうぜんについたとも考えられるが、このように五つ以上もついていると なると、しじゅうあぶらろうそくをつかっているとみていい。夜、かた手に帽子をもち、かた手にろうそくをもって、階段をのぼるとき、しみがついたのだろう。ガス灯があれば、そういうことはない。」

わたしは、わらいながらいった。

「なるほど、あざやかなお手なみだ。だが、きみがさっきいったように、犯罪と関係なくて、被害がガチョウ一わだけならば、きみのせっかくの推理も、どうやらむだぼねおりになりそうだね。」

ホームズがこたえようと口をうごかしかけたとき、ドアがさっとひらいて、配達夫のピータースンが顔をまっかにし、びっくりした顔で、へやにとびこんできた。

「ガチョウです。ホームズさん、ガチョウが――。」

「どうしたんだ？　ガチョウが生きかえって、台所の窓から飛んでいきでもしたのか？」

ホームズはソファの上でからだをよじって、男の興奮した顔を観察した。

「これです！　うちのやつがえぶくろのなかから見つけたんです。」

ピータースンが手をさしだすと、てのひらのまんなかで、青い石がきらきらとかがやいていた。大きさは、ソラマメよりすこし小さいが、けだかい光をはなち、うす暗いてのひらのくぼみのなかで電光のようにひらめいた。

ホームズはヒュッと口を鳴らして、すわりなおした。

「やあ、ピータースン、宝物の発見だぞ。これがなんだか、おまえ、知っているだろう。」

「宝石でさ！　ガラスがパテみたいにきれますわい。」

「これは、ただの宝石ではない。あの問題の宝石だよ。」

わたしは口ばしった。

「モーカー伯爵夫人のルビーじゃないか。」

「そうだ。このごろまい日、タイムズの広告にでているか

ら、大きさも形も心にきざみこまれている。またとない品で、ほんとうの値うちは、だれにもわからない。見つけた人への賞金は、一千ポンドだが、その二十ばい以上の値うちがあるだろう。」

ピータースンはいすにしりもちをつくと、わたしたちの顔を見まわした。

「千ポンド！　へえ、これが！」

わたしはいった。

「たしか、コズモポリタン・ホテルでなくなったのだね。」

「そのとおりだ。十二月二十二日だったから、いまからちょうど五日まえだ。配管工のジョン・ホーナーが、夫人の宝石箱からぬきとったというたがいをかけられた。そして、ホーナーにとって不利な証拠があったので、事件はいま巡回裁判所にまわされている。ここにも、その記事がすこしはでているはずだが。」

ホームズは、日付けを見ながら新聞をかきまわしていたが、ついに一まいの新聞をぬきだし、それを二つにおって、つぎのような記事を読みあげた。

『コズモポリタン・ホテル宝石盗難事件――配管工ジョン・ホーナー（二十六歳）は、本月二十二日、モーカー伯爵夫人の宝石箱から、青いルビーとして有名な宝石をぬきとったうたがいで拘引された。ホテル事務長ジェームズ・ライダーの証言によれば、炉格子の二本めがはずれたので、ハンダづけをさせるために、当日ホーナーを伯爵夫人のけしょうべやへつれていった。かれもしばらく立ちあっていたが、用事があって、しばらくへやからでた。ひきかえしてみると、ホーナーのすがたが見えず、たんすがこじあけられており、夫人がふだん宝石箱としてつかっていたモロッコ皮の小箱がからになって、けしょう台の上にころがっていた。

ライダーは、ただちに事件を警察に知らせ、夕方ホーナーが逮捕された。しかし、宝石をもっていなかった。また、自分のへやにかくしたようすもなかった。ライダーが被害を発見したとき、あわてて大声でさけんだので、伯爵夫人の小間使いキャスリン・キューザックがへやにかけつけたが、そのときの室内の状況は、ライダーがのべたとおりであったと証言している。

また、B区警察のブラッドストリート警部の証言によると、ホーナーは逮捕されるときに、はげしく抵抗して、身

におぼえがないといいはったそうである。だが、ホーナーにぬすみの前科があることがわかったため不利となり、裁判にかけられた。ホーナーはとりしらべちゅう、いちじるしく興奮しているようであったが、とりしらべがおわると、気をうしなって、法廷の外へはこびだされた。』

ホームズは新聞をなげすて、考えぶかそうにいった。

「問題は、ぬすまれた宝石がどういう道をたどって、トテナム・コート通りにいたガチョウのえぶくろにうつったかを知ることだ。ね、ワトスンくん、われわれのつまらない推理あそびが、きゅうに重大で、しかも犯罪に関係あるものになりだしたじゃないか。ここに宝石がある。これはガチョウからでてきた。そしてそのガチョウは、ヘンリー・ベーカー氏という、このきたない帽子をかぶり、さっき、きみが聞いたようなとくちょうをもっている紳士がもっていたのだ。そこでまず、ぜひその紳士をさがしだして、この事件でどういう役わりをはたしていたかを、たしかめねばならない。それにはまず、いちばん単純な方法からやってみる必要がある。つまり、ぜんぶの夕刊新聞に広告をだすのだよ。で、もしこれで失敗したならば、つぎの手段をとるとしよう。」

「どんな文句で広告するんだい？」

「えんぴつと、その紙きれをとってくれたまえ。いいかい。『グッジ街で、ガチョウと黒の山高帽子とをひろいました。今夕六時半、ベーカー街二二一番地Bまで、うけとりにきてください。ヘンリー・ベーカー殿』――これでいいだろう。」

「うん。だが、本人は気がつくだろうか？」

「なあに、新聞に注意しているよ。貧乏人には、そうとうな損害だからね。運わるく、窓ガラスをわったうえ、ピータースンのすがたが見えたから、ひどくあわててにげることがい、考えなかったのだろうが、いまごろは、うろたえて鳥まですててきたのを、たいそう、こうかいしているにちがいない。それにまた、こうして名まえまでだしておけば、知りあいの者から注意されて見ることもある。おい、ピータースン、大いそぎで広告取次所へいって、これを夕刊にだしてもらってくれ。」

「何新聞にだしますんで？」

「えーと、グローブ、スター、ペルメル、セント・ジェームズ・ガゼット、イブニング・ニューズ、スタンダード、エコー、そのほかおまえの思いだしたのにぜんぶたのむ。」

「しょうちいたしました。それから、この宝石はどうしましょう。」

「ああ、それは、ぼくがあずかっておこう。ごくろうさん。それからね、ピータースン、かえりに、ガチョウを一わ買って、ここへとどけてくれ。いま、おまえのうちでたいらげているやつのかわりを用意しておかないと、おとし主にかえせないからね。」

ピータースンがいってしまうと、ホームズは宝石を手にとって、あかりにすかした。

「みごとだな。ほら、こんなに光りかがやいている。犯罪の原因になるのももっともだ。よい宝石はすべてそうだ。これよりもっと大きくて古い宝石になると、血なまぐさい事件が、その面の数ぐらいおこっているだろう。この石は、発見されてから、まだ二十年にならない。南シナのアモイ川の岸でほりだされたが、有名になったわけは、色がルビー色でなく青いだけで、ほかは、あらゆるてんで、ルビーのとくちょうをそなえているからだ。発見いらい日があさいのに、すでにうすきみわるい歴史がある。人殺しが二ど、硫酸をぶっかけたのが一ど、自殺が一ど、それから、ぬすみが数回、この宝石のためにおこっているんだ。こんなきれいなおもちゃが、人を牢獄や絞首台へおくるご用をつとめているとは、だれが思うかね。さあ、金庫にしまっておこう。それから、これを保管していることを、伯爵夫人に手紙で知らせよう。」

「このホーナーという男は、無実だろうか？」

「なんともいえないね。」

「それでは、ヘンリー・ベーカーのほうは、事件に関係していそうかね。」

「ぼくの考えでは、ヘンリー・ベーカーは、自分のもっている鳥が、金の鳥よりもっと高価な鳥だと知らずにいたのだから、犯罪とぜったい関係がないとみてまちがいあるまい。もっとも広告で本人がきたら、このてんは、ごくかんたんなテストでたしかめられるがね。」

「すると、それまでは、することもなしかい？」

「そうだ。」

「それじゃ、ぼくは、もうすこし患者まわりをしてこよう。しかし、こんなにこみいった事件がどう解決するか、ぜひ知りたいから、夕方、きみのいう時間には、またもどってくるよ。」

「まっている。七時に食事だ。きっとヤマシギのごちそうがでるよ。そうだ、こういう事件もあるということを思えば、ハドスン夫人にヤマシギのえぶくろもしらべてもらうべきか

な。」

わたしがベーカー街にひきかえしたときには、六時半をすこしすぎていた。ホームズの家に近づくと、オーバーを着て、つばなしのスコットランド帽をかぶった背の高い男が、玄関に立っているのが見えた。わたしがちょうどそばへいったとき、ドアがひらいて、ふたりはいっしょにホームズのへやへとおされた。

ホームズはひじかけいすから立ちあがると、例によって、すばやく快活でしたしげな態度になって客をむかえた。

「ヘンリー・ベーカーさんですね？　さあ、どうぞ火のそばへおすわりください。寒い晩ですね。あなたのお顔色を拝見すると、夏はいいが、寒さにはおよわいようですね。ベーカーさん、これは、あなたの帽子ですか？」

「そうです。はい、たしかにわたしのです。」

ネコ背の、頭の大きい大男で、ほおがこけて、さきのとがったしらがまじりの茶色いあごひげ。鼻のさきと両ほおがすこし赤く、さしだした手がかすかにふるえているところをみると、ホームズが推理したように、アルコール中毒らしい。ことばづかいに注意して、ひくい声でぽつりぽつりと話すようすは、教育も学問もあるのに、運がわるくておちぶれてしまったというかんじだった。ホームズはいった。

「わたしたちは、これを、きのう、おあずかりしていたのですよ。あなたのほうで広告をだされると思っていましたからね。どうして、広告されなかったのですか？」

ベーカーは、すこしきまりわるそうにわらった。

「むかしとちがって、金に不自由していましてね。それに、わたしをおそった、あのよたものたちが、帽子も鳥ももっていったものと思っていました。それで、とりかえせるあてもないのに広告して、むだな金をつかいたくなかったものですから――。」

「ごもっともです。ところで、鳥のほうは、いたむといけないので、食べてしまいましたよ。」

「食べてしまったんですって？」

ベーカーは興奮して、いすからからだをうかせた。

「そう、食べないと、むだになりますからね。だが、あの食器棚の上に、べつのがあります。めかたもほぼおなじだし、このほうはごく新しいから、あれでまにあいませんか？」

ベーカーは、ほっとしたようにため息をもらした。

「おお、けっこうです。けっこうですとも。」

「もちろん、あなたの鳥の羽や足やえぶくろなどは、まだのこっていますよ。もしなんなら――。」

あいてはおかしくてたまらぬというように、ふきだした。

「事件の記念品にはなるかもしれませんが、それいじょう役にたつとは思えません。いや、それよりも、おことばにあまえて、あの棚の上に見えるすばらしい鳥だけちょうだいしていきましょう。」

ホームズは、するどい目でわたしを見て、肩をすくめてみせた。

「では、この帽子と、その鳥とをどうぞ。それからついでに、あの鳥をどこでもとめられたか、聞かせていただけませんか。わたしはいささか鳥ずきですが、あんなみごとなガチョウには、めったにお目にかかったことがありませんよ。」

ベーカーはすでに立ちあがって、とりもどした帽子とガチョウとを小脇にかかえたままいった。

「おやすいごようです。わたしたちのなかまで、博物館のそばのアルファという飲み屋にいきつけの者が、四、五人います。わたしたちは昼間は博物館ではたらいているものですから。このアルファの主人が、ことし、ガチョウクラブをこしらえましてね、まい週何ペンスかつみたてておくと、クリスマスにガチョウが一わもらえるのです。わたしは会費をきちんとはらっていたのですが、それが、あんなことになってしまったのです。どうもありがとうございました。」

ベーカーは、こっけいなほどもったいぶって、うやうやしく礼をすると、大またで、のしのしかえっていった。

ホームズは、客をおくりだして、ドアをしめてからいった。

「ヘンリー・ベーカーは、これですんだ。あきらかに、事件とまったく無関係だ。きみ、腹がへったかい？」

「いや、たいして。」

「じゃ、夕食を夜食までおあずけにして、ほとぼりのさめないうちに、この手がかりをたぐってみないか？」

「さんせい。」

ひどく寒い晩だったから、わたしたちはオーバーを着て、えりまきを首にまきつけた。外はひときれの雲もない空に星がつめたくまたたき、通行人のはく息が白い煙になって、ピストルを発射しているように見えた。わたしたちは、こおりついた道を足音たかくふみしめながら、十五分後には博物館の近くにある、アルファという小さな居酒屋についた。ホームズは、店にはいると、奥の小べやに席をとって、白いエプロンをかけた赤ら顔の主人に、ビールを二はい注文した。

「このうちのビールがガチョウほどじょうとうなら、さだめしすばらしいだろうな。」
「え、ガチョウですって？」
主人はおどろいたようにいった。
「そうだよ。ぼくはつい三十分ほどまえ、ヘンリー・ベーカーさんと話していたんだが、あの人は、ここのガチョウクラブの会員だったね？」
「ああ、なるほど。だが、だんな、あのガチョウは、店の品とはいえませんぜ。」
「じゃ、どこのだい？」
「なに、コベント・ガーデンの仲買人から、二ダース仕入れたんでさ。」
「そうかね。あそこの鳥屋は二、三げん知っているが、どこの店かね。」
「ブレックンリッジて男でさ。」
「ああ、そこは知らない。さあ、おやじさん、きみの健康とこの店がはやることをいのって、乾杯！　じゃ、さようなら。」
寒い外にでると、ホームズは、オーバーのボタンをかけながらいった。
「こんどはブレックンリッジだ。ね、ワトスンくん、この事件のきっかけは、たかが一わのガチョウだが、われわれは、警察がのがした捜査の糸口をつかんでいるのだ。これを、さいごまでおってみようじゃないか。さあ、南むけ南！　速足行進、すすめ！」
わたしたちは、コベント・ガーデンの市場についた。一けんの大きな店に、ブレックンリッジの看板がでており、するどい顔つきをして、ほおひげを刈りそろえた、なんとなしに競馬ずきらしい主人が、小僧といっしょによろい戸をおろしているところだった。
「こんばんは。ひえるね。」
ホームズが声をかけると、主人はうなずいて、うさんくさそうに、かれをながめた。
ホームズは、なにもならんでいない、大理石板の売り台を指さした。
「ガチョウは売りきれだね。」
「あすの朝なら、五百ぱでもそろえますよ。」
「しようがないな。」
「じゃ、あのガス灯のついている店へいけば、いくらかのこっていますぜ。」

「ああ。だが、きみの店がいいって、聞いてきたんでね。」
「へえ、どこで？」
「アルファの大将からだ。」
「なるほど。あそこなら、二ダースとどけましたよ。」
「いい鳥だったよ。あれは、どこから仕入れたのかね？」
おもいがけないことに、この質問で、鳥屋の主人は、ひどくおこりだし、頭をそらせると、両手を腰につっぱってどなった。
「ちょっと、まった、だんな。いったい、どういう用件か、そいつをはっきりいってください。」
「はっきりいっているよ。きみがアルファへおろしたガチョウを、どこから仕入れたのか、それが知りたいんだ。」
「ふん、それなら、いえないや。さあ、かえった、かえった！」
「いや、たいしたことでもないよ。だが、きみが、こんなつまらないことで、どうしてそうかんかんになるのか、わからないね。」
「かんかんだって？　おまえさんだって、こうるさくたずねられたら、かんしゃくがおきるだろう。いい品を買って、まっとうな金をはらえば、それで、とりひきはおしまいだよ。それを、やれ、『ガチョウはどこだ？』『どこへ売った？』『いくらで売った？』なんて、いったいなぜ、こんなに大さわぎするんだ。人が聞いたら、ほかにガチョウはないのかと思うよ。」
ホームズは、さりげなくこたえた。
「いや、ぼくは、まえにガチョウのことを聞きにきた人たちとは、すこしも関係ないよ。きみがもしおしえてくれなきゃ、かけがおながれになるだけの話さ。だが、ぼくは食用の鳥のことでかけをするのがすきでね、このあいだ食べたガチョウも、いなかそだちの味がしたから、それで五ポンドかけたんだ。」
鳥屋はどなった。
「ふん、そんなら、あんたは、五ポンドとられたよ。あいつは町そだちだ。」
「まさか。」
「たしかだよ。」
「いや、そんなはずがない。」
「だんなは、小僧のときから鳥をいじくってきたわしより、鳥のことにくわしいというんですかい。だんな、アルファへおくった鳥は、みな町そだちですぜ。」

「いくらいわれても、ぼくは、説をかえないね。」
「じゃ、かけますか？」
「ぼくが勝つにきまっているから、きみは損するだけだよ。だが、きみの強情をやっつけるために、ひとつ、一ポンドかけよう。」
「ビル、帳簿をもってこい。」
鳥屋はうすきみわるく、ふくみわらいをした。
小僧は、うすい小型の帳面と、背表紙のあかじみた大型の帳面とをもってきて、つりランプの下にならべた。鳥屋はいった。
「さあ、うぬぼれ屋さん。あんたはいいカモだ。カモは売りきれだと思っていたが、店じまいのまえに、ここにもう一わ、まいこんできたようだわい。ほら、この小さい帳面を見な。これは、店の仕入れさきの一覧表だ。わかったかね。で、このページに書いてあるのが、いなかの仕入れさきで、名まえのつぎの数字が、あの大きな台帳のページ数で、そこをめくれば、くわしくでているんだ。さあ、それでね、こっちのページの赤インクの字を見てくんなさい。これは、町の仕入れさきの名簿ですぜ。その三番めになんとあるかね。名まえを読んでみなさい。」
ホームズが読みあげた。
「オークショット夫人、ブリクストン通り、一一七番地——二四九。」
「そのとおりだ。こんどは台帳の二四九ページをあけてみなさい。」
ホームズはいわれたページをひらいた。
「ここだな。『オークショット夫人、ブリクストン通り、一一七番地。たまご、鳥仕入れもと』」
「で、だんな、さいごの書きいれは、なんとなっていますかい。」
「十二月二十二日、ガチョウ二十四わ、七シリング六ペンス。」
「ほら、どうだね。その下には、なんとありますかい。」
「アルファのウィンディゲート氏へ十二シリングで売りわたし。」
「これで、まだ、もんくがありますかい。」
ホームズは、ひどくくやしそうな顔をして、ポケットから金貨を一まいつまみだすと、売り台の上になげつけ、口をきくのもいまいましいようすで背をむけた。そして、店さきから、五、六メートルはなれたところで、ガス灯の下に立ちどまると、声をださないで、さもおかしそうにわらいころげた。
「ほおひげをあんなふうに刈って、ポケットから競馬の赤新聞をだしている男を見たら、かけでつれると思ってまちがいなしだ。たとえ、あの男の前に百ポンドつんでも、こうすっかりは、おしえてくれなかっただろう。やっこさん、ぼくを負かすのがうれしくて、あらいざらいしゃべったんだ。ところで、きみ、捜査もどうやらおわりにちかづいたらしいが、ここでのこされた問題は、これからすぐ、オークショットのおかみさんをたずねるか、それともあすにまわすかをきめることだ。あのつっけんどんな鳥屋のおやじの話では、この事件を気にしているやつが、ほかにいるらしいから、ぼくはできたら——。」
ホームズのことばが、ふいにとぎれたのは、いまでてきたばかりの店から、大声でののしる声が聞こえてきたからだ。ふりむくと、つりランプのおとす黄色い光の円のなかに、ネズミのような顔の小男が立っていた。主人のブレックンリッジは入り口に立ちはだかって、ぺこぺこするあいてにむかって、はげしくこぶしをふりまわしていた。
「おまえさんもガチョウも、もうたくさんだ。どいつもこいつも、地獄へいきやがれ！　このうえ、くだらんことをぶつぶついってくるなら、犬をけしかけるぞ。オークショットさんをつれてこい。あのおかみさんにならおしえてやるわ。だが、おまえなんか、どんな関係があるんだ？　おまえがあのガチョウを売ってくれたのか。」
小男は、泣き声でうったえた。
「そうじゃない。だが、あのなかに、ぼくの鳥が一わはいってたんです。」
「ふん、そんなら、オークショットさんにそういえばいい。」
「そういったら、ここへいけっていわれたんで——。」
「そんなこと知るもんか。プロシア王にでも聞いてこい。おれは、もうたくさんだ。とっとと、うせろ。」
鳥屋がすごいいきおいでとびかかったので、小男は身をひるがえして、暗やみへにげさった。
ホームズがささやいた。
「ははあ、これでブリクストン通りまでいかなくてもすみそうだ。さあいこう。あの男から、なにかほりだしてみよう。」
ホームズは、人ごみを大またですりぬけて、たちまち小男においつき、肩に手をかけた。男はぎょっとしてふりむいたが、顔じゅうの血の気がなくなっているのが、ガス灯の光で

わかった。男は、ふるえ声でたずねた。
「どなたですか。なにかご用で？」
ホームズは、おだやかにいった。
「失礼ですが、いまきみが、鳥屋としゃべっておられた話が、つい耳にはいったもので。ことによると、お力になれるかもしれません。」
「えっ、あんたはどなたですか？　わたしの用事が、いったいどうしてわかったのですか？」
「ぼくはシャーロック・ホームズといいます。人の知らないことを知るのが商売でしてね。」
「だが、このことがわかるんですか？」
「すっかり知っています。きみがさがしているのは、あるガチョウのゆくえですな。それは、ブリクストン通りのオークショットのおかみさんから、ブレックンリッジという商人に売られ、そこからこんどは、アルファの主人のウィンディゲートに売られ、それからまた、ガチョウクラブの会員、ヘンリー・ベーカーさんの手にわたった。」
男は両手をつきだし、指をふるわせながら、さけんだ。
「ああ、あんたこそ、ぼくがあいたかった人です。ぼくは、こんどのことでは、いうにいわれないほど、気をもんでいるんです。」
ホームズは、とおりかかった四輪の辻馬車をよびとめた。
「それではこんなふきさらしの市場でなく、あたたかいへやで、お話ししましょう。だが、そのまえに、せっかく力ぞえをするんですから、名まえを聞かせてください。」
男は、すこしためらった。そして、横目をつかいながらこたえた。
「ジョン・ロビンスンです。」
「いや本名を。変名では、お話ししにくいですから。」
ホームズが、ものやわらかにいった。
男の白いほおに、さっと血がのぼった。
「それじゃ、いいます。ほんとの名はジェームズ・ライダーです。」
「そうでしょう。コズモポリタン・ホテルの事務長さんだ。さあ、馬車にのってください。きみの知りたいことは、すぐにぜんぶお聞かせします。」
小男は、おもいがけない幸運にめぐりあったのか、たいへんな不幸にぶつかったのかまようように、不安と希望のいりまじった目つきで、わたしたちを見くらべた。三人は馬車にのりこみ、三十分後にベーカー街の居間にもどった。とちゅうでは、だれも口をきかなかったが、小男は、はげしい息づかいをしながら、手をひらいたりとじたりしていた。よほど心がいらだっているらしい。
へやにはいると、ホームズが、元気よくいった。
「やっとかえれた。こういう晩には、火がこいしいですね。ライダーさん、寒いでしょう。このいすにおすわりなさい。さあ、ガチョウのゆくえをお聞きになりたいんですな。」
「はい。」
「きみが興味をもっているのは、白くて、尾に黒いすじのあるのでしょう。」
ライダーは、興奮してふるえだした。
「そうです！　あれがどこへいったか、ごぞんじですか？」
「ここへきましたよ。」
「ここへ？」
「そう。あれは、たしかに、すばらしい鳥でしたな。きみがあれに興味をもつわけが、よくわかりますよ。死んでから、たまごをうんだんです。――いままで見たこともないほど美しくて、光りかがやく、青いたまごをね。わたしの博物館にしまってあります。」
ライダーはよろよろと立ちあがって、右手でマントルピースにつかまった。ホームズが金庫をあけて青いルビーをとりだすと、つめたい光をきらきらと八方にはなって、星のようにかがやいた。ライダーは、それが自分のものだといったほうがいいのか、それとも、そうではないといったほうがいいのか、まようように、顔をしかめて、宝石を見つめた。
ホームズは、静かにいった。
「ライダー、計画は失敗だよ。そら、しっかりしないと、火のなかにおちるぞ。ワトスンくん、手をかして、いすにすわらせてやりたまえ。この先生、だいそれた犯罪をやってのけるには、血の気がたりないんだ。ブランデーをすこしやってくれたまえ。そうそう、それで、すこしは人間らしくなった。ほんとに、なんてけちな男だろう！」
ライダーは、すこしのあいだよろめいて、たおれそうだったが、ブランデーのおかげで、ほおに赤味がさしてきた。そして、腰をおろして、自分の罪をせめるホームズをおそろしそうに見つめた。
「ぼくには、事件のすじがだいたいわかっているし、証拠もそろっているから、きみから聞くことは、ほとんどなさそうだ。だが、二、三のてんをただして、はっきりとさせておくのもよかろう。ライダー、きみは、モーカー伯爵夫人の青い

宝石のことを知っていたんだろう。」

ライダーは、しゃがれた声でこたえた。

「キャスリン・キューザックから聞きましたので。」

「そうか、夫人の小間使いだね。なるほど、きみよりりっぱな人でも、大金をたやすくつかめると思うと、ふらふらするのだから、きみが負けたのはむりもない話だ。だが、方法に手ぬかりがあったな。ライダー、きみには、悪人の素質がかなりあるとみえる。きみは、配管工のホーナーがおなじようなぬすみの罪をおかした前科者で、うたがいをうけやすいと知った。それで、夫人のへやにちょっとした小細工をした。あいぼうのキューザックとかたらって、ホーナーがよばれるようにしむけたのだろう。そして、ホーナーのかえったあとで、宝石箱から青いルビーをぬすみとり、そのあと、さわぎたてて、ホーナーを警察にわたしてしまった。」

ライダーは、ふいに敷物の上にすわりこんで、ホームズのひざにすがると、かなきり声をあげた。

「おねがいです！　おじひです。父や母のことを考えてください。どんなに悲しがるでしょう！　いままでは悪いことはしなかったんです。二どといたしません。おちかいします。聖書にかけておちかいします。警察へつきださないでください。おねがいです！」

ホームズが、きびしくいった。

「いすにかけたまえ。おそれいって頭をさげるのはいいが、かわいそうに、身におぼえのない罪で、法廷にひきだされているホーナーのことを、すこしは考えてみるんだ。」

「ぼくはにげます。国をでていきます。そうすれば、ホーナーはうたがいがはれますでしょう。」

「ふん。その相談はあとでしよう。いまは、それよりも、きみがつぎにどうしたかを、つつまず話すんだ。どうして宝石がガチョウのえぶくろにはいり、そのガチョウが市場へでたのか。助かろうと思ったら、しょうじきにいうことだ。」

ライダーは、かわききったくちびるをなめて話しだした。

「ありのままにもうしあげます。ホーナーが逮捕されたとき、警察がいつ思いたって、ぼくのからだやへやをしらべないともかぎらないから、すぐにも宝石をかくしたほうがいいと思いました。だが、ホテルには安全なかくし場所がありません。それで用事にいくふりをして、外出し、姉の家にいきました。姉はオークショットという男と結婚して、ブリクストン通りで、市場へだす鳥を飼っているのです。

とちゅうであう男がみな、巡査や刑事にみえて、寒い晩でしたが、顔じゅう汗だらけになり、姉の家につきました。姉が、

『どうしたの？　顔がまっさおじゃないの。』

といいますから、

『ホテルに宝石どろぼうがあって、すっかりあわててしまったのだ。』

とこたえました。それから裏庭にでて、パイプをふかしながら、これからどうするか考えました。

いぜんにぼくは、モーズリという男と知りあいでしたが、この男は悪い道にふみこんで、ちかごろまで刑務所にはいっていました。いつかこの男に、ひょっとであいまして、ぬすみの方法やぬすんだもののさばき方を聞いたことがあります。この男なら、ぼくも、すこしばかりいたいところをにぎっていますので、安心できます。それで、まっすぐにモーズリのところにでかけて、事情をうちあけようと決心しました。モーズリなら、宝石を金にかえる方法も知っているでしょう。だが、どうすればぶじにかれのところまでいけるか？　ホテルからここへくるのにも、あんなにこわくてならなかったのです。

いつどこでつかまって、身体検査をされて、チョッキのポケットから宝石がつまみだされるかわかりません。壁にもたれて、足もとをガチョウがよちよち歩くのを見ているうちに、ふと、ある考えが頭にうかんできたのですが、それは、どんな名探偵でもだますことのできる方法だと思えました。

だいぶまえに、姉から聞いた話では、いちばんいいガチョウをクリスマスにプレゼントしてくれることになっていました。それで、ぼくは、いまガチョウをもらって、それに宝石をのませ、モーズリのところへもっていこうと思いついたのです。ぼくは、裏庭にある小屋のうしろに、白くて尾に黒いすじのある、みごとにふとったガチョウを、おいこみました。それをつかまえて、くちばしをこじあけ、のどのできるだけ奥へ、指で宝石をおしこみました。のみこませてから、さわってみますと、宝石は食道からえぶくろへさがっていきます。だが、ガチョウがあばれて羽ばたいたので、姉が、なにごとかとでてきました。姉と話をつけようとふりかえったとき、鳥のやつはにげだして、なかまのほうへとんでいきました。

『いったい、あの鳥をどうしたの、ジェームズ？』

『クリスマスに一わくれるっていうから、どれがいちばんふとっているか、しらべていたのさ。』

『おまえにあげるのは、べつにしてあるわ。わたしたち、ジェームズの鳥とよんでいるのよ。ほら、あそこに白くて大きいのがいるでしょう。いまぜんぶで二十六わいるけど、おまえのが一わに、わたしたちのが一わ。あとは市場いきよ。』

『ありがたいな、マギーねえさん。だが、さしつかえなかったら、いまつかまえていたのをもらえないかね。』

『でも、あれのほうが、たっぷり三ポンドは重いのよ。おまえにあげるつもりで、とくべつ、ふとらせたんだから。』

『かまわないよ。さっきのがいいね。いまもらっていこう。』

『ああ、そんなら、すきなようにおし、それで、おまえのほしいのはどれなの？』

姉は、すこしふくれました。

『ほら、あのまんなかにいる、白くて、尾に黒いすじのあるやつだよ。』

『ああ、いいよ。いま殺して、もっておいき。』

それで、ぼくは、姉のいうようにその鳥をしめころして、モーズリのところまで、はるばるもっていきました。そして、モーズリに、じつはこれこれだとうちあけましたが、この男は、こういう相談をするにはもってこいのあいてです。モーズリはわらいころげて、むせびあげるほどでしたが、さて、ナイフをもってきて、ガチョウの腹をひらきました。ところが、ホームズさん、ぼくは、まっさおになってしまいました。宝石など、かげもかたちもないのですから。なにか、おそろしいまちがいがおこったのにちがいありません。鳥をそのままほうったらかしておいて、姉の家に、もういちどかけつけ、いそいで裏庭にでてみました。だが、鳥はすっかりいなくなっています。

『ねえさん！　鳥をどこへやったんだい？』

『問屋へだしたのよ。』

『どこの問屋だい？』

『コベント・ガーデンのブレックンリッジよ。』

『そのなかに、尾に黒いすじのあるのが、もう一わいたかね？　ぼくのもらったのとよく似たのが。』

『ああ、いたわよ。尾に黒いすじのはいったのは二わいてね、わたしたちでもよくまちがったわよ。』

もちろん、それでわかりました。鳥をまちがえてしまったのです。ぼくは足のつづくかぎり走って、そのブレックンリッジという男のところへいそぎました。だが、もう、ひとまとめにして売ってしまったあとで、売りさきを、どうしてもおしえてくれません。ぼくは、気がかりで気ちがいになりそうでした。ああ、そのうえ、もう、ほんもののどろぼうです。のぞんでいた宝も手にしないというのに。ああ、神さま、ああ、神さま、お助けください！」

ライダーは両手に顔をうずめて、わっと泣きだしてしまった。

ながい沈黙がつづいた。ライダーのはげしい息づかいと、ホームズがテーブルのはしを指さきでコツコツとたたく音が聞こえる。しばらくすると、ホームズが立ちあがって、ドアを大きくあけた。

「でていけ！」

「えっ？　ああ、ありがとうございます。」

「つべこべいうな！　でていけ！」

そして、それ以上なにもいう必要がなかった。ライダーはドアをとびだした。つづいて、階段をかけおりる音、玄関のドアのバタンとしまる音、こおりついた道を走る足音が遠ざかっていった。

焼物のパイプに手をのばしながら、ホームズがいった。

「ぼくは、警察のふてぎわをうめあわせるために、やとわれているんじゃない。ホーナーが有罪の判決をうけることはあるまい。ライダーが、これいじょう法廷でホーナーに不利な証言をすることもなさそうだから、事件はうやむやになるだろう。ぼくが重罪犯人をゆるしてやったようなものだが、これで、たましいがひとつすくわれたのではなかろうか？　あの男は、二どと悪いことをしないだろう。ひどくこたえているからね。いまここで刑務所におくってごらん。常習犯になってしまう。そのうえ、いまはクリスマスで、人をゆるす季節だ。ふとした機会から、ひじょうにふうがわりでめずらしい事件にぶつかったが、解決できたのだから、それでよかったね。きみ、すまないが、ベルを鳴らしてくれないか。夕食にしよう。ガチョウじゃなくて、ヤマシギの料理がでるはずだ。」

まだらのひも

この八年間に、シャーロック・ホームズがあつかったさまざまな事件のなかでも、イングランド南部サリ州ストーク・モーランのロイロット事件ほど、ぶきみなものはないだろう。この問題の事件は、わたしがホームズと知りあってまもなく、ベーカー街でふたりして生活していたころにおこった。だから、もっと早く発表することもできたわけだが、そのとき、わたしたちは、ある婦人に、これをひみつにすることを約束したのだ。

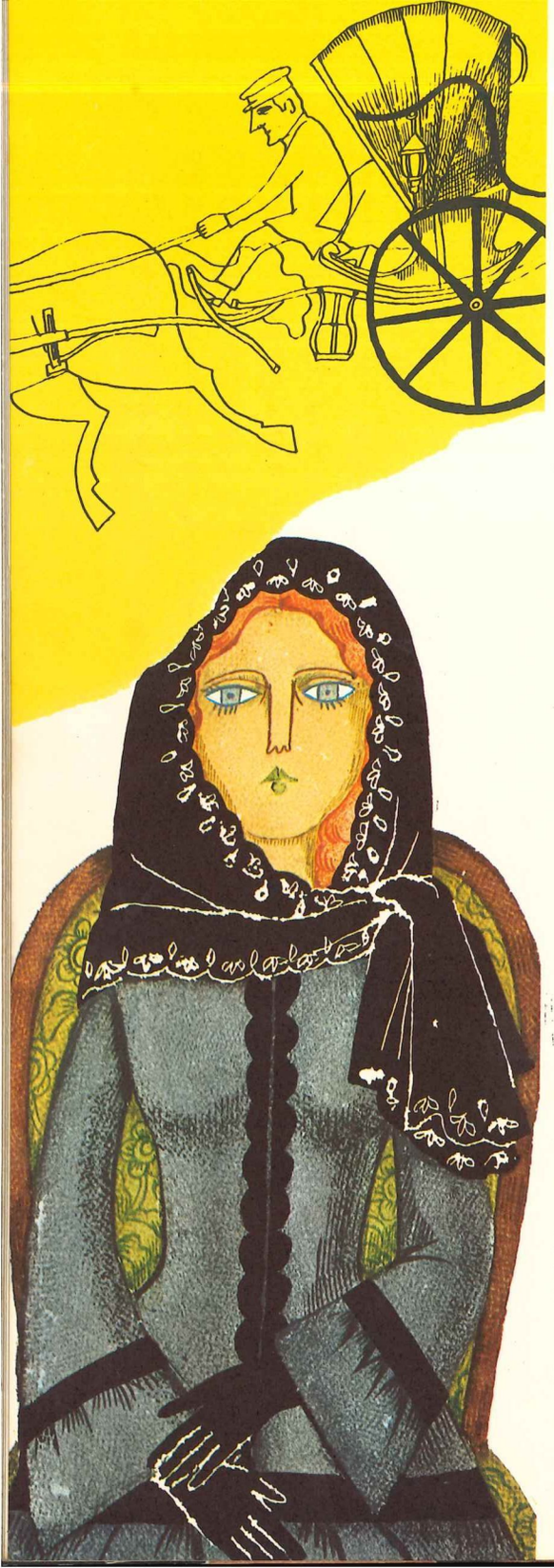
その婦人が、つい先日、とつぜん死んだので、やっと発表できるようになったというわけである。それで、真相をあかるみにだすのも、また、わるくないと考える。というのは、グリムズビ・ロイロット博士の死については、真実がほとんど知られていないからだ。

一八八三年の四月のはじめのことだった。ある朝、ふと目をさますと、シャーロック・ホームズがきちんと服を着こんで、わたしのベッドのかたわらに立っていた。ホームズは、ふだんから朝寝ぼうで、マントルピースの上の時計は、まだ七時十五分すぎだったから、わたしはおやっと思って、まばたきしながら、ホームズを見あげた。

「ワトスンくん、おこしてすまないがね、けさは、みんなが早おきする運命なのだ。ハドスンさんが、まず、たたきおこされて、はらいせにぼくをおこした。そこで、ぼくが、きみをおこしたというしだいだ。」

「なんだね。火事かい？」

「いや、依頼人だ。若い婦人がひじょうに興奮してやってきて、どうしても、ぼくにあいたいといっている。居間でまたせてある。若い婦人がこんなに朝早くロンドンを歩きまわって、まだ眠っている者をたたきおこすというのは、よくよくさしせまった事情があって、相談にのってほしいのだろう。もしそれがおもしろい事件であったとすれば、きみはきっと、はじめから、それをおっていきたいというだろう。きみをおこして、いちおう話しておこうと思ったのだ。」



「ああ、そうか。それは見のがすわけにはいかない。」

わたしは、ホームズが、依頼された難問をみごとな推理でといていくのを、はたで見ているのが、なによりのたのしみだった。そこで、いそいで服を着て、ホームズといっしょに居間へおりていった。黒ずくめの服装をして、厚いベールをつけた婦人が、窓ぎわのいすにすわっていたが、わたしたちを見て、立ちあがった。ホームズが、元気に声をかけた。

「お早うございます。わたしがシャーロック・ホームズです。こちらは親友であり、またしごとの協力者であるワトスン博士です。この人の前では、わたしとおなじに、気がねなくお話しください。どうぞ、火のそばへおよりください。寒くてふるえていらっしゃるようですが、いま、熱いコーヒーをもってこさせます。」

婦人はいわれたように席をうつしながら、ひくい声でいった。

「ふるえていますのは、寒さのためではございません。」

「では、どうしてですか？」

「こわいからです、ホームズさん。おそろしいのでございます。」

そういいながらベールをあげたが、たしかに気のどくなほ

どおびえていて、顔はあおざめてひきつり、目は、おわれた動物のように不安そうだった。顔やからだつきを見ると、まだ三十歳そこそこにしか見えないが、髪の毛には、もう白いものがまじり、つかれてひからびた表情をしている。ホームズは、なにもかも見とおするどい目つきで、すばやく婦人を観察したのち、からだをかがめて、あいての二の腕をかるくたたきながらなだめた。

「ご心配にはおよびません。すぐ解決できると思います。けさ、汽車でおつきになったんですね。」

「あら、わたしをごぞんじですの？」

「いや、あなたの手ぶくろのてのひらのなかに、往復切符のかえりのぶんがはいっているようですね。朝早く家をでて、ぬかるみ道を二輪馬車でながいあいだ走ってから、駅におつきになったのでしょう？」

婦人はからだをびくりとうごかし、あきれた顔でホームズを見つめた。ホームズは微笑して、いった。

「ふしぎなことではありませんよ。あなたの上着の左の腕のところに、どろのはねが、七つはついています。しかも、ごく新しい。そんなところにはねがあがるのは、二輪馬車にのって、しかも、御者の左がわへ腰をおろしたときだけです。」

「どういう頭のおはたらきかぞんじませんけれど、まったくそのとおりでございます。六時まえに家をでて、六時二十分にレザーヘッドにつき、一番列車でロンドンのウォータールー駅へきましたの。ホームズさま、わたしは、もう、この不安にたえられません。このままでいれば、気がくるってしまいます。たよりになる人もいませんし。いえ、わたしのことを気にしてくれる人がひとりいるのですけれど、あいにく、力になりません。

それでホームズさん、あなたのおうわさを聞いていたものですから。おねがいでございます、わたしを助けていただけませんでしょうか？　お礼のほうは、いますぐにはできませんけれど、一、二か月さきに結婚しますので、自由になるお金がはいりますから、わたしが恩知らずではないことをおみせいたします。」

「よろこんでお力ぞえいたします。報酬のことですが、わたしには、しごとそのものが報酬です。ごつごうのいいときに、かかった費用だけはらってくださるのはご自由です。では、判断の材料になりそうなものは、すべてもらさずお話しくださいませんか。」

「ああ、ただいまわたしが、こんなにおそろしくかんじていますのは、ひどくとらえどころがなくて、ほんの小さなことばかりなのです。ほかの人には、とるにたりないことばかりですから、わたしのためを思ってくれるあの人までが、わたしの話を、神経質な女の空想だとしか考えないのでございます。でも、ホームズさま、あなたは人間の心を見ぬく力がおありの方とうかがっております。わたしにせまっている危険をきりぬけていく方法を、どうかぜひ、おしえてくださいませ。」

「さきほどから、ねっしんにうかがっていますよ。」

「わたしの名まえは、ヘレン・ストーナともうします。いま、いっしょにおります義理の父は、イングランドでいちばん古い、サクスン系の家がらのロイロット一族さいごの人で、サリ州の西ざかいに住んでおります。」

ホームズはうなずいた。

「お名まえは、よく知っております。」

「ロイロット家は、イングランドでも指おりの金持ちだったこともあります。しかし、前世紀に、ひきつづいて四代も、金づかいのあらいあととりがでたために、一家はすっかりおちぶれてしまいました。そして、あとにのこったのは、一ヘクタールの土地と、二百年まえに建った古いやしきとだけで、それも、何じゅうにも抵当にはいっています。

先代の主人は、そこでみじめな生活をしながらおわりましたが、そのひとりむすこ、つまりわたしの義理の父は、しんせきからまえ借りをしまして、医学博士になりました。しかし、はげしい性質の人で、かっとなったはずみに、土人の召使いをなぐりころしてしまったので、死刑はまぬがれたものの、ながいこと刑務所にいれられていたあとで、うちのめされたようになって、イギリスにかえってまいりました。

わたしの母は、ロイロット博士がインドにいたとき結婚しましたが、そのまえはベンガル砲兵隊のストーナ少将の妻で、若いうちに夫に死にわかれたのです。わたしと姉のジューリアとはふたごで、母がロイロット博士と結婚したとき、まだ二歳でした。母は年収一千ポンドをこえる財産をもっていまして、遺言で、それをすっかり博士にゆずりました。しかしこれは、わたしたちきょうだいが博士と暮らしているあいだだけのことで、もし結婚したばあいには、まい年一定のお金がわたしたちのほうにまわることになっています。母はイギリスにひきあげてきてまもなく、なくなりました。八年まえのことで、クルーの鉄道事故で死んだのです。

ロイロット博士はロンドンで開業する計画を中止し、わた

したちをつれて、ストーク・モーランの先祖代だいつたわった家にうつりました。母がのこしてくれました財産は、わたしたちが暮らすのには、たっぷりありましたから、わたしたちの幸福は、そのままつづくと思われました。

でも、このころから、義理の父は、しだいにおそろしい人になっていきました。近所の人たちは、ストーク・モーランのロイロット家の主人が古いやしきへもどってきたというので、はじめのうちは大よろこびをしてくれていました。でも、かんじんの父が、ご近所の方とつきあったり、友だちになったりするのをきらって、家にとじこもってしまって、たまに外出したかとおもうと、道であう人と、かたっぱしから大げんかをするしまつです。

ロイロット家の男子には、もともと気ちがいめいた気のあらい人が多いのですが、父のばあいは、ながいあいだ熱帯地方に住んでいたため、いっそう心がすさんでいたのでしょう。おはずかしい話ですけれど、つぎつぎにけんかをいたしまして、二ど、警察ざたをおこし、しまいには、村の恐怖のまとになりまして、みなは父の影を見ると、走ってにげました。といいますのも、父はおそろしいほど力が強く、また、おこりだすと、自分をおさえられなくなるからでした。

先週も、村のかじ屋を、橋の手すりから川へなげこんでしまいましたので、わたしが、かきあつめただけのお金を、すっかりはらいまして、ようやくのことで、まるくおさめたのでございます。父は、友だちといえば、ながれ者のジプシーのほかにはなくて、その宿なしたちには、わずかにのこっています荒れ地にテントをはるのをゆるして、そのかわりに、そのテントのお客になってもてなされたり、ときには、何週間も、いっしょにながれ歩くのでございます。

父はまた、インドの動物がたいへんすきで、あちらの代理人からとりよせています。いまいるのは、ヒョウとヒヒですが、それはやしきのなかを自由にうろついていますので、村の人たちは、父をおそれるのとおなじように、そのけものをこわがっております。

これでおわかりのように、姉のジューリアとわたしの生活は、けっしてたのしいものではありませんでした。召使いもいつきませんので、ながいあいだ、わたしたちだけで家事をいたしておりました。姉は三十になったばかりで亡くなりましたが、そのときに、もう、しらががではじめておりました。そして、わたしの髪もまた、こんなことでございます。」

「では、おねえさんは、亡くなられたのですね。」

「もう二年になります。わたしは、その姉の死についてお話をしたいのです。おわかりになりますでしょうが、わたしたちの生活ともうせば、こういったものだったのですから、おなじ年ごろや身分の方にお目にかかることなど、ほとんどございませんでした。

でも、母の妹にあたる人で、まだ結婚していないおばが、ハローの近くに住んでいまして、わたしたちは、ときどき、おばのところでしばらくとまってくるのをゆるされておりました。

二年まえのクリスマスに、ジューリアは、そこへでかけまして、そこで海兵隊の少佐の方におあいして、婚約しました。姉は、かえってきてから、父にこの話をしましたが、父は反対しませんでした。しかし、結婚式の日まであと二週間もないというときになって、おそろしい事件がおこり、そのため、わたしのたったひとりの話しあいてがなくなってしまうことになりました。」

シャーロック・ホームズは、いすにふかくよりかかって、目をとじていたが、このとき目をほそくあけて、客のほうをちらとながめた。

「そのときのことを、くわしいところまで、正確にお話しください。」

「あのおそろしかったときのことは、ひとつひとつ、心にやきついていますから、お話しするのは、たやすいことでございます。さっきからもうしましたように、やしきはたいへん古いので、いまでは、はりだし棟のひとつしかつかっておりません。この棟にある寝室は、みんな一階にあって、居間は、中心の母屋のほうにあります。寝室は手まえが父、まんなかが姉、そのつぎがわたしのものになっています。そのあいだをいききすることはできませんが、三つとも、おなじろうかにむいてドアをあけることができます。これでおわかりでしょうか？」

「すっかりわかりました。」

「三へやとも、窓の外はしばふになっています。あのおそろしいできごとのあった晩、父は、早くから寝室にはいっていましたが、ベッドにはいってはいなかったようです。というのは、父がいつもすっているつよいインドたばこのにおいがして、姉がこまっていましたから。ですから姉は、わたしのところへはいってきて、もうすぐおこなわれる結婚式のことなど、しばらく話していました。十一時になったので、立ちあがってかえろうとしましたが、戸口のところで立ちどまる

と、ふりむきました。
『ねえ、ヘレン。ま夜中に、だれかが口ぶえをふくのを、知っていて？』
『いいえ。』
『あなたが眠っていてふくなんてことは、考えられないけど。』
『あたりまえだわ。でも、どうして？』
『この四、五日、まい晩夜中の三時ごろに、ひくいけど、はっきりした口ぶえが、聞こえるのよ。あたし、眠りがあさいものだから、それで目がさめるの。どこから聞こえてくるのかわからないんだけど――。となりのへやかもしれないし、しばふからかもしれない。あなたも聞いたかどうかと思って、たずねてみたの。』
『あたし、聞いたことないわ。きっと、あのいやらしいジプシーが、植えこみのかげでふくのにちがいないわ。』
『そうかもしれないわ。でも、しばふのほうだとすると、あなたが知らないのはへんね。』
『そうね。でも、あたしは、おねえさまよりぐっすり眠るたちだから。』
『まあ、どっちにしても、そうたいしたことじゃないわ。』
姉はほほえんでみせて、わたしのへやのドアをしめ、それからしばらくして、姉のへやのかぎがかかる音が聞こえました。」
ホームズが口をはさんだ。
「おふたりとも、まい晩かぎをかけておやすみになっていたのですね？」
「いつも、そうしていました。」
「それはまた、どうしてですか？」
「さっきお話ししましたように、父はヒョウとヒヒを飼っておりました。かぎをかけないと安心できなかったのでございます。」
「そりゃそうですね。どうぞ、おつづけになってください。」
「わたしは、その晩眠れませんでした。なんだか災難がせまってくるようなかんじがして、胸がさわぐのです。姉とわたしは、ふたごでございますが、これほどちかしいあいだがらにあると、おたがいのたましいが、どんなにしっくりむすばれているか、おわかりと思います。その晩はあらしでした。外では風があれくるい、雨がはげしく窓をたたいていました。とつぜん、このざわめきのなかに、おびえた女のおそろしい悲鳴が聞こえました。たしかに姉の声です。わたしはベッドからとびおきると、ショールをまきつけて、ろうかへ走りでました。ドアをあけたとたんに、ひくい口ぶえが聞こえ、それからすぐ、おもい金物でもおちたみたいな、ガチャンという音が聞こえたように思います。
ろうかを走っていきますと、姉のへやのかぎがあいて、ドアが静かにあきだしました。わたしは、なにがあらわれることかと、恐怖におそわれて見まもっていました。すると、そこから姉がでてくるのが、ろうかのランプの光で見えました。その顔は、恐怖のあまりまっさおになり、助けをもとめるように両手をつきだし、からだぜんたいが、よっぱらいのようにふらふらしています。
わたしは走りよって両腕にだきとめましたが、姉はそのとたんに、ひざの力がぬけたものとみえて、その場にくずおれてしまいました。ひどい痛みがあるらしく、身もだえして、手足をはげしくけいれんさせているのです。はじめは、わたしに気づいていないようでしたが、わたしがかがみこむと、ふいにさけびました。
『おお！　ヘレン、ひもが！　まだらのひもが！』
それは、一生わすれられないような声でした。姉は、なにかほかにもいいたいことがあったようで、指でつきさすみたいにして、父のへやのほうをしきりに指さしましたが、そのとき、またけいれんがおこって、ことばがでませんでした。
わたしが大声をあげながら、父をよびに走っていくと、父は、ちょうどガウンを着て、へやからでてくるところでした。父がかけつけたときには、姉は意識をうしなっており、父は姉の口にブランデーをながしこんだり、村へ助けの医者をよびにやったりしましたが、そのかいもなく、姉は、そのまま意識をとりもどさずに、しだいによわって死んでしまいました。これが、姉のおそろしいさいごのようすです。」
ホームズがいった。
「ちょっとまってください。口ぶえと金物の音は、たしかにお聞きになったのですね。まちがいありませんか？」
「州の検死官も、おしらべのとき、そのてんをおたずねになりました。たしかに聞いたと思うのですけれど、ひどいあらしの晩で、家が古くてミシミシ鳴っていましたから、ひょっとすると、思いちがいかもしれません。」
「おねえさんは、服を着ておられましたか？」
「いいえ、ねまきのままでした。右手にマッチのもえさしを、左手にマッチ箱をもっていました。」
「では、事件のあったときに、マッチをすって、まわりをご

らんになったのですね。これはだいじなことだ。検死官は、どんな結論をだしましたか？」

「父のかわったおこないは、まえからあたりのひょうばんになっておりましたから、検死官のおしらべは、とくにねんいりでしたが、姉の死因については、はっきりわからずじまいでした。ドアのかぎが内がわからかかっていたのは、わたしが知っていましたし、窓には、はばの広い鉄棒のついた旧式のよろい戸があって、まい晩それで戸じまりをいたしておりました。壁も四方をねんいりにたたいて、異状がないとわかりましたし、床もくわしい検査で、かわりがないとわかりました。煙突はふといのですが、ふとい鉄棒が四本もはめこんであります。ですから、そのとき、姉は、へやにひとりだったとしか、考えられません。そのうえ、からだには、傷あともありませんでした。」

「毒殺のうたがいは？」

「数人のお医者さんがしらべましたけれど、わかりませんでした。」

「では、あなたは、おねえさんがなんでお亡くなりになったと、お考えですか？」

「ただ、まったく恐怖のために、神経にショックをうけて死んだのだと思います。なにがそんなに恐怖をあたえたのかはわかりませんけれど。」

「ジプシーは、そのころ、庭のしげみにいましたか？」

「はい、たいてい、いつも何人かはいますので。」

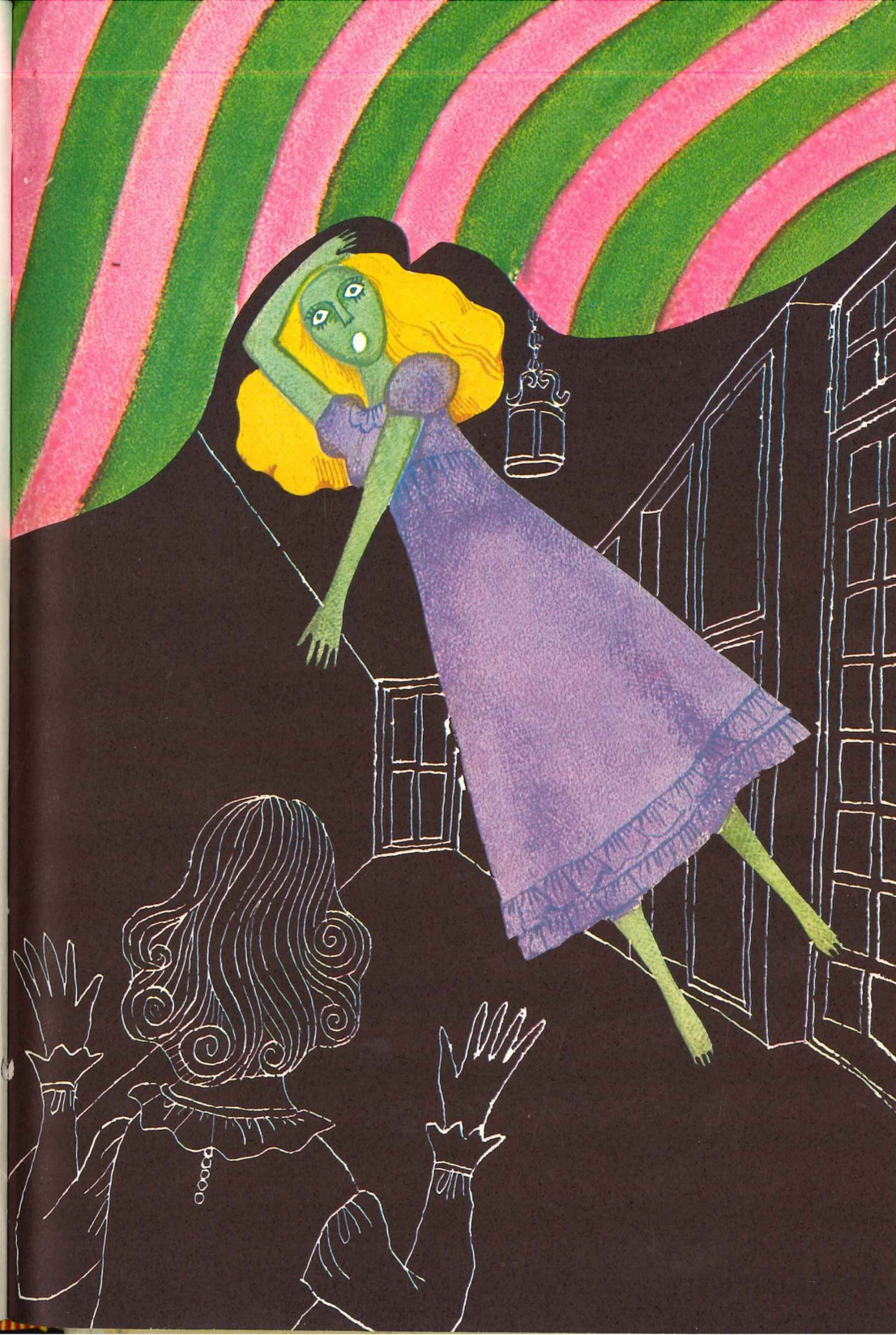
「なるほど、それから、おねえさんのおっしゃったまだらのひもについては、なにかお心あたりがありましたか？」

「いろいろ考えてみましたが、頭がへんになって、うわごとをいったとも思えます。姉はまだらの、というへんなことばをつかいましたが、ジプシーがよく頭にまいている、水玉もようのハンカチと関係があるのでしょうか？　わたしには、わかりません。」

ホームズは、頭をふった。

「これは、たいへんふかいわけがありそうですよ。どうか、お話をつづけてください。」

「それから二年間たちましたが、ついちかごろまで、わたしの生活は、まえにもましてさびしいものでございました。でも、一か月ほどまえに、なが年ぞんじあげていましたしたしい方から、結婚のおもうしこみをうけました。パーシ・アーミテッジ、とおっしゃる方です。父も、この結婚に反対いたしませんでしたので、春には式をあげることになっておりま



す。

二日まえから、西の棟の修理がはじまって、わたしの寝室の壁に穴があきましたので、しかたなく姉の死にましたへやへうつり、姉の寝ておりましたベッドにやすむことになりました。ところが、ゆうべのこと、眠れないままに姉のおそろしいさいごを考えていますと、とつぜん、夜の静けさのなかから、姉の死のまえぶれとなりました、あのひくい口ぶえが聞こえてまいりました。そのときのおそろしさというものを、おさっしくださいませ。

とびおきて、ランプをつけてみましたが、へやには、べつになにも見あたりません。でもすっかりこわくなって、二どと寝る気になれませんでしたから、そのまま服を着て、夜が明けるとすぐぬけだし、お目にかかってご忠告をいただきたいいっしんで、朝からうかがったわけでございます。」

「それはいいことでした。まだ、お話がのこってはいませんか？」

「いいえ、これでぜんぶですわ。」

「いや、ロイロットさん、まだあるはずです。あなたは義理のおとうさんをかばっておられる。」

「まあ、なんですかしら？」

ホームズは、へんじをするかわりに、ヘレンがひざにおいている手の、黒いレースのそでかざりをまくりあげた。五つの小さなあざが、白い手首にあざやかにしるされている。だれかが、おそろしい力でにぎりしめたあとらしい。ホームズはいった。

「ひどいしうちをうけておられるんですね。」

ヘレンはまっかになって、あざのある手首をかくした。

「父は、こわい人ですの。それに、自分の力がどんなにつよいか、自分で知らないらしいんですの。」

ながい沈黙がつづき、そのあいだ、ホームズは両手にあごをのせて、パチパチと音をたててもえる火をじっとながめていた。ついに、ホームズが口をきった。

「これは、だいぶ奥のふかい事件です。いろいろのてんをたしかめてから、とるべき方針をきめたいと思います。しかし、一刻もぐずぐずできません。きょう、これからストーク・モーランにいったとして、おとうさんに知られずに、へやをしらべることができるでしょうか？」

「父は、さいわい、重要な用事があって、きょうはロンドンにでかけるともうしておりました。たぶん、一日じゅう外出しておりますでしょうから、さしつかえはないと思います。

いま、家政婦がひとりいますが、年よりで、すこしぼんやりしていますから、このほうは、おじゃまにならないようにするのは、なんでもございません。」

「それはつごうがいい。ワトスンくん、いっしょにでかけることにもんくはないね？」

「もちろんないとも。」

「では、ふたりでいきます。ストーナさん。あなたは、これからどうなさいますか？」

「ロンドンまでまいりましたついでに、用事を一つ二つ、かたづけていきたいとぞんじます。でも、おいでいただくのにまにあいますように、二時の汽車でかえりますわ。」

「では、午後早めにうかがいましょう。ぼくは、やらなければならないかんたんな用事が二、三あるのです。すこしおまちになって、朝食をしていらっしゃいませんか？」

「いえ、もうおいとまいたしませんと。心配事をおうちあけしましたら、気がかるくなりました。午後、お目にかかれますのを、たのしみにしておりますわ。」

ヘレンは厚い黒のベールを顔におろして、静かにへやをでていった。シャーロック・ホームズは、いすにもたれかかりながら、たずねた。

「ワトスンくん、いまの話を、どう思うかね？」

「きわめてたちのわるい、ぶきみな事件のような気がする。」

「たちのわるいことも、ぶきみなことも、もうしぶんないよ。」

「しかも、あの婦人のいうように、床や壁に異状がなくて、ドアや窓や煙突からも、ではいりできなかったとすれば、ねえさんは、へやにひとりでいて、じつにふしぎな死に方をしたものだ。」

「もしそうだとすると、まい晩聞こえた口ぶえや、ねえさんの死にぎわのふしぎなことばは、どうなるだろう？」

「ぼくには、まったくわからない。」

「まず、ま夜中に口ぶえが聞こえたこと、博士としたしいジプシーのむれが、庭にきていたこと、博士は、義理のむすめの結婚をさまたげたほうがつごうがよかったこと、ねえさんが、死にぎわに、ひもということばをもらしたこと、そしてさいごに、ヘレン・ストーナが、金属性のひびきを聞いたこと、これは、よろい戸をとめていた鉄の棒が、もとの場所へおちこんだ音かもしれないから、こうした事実をむすびつけてみれば、なぞがとけてくるかもしれない。」

「だが、そうすると、ジプシーの役わりは、なんだろう？」

「そこは、わからない。」
「いまの説明では、まだ、ふにおちないてんがあるよ。」
「そう、ぼくもそうだ。だからこそ、きょう、ふたりでストーク・モーランへいこうというのだ。ふにおちないてんをたしかめてみたい。おや、これはいったいどうしたんだ！」
ホームズがふいにさけんだのは、ドアがらんぼうにおしあけられて、すごく大きな男が、戸口に立ちはだかったからだ。男の服装は、医者らしくもあり、百姓みたいでもあるふうがわりなもので、黒いシルクハットに長いフロックコートを着こみ、ゲートルをひざにまいて、手には狩猟用のむちをふりまわしている。ひどく背が高くて、かぶっている帽子が、入り口のかもいにすれすれになり、横はばも、戸口をいっぱいにふさぐほどなのだ。大きな顔は日にやけて、しわだらけで、おちくぼんだするどい目と、高くそげた鼻のせいか、ワシのようなかんじだった。男は、わたしたちを見くらべて、わめいた。
「どっちがホームズだ？」
ホームズは、おだやかにいった。
「ぼくです。どなたでしょうか？」
「わしはストーク・モーランのロイロット博士だ。」
「おお、博士でしたか、どうかおかけください。」
「腰なんかかけはせんぞ。わしの義理のむすめが、ここへきただろう。わしは、あとをつけてきたのだ。むすめは、なにをしゃべった？」
ホームズは、とぼけていった。
「季節のわりにしては、しょうしょうお寒いようですね。」
老人は、たけだけしくどなった。
「むすめはなにをしゃべったかというんだ。」
ホームズは、あいかわらずおちついたちょうしでいう。
「だが、ことしはクローカスの花のできがよいといいます。」
客は一歩前へでて、むちをふりまわしながらさけんだ。
「ふん、ごまかす気だな。知っておるぞ、このならず者め！おまえのうわさは、まえから聞いている。でしゃばり屋のホームズだ。警視庁の手さきめ。」
ホームズは、ゆかいそうに、クスクスわらった。
「なかなかおもしろいことをおっしゃいますね。おかえりになるときは、ドアをきちんとしめていただきましょう。どうも、すきま風がひどいですから。」
「いいたいことだけいえばかえる。いいか、わしの家のことに、いらぬ手だしはやめてもらおう。ストーナのむすめがこ

こへきたことは、わかっておる。あとをつけたんだから。わしがどんなに危険なあいてか、おしえてやろう。そら、どうじゃ。」
かれはすばやく前へでると、火かき棒をつかみ、日にやけた大きな手で、ぐいとねじまげてみせた。
「さあ、近よって、わしにつかまれたりせぬことだ。」
そうどなると、まがった火かき棒を炉へほうりこんで、すたすたとかえっていった。
ホームズは、わらいながらいった。
「なかなかゆかいなやつじゃないか。もうすこしいてくれたら、ぼくも、からだこそ小さいが、腕力のほうでは、たいしておとらないところを見せてやれたんだがな。」
こういいながら、鉄の火かき棒をひろいあげると、ぐいと力をいれて、もとどおりにのばした。
「ぼくを警視庁の刑事といっしょくたにするなど、じつにおもしろい。まあ、この先生があらわれたので、われわれの調査が、いよいよおもしろくなったというわけだ。じゃ、ワトスンくん、朝食をたのもうよ。ぼくは、そのあとで、登記所へでかけて、この事件に役だつ資料を見つけてこようと思う。」
ホームズは、一時ちかくになって、もどってきた。メモや数字をはしり書きした青い紙を一まい手にしている。
「死んだ細君の遺言を見てきたよ。ぜんたいの収入は、細君が死んだころ、一年の収入が千百ポンドにちかかったが、農産物価格が下落したため、いまでは七百ポンドあるかなしかだ。むすめたちは、結婚すれば、それぞれ年収二百五十ポンドずつもらえる権利がある。だから、ひとりが結婚してもたいした損だが、ふたりとも結婚してしまえば、いまの収入の三分の一しかはいらなくなる。ぼくが午前ちゅうつぶしたのは、むだでなかった。博士には、むすめの結婚を、ぜひともじゃましたいわけがあるのがわかったからね。
さあ、ワトスンくん、ぐずぐずしてなんかいられない重大な事態だ。なにしろ、ぼくらがこの事件にのりだしたことが、あの老人に知られているんだから、用意がよければ、辻馬車をよんでウォータールー駅へいこう。ピストルをポケットにしのばせていってくれるとありがたい。鉄の火かき棒をひんまげてみせる男があいてだからな。そのほかは、歯ブラシさえもっていけば、じゅうぶんだ。」
ウォータールー駅でうまく汽車にまにあい、レザーヘッド

からは駅前の旅館でやとった小型の馬車で七、八キロ、けしきの美しい道を走らせた。よく晴れた日で、空には太陽がかがやき、ヒツジの毛をちらしたような雲が二つ三つただよっていた。木々や道ばたの生垣は、新しい緑の芽がふきだしたばかりで、空気は、しめった土のこころよいにおいにみたされている。

このたのしい春のさきぶれと、わたしたちがこれから調査にのりだそうとするぶきみな事件とは、じつにちぐはぐに思われた。ホームズは、馬車の前の席で、腕をくみ、帽子をまぶかにかぶり、あごを胸にうずめてもの思いにふけっていたが、とつぜん、はっと身をおこして、わたしの肩をたたき、牧場のむこうを指さした。

「ほら、見たまえ。」

立木のしげった大庭園が、なだらかなスロープをなしてひろがり、上にいくほど木がふえて、いただきでは森になっている。枝のしげみのあいだから、ひじょうに古い灰色のやしきがつきでていた。ホームズは御者にたずねた。

「ストーク・モーランだね。」

「へい、だんな、グリムズビ・ロイロット博士のおやしきでございます。」

「あそこで工事をしているはずなんで、その現場へいきたいんだが。」

「おやしきにいかれるんでしたら、この段だんをのぼって、畑の小道をたどったほうが近道です。ほれ、あのご婦人のいきなさるところだ。」

ホームズは、小手をかざしながらいった。

「ああ、あのご婦人は、ストーナさんらしい。そうだ、おまえさんのいうようにしたほうがよさそうだ。」

わたしたちがおりて車代をはらうと、馬車は、レザーヘッドのほうへひきかえしていった。

ホームズは、段だんをのぼりながらいった。

「ぼくの考えは、あの男に、ぼくらのことを、建築技師かなにか、はっきりした用事できた人間と思わせておくのがよかろうということだ。うわさされずにすむからね。こんにちは、ストーナさん。ちゃんとお約束をまもったでしょう。」

ヘレンは、いかにもうれしそうな顔で、かけよってきた。

「ほんとうに、おまちしていましたわ。なにもかもつごうよくはこんでいますの。父はロンドンへでかけまして、夕方までかえりそうにございません。」

「博士とは、すでにお目にかかりましたよ。」

ホームズは、さっきのできごとを、かいつまんでのべた。ヘレンは話を聞きながら、くちびるまでまっさおになった。

「まあ、わたしのあとをつけたんですわ。」

「そうらしいですね。」

「ほんとうにぬけめのない人だものですから、すこしのあいだも安心していられませんの。かえってきて、なんといいますことか。」

「博士ご本人のほうが、用心しなくてはなりますまい。ぬけめのなさでは、一まいうわ手のわたしがつけねらっているんですから。あなたは今夜、へやにかぎをかけて、おとうさんをさけていらっしゃい。らんぼうをするようだったら、ハローのおばさんのところへつれていってあげます。さあ、時間は、できるだけ有効につかわなければなりませんから、さっそく目的のへやへ案内していただきましょう。」

やしきは、まだらにコケむした灰色の石づくりで、まんなかの建物がひときわ高く、その両がわに、たての棟が、カニのはさみのようにつきでていた。そのいっぽうの棟は、窓のやぶれを板でふさいであり、屋根のおちこんでいるところもあって、まるであばら屋といっていい。中央部も、それにおとらず手いれがいきとどいていないが、右ての棟だけは、いくぶんていさいがよくて、窓にはよろい戸があり、二、三本の煙突から青い煙がたちのぼっている。家族は、ここに住んでいるのだ。

はじのところの壁に足場がくまれており、石の壁をぶちぬいてあったが、職人などいるようすは、すこしも見られなかった。ホームズは、手いれのわるいしばふを、ゆっくり歩きまわって、窓を、外がわからねんいりにしらべた。

「これがあなたの寝室の窓で、まんなかがおねえさんの寝室の窓、そのとなりが、ロイロット博士の寝室の窓ですね。」

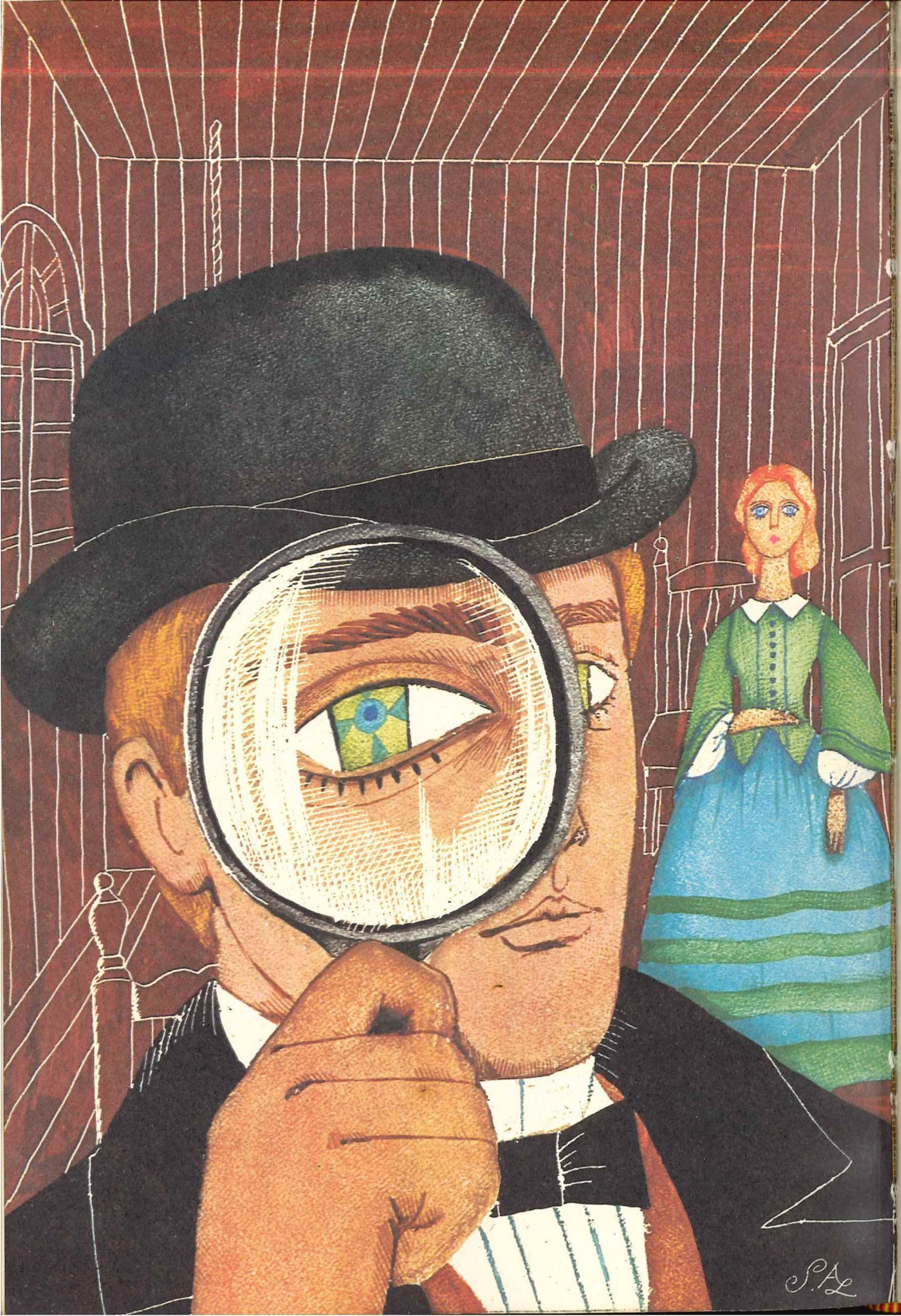
「そのとおりでございます。でも、わたしは、いま、まんなかのへやでやすんでおりますの。」

「それは、修理のあいだだけでしょう。ところで、あのはじの壁は、さしせまって修理の必要があるとは思えませんが。」

「ええ、ございませんでした。わたしを自分のへやからおいだす口実だったのだと思います。」

「ほう、それは意味ぶかい。ところで、このせまい棟のむこうがわを、ろうかがはしっていて、それに三つのへやが面しているわけですね。むろん、ろうかがわにも窓があるのでしょう?」

「ええ、でも、ほんとうに小さな窓です。だれだって、では



いりできないほどせまいんですの。」

「夜は、おふたりともドアにかぎをかけておられたのですから、ろうかのほうからは、しのびこめなかったわけだ。ではおそれいりますが、おへやにはいって、よろい戸をしめてみていただきましょう。」

ヘレンがよろい戸をしめると、ホームズは、あいているほうの窓を、ねんいりにしらべてから、しめたよろい戸をこじあけようと、いろいろやってみたが、どうにもならなかった。さんをつきあげようにも、ナイフひとつさしこめるすきまがないのだ。こんどは、虫めがねでちょうつがいをしらべたが、これも、がんじょうな鉄製で、がっしりした石壁に、かたくはめこまれている。

ホームズは、すこしこまったようすで、あごをなでながら、いった。

「ぼくの推理には、ちょっとむりがあるようだ。このよろい戸にかんぬきがさしてあれば、そこからは、ぜったいにはいれない。よし、こんどは、へやのなかに、なにか手がかりがあるかどうか、見ることにしよう。」

横ての小さい戸口からはいると、しっくいぬりのろうかに面して、三つの寝室のドアがならんでいる。わたしたちは、すぐに、いまヘレンのつかっている、二番めのへや、つまり、ヘレンの姉の死んだへやへはいっていった。質素な小さいへやで、古いいなか家風に、天じょうが低く、壁に大きな炉がきってあった。かたすみには、茶色のたんす、もうひとつのすみには、白いカバーをかけたベッドがあり、窓の左てには、鏡台がおいてある。

家具といえば、このほかには、二つの小さいとういすと、へやの中央にしいたじゅうたんだけだった。ホームズは、かたすみにいすをひきよせると、そこへ静かにすわって、このへやのどんなこまかいところも見もらすまいと、上下四方に目をはしらせた。しばらくして、ホームズは口をきった。

「あのよびりんのひもは、どこへつうじていますか？」

そして、ベッドの横にたれさがった、ふといよびりんのひもを指さした。

「家政婦のへやへつうじています。」

「ほかのものとくらべて、新しいように見えますが？」

「ええ、二年まえにつけたばかりですから。」

「おねえさんのご希望だったのでしょうね。」

「いいえ、姉がつかうのを聞いたことはございません。わたしたちはいつも、自分のことは自分でする習慣でしたから。」

「なるほど、こんなにりっぱなひもの必要は、なかったわけですね。床をしらべたいと思います。しばらくごめんください。」

ホームズは虫めがねを手にして、腹ばいになると、すばやく床を前後にうごいて床板のすきまをこまかにしらべた。それから、おなじように壁の羽目板をしらべた。さいごにベッドに近よって、しばらくそれを観察したり、壁にそって目を上下にはしらせたりした。それから、いきなりよびりんのひもをつかんで、ぐいとひいた。

「おや、音がしないぞ。」

「鳴りませんですか？」

「鳴らないはずですよ。針金につないですらない。これは、じつにおもしろい。ほら、空気ぬきの穴のすぐ上のところで、かぎにくくってあるのが見えるでしょう。」

「まあ、なんてみょうなんでしょう？　わたし、いちども気がつきませんでしたわ。」

ホームズは、ひもをひきながらつぶやいた。

「たしかにみょうだ。このへやには、ほかにもたいへんかわったてんが一、二ある。たとえば、空気ぬきの穴が、となりのへやにつうじている。空気ぬきの穴なら、外へむかってあけそうなものだ。こんなばかなことをする大工がいるものだろうか。」

「これも、ごく新しいんですの。」

「よびりんとおなじころこしらえたんですね。」

「ええ、あのころ、ほかにも四、五か所、かんたんな工事をいたしました。」

「これは、じつにおもしろい性質の工事だったようですね。音のしないよびりんに、空気ぬきの役にたたない空気穴。では、ストーナさん、こんどは、いちばん奥のへやをしらべることにいたしましょう。」

グリムズビ・ロイロット博士の寝室は、むすめのへやより大きかったが、おなじように質素なできだった。おりたたみベッド、専門の書物がぎっしりつまった小さい木の本棚、ベッドの横のひじかけいす、壁ぎわにおかれた木のいす、まるいテーブル、大きな鉄の金庫といったところが、おもなものだった。ホームズは、ゆっくりと歩きまわりながら、これらのものを、ひとつひとつ、きわめてねっしんにしらべた。そして、金庫をたたきながらたずねた。

「ここには、なにがはいっていますか？」

「父の用むきの書類ですわ。」

「なかをごらんになったのですか？」

「数年まえに、いちど見たきりですけど、書類がいっぱいはいっていたのをおぼえています。」

「ネコかなにかはいってるんじゃないでしょうか？」

「まさか。へんなことをおっしゃいますのね。」

「でも、これをごらんなさい。」

ホームズは、金庫の上にあった牛乳の小皿をとりあげた。

「いいえ、ネコは飼っていませんわ。ヒョウとヒヒはいますけど。」

「ああ、そうでしたね。まあ、ヒョウは、ネコの大きいのとはいえなくはないが、小皿一ぱいの牛乳では、とてもしんぼうしっこないでしょう。ひとつたしかめておきたいことがあります。」

ホームズは木のいすの前にうずくまって、その上かわを、きわめて注意ぶかくしらべた。それがすむと、立ちあがって、虫めがねをポケットにしまった。

「ありがとう。かなりはっきりしてきましたよ。やあ！　ここにおもしろいものがあるぞ。」

ホームズの目にとまったのは、ベッドのかたすみにかけてあった犬用の小さなむちである。ところがこのむちは、ぐるりとまいてあって、皮のぶぶんが輪になるようにむすんであるのだ。

「ワトスンくん、これをどう思うかね？」

「ごくふつうのむちじゃないか。なぜ輪にしてあるかわからないが。」

「ごくふつうのむちなものか。とんでもない。ああ、おそろしい世の中だ。まして頭のいい人間が、悪事に頭をつかうとなれば、おそろしいことこのうえなしだ。ストーナさん、見るべきものは見たように思いますから、おさしつかえなかったら、しばふへでようじゃありませんか。」

この調査のあと、ホームズは、きびしい顔つきをして、額をくもらせていた。わたしは、ホームズのこんな顔を見たことがなかった。

ホームズは、ついに口をきった。

「ストーナさん、だいじなのは、ぜったいに、わたしの忠告どおりうごいてくださることです。」

「はい、お約束します。」

「すこしもぐずぐずしていられないほど、たいへんな事態なのです。あなたは、わたしのいうとおりになさらないと、い

のちがありませんよ。」
「おもうしつけどおりにするとちかいますわ。」
「まずだいいちに、今晩、わたしとワトスンくんとは、あなたのおへやで夜を明かすことになります。」
ヘレンもわたしも、おどろいてホームズの顔を見つめた。
「そう、ぜひそうしなければならないのです。説明は、これからしましょう。あそこに見えるのが、村の宿屋ですね。」
「はい、クラウン亭といいます。」
「あそこから、あなたのおへやの窓が見えるでしょう?」
「ええ、見えますわ。」
「おとうさんがかえってこられたら、頭痛だといって、おへやにとじこもってください。それから、おとうさんが寝室へはいる音が聞こえたら、窓のよろい戸をあけて、かけ金をはずし、ランプをだして、ぼくたちに合図をする、それから手まわりの品をもって、あなたがまえにつかっていた寝室へうつるのです。修理ちゅうといっても、ひと晩ぐらい、どうにかすごせるでしょう。」
「ええ、それは、だいじょうぶですわ。」
「あとは、われわれの手でやります。」
「でも、なにをなさいますの?」
「あなたのおへやでひと晩すごしてみて、あなたをおどろかせた音のでどころをつきとめるのです。」
「ホームズさん、あなたには、もう、すっかりおわかりになっていらっしゃいますのね。」
「かもしれません。」
「では、おねがいでございます。姉が死んだ原因をおしえていただけませんでしょうか?」
「もっとたしかな証拠をつかんでからお話ししたいのです。」
「でも、わたしの考えがあっているかどうかぐらいは、おっしゃってくださいますわね。姉は、やはり、とつぜんの恐怖におそわれて死んだのでございましょうか?」
「いや、そうは思いません。もっとはっきりした原因があったようです。さあ、ストーナさん、ロイロット博士がかえってこられて、わたしたちが見つかると、せっかくでむいてきたのが、だいなしになりますから、もう、おいとましなければなりません。おやすみなさい。元気をだすんですよ。わたしのいったようにさえしてくだされば、あなたをおびやかしている危険は、われわれがじきにおいはらってしまいます。」
シャーロック・ホームズとわたしは、クラウン亭で、居間つきの寝室を借りた。二階のへやで、窓からはストーク・モーランやしきが見わたせた。日が暮れかけたころ、グリムズビ・ロイロット博士が、馬車でかえってくるのが見えた。しばらくすると、居間のひとつにランプがついたらしく、木立ちのあいだから、さっと光がさした。
しだいに暗さをましてきた夕やみのなかにすわって、ホームズは、いった。
「ねえ、ワトスンくん。じつをいうと、今夜きみをつれだすことを、すこしためらっているんだ。危険なのがわかっているものだから。」
「ぼくは、役にたたないのかね?」
「いや、きみがいてくれれば、どんなに助かるだろう。」
「それなら、ぜひいくよ。」
「そいつは、ほんとうにありがたい。」
「危険があるといったね。きみは、あのへやで、ぼくに見えなかったものまで見てきたんだな。」
「いや、そんなことはない。きみよりは、すこしばかりさきまで、推理したかもしれないが、ぼくの見ただけのものは、きみも見ているはずだ。」
「ぼくの見たところで、かわったものといえば、よびりんのひもだけだが。それも、なんの目的でつけられたかといえ

ば、しょうじきなところ、想像もつかない。」
「空気ぬきも見ただろう。」
「うん。だが、へやとへやのあいだに小さい穴があるのが、そんなにかわったことと思えないがね。あんなに小さくては、ネズミだって、とおれるかとおれないかだ。」
「ぼくはストーク・モーランにくるまえから、空気穴があると考えていた。」
「なんだって！」
「いや、ほんとうにそう思ってたんだ。ストーナさんの話に、ねえさんがロイロット博士のインドたばこのにおいでこまった、というのがあったろう。それを聞けば、二つのへやのあいだにつながりがあるにちがいないと、すぐわかる。これは、小さな穴でなければならない。さもなければ、検死官のとりしらべのときに問題になっただろうからね。それで、空気ぬきと推理したわけだ。」
「だが、あんな小さい穴で、どんなしかけができるだろう？」
「だが、空気ぬきがあけられたのと、よびりんのひもがとりつけられたのと、ベッドに寝ていたねえさんが死んだのと、日がいっちしている。ふしぎとは思わないかね。」
「まだ、そこがのみこめないが。」
「あのベッドに、たいへんかわったてんがあったのに気がついたかい？」
「いいや。」
「かすがいで、床にくぎづけになっていた。こんなにして固定したベッドなんて、見たことがあるかね？」
「まあ、ないね。」
「姉むすめは、ベッドの位置をかえることができなかった。ベッドは、空気ぬきとひもにたいして、いつもおなじ位置になければならなかったのだ。しかも、あのひもが、よびりん用でなかったことはたしかなんだ。」
わたしはさけんだ。
「きみのいおうとすることが、かすかにわかってきたような気がする。これは、功妙で、おそろしい犯罪だ。ぼくたちは、かろうじてまにあったんだな。」
「功妙なことも、おそろしいことも、このうえない。医者が悪事にはしると、最悪の犯罪者になるものだ。度胸と知識をかねそなえているからね。
だが、ぼくたちは、やつのもうひとつうえをいくことができると思うよ。それにしても、夜が明けるまでには、ずいぶんおそろしいめにあわなきゃならない。いまのうちに、ゆっくりパイプでもふかして、せめて二、三時間は、なにかもっとゆかいなことに心をむけようじゃないか。」
九時ごろになると、木々のあいだの光がきえて、やしきの方角は、まっ暗になった。それからながい二時間がすぎて、時計が十一時をつげたかとおもうと、わたしたちのま正面に、ひとすじの明るい光が、ぱっとともった。
ホームズは、いきおいよく立ちあがりながらいった。
「ああ、合図の火だ。まんなかの窓にともっている。でかけよう。」
ホームズは、でがけに宿の主人とことばをかわして、いまから知りあいを訪問するのだが、とまってくるかもしれないと説明した。わたしたちは、すぐ、暗い夜道を歩きだしたが、黄色い光は、正面にまたたいて、道案内をつとめてくれるのだった。
古いへいには、くずれたところがあちこちにあったから、わたしたちは、わけなくやしきうちにはいりこんだ。木々のあいだをぬって、しばふにでた。それを横ぎって、窓からはいろうとしたちょうどそのとき、しげみのなかから、きみのわるい、ねじまがった子どものようなものがとびだし、すばやくしばふをかけぬけて、やみのなかへきえてしまった。
わたしはさやいた。
「あっ。見たかい？」
ホームズもわたしとおなじぐらいびっくりしたらしいが、すぐにひくいわらい声をたてて、わたしの耳に口をよせた。
「これは、とんだ家族だ。いまのはヒヒだよ。」
博士がかわいがっている、ふうがわりなペットだったのだ。ヒョウもいるはずだった。いつ、うしろからとびつかれるかわからない。ホームズのまねをして、靴をぬぎ、寝室にはいりこんだが、じつのところ、ほっとした。ホームズは音をたてずによろい戸をしめ、ランプをテーブルの上にうつすと、へやじゅうに目をはしらせた。なにもかも、昼間に見たのとかわっていない。ホームズは、そばへそっとよってくると、手でらっぱの形をこしらえて、わたしの耳に、ことばがやっと聞きわけられるくらいの声でささやきかけた。
「すこしでも音をたてると、ばんじおしまいだよ。」
わたしは、聞こえたというしるしに、うなずいてみせた。
「あかりなしですわっていなければならない。空気ぬきから光がもれるからね。」
わたしは、またうなずいた。

「眠るんじゃないぞ。いのちにかかわるんだからな。まんいちの用心に、ピストルを用意しておきたまえ。ぼくはベッドのふちに腰かけているから、きみは、あのいすにかけるんだ。」

わたしはピストルをとりだして、テーブルのすみにおいた。ホームズは、細長いステッキをもってきていたが、それを自分のそばのベッドの上におき、その横に、マッチ箱と、もえさしのろうそくとをならべた。それから、ねじをまわしてランプをけしたので、あたりはまっ暗になった。

これは、永久にわすれられないほどおそろしい夜だった。もの音ひとつ、いや、息づかいの音さえ聞こえない。一メートルくらいむこうには、ホームズが、わたしとおなじように神経をとぎすまし、目を見ひらいてすわっているとわかっていたのだが。よろい戸にさえぎられて、ほんのわずかの光もしのびこまない。

わたしたちは、真のやみのなかで、まちつづけた。外からは、ときどき、夜鳥の鳴くのが聞こえた。いちどは、このへやの窓のすぐ下で、ネコのような鳴き声が聞こえたが、これは、ヒョウらしかった。

遠くから、十五分ごとに時をつげる教会の時計の、ふかい音色が聞こえてくる。その十五分ごとが、どれほどにながくかんじられたことか。十二時が鳴り、一時、二時、三時が鳴った。そのあいだ、わたしたちは、ものもいわずに、まちつづけた。

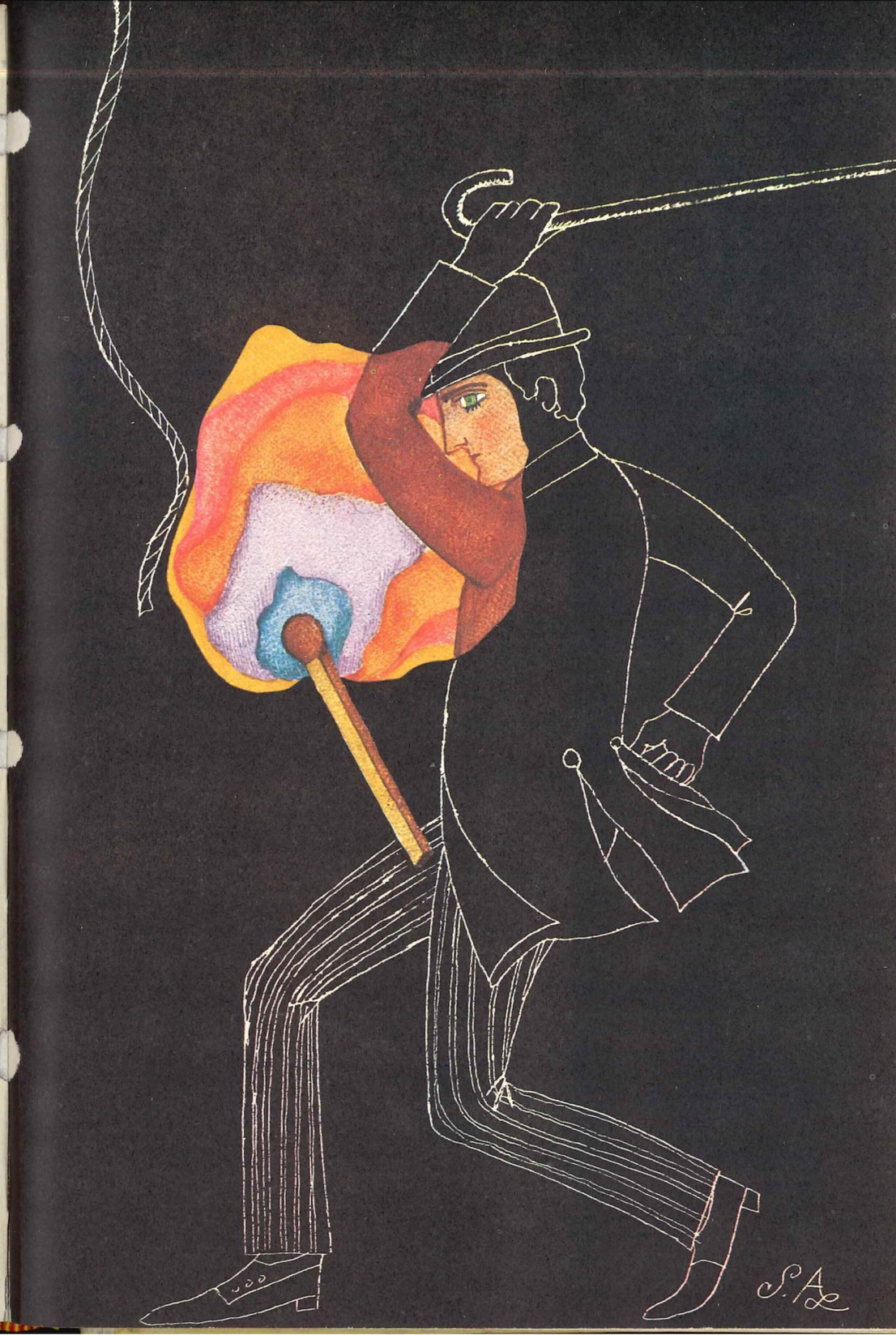
とつぜん、空気穴の方角に、ぱっと光がさしたかとおもうと、また、すぐきえてしまった。つづいて油のもえるにおい、金属のやけるにおいが、つよくただよってきた。だれかが、となりのへやで、カンテラをつけたのだ。人のうごく音が、かすかに聞こえ、それから、もういちど、静かになったが、においのほうは、しだいにつよくなっていく。三十分ばかり、わたしは緊張しきって、耳をそばだてていた。

すると、ふいにまた、べつのもの音が聞こえだした。——やかんからふきでる蒸気の音に似た、静かな、ものやわらかな音だ。とたんに、ホームズはベッドからとびだし、マッチをすって、ステッキで、力まかせによびりんのひもをたたいた。

ホームズが、わめくようにいった。

「見たか、ワストン？　あれを見たか？」

しかし、わたしは、なにも見なかった。ホームズがマッチをすったとき、するどい口ぶえは聞いたけれど、まぶしい光が、とつぜん目を射たものだから、見そこなってしまったの



だ。ホームズの顔は、死人のようにあおざめ、おそれといとわしさにみちていた。

ホームズはうつのをやめて、じっと空気穴を見あげた。そのとき、ふいに、夜の静けさをやぶって、世にもおそろしい悲鳴が聞こえてきた。その声は、しだいに大きくなっていき、ついに、苦痛と恐怖と怒りとがまじりあった、すさまじいわめき声になった。このさけびは、遠くの村までとどいて、寝ていた人たちがベッドからとびあがったという。ホームズとわたしが、骨のしんまでこおらされたように顔を見あわせているうちに、さいごのこだまもきえ、あたりは、もとの静けさにもどった。

わたしは、息をきらせていった。

「いったい、どうしたわけだ！」

ホームズはこたえた。

「すべてがおわったということだ。けっきょく、これでよかったかもしれない。ピストルをもってきたまえ。ロイロット博士のへやへいこう。」

ホームズは、しんけんな顔でランプに火をつけ、さきにたってろうかをすすんだ。ドアを二どノックしたが、へんじはない。そこで、ホームズはとっ手をまわしてなかへはいり、わたしは、うち金をおこしたピストルを手にして、そのあとにつづいた。

ぶきみな光景が、わたしたちの目にはいった。テーブルの上には、おおいをなかばあけた、カンテラがあって、ドアの半びらきになった鉄の金庫を明るくてらしだしている。このテーブルのかたわらの木のいすに、ネズミ色の長いガウンをまとったロイロット博士が、すわっていた。そのひざには、昼間見かけた短い柄に長い皮のついたむちがのっている。

博士はあごをそらせて、天じょうの一角を、うごかない目つきでにらんでいるのだ。ひたいのまわりに、褐色のまだらのある、奇妙な黄色いひもがまといついている。わたしたちがはいっていっても、博士は、もの音ひとつたてず、身うごきひとつしなかった。

ホームズはささやいた。

「ひもだ！　まだらのひもだ！」

わたしは一歩前にでた。するとそのとき、奇妙な頭かざりがうごきだして、博士の髪の毛のあいだから、きみのわるいヘビのずんぐりしたひし形の頭と、ふくれあがった首とがにゅうっとあらわれでた。

ホームズがさけんだ。

「沼毒ヘビだ！　インドでも、いちばん危険な毒ヘビだ。博士は、かまれて十秒たらずで死んでいる。暴力は、ふるった人間にはねかえってくる。他人におとし穴をほる者は、みずからその穴におちるのだ。さあ、このヘビを巣へおいこんで、ストーナさんに安全な場所へうつってもらい、それから、州警察へ、このできごとをとどけでることにしよう。」

こういいながら、死人のひざからすばやく犬むちをひろって、その輪をヘビの首にまわしてもちあげ、できるだけ腕をはなして、はこんでいくと、金庫のなかになげこんで、とびらをしめた。

これが、ストーク・モーランのグリムズビ・ロイロット博士の死についての真相である。わたしたちは、おびえているヘレンに、この悲しい事件を説明して、朝の汽車でおばのもとにおくりとどけた。警察は、博士が危険なペットとあそんでいて、事故をおこしたのであるという結論をだした。

よく日、かえりの汽車のなかで、ホームズが事件について説明してくれた。

「ぼくは、はじめ、まったくあやまった結論にたっしていたんだが、これは、ふじゅうぶんな資料で推理したためだ。ヘレンの姉はマッチの光でちらと見たものの外観をつたえようとして、『まだらのひも』ということばを用いたにちがいない。ところが、ぼくは、それをジプシーに関係があるものと考えてしまったのだ。

しかし、あのへやにいる者をおびやかす危険が、窓やドアからくるものではありえないと知って、すぐ考えをあらためた。そして、あの空気穴と、ベッドにたれているよびりんのひもに、すぐさま注意をむけた。よびりんのひもが、まがいもので、ベッドが床にくぎづけになっていることを見つけたとき、このひもは、なにかが空気穴からでてきて、ベッドへいくときにつたう橋ではないか、といううたがいがおきた。

そこで、たちまち、ヘビという考えがうかんだ。博士がインドから動物をとりよせているという話を考えあわせてみて、いよいよそれにちがいないとかんじた。毒ヘビの毒は、どんな化学検査でも見やぶられない。博士は、インドで暮らしていたし、医者でもあるから、そういう毒をつかうことを思いついてもふしぎはない。こうした毒は、作用がはやいということも、つごうのいいてんだ。毒牙がかみついたあとにのこる、二つの小さな黒い傷を見わける検死官は、めったにいないだろう。

それから、口ぶえのことを考えてみた。むろん、朝までにヘビをよびもどさなければ、見やぶられてしまう。あの牛乳をつかって、よべばもどるようにしこんだのだろう。いちばんいいと思われる時間をえらんで、空気穴からくぐらせると、ひもをつたってベッドにおりていくわけだ。ヘビは、へやの人間をかむとはきまっていないから、一週間ぐらいはぶじかもしれないが、おそかれはやかれ、かみつかれることはたしかだ。

これだけの推理は、博士のへやにはいるまえにたててしまった。いすをしらべてみて、博士が、ときどきその上に立つことがわかったが、これはむろん、空気穴に手をのばす必要があってつかったのだ。金庫、牛乳の皿、輪にしたむちと、これだけ見れば、もうまちがいはない。ヘレンの聞いた金属性の音というのは、博士がヘビを金庫にいれて、大いそぎでとびらをしめたときの音にちがいない。

それからあと、証拠をかためるためにぼくがとった手段は、きみの見たとおりだ。きみも聞いただろうが、ヘビのシュウシュウうなる音が聞こえたから、すぐマッチをすって、攻げきをくわえたんだ。」

「それで、ヘビは、空気穴からにげてかえったんだね？」

「そうだ、そのうえ、壁のむこうがわの主人におそいかかることになったのだ。ぼくの打げきがひどくきいたものだから、いきりたって、手あたりしだいの人間にかみついたのだ。こう考えると、グリムズビ・ロイロット博士が死んだことについては、ぼくに、いくらかの責任があるにちがいないが、悪いことをしたとは思わないね。」

あき家事件

ロナルド・アデア卿が、きわめてふしぎな殺され方をして、ロンドンじゅうの人びとをおびやかしたのは、一八九四年の春のことだった。

この犯罪そのものも興味あるものであったけれど、それにつづいておこったできごとは、わたしにとって、いっそうおどろくべきものだった。冒険にみちたわたしの一生にも、これほどのおどろきを味わったことは、またとなかった。

三年まえ、ホームズは、スイスを旅行ちゅう、犯罪王といわれたモリアーティ教授の一味におそわれ、きりたったがけからおちて、ゆくえしれずになっていた。わたしは、ホームズが死んだものと思って、悲しみにしずんでいた。

アデア卿の殺人事件がおこったのは、そんなときのことだったのである。わたしはホームズとたいへんしたしかったせいで、犯罪にふかい興味をいだくようになり、ホームズがいなくなってのちも、世間をさわがせたさまざまな事件に注意ぶかく目をとおすことをおこたらなかったし、自分ひとりのまんぞくのために、たいした成功もおさめないながら、ホームズの方法をもちいて問題をとこうとこころみたことも、たびたびあった。しかし、ロナルド・アデア卿の不運なさいごほど、わたしの心をひいた事件はない。

陪審は、一名または数名の犯人による他殺という評決をくだした。わたしは、馬車で患者まわりをしながら、一日じゅうこの事件を考えめぐらしたのだが、てきとうと思われる説明は見つからなかった。事件は、つぎのようなものだった。

ロナルド・アデア卿は、オーストラリア植民地の知事メイヌース伯爵の次男である。アデアの母親はそこひの手術をうけるために帰国しており、むすこのロナルド、むすめのヒルダとともに、パーク・レーン四二七番地に住んでいた。

アデアは上流の社交界にでいりしていたが、知られているかぎりでは、敵もなく、これといって、おこないがわるいところもない。静かな人がらで、感情にはしらない性質だったから、かれの生活ぶりは、ありきたりのおとなしいものだ

った。

ところが一八九四年三月三十日の夜、十時から十一時二十分のあいだのことだった。このおっとりした青年貴族に、死が、たいへんふしぎな、おもいがけないすがたをとって、おとずれたのである。アデアはトランプがすきで、しょっちゅうやっていたが、自分の身をあやうくするような大きなかけは、けっしてしなかった。ボールドウィン、キャベンディッシュ、バガテルの三つのトランプ・クラブにでいりしていた。

死の当日は、夕食のあと、バガテルでホイストの三番勝負をこころみたことが知られている。午後にも、おなじクラブで勝負をした。あいてをしたマリ氏、ジョン・ハーディ卿、モラン大佐の証言によれば、ゲームはホイストで、アデアの負けは五ポンドそこそこだった。

こういったところが、事件直前のアデア卿の行動について、審理の結果知られたことがらである。

犯行のあった晩、アデアは、きっかり十時にクラブからかえってきた。母と妹とは、あるしんせきのところで夕べをすごしていた。女中は、アデアがふだん居間にしている三階正面のへやにはいっていく音が聞こえた、と証言している。女中はそのへやに火をいれておいたのだが、いぶったので、窓をあけはなしておいた。

十一時二十分、すなわちメイヌース夫人と令嬢との帰宅した時間まで、そのへやから、なんのもの音も聞こえなかった。夫人は、おやすみをいおうと思って、むすこのへやにはいろうとした。ドアは内がわからかぎがかかっていて、みんなでさけんだりたたいたりしてみても、こたえがなかったので、人をよんできて、ドアをおしあけた。

アデアは、テーブルのそばに横たわっていた。頭は拳銃の弾がはじけたので、むざんにくだかれているのだが、へやのなかに凶器らしいものはなにも見あたらない。テーブルの上に、十ポンド紙幣が二まいと、銀貨金貨とりまぜて十七ポンド十シリング、ならべてあった。

また、一まいの紙にクラブの友人たちの名まえを書いて、それぞれにたいして、数字が記入してあったが、これは、殺されるまえ、トランプの勝ち負けの計算をしていたものらしい。状況をこまかにしらべてみても、事件は、ますますこんぐらかるばかりだった。まず、アデアがなかから、ドアにかぎをかけた理由がわからない。それは犯人のしたことで、そのご、窓からにげた、と考えることはできる。

しかし、窓から地面までは、すくなくとも七メートル、まま下には、いままっさかりのクローカスの花壇があった。花も地面も、すこしもみだされたあとがなく、家を道路からへだてる細長い草地にも、なんのあともない。

だから、かぎをかけたのはアデア自身だということになる。では、アデアは、どのようにして殺されたのだろうか？あとをのこさずに窓をよじのぼることは、だれにもできなかったはずだ。窓ごしに撃ったものとしてみても、その一発で、あれほど急所にあてるとは、まったく、あきれるばかりたいしたうでまえではないか。

それに、パーク・レーンは人どおりの多い道路なのだし、家から百メートルたらずのところに、貸馬車のたまりもある。ところが、だれも銃声を聞いていないのだ。いじょうがパーク・レーン怪事件の状況だが、すでにのべたように、アデア青年には、敵というものがなかったとみられ、また、室内の金や貴重品をもちさろうとしたあとがすこしもないのだから、ことは、ますますめんどうになった。

夕方、わたしはぶらぶらとハイド・パークをとおりぬけ、六時ごろ、パーク・レーンのオックスフォード街がわのはずれに立っていた。ひまな人間たちが歩道の上にむらがり、みんなそろってひとつの窓を見あげているので、めざす家は、すぐそれと知れた。

どう見ても私服刑事と思われる、背の高くてやせた男が、なにか自分の意見を話して聞かせているところで、ほかの者たちは、その男をとりまいて耳をかたむけている。わたしは、できるだけ近くへよってみたが、どうもすじのとおらない見解のようだったから、しょうしょういや気がさして、またひきさがった。

すると、そのひょうしに、うしろにいたみにくい老人にぶつかって、老人がもっていた数さつの本をとりおとさせてしまった。わたしはしきりにわびたが、老人は、あざけるようなうなり声をだし、くるりと背をむけた。やがて、そのまがった背中と白いあごひげとが、人ごみにきえていくのが見えた。

わたしはパーク・レーン四二七番地をしらべてみたけれども、この事件のなぞをとくようなことはわからなかった。家を通りからへだてているのは、低いへいと、その上の柵とだが、高さは、あわせて一メートル半くらいだ。だから、庭にはいることは、だれにでもやすやすとできる。

しかし窓のほうは、まったくとりつきようがない。水道管

といったものでもあれば、ひじょうにすばしこい人間ならよじのぼれようが、そうしたものもぜんぜんないのだ。わたしはいよいよとほうにくれて、ケンジントンへひきかえした。書斎へはいって五分たつかたたぬかに、女中がはいってきて客だという。

おどろいたことに、あらわれたのは、ほかでもない、さっきの奇妙な老人で、とがった、しなびた顔をしらがのなかからのぞかせ、十さつあまりの本を、右腕でせいいっぱいかかえている。老人はみょうなしゃがれ声でいうのだった。

「わしがきたので、おどろいておられますな。」

「そのとおりです。」

「なあに、わしにも良心がありますんでね。つまり、あなたのうしろからひょこひょこついてきたら、はからずもこの家へはいられるのを見かけたものだから、ちょっと立ちよって、さっきはどうもぶあいそなことをいたしましたが、けっしてわるぎがあったわけじゃない、本をひろってくださってほんとうにありがとうと、ひとこともうしあげておく気になりましたんで。」

「あんなつまらないことをして、そんなにまでいわれたのでは。」

「いや、あなた、失礼ながら、わしはご近所におるものでして、チャーチ街のかどに小さな本屋の店をだしていますから、おでかけくだされればたいへんうれしいのです。どうやらあなたも本をあつめておられますな。もう五さつで二段めの棚のすきまがちょうどうまりますが。これじゃどうも、まがぬけて見えますな。」

わたしはうしろの本箱を見ようとして首をまわした。それからむきなおって見ると、シャーロック・ホームズが、机のむこうがわから、にこにこわらいかけているのだ。わたしは立ちあがると、数秒のあいだあっけにとられてホームズを見つめていたが、そのまま気絶してしまったらしい。気がついてみると、カラーのはしがゆるめてあって、くちびるにブランデーのひりひりするあと味がのこっていた。ホームズはブランデーのびんを手にして、わたしをのぞきこみながら、なつかしい声でいった。

「いやあ、ワトスンくん。まったくすまなかった。こうまできみがびっくりするとは思わなかったんでね。」

わたしはホームズの腕をつかんで、さけんだ。

「ホームズ！　ほんとうにきみなのか。おどろいたなあ、きみが生きていたなんて。あのおそろしい谷底から、どうやってはいのぼることができたんだ？」

「まあ、あわてずに！　めんどうな話をしても、もうからだはだいじょうぶかね？」

「だいじょうぶだよ。だが、まったくのところ、ホームズくん、自分の目が信じられないみたいだ。じっさい、きみがこうしてぼくの書斎に立っているなんて。」

わたしはもういちどホームズのそでをつかんで、服の上から細長い筋肉質の腕をかんじとった。

「うん、とにかく幽霊じゃないようだ。ねえ、きみ、こんなにうれしいことがあるだろうか。腰かけたまえ、そして、どうやって生きてかえってきたのか、話してくれないか。」

ホームズは、わたしにむきあって腰をかけると、むかしながらのさりげないようすで、たばこに火をつけた。本屋の老人らしく、ふるぼけたフロックコートを着こんでいるのだが、白い髪も古本も、テーブルの上にまとめてつんであった。

ホームズは、まえよりもっとやせており、ものごしはいちだんとするどくなって、ワシめいた顔が、ちょっとあおざめていた。

「こうやって身をのばせるのは、じつにうれしいよ、ワトスンくん。背の高い人間が、何時間もぶっつづけに、三十センチばかり低くなっていなきゃならないなんて、なまやさしいことじゃない。ところで、きみ、今夜、これからむずかしくて危険なしごとをひかえているが、てつだってくれるだろうね。そうすれば、ぼくがこう身をやつしていることも、おのずと説明がつこうというものだ。ぼくがどうして助かったかを話すのは、そのしごとがすんでからにしたほうがいいのじゃないかと思う。」

「ぼくは好奇心でいっぱいだ。話はいますぐのほうがいいよ。」

「今夜、いっしょにきてくれるね。」

「いつでも、どこへでも、おのぞみのままだ。」

「まるでむかしとおんなじだな。でかけるまえに、夕食をひとくち食べていくぐらいの時間はある。よし、それじゃ、あのがけの話をしよう。あそこからでてくるのは、べつにむずかしいことではなかった。というのは、もともとおちこみやしなかったというだけのことだが。」

「おちなかっただって？」

「そうだ、ワトスン、おちなかったんだ。あのとき、きみあてに遺書がわりのおき手紙をしたが、あれはまぎれもないほ

んものだ。安全なほうへつうじるほそい道に、あのモリアーティ教授が立っているのをみとめたとき、いよいよぼくの一生もおわりがきたと思った。教授の灰色の目には、どうしてもぼくを殺そうという決意のほどがよみとれた。

だからぼくは、教授と二つ三つことばをかわして、あのおき手紙を書いてもいいという、礼儀にかなったゆるしをえたわけだ。それをたばこ入れや杖といっしょにのこして、すぐうしろからついてくるモリアーティ教授とともに、細道を歩いていったのだ。

道のはずれまできて、ぼくはふくろのネズミといったかたちになった。あいては武器などとりださず、長い両の腕でくみついてくる。教授としても、自分の運もこれかぎりとかくごして、ぼくに復しゅうすることしか頭になかったのだ。

ふたりのからだがひとつになって、滝のがけっぷちでよろよろとした。けれどもぼくは、日本の格闘術の心得がいささかあった。

で、ぼくがあいての腕をすりぬけると、やつは身の毛もよだつようなさけびをあげながら、あおのけざまにおちていった。それから岩にぶちあたって、はねかえり、しぶきをあげて水のなかへきえてしまった。」

ホームズがたばこをふかしながらものがたるいちぶしじゅうに、わたしは、おどろきの目を見はりながら、耳をかたむけていたが、ここで口をはさんだ。

「でも、足あとはどうした？　ふたりの足あとが小道をくだっていったっきり、かえったあとはなかったのを、この目で見とどけたんだぜ。」

「それはこういうわけだ。教授のすがたがきえたとたん、運命の神がめったにないようなチャンスをめぐんでくれたことに気がついたのだ。ぼくを殺すとちかいをたてたやつは、モリアーティひとりではない。首領の死を知って、いよいよぼくへの復しゅうのねんをつよくするやつらが、すくなくとも三人はいる。みんな危険きわまる人間ばかりだ。どいつかが、ぼくをやるにちがいない。

しかし、ぼくが死んだと世間一般で信じるようになれば、この連中はすきかってなことをしだすだろう。おおっぴらにやりはじめたところを、おそかれはやかれ、やっつけることができるわけだ。そこではじめて、まだぼくはこの世にいたぞ、と名のってでればいい。

ぼくはおきあがって、うしろの岩壁をとくとながめた。がけはひじょうに高くて、これをのぼりきることは、どう見て

も、不可能だったし、かといって、ぬれた小道をとおれば、足あとをのこさないわけにはいかない。

つまるところ、危険はかくごでがけをのぼるのがいちばんいい方法だった。気楽なしごとではなかったぜ、足もとには滝がとどろいている。手ににぎった草の根がぬけてきたり、ぬれた岩かどにかけた足がすべったりして、もうこれまでと思ったことも、一どや二どではない。

それでもぼくは、上へ上へとがんばりつづけ、とうとう、奥ゆき二メートルちかくはある、岩棚にたどりついた、そこでぼくは、だれからも見られる心配なしに、らくらくと横になることができた。きみたちは、ぼくが死んだものと思いこんで、下ばかりしらべていたが、そのあいだ、ぼくは、そこでからだをのばしていたのだ。

やがて、きみたちはあきらめて、ホテルへひきあげてしまい、ぼくはひとりのこされた。さっきからの冒険もここらできりがついたつもりでいたら、巨大な岩が上からおちてきて、うなりとともに、ぼくのかたわらをすぎ、小道にぶちあたると、もんどりうって滝つぼへとびこんでいった。はじめぼくは、ぐうぜんのできごとと思った。しかし、つぎのしゅんかん、上を見ると、暗い空を背景にひとりの男の頭が見え、つづいて第二の石が、まさしくぼくの寝ている岩棚の上、頭から三十センチとははなれぬところにあたった。

モリアーティは、ひとりではなかったのだ。教授がぼくをおそっているあいだ、ひとりのあいぼうが見はりにたっていて、遠くから、なかまだけ死んでぼくが助かったことを見とどけたのだ。それから、遠まわりしてがけのてっぺんにのぼり、教授がしそんじたことを自分の手でやりとげようとたくらんだのにちがいない。

これだけのことを考えるのに、ひまがかかったわけではない。ふたたびあのおそろしい顔ががけの上にのぞいたが、これは、つぎの石がふってくるまえぶれだった。ぼくは小道めざしてはいくだりはじめた。のぼりより百ばいもむずかしかった。だが、危険だと思っているひまもありはしない。というのは、岩棚のはしに手をかけてぶらさがったとたん、つぎの岩がヒューッと音をたててすれすれにとおりすぎたりするのだから。

ちゅうとまですべりおち、ほうぼうすりむけて血だるまになりながらも、とにかく道へおりたつことができた。すぐさま走りだして、暗いなかを十五キロも山越えしたわけだ。それから一週間たって、フロレンスにすがたをあらわしたのだ

が、世界でだれひとりぼくがどうなったか、知る者のないことは、たしかだった。

ぼくはひとりの人間にだけうちあけた。兄のマイクロフトだ。ワトスンくん、きみにはくれぐれもあやまらなければならないが、あのときはぼくが死んだと思わせておくことがぜったい必要だったのだ。この三年間、きみに手紙を書こうと思って、ペンを手にしたこともなんどかあったが、そのたびに、きみがぼくを愛するあまり、ひみつを知られるようなへまをしでかしはしまいかと、心配になった。

今夜、きみがぼくの本をひっくりかえしたとき、すぐ遠ざかってしまったのも、あのときぼくが危険な立場にいたからなのだ。ちょっとでもきみがびっくりしたり感動をおもてにだしたりしようものなら、ぼくの正体に注意がむけられて、このうえもなくなげかわしい、とりかえしのつかない結末になっていたかもしれない。

マイクロフトには、必要な金を手にいれるため、うちあけざるをえなかったのだ。ロンドンでのことのはこびは、ぼくが思ったようにはいかず、モリアーティ一味の裁判は、ぼくをいちばん執念ぶかくねらっているふたりのやつらを、野放しにする結果におわってしまった。だから、ぼくは二年間、チベットやペルシアを旅行してきたのだ。そして、しばらくフランスですごして帰国しようと思っているところへ、この注目すべきパーク・レーン事件のニュースがはいったので、行動を早めたわけだ、この事件は、それ自体として魅力があるばかりでなく、ぼくに個人的なかかわりのあるもののように思われたからだ。

というわけで、ワトスンくん、きょうの午後二時には、むかしなつかしいやの、むかしなつかしいひじかけいすにおさまって、あとはただ、むかしなつかしい友人ワトスンが、もうひとつのいすにすわっていさえすればなあと、思っていたのだ。」

わたしは、このおどろくべき物語にじっと耳をかたむけていた。二どと見ることがあろうとは、夢にも思わなかった、あの高くてほっそりしたすがた。そしてするどいきびきびした顔が、目の前にあるのでなかったらば、とても信じられるような物語ではなかった。ホームズは、話しおわって、いった。

「で、今晩これからふたりでやるしごとがひとつあるのだが、これは、まったくやりがいのあるしごとだ。」

「もっとくわしく話してくれたまえ。」

「夜が明けるまでには、たっぷり見たり聞いたりすることになるよ。過去三年ぶんの、つもる話があるじゃないか。九時半までその話でまにあわせて、それからあき家の冒険にとりかかるとしよう。」

時間がきて、二輪馬車にホームズとならんで腰をおろし、ポケットにピストルをしのばせて、冒険への期待に胸をときめかせていると、ほんとうに、むかしそのままのおもいがした。

ホームズはひややかで、いかめしく、口もきかなかった。街灯の光がそのきびしい顔だちをてらしだすたびに、眉はものおもいにたれ、うすいくちびるはかたくむすばれているのが見えた。この態度を見るだけで、冒険がただならぬものであることはうたがいようがなかった。

ホームズのアパートのあるベーカー街へいくのだと思っていたところ、ホームズはずっとてまえの広場のかどで、馬車をとめさせた。馬車をおりるとき、ホームズがこのうえもなくするどい目つきで左右を見やるのに気づいたが、それからも、道のかどごとに、ひじょうな気のくばりようで、だれもつけてきていないことをたしかめるのだった。

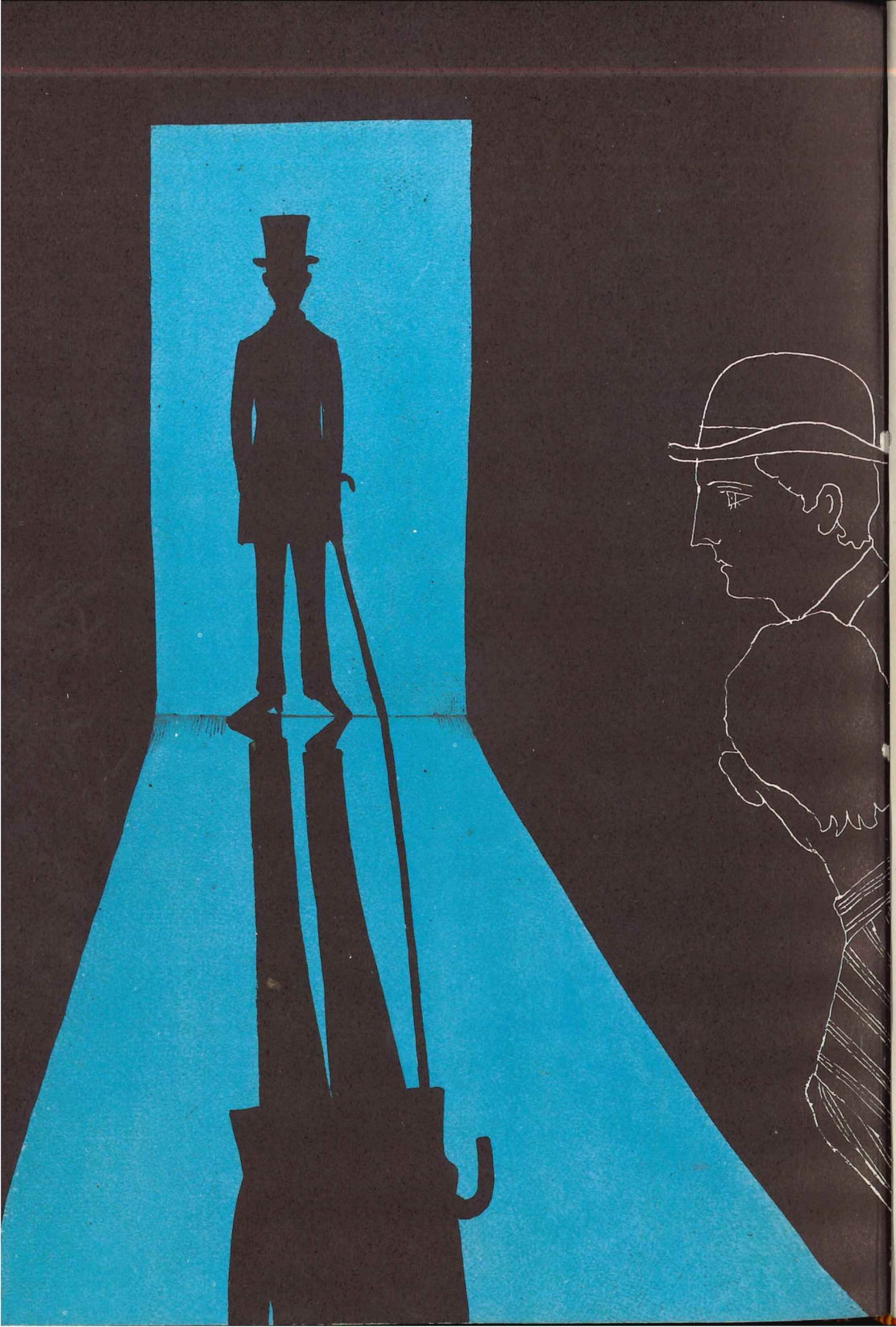
とおる道すじが、またじつにかわったものだった。ロンドンのぬけ道にかけてのホームズの知識といったら、それこそたいへんなものだが、こんども、わたしがまるで知らないようないりくんだ小路を、足速に、しかも自信ありげな足どりで、ぬっていくのだ。

やがて、古い陰気な家のたちならぶ小さな通りへでると、ホームズはせまい小路へすばやくまがりこみ、木の門をくぐって、人気のない中庭へはいり、かぎをつかって、とある家の裏戸をあけた。ふたりはなかへはいり、ホームズはまたドアをしめた。

なかはまっ暗だが、あき家であることはよくわかった。むきだしの床を歩くと、キイキイ、カタカタ、音がするし、手をのばすと、壁紙がずたずたになってさがっているのにさわる。ホームズの、つめたいやせた手が、わたしの手首をにぎって、長いろうかを奥へとみちびいていったが、やがて、ドアの上のうす暗いあかりとり窓が、かすかに見わけられた。

ここでホームズは、きゅうに右へまがり、われわれは大きな四角いへやにはいりこんだ。すみのほうはまっ暗だが、中央のあたりは、街路のむこうからくる光に、うっすらとてらされている。おたがいの顔がどうにか見わけられるくらいだ。ホームズはわたしの肩に手をおき、口を耳もとにちかづ

けた。
「ここがどこだかわかるかい？」
わたしはくもったガラスごしにのぞきながら、こたえた。
「まぎれもないベーカー街だ。」
「そのとおり。ぼくたちの古巣のまむかいのカムデン・ハウスにいるわけだ。」
「でも、なんだってこんなところへきたんだい。」
「むかいの、絵のごとき建物が、おもうさまながめられるからだ。ワトスンくん、ごくろうだが、すがたを見られないようにじゅうぶん気をつけて、もうちょっと窓へちかよるのだ。そして、ぼくたちのむかしながらのへやを見あげてくれたまえ。」
わたしは、はうようにして前へでて、なつかしい窓のあたりに目をやったが、視線がそこにとどいたしゅんかん、息もとまらんばかりになって、「あっ、」と声をあげた。
日よけがおろしてあり、へやのなかには、つよい光があかあかとかがやいている。いすに腰をおろした男の影が、くっきりした、黒い輪郭をえがいて、白く明るい日よけにうつっているのだ。頭のこなしといい、肩のいかりぐあい、おもだちのとがりぐあいといい、ホームズそっくりだ。わたしはおどろきのあまり、手をのばして、ほんものがそばに立っているかどうかたしかめてみたほどだ。ホームズは、身をふるわさんばかりにして、わらいをこらえながらいった。
「どうだい？」
「じつにどうもおどろいたよ。」
ホームズは、とくいそうにいった。
「なかなかぼくによく似てるだろう、どうだ？」
「きみそのものとおもいかねなかったよ。」
「ろう人形なんだ。きょうの午後、ベーカー街をおとずれたとき、配置したわけだ。」
「だが、なんのつもりで？」
「それはね、ワトスン、ぼくがじつはよそにいながら、あそこにいると、ある人間たちに思わせておきたい理由があるからだ。」
「つまり、あのへやを見はっているやつがあると思ったんだね。」
「見はられていると知ったのだ。」
「だれが見はっているのだ？」
「古い敵どもだよ、ワトスン。やつらは、ぼくが生きていることを知っている。おそかれはやかれ、ぼくが古巣へかえってくると、やつらは考えた。たえず見はっていて、けさはついに、ぼくが到着するところを見たのだ。」
「どうしてわかる？」
「窓からのぞいたら、見おぼえのあるやつが見はり番に立っていたのだ。バーカーといって、辻強盗が商売だが、こわいやつではなく、ユダヤ琴の名手だ。こいつのことなら、べつだん気にもしなかった。だが、気にかかったのは、背後にいる、ずっとはるかにおそろしい男、モリアーティの腹心の友で、がけの上から岩をおとした男、ロンドンずいいちの悪知恵にたけた、危険な犯罪者のことだ。こいつが、ワトスン、今夜ぼくをつけてる男なんだがね、ぎゃくにぼくたちにあとをつけられてるとはまるでごぞんじないのだ。」
ホームズのもくろみはだんだんとあきらかになってきた。自分を見はっている人間を、このうってつけのかくれ場所から、見はろうというのだ。むかいの骨ばった影法師がおとりで、われわれが猟師というわけだ。
ふたりはおしだまって暗やみのなかに立ち、目の前をいそぎ足におうらいする人びとを見はりつづけた。
ホームズは口もきかず、身うごきもしない。寒ざむとした、あれもようの晩で、風は悲鳴をあげて長い街路をふきすぎていた。右に左にゆきかう人は数多いが、たいていは上着やえりまきに首をうずめていた。
一、二どばかり、まえとおなじ人影を見かけたような気がしたが、とりわけ、すこしはなれた家の戸口に風をよけているらしい、ふたりの男が目についた。
ホームズの注意をひこうとしてみたが、もどかしげに小さな声をあげただけで、あいかわらず街路に見いりつづけるのだ。いちどならず、足をもじもじさせたり、指でせわしげに壁をたたいたりする。計画がおもったようには、はこばないので、しだいに不安になってきたのにちがいなかった。
ついにま夜中ちかくなり、街路にも、ようやく人どおりがたえるころになると、ホームズは不安をおさえきれなくなって、室内をいったりきたりしはじめた。わたしはことばをかけようと思って、ふと、むかいの明るい窓に目をあげたのだが、またも、さっきにおとらないおどろきを味わうことになった。わたしはホームズの腕をつかんで、上を指さした。
「影がうごいたぜ！」
ほんとうの話、もはや横顔ではなくて、背中がこちらをむいているのだ。
「そりゃうごいたろうとも、ワトスンくん。このぼくが、ひ



と目でそれとわかるかかしをおったてておいて、欧州きってのぬけ目ない連中をだましおおせると思うようなまぬけだろうか。ぼくたちがこのへやにきてから二時間になるが、そのあいだに、家政婦のハドスン夫人が八ども、つまり十五分ごとに、あの人形をうごかしてくれている。自分の影はうつらないようにね。あっ！」

ホームズは、シュッと興奮の音をたてて、息をのんだ。頭をつきだし、全身を注意にこわばらせるのが、うすあかりで見えた。さっきのふたりは、まだあの戸口にうずくまっているのかもしれないが、わたしには、もう見えない。なにもかも静まりかえって暗く、むかいの窓の日よけだけが、中央に黒いかたちをくっきりとうかべて、黄色くかがやいている。

つぎのいっしゅん、ホームズはへやのいちばん暗いすみへ、わたしをひきずりこみ、かた手をわたしのくちびるにあてて声をふうじた。わたしをつかんだホームズの手の指はふるえている。ホームズがこれほど心をたかぶらせたのは、かつてないことだが、目の前の暗い街路はといえば、人のけはいもなく、なんのうごきもないままなのだ。

ところが、きゅうに、わたしも、ホームズがすばやくかぎつけていたものに、ようやく気がついた。ひくい、しのびやかなもの音が聞こえてくるのだが、それがベーカー街の方角からではなく、われわれがひそんでいる、当の家の裏てからなのだ。ドアがひらいて、しまる。つぎのしゅんかん、ろうかをしのび足で近づいてくる音がした。音はさせないつもりでも、あき家じゅうにするどくこだましてしまうのだ。

ホームズは、壁を背に身をちぢめ、わたしもそれにならいながら、ピストルをにぎりしめた。暗やみにじっと目をこらしていると、ひらいた戸口のやみのなかに、わずかながら、いっそう黒く見える男のすがたが、ぼんやりとみとめられた。男はいっしゅん立ちどまったが、やがて、身を低くし、おどすようなかっこうで、へやのなかへじりじりとすすみでた。

この影が、三メートルばかりの近さにきたので、わたしは、とびかかられたらおうじる身がまえをしたが、すぐ、むこうはわれわれに気がついていないとわかった。

男はふたりのま横をとおり、窓にしのびよって、音もたてずに、窓を十五センチばかりおしあげた。男が窓のあいたところまで背を低くしたので、街路の光が、もうほこりだらけのガラスにさえぎられることもなく、まともにその顔をてらしだした。

男は興奮しているようすだった。両の目は星のように光

り、顔じゅうがひきつるようにうごいていた。肉のうすい、つきでた鼻、高く、はげあがったひたいをもち、ふといしらがまじりの口ひげをはやした、中年すぎの男だった。オペラ・ハットをあみだにかぶっており、前をはだけたオーバーの下に、夜会服のシャツの胸が白じろとのぞいていた。顔はやせこけてあさ黒く、どくどくしい顔つきだった。

手にステッキらしいものをもっていたが、床におくと金属性の音をたてた。男はオーバーのポケットから、かさばったものをとりだして、しきりになにかやっていたが、バネかボルトかがはまったときのような、するどいカチッという音がして、このしごとはおわりになった。つぎは床にひざまずいたまま、前かがみになって、なにか、てこのようなものに全体重と全力とをかけると、ぐるぐるまわるような、ギーギーこするようなながい音がしたが、これもさいごに力のこもったカチッという音がしておわりになった。

そこで、男は身をのばしたが、へんにぶかっこうな台尻のついた、一種の銃尾をひらいてなにかをさしこみ、栓をパチンとしめた。それから、うずくまって、銃身のさきを、あけた窓のしきいにかけた。ねらいをつけるかた目のするどく光るのが見えた。台尻をかかえて肩にあて、あの黄色い地にうつった黒い人影を見やりながら、まんぞくのため息をもらすのが聞こえた。

いっしゅん、男はかたくなって、うごかなかった。それから、引き金をあてた指さきに力をこめた。奇妙な、高い音がヒュッと空をきり、ガラスのくだける音がひびきわたった。

そのしゅんかん、ホームズはトラのように、男の背におどりかかって、うつぶせになぎたおした。男はすぐさまおきあがり、必死になってホームズののどにつかみかかった。

だが、わたしがピストルの台尻で頭を一げきすると、ふたたび床にのびてしまった。わたしはその上におそいかかっておさえつけ、ホームズは音たかくよびこをふいた。通りをバタバタかけてくる音がして、ふたりの制服巡査と、私服の刑事がひとり、正面玄関からへやへとびこんできた。ホームズはいった。

「ああ、レストレードくんか？」

「そうですよ、ホームズさん。この事件は自分でうけもちました。ようこそロンドンへおもどりでした。」

「ぼくが、かげで警察のおてつだいをする必要があるのではないかと思ったのでね。一年に迷宮入り殺人が三つもでるんでは、どうにもならないね、レストレードくん。」

犯人は両がわからがっしりした警官にはさまれて、はげしく息をしていた。おうらいには、もう、やじうまが何人か、たかりはじめていた。ホームズは窓ぎわへあゆみよって、窓をしめ、よろい戸をおろした。レストレードはろうそくを二本とりだしていたし、警官たちはカンテラのおおいをはずしていた。わたしはやっと、男の顔をつくづくながめることができた。

わたしたちのほうをむいたその顔は、たいへん男性的で、しかも邪悪なかんじだった。善にむかうにせよ悪にむかうにせよ、偉大な能力をもっているにちがいない。だが、その冷酷な青い目、するどい攻げき的な鼻、ふかくしわのきざまれた、おどすようなひたいなどを見れば、だれしも、危険をありありとかんぜずにはいられない。男は、にくしみとおどろきがまざりあった表情をうかべて、もっぱらホームズを見つめながらつぶやいた。

「このなまいきな、悪魔め！」

ホームズは、しわになったカラーをなおしながらいった。

「やあ、大佐、こうしてお目にかかるのは、スイスの滝で、岩棚に寝ていて、お心づくしに岩をなげつけていただいたときいらいのように思うが。」

男はあっけにとられたようすで、ホームズの顔を見つめるばかりだ。

ホームズは人びとにいった。

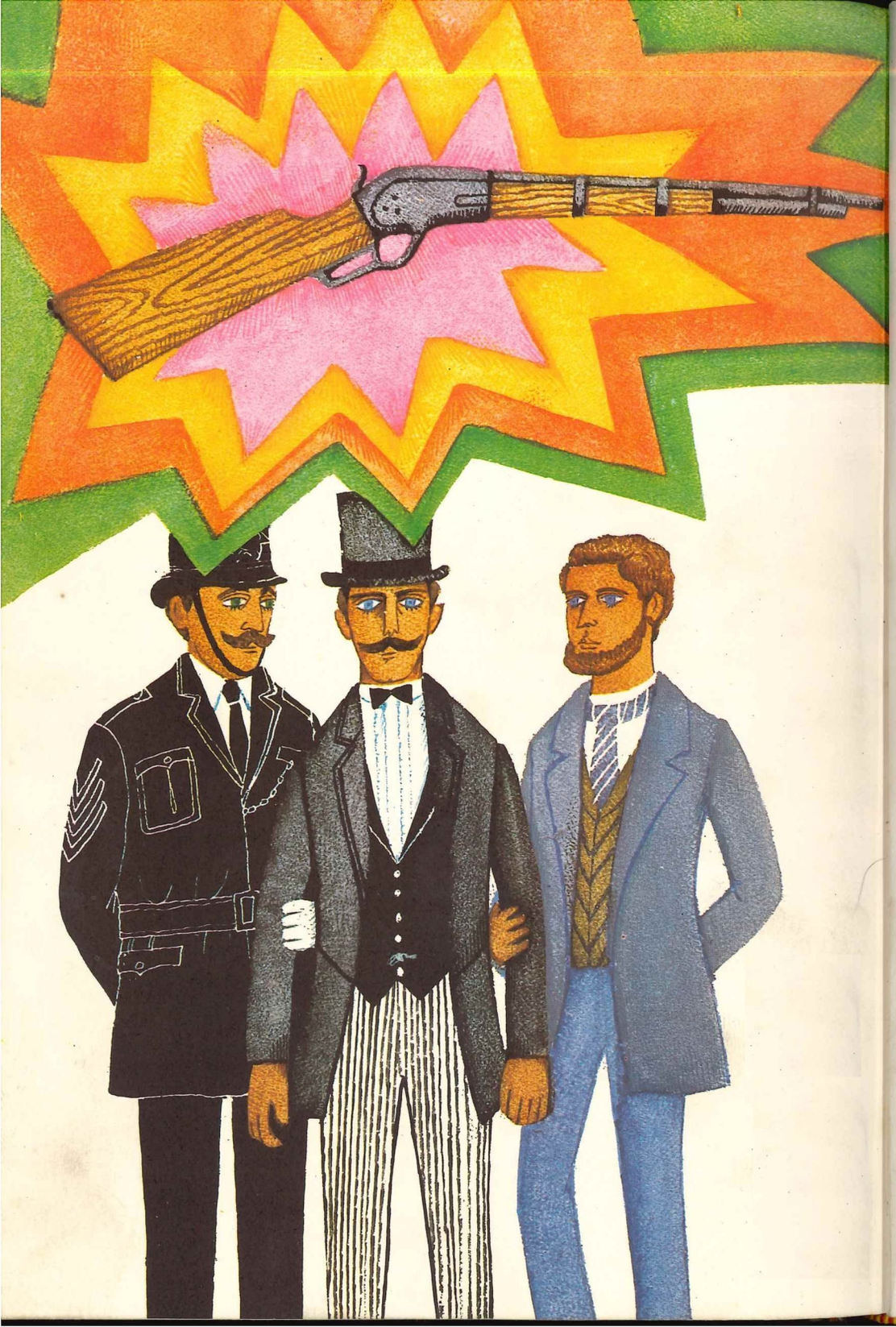
「まだ紹介してなかったですな、諸君。この人はもと大英帝国インド陸軍におられたセバスチャン・モラン大佐、猛獣狩りにかけては、インド最高の名手です。大佐、きみのしとめたトラの数には、たしかにまだ、だれもおよぶ者がないと記憶していますが。」

モラン大佐は口をひらかず、ホームズをにらみつけたままである。たけだけしい目つきといい、こわい毛のさかだつ口ひげといい、この男自身がトラににていることは、おどろくばかりだ。

ホームズはいった。

「こんなかんたんな計略に、きみほどのぬけめのない猟師がひっかかったとは、ふしぎですな。よくごぞんじの計略のはずだ。木の下に子ヤギをつないで、鉄砲をもってその上に身をひそめ、トラがおとりにつりだされてくるのをまったことなど、よくあるでしょうに。このあき家が木で、きみがトラというわけですよ。」

モラン大佐は、怒りで、うなり声をあげてとびかかろうと



したが、警官たちがひきもどした。

ホームズはいった。

「しょうじきな話、ひとつだけちょっとおどろかされたことがある。きみまでが、このつごうのいいあき家をつかおうとは、ぼくも予想しなかった。通りからやるだろうと思ったものだから、レストレードくんとおなじみの部下諸君とに、そっちを見はってもらったのだが。このてんだけが例外で、あとはすっかり思いどおりにいったわけだ。」

モラン大佐は、刑事のほうへむきなおった。

「おれを逮捕する正当な根拠があろうとあるまいと、すくなくとも、この男にあざけられるがままになっておらねばならぬ理由はないはずだ。おれが法律の手におちたのなら、すべて法律にのっとってやってもらおう。」

レストレードはいった。

「いや、もっともだ。では、でかけるとしますが、ホームズさん、まだなにかいっておかれることはありませんか？」

ホームズは床から例の強力な空気銃をひろいあげて、構造をしらべているところだった。

「おどろくべき、武器だ。音はしないし、きわめて強力なものだ。ぼくも知っているフォン・ヘルダーという、ドイツのめくらの技師が、死んだモリアーティ教授の注文にあわせてこれをくみたてたのだ。こういうものもあることは、まえから知っていたけれども、手にとってみる機会は、ついぞなかった。レストレードくん、よく気をつけてあずかってください。それから、この特製の弾丸もね。」

「ちゃんと保管しますから、ご心配なく、ホームズさん。」

レストレードは、みんなとともに戸口のほうへむかいながら、モラン大佐にいった。

「ほかに、いうべきことはあるかね。」

「なんの容疑で告発するつもりか、それだけ聞きたい。」

「なんの容疑だって？　そりゃ、むろん、シャーロック・ホームズ氏にたいする殺人未遂のかどですよ。」

ホームズが口をはさんだ。

「それはいけない、レストレードくん。ぼくはこの事件に、ぜんぜん顔をだしたくないのです。このみごとなとり物は、きみがじっさいやってのけたのだから、手がらはまったくきみのものだ。そうとも、レストレードくん。ほんとうにおめでとう！　いつもながら、頭のいいところと大胆なところが、うまく一体になった逮捕ぶりでした。」

「逮捕ですって？　だれをですか、ホームズさん。」

「当局が全力をあげながら、つかまえかねていた男さ。先月の三十日、パーク・レーン四二七番地三階のあいたおもて窓ごしに、空気銃でダムダム弾を撃ちこんでロナルド・アデア卿を殺した、セバスチャン・モラン大佐のことです。これがこの男の容疑ですよ、レストレードくん。さあ、ワトスンくん、こわれた窓からすきま風がはいるのをがまんする気ならば、ぼくの書斎で葉巻をふかしながら、半時間ばかり、おもしろくてためになる話をきかせてあげよう。」

わたしたちが、むかし住んでいたひとつづきのへやは、ホームズの兄マイクロフト・ホームズの監督のもとに、家政婦のハドスン夫人が管理していてくれて、むかしとすこしもかわっていなかった。かたすみには化学実験の設備があるし、酸でよごれた板張りのテーブルもある。棚には、ロンドンの多くの犯罪者がやきすてたがっている、あのおそるべき切りぬき帳とメモとがならんでいる。図表の類や、バイオリンのケースや、パイプかけや、すべてが、ぐるりと見わたしたわたしの目にはいってきた。

へやには、ふたりの人間がいた——ひとりはハドスンさんで、わたしたちふたりがはいっていくと、はれやかにほほえみかけてくれた。もうひとりは、この夜の冒険にたいへん重要な役をえんじた奇妙な人形である。ホームズに似せてつくったろう人形で、実物そっくりのみごとなできばえだった。小さなテーブルを台にしてその上にのせ、ホームズの古いけしょう着を着せかけてあるのだが、通りからでは、ぜったいほんものとしか見えないであろうと思われた。

ホームズは、いった。

「注意はすべてまもってくれましたね。ハドスンさん。」

「おいいつけどおり、そばへよるのも、ひざをついていきましたよ。」

「けっこうです。じつにうまくやってくださった。弾はどこへあたったか、見ましたか？」

「はい、このりっぱな胸像をだいなしにしてしまいました。頭をつきぬけてから、壁にあたって、ひらったくなったのです。敷物の上からひろっておきましたわ。これですの。」

ホームズは手にとってわたしに見せた。

「ほら、ごらんのとおり、ピストル用のダムダム弾だ。じつに天才的なおもいつきじゃないか。空気銃からこんなものがとびだしてこようとは、だれもおもいつかないからね。いや、ハドスンさん、ほんとうにおせわになりました。

さあ、ワトスンくん、そのいすに、まえみたいに腰をかけてみせてくれたまえ。きみと話しあいたいてんが、二、三あるから。」

ホームズはみすぼらしいフロックコートをぬぎ、人形に着せてあったネズミ色のけしょう着をまとって、むかしながらのホームズにもどっていた。

「老猟師先生は、神経のしっかりしたところも、目のするどさも、ぜんぜんむかしのままだ。」

ホームズは自分の胸像のくだけたひたいをじっと見ながら、わらっていった。

「後頭部のまんなかにあたって、脳髄をまともにぶちぬいている。インドきっての名射手だったが、ロンドンでも右にでる者はそういるまい。名まえを聞いたことはあるかい？」

「いや、ない。」

「さて、さて、名声とはかくのごとしか！　だが、ぼくの記憶が正しければ、今世紀最大の犯罪者のひとり、ジェームズ・モリアーティ教授の名まえさえ、きみはあのとき、はじめて聞いたといったっけ。ちょっと棚から、ぼくのつくった犯罪者辞典をおろしてくれたまえ。」

ホームズはいすにぐっと背をもたせかけて、葉巻から雲のような煙をはきながら、たいぎそうにページをくった。

ホームズは、とじこみをよこし、わたしは読みあげた。

「セバスチャン・モラン＝陸軍大佐。退役ちゅう。もとインド第一工兵隊所属。父はもとペルシア公使、準男爵オーガスタス・モラン。イートンおよびオックスフォードにまなぶ。インドでの戦争でたびたび手がらをたてた。著書、『西部ヒマラヤの猛獣狩り』『ジャングルの三か月』住所、コンデュイット街。所属クラブ、英印クラブ、タンカビル・クラブ、バガテル・カード・クラブ。」

余白には、ホームズのきちょうめんな筆跡で、『ロンドン第二の危険人物』と書きいれてある。

わたしは本をホームズにかえしながらいった。

「これはおどろいた。名誉ある軍人の経歴じゃないか。」

「そのとおりだ。ある時期まではまともにやってきたのだ。いつもかわらぬ鉄の神経の持ち主で、手負いの人食いトラをおっかけて排水溝をはっていった話は、いまもインドの語りぐさだ。ワトスンくん、ある高さまでのびると、きゅうにみにくく、みょうなぐあいに枝をのばしはじめる木があるだろう。人間にもしばしば見られることだ。原因がなんであるかはともかく、モラン大佐は悪くかわってきたのだ。

おもてだった事件はおこさなかったが、だんだんインドに

は、いづらくなってくる。退役して、ロンドンへかえってきて、ここでもまた悪名をえてしまった。このとき、モリアーティ教授に見いだされて、しばらくはその参謀長の役どころをつとめていた。モリアーティは、モランに気まえよく金をやっておいて、ふつうの犯罪者の手にはおえないような、一、二の最高級のしごとにだけつかった。

一八八七年に、ローダのスチュアート夫人が死んだ事件のことを、おぼえているかい。いないって？　そう、あれなんかも、たしかにモランのしわざなんだ。だが、どうにも確証があがらない。じつにうまく裏にかくれていたものだから、モリアーティの一味がすっかりやられたときでさえも、大佐だけは罪におとすことができなかったのだ。

あのころ、ぼくがきみのすまいをたずねていって、空気銃をおそれてよろい戸をおろしたことを、おぼえているだろう。きみはぼくのことを神経質すぎると思ったようだったね。ぼくにしてみれば、ちゃんとわきまえがあってしたことなのだ。というのは、あのおどろくべき銃の存在も知っていたし、世界で指おりの射げきの名手がその銃をにぎっていることも知っていたからだ。

ぼくたちふたりが、スイスへいったときも、モランはモリアーティといっしょにつけていたし、岩棚の上で、ぼくにあのおそろしい五分間を経験させたのも、モランだと考えてまちがいないのだ。

フランス滞在ちゅう、なんとかあの男を監獄へおくりこむ機会はないものかと思って、ぼくが気をつけて新聞を読んでいたことは、きみにもさっしがつくだろう。あいつがロンドンでのさばっているあいだは、ぼくもじっさい生きている値うちがないというものだからね。そこへ、このロナルド・アデアの死んだ事件だ。とうとうこっちのチャンスがきた！

わかっているだけのことから考えて、モラン大佐が下手人であることは、じつにあきらかではないか。大佐はアデアとトランプをやった。クラブから家まで、さっそくアデアをつけていった。窓ごしにアデアを撃った。うたがいの余地もない。ぼくはすぐかえってきた。用心棒がぼくを見つけ、ぼくのかえったことを大佐に知らせるにちがいなかった。

大佐は、ぼくのとつぜんの帰還を自分の犯罪とむすびつけて考えないわけにはいかず、あわてふためくにちがいない。大佐はぼくをさっそくかたづけようとするだろうし、そのためには、あのおそるべき武器をもちだすにきまっている。

そこで、大佐には窓にぜっこうの標的をこしらえてやり、

警察には、手をかりることになるかもしれないとつたえておいたのだ。ぼくは、監視にうってつけの場所に、うまく陣どったつもりだが、あいてがおなじ場所を攻げきに利用しようとは夢にも思わなかった。さあ、ワトスンくん、まだ説明のたりないところがあるかね？」

「あるよ。モラン大佐がロナルド・アデア卿を殺した動機を、まだあきらかにしてくれていない。」

「ああ！　ワトスンくん、そこからは推測の領域になるから、どんなに論理的な頭の持ち主でも、あてずっぽにならないわけにはいかない。いまあがっている証拠にもとづいて、めいめい仮説をたてることができるわけなので、きみの説もぼくの説も、あたっている可能性は似たようなものだ。だが、これまでにわかっている事実に説明をつけるのは、むずかしいことではない。モラン大佐とアデア青年とがくんで、これまでにかなりの金額を勝ったことが、証言であきらかにされている。ところで、モランがいんちきをやっていたことは、まちがいはない。

事件の日に、アデアがモランのいんちきを見やぶったのだと思う。おそらく、ないないに話をして、自発的にクラブを脱退して、二どとトランプをやらないと約束しなければ、表ざたにするぞ、というような、つよいことをいったのだろう。アデアのような若い者が、あれほど年上で有名な人物のひみつをあばいて、いきなり恥さらしをさせるようなことは、まず考えられない。たぶん、いまいったような行動にでたことだろう。

モランはトランプの不正なみいりで暮らしているんだから、クラブを追放されれば身の破めつだ。それでアデアを殺したわけだが、そのとき青年は、くんだなかまのいんちきで得をするわけにはいかないというので、自分が返済すべき金額を計算しているところだった。ドアにかぎをかけたのは、母や妹がふいにはいってきて、根ほり葉ほりきくのをきらったからだ。こういったところでどうかね。」

「真実をいいあてていること、まちがいなしと思うが。」

「あたっているかいないか、裁判が証拠だててくれることだ。いずれにせよ、モラン大佐が、ぼくたちをなやますことは二どとないだろうし、フォン・ヘルダーの名高い空気銃はロンドン警視庁の陳列所をかざることになり、そこで、シャーロック・ホームズ氏は、ロンドンでおこる、さまざまな興味ある事件の探究に、身をいれることができるわけだ。」

海軍条約事件

わたしが結婚してまもない七月のこと、興味ある事件がおこった。これは、いちじは、国家の重大事になるかと思われた事件だった。

学校時代、わたしはパーシ・フェルプスという少年としたしくしていた。年はおなじぐらいなのに、わたしより二年も上級だった。

たいへんよくできる少年で、学校からでる賞をまいどのように獲得し、ついに一流大学のケンブリッジにはいった。

また、フェルプスの母方のおじが保守党の大政治家ホールダースト卿だった。こうして、フェルプスは自分の才能と、おじの勢力とのおかげで、外務省のかなりいい地位についた、ということだった。それきり、フェルプスのことは、わすれてしまっていたところへ、つぎのような手紙がきて、フェルプスのことを思いださせてくれたのである。

ウォーキング、ブライアブレーやしきにて

ワトスンくん　きみが三年のとき五年のクラスにいた『おたまじゃくし』フェルプスをおぼえておられることと思います。また、おじの力で外務省のかなりいい地位についたことも、お聞きおよびかもしれません。ところがその責任と名誉とのある地位にいたわたしに、とつじょ、おそろしい事件がふりかかって、わたしの将来はだいなしになろうとしているのです。

このおそるべき事件について、ことこまかに書くことは、無用と思います。もし、きみがわたしのねがいをききいれてくださったばあいには、くわしくお話しいたすことになるでしょうから。わたしは九週間にわたる脳炎から回復したばかりで、まだ、ひどくよわっています。

きみの友人ホームズ氏を、わたしのところまでおつれくださるわけにはいかないでしょうか？　警察では、うつべき手段はうったといっておりますが、わたしとしては、この事件について、ホームズ氏のお考えをうかがいたいので

す。なにとぞホームズ氏をおつれくださるよう、それも、できるかぎり早く。このおそろしい不安のなかに暮らしていると、一分一分が一時間にもかんじられます。

もっと早くホームズ氏に助言をおねがいしなかったのは、ホームズ氏のお手なみを知らなかったためではなく、事件の打げきに気をとりみだしていたせいです。いまでは、もう、はっきりしております。まだ、からだのほうはひどくよわっていますので、ごらんのとおり、口述筆記させたようなしだいです。なにとぞ、ホームズ氏をおつれくださいますよう、おほねおりねがいます。

むかしの学校友だち　パーシ・フェルプス

この手紙を読むと、なにか胸にせまるものをかんじた。わたしは、たいへん心をうごかされて、なんとかしてやらねばならぬと思った。いうまでもなく、ホームズはきわめてしごとずきで、依頼人がうけいれさえすれば、いつでも助けの手をさしのべる男だ。

ホームズに事情を知らせるのを、いっときもおくらせるべきではない。妻もそれに同意してくれたので、わたしは朝食をすませて一時間とたたないうちに、ベーカー街のアパートをおとずれたのだった。

ホームズはけしょう着のままで、サイドテーブルにむかって、なにやら化学実験にねっちゅうしていたが、ふりむいて、いった。

「またきたね。どんな事件だい？」

例の手紙をわたすと、かれは、このうえなく注意を集中して読んだ。

「これだけじゃ、よくわからないね、だが、筆跡はおもしろい。」

「本人の筆跡じゃないんだぜ。」

「そう。女のだよ。」

「いや、男のだよ。」

「ちがう、女のだよ。しかも、めずらしい性格の女だ。調査をはじめるにあたって、依頼人の身近に、よかれあしかれ、なみはずれた性格の人間がいるとしれただけでも、ありがたいじゃないか。なんだかこの事件に興味がわいてきたぜ。きみさえよければ、さっそくウォーキングへでかけて、こんなはめにおちいった外交官と、手紙を書きとったご婦人にあってみよう。」

わたしたちは、運よくウォータールー駅発の朝の汽車にま

にあったので、一時間とたたぬうちに、ウォーキングのモミの林や荒地を歩いていた。ブライアブレーやしきは、広い地面をもつ大きな一軒家で、駅から二、三分のところにあった。

名刺をわたすと、上品に装飾された客間へとおされた。しばらくして、小ぶとりな男があらわれ、たいへんあいそよく、わたしたちをむかえた。三十よりは四十にちかい年ごろだが、ほおがあかく、目もとも快活で、ぽっちゃりとしたわんぱく少年といったおもかげがのこっている。

「ようこそおいでくださいました。パーシは、朝から、あなたがたにおあいしたがってばかりいます。かわいそうに、わらにもすがりたい気持ちなんです。」

ホームズはいった。

「まだ、くわしいことをうかがっておりませんが、お見うけしたところ、あなたはこの家の方ではありませんね。」

あいてはおどろいたようだったが、ちらと目をおとして、それからわらいだした。

「さては、わたしのロケットの、J・Hのくみあわせ文字をごらんになったんですね。はじめは、なにかの術でもおつかいになったのかと思いました。わたしはジョーゼフ・ハリスンともうしますが、妹のアニーがパーシと結婚することになっていますので、これから、すくなくとも親類にはなるわけです。妹はパーシのへやにいます。このふた月、それこそつきっきりで介抱してきたのです。さっそく、パーシのへやへいくことにしましょう、まちわびていますから。」

わたしたちが案内されたへやは、客間とおなじ階にあった。なかば居間、なかば寝室としてしつらえてあって、すみずみには、花がきれいにかざられている。顔色のわるい、やつれた青年が、窓のそばのソファに横たわっており、青年のかたわらに、ひとりの若い女がすわっていたが、わたしたちがはいっていくと立ちあがった。ジョーゼフの妹アニーにちがいない。アニーは青年にたずねた。

「わたし、あっちへいっていましょうか、パーシ。」

青年はその手をとってひきとめ、わたしに心をこめてあいさつした。

「やあしばらく、ワトスンくん。口ひげをのばしておられるので、なかなか、きみだとわかりませんよ。ぼくのほうも、ちょっと見わけがつかないでしょう。こちらが、有名なお友だちのシャーロック・ホームズさんですね？」

わたしはホームズを手みじかに紹介して、いっしょに腰をおろした。ジョーゼフは、もういなかったが、妹は、病人に手をあずけたままのこっていた。すばらしい美人で、背がちょっと低く、ふとりぎみだが、オリーブ色の顔色が美しく、イタリアふうの大きな黒い目をもち、黒髪がゆたかである。そのあざやかないろつやにくらべて、病人のあお白い顔が、いっそうやつれて見えるのだった。

フェルプスは、ソファの上に身をおこしながらいった。

「おてまをとらせたくありませんから、すぐ本題にはいりましょう。ホームズさん、わたしは、成功の道をたどる幸福な人間でした。ところが、いざ結婚というまぎわに、わたしの将来をうちくだくおそろしい不運が、とつぜんふりかかってきたのです。

ワトスンくんからお聞きと思いますが、わたしは外務省にいて、おじにあたるホールダースト卿のひきたてで、いちはやく責任ある地位にのぼりました。おじがいまの内閣の外務大臣になってから、責任あるしごとをいくつかあたえられましたが、いずれもりっぱにやってのけたので、おじは、わたしの才能を信用するようになったのです。

十週間ばかりまえ、正確にいうと、五月二十三日のことですが、おじは役所の自分のへやにわたしをよんで、これまでのしごとぶりをほめてくれたうえで、またひとつ重要な任務をわたしにやってもらいたいともうしました。

そして、ひきだしから灰色の巻紙をとりだして、いいました。

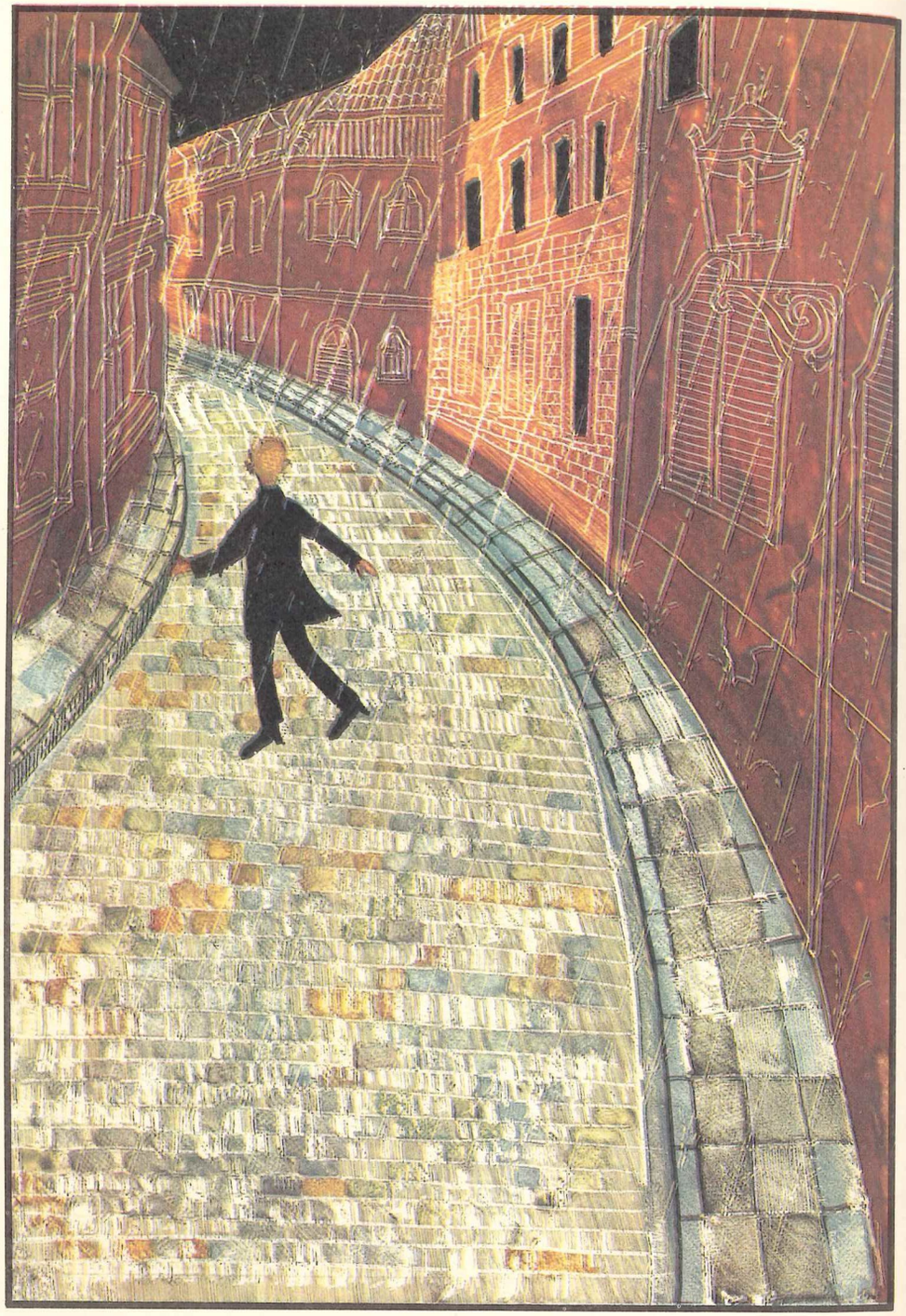
『これが、例のイタリアとの秘密条約の原本だが、こまったことに、これについてのうわさが、もう新聞にでてしまった。ひじょうに重要なものだから、これ以上外部にもれることがあってはならないのだ。フランスやロシアの大使館は、この文書の内容を知るためならば、たくさんの金をだすだろう。わたしの机からだすべき性質のものではないのだが、ぜひとも、うつしをとる必要がしょうじたのだ。自分のデスクにしまって、かぎをかけておきなさい。みながかえったあと、だれにも見られる心配なしに、ゆっくりとうつすがよい。うつしおえたならば、原本とうつしとの両方とも、ひきだしにいれてかぎをかけて、あすの朝、わたしに、じかに手わたしてもらいたい。』

わたしは書類をうけとって――。」

ホームズはいった。

「ちょっとまってください。その話のあいだ、あなたがたは、ふたりきりでしたか？」

「まったくふたりきりでした。」
ホームズは、目をとじていった。
「ありがとう、さきをどうぞ。」
「わたしはおじのさしずどおり、ほかの役人たちがかえってしまうのをまちました。わたしのへやのチャールズ・ゴローという男が、ひとり、しごとののこりをやっていましたので、わたしはゴローをのこして食事にでかけました。わたしがもどったときには、ゴローは、もう、いませんでした。わたしは、しごとをいそいでいました。というのは、あのジョーゼフ、あなた方がいまおあいになったハリスンが、ロンドンにきていて、十一時の汽車でウォーキングへかえるはずでしたから、できればその汽車にのりたかったのです。
さて、その条約に目をとおしますと、なるほど重要なもので、おじのことばがけっしておおげさでなかったことが、すぐわかりました。くわしいことはもうしあげませんが、あつかわれていることがらは、まったく海軍問題にかぎられています。さいごには、この条約を締結した高官たちの署名が、ちゃんとあります。わたしは、ひととおり目をとおすと、うつすしごとにかかりました。
二十六か条からなるながい文書で、フランス語で書かれています。階段のちゅうとに、小さなおどり場があり、ここに、もうひとつの通路が直角についています。この第二の通路は、すこしいくと、小さな階段になり、使用人用の裏口にでます。
ここがいちばんたいせつなところですから、どうかご注意ねがいます。わたしが階段をおりて、ろうかへきてみますと、小使いは、へやでぐっすり眠りこんでおり、アルコール・ランプにかけたやかんがグラグラ煮えたって、湯が、床の上にふきこぼれているんです。手をのべて、まだ眠りこけている小使いをゆりおこそうとしたとたん、その頭の上のベルが大きな音をたてて鳴り、小使いは、びっくりして目をさましました。
『やかんをかけたまま寝こんでしまいましたんで。』
まだ鳴っているベルを見あげましたが、その顔には、いちだんとつよいおどろきのいろがあらわれました。
『あなたはここにいらっしゃるのに、だれがベルをお鳴らしになったんでしょうか?』
『ベルだって! いったい、なんのベルだね?』
『あなたがしごとをしておられましたへやのベルです。』
わたしは、つめたい手で心臓をぴたりとにぎりしめられたようす気がしました。してみると、たいせつな文書が机の上においてあるあのへやに、だれか、いるのだ。わたしは気ちがいのように階段をかけあがり、ろうかを走りました。ろうかには、だれもいませんでした、ホームズさん。へやのなかにもいません。すべてわたしがでたときのままで、ただ、わたしにあずけられたあの文書だけが、おいてあった机の上からもちさられているのです。うつしはありましたが、原本はきえてしまいました。」
ホームズはきちんとすわりなおして、両手をこすりあわせた。この問題が、すっかり心にかなったようすである。
「で、それからどうしました?」
「そのしゅんかん、どろぼうは、裏口から階段をのぼってきたにちがいないとかんじました。べつの通路からきたのなら、むろん、わたしがでくわしているはずです。
小使いは、わたしのあおい顔色から、なにかおそろしいことがあるのだとさっして、二階までついてきていました。そこで、わたしたちはろうかを走り、チャールズ街へでるきゅうな階段をかけおりました。裏口のドアはしまっていましたが、かぎはかかっていません。それをおしあけて、とびだしました。ちょうどそのとき、近くの教会の鐘が三つなったのいました。できるだけいそいだのですが、九時になってもまだ九か条しかうつせず、とても思った汽車にはのれそうもありません。食事をしたのと、まる一日のしごとのつかれとで、眠たくもあり、頭がぼんやりしてきました。コーヒーでも飲んだら、はっきりするかもしれません。小使いがひとり、階段の下の小さなへやに当直していて、いのこってしごとする役人が命ずれば、コーヒーをいれてくれることになっています。そこで、わたしはベルを鳴らして、小使いをよびました。
おもいがけないことに、ベルにおうじてあらわれたのは、女でした。大がらな、下品な顔つきの年とった女で、エプロンをかけています。小使いの妻で雑役をやっている、ともうしますので、とにかくコーヒーを命じました。
それから二か条うつしたのですが、まだ、コーヒーがこないので、どうしてこんなにおそいのだろうと、ふしぎになりました。見てこようと思って、ドアをあけ、ろうかを階段のほうへ歩いていったのです。わたしのしごとをしていたへやからまっすぐに、うす暗いあかりのついたろうかがあり、ただひとつの出入り口になっています。それが、まがった階段につづき、おりきったところに、小使いのへやがあるので



を、はっきりおぼえています。十時十五分まえでした。」

「それは、たいへん重要なことです。」

そういって、ホームズは、シャツのカフスに、なにか書きとめた。

「まっ暗な晩で、あたたかい、まばらな雨がふっていました。チャールズ街には人影ひとつありませんでしたが、ずっとむこうのホワイトホール街は、いつものように、にぎやかでした。わたしたちが、通りをかけていくと、むこうの街かどに警官がひとり立っているのが見えます。わたしは、息をきらしながらいいました。

『盗難があったんです。たいへん貴重な書類が、外務省からぬすまれました。だれか、ここをとおらなかったですか？』

『十五分もここに立っておりますが、そのあいだ、たったひとりとおっただけです。背の高い、年かさの女で、ショールをしてましたよ。』

小使いがさけびました。

『ああ、そりゃ、わたしの家内ですよ。じゃ、どろぼうは、あっちへいったにちがいありませんよ。』

そして、わたしのそでをひっぱるのです。しかし、わたしはふにおちませんし、わたしをひっぱっていこうなどとするので、ますますあやしく思えてきました。わたしも大声になりました。

『その女は、どっちへいったのですか？』

『知りません。とおるのは気がつきましたが、とくべつ注意して見る理由はないのですから。いそいではいたようです。』

『どのくらいまえですか？』

『五分とはたっていません。』

小使いはせきたてます。

『時間をむだになさるだけですよ。一刻もぐずぐずできませんのに、わたしのいうことを信じてください。うちの家内は、なんにも関係ございません。それより、反対のほうへいってみましょう。おいやなら、わたしがまいります。』

そういって、小使いは反対の方角へかけだしました。

わたしもすぐおいかけて、そでをとらえました。

『きみは、どこに住んでいるのか？』

『ブリクストン、アイビー小路一六番地です。でも、かんちがいなさっちゃいけませんよ、フェルプスさん。あちらの通りへでてみましょう。なにか聞きだせるかもしれませんから。』

小使いの意見にしたがっても、とくに損するわけじゃあり

ません。警官もいっしょになって、いそいでいきましたが、いっぱいの人どおりです。なにしろ、こんな雨ふりの晩ですから、ただもう、屋根の下にたどりつきたいいっしんで、だれがとおったか、ながめていておしえてくれるような、のんきな散歩者はおりません。

それから、わたしたちは役所へもどって、階段やろうかをさがしましたが、むだでした。事務室の前のろうかには、クリーム色のリノリウムが敷いてあって、足あとがつけば、すぐわかるのです。ねっしんにしらべてみましたが、足あとらしいものは見つかりませんでした。」

「その晩は、ずっとふっていたんですか？」

「七時ごろから、ずっとです。」

「とすると、九時ごろへやにはいってきた女が、泥靴のあとをのこしていないのは、どういうわけでしょう？」

「そこが、もうしあげたいところなんです。わたしも、そのとき、それに気がつきました。雑役婦たちは小使い室で靴をぬいで、スリッパをはく習慣になっているのです。」

「よくわかりました。それで、雨の晩なのに、足あとがのこらなかったわけですね。こうしたできごとのつながりは、たしかに、ひじょうに興味があります。それからどうされましたか？」

「へやのなかもしらべました。ひみつのドアなど、あるはずはないし、窓は、地面から九メートルもあります。その窓は二つとも、なかから戸じまりがしてありました。じゅうたんが敷いてあって、おとし戸などのある気づかいはないし、天じょうは、ふつうのしっくいぬりです。書類をぬすんだやつが、ドアからはいったにちがいないことは、いのちをかけてもいいです。

ベルのひもは、わたしの机のすぐ右てに、上の針金からさがっています。ベルを鳴らしたやつは、まっすぐ机のところへやってきて、鳴らしたものにちがいありません。だけど、いったい、どろぼうがベルなぞ鳴らしたがるものでしょうか？　ここが、いくら考えてもわからないなぞなんです。」

「たしかに、このてんはふしぎですね。で、つぎにどうなさいました？　侵入者がなにかあとをのこしていなかったか、しらべたのでしょうね。葉巻のしっぽだとか、手ぶくろのかたほうだとか、ヘヤピンだとか、そういったもの――。」

「そうしたものは、なにもありませんでした。」

「においなんかも？」

「さあ、そこまでは気がつかなかったんです。」

「ううん、こうした調査には、たばこのにおいなどが、たいへん役にたつんですがねえ。」

「わたし自身、たばこをすいませんから、もしそのにおいがあったのなら、気がついたと思います。とにかく、手がかりになるようなものは、ぜんぜんありませんでした。明白な事実は、ただひとつ、小使いの女房がいそいでていったということだけです。小使いにたずねても、いつも家にかえる時間だというじょうのもうしひらきはできません。警官とわたしとは、あの女が書類をもっていると仮定して、それを処分してしまうまえにとらえるのが、最上の策だろう、ということに意見がいっちしました。

そうするうちに、ことの知らせが警視庁にとどき、刑事のフォーブズという人がかけつけてきて、大馬力で捜査にかかりました。わたしたちは辻馬車をやとって、三十分ばかりで小使いの家につきました。ドアをあけたのは若い女で、長女ということでした。母親はまだかえっておらず、わたしたちはおもてのへやにとおされて、かえりをまちました。

十分ばかりして、ドアをノックする音が聞こえましたが、ここのところで、わたしたちは、重大な失策をしでかしてしまいました。自分たちでドアをあければよかったのに、むすめをいかせたのです。

『おかあさん、男の人がふたり家にきて、おかあさんにあいたいってまってますよ。』

むすめのいうのが聞こえ、それからすぐ、パタパタとろうかを走っていく足音がしました。フォーブズはドアをおしあけ、わたしたちふたりは裏の台所にかけこみましたが、女はさきにきています。女はけんか腰でにらみつけましたが、ふとわたしをみとめると、びっくりした表情が顔にうかびました。

『まあ、お役所の、フェルプスさまじゃありませんか！』

刑事がたずねます。

『おいおい、おれたちをだれだと思ってにげだしたんだな。』

女はいいます。

『取りたて人かと思ったんですよ。商人とごたごたをおこしましたもんですから。』

刑事はこたえました。

『そんなことといっても通用せんぞ。おまえが外務省から重要な書類をもちだしたにちがいない。そして、それを始末しにここへかけこんだんだろう。身がらをしらべるから、警視庁までてきてもらおう。』

女はいいあらそいましたが、むだでした。辻馬車がよばれ、三人で、それにのってひきあげました。そのまえに台所を、とくに、わたしたちがとびこむまでに書類を処分しはしなかったかと、かまどを、しらべました。しかし、灰も紙きれも見あたりません。警視庁へつくとすぐ、女は婦人検査官の手にわたされました。わたしは、どうなることかと気をもみながら、検査官の報告をまちました。書類は見つからなかったのです。

そのときはじめて、自分の立場のおそろしさが、ひしひしと身にせまってきました。それまでは、ずっとうごきまわっていたおかげで、頭のはたらきがとまっていたのです。

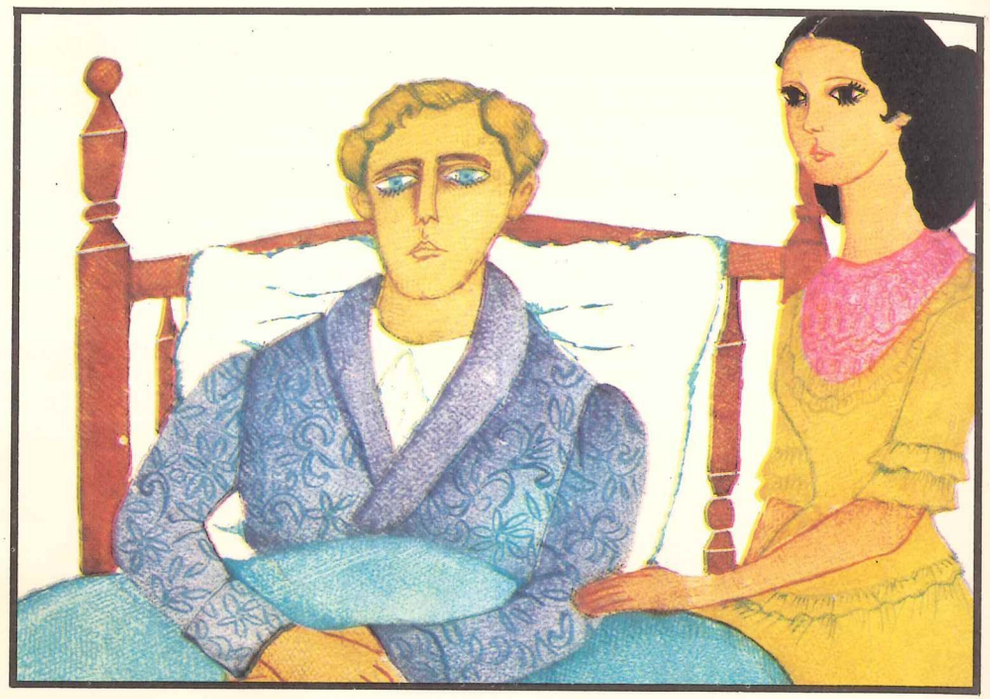
おそろしい立場でした！

ワトスンくんは知っていますが、わたしは、学校で、神経質な、かんじやすい子どもでした。わたしは、おじのこと、その同僚の大臣たちのことを考え、おじにおよぼした不名誉を思いました。わたしがこうなったのは、さけられない事件によるものだったからといって、それがなんでしょう。ことが外交上の利害にかかわるばあい、事故だからといって、いささかもゆるされる余地はないのです。身の破めつです。

それからは、どうしたか、まったく知りません。大さわぎをやったような気がします。何人かの役人がわたしをとりまいて、なぐさめようとしてくれたのを、ぼんやりおぼえています。そのなかのひとりが、ウォータールー駅まで車でおくってくれ、ウォーキングいきの汽車にのせてくれました。この近所に住むフェリア博士が、ちょうどその汽車にのりあわせておられ、とてもしんせつにめんどうをみてくださいましたが、これは、じつにありがたいことでした。わたしは駅で発作をおこし、家にかえりつくころには、まったくのところ、手のつけられない狂人になって、あばれていました。

家の者たちが、フェリア先生のベルで目をさまして、わたしのこんなありさまを見たときのさわぎをご想像ください。このアニーや母などは、すっかり悲しみにくれてしまいました。フェリア先生は、駅で刑事からいくらか話を聞いておられたので、事件のあらましを説明されましたが、それでどうなるというものでもありません。わたしがながく寝こみそうなことは、だれの目にもあきらかでしたから、ジョーゼフは、この気持ちのいい寝室からおいだされ、そのあとが、わたしの病室になりました。

そしてこのとおり、九週間以上も、意識不明で脳炎のためにうわごとをいいながら、寝たっきりでした。このアニーが



いなかったら、そして先生の手当てがなかったら、こうしてあなたにお話しすることもできなかったでしょう。昼間は、アニーがついていてくれましたし、夜は、やとい看護婦がめんどうをみてくれました。気ちがいじみた発作がおきると、じっさいなにをしでかすか、わからなかったのです。意識は、すこしずつはっきりしてきましたが、記憶がすっかりもどったのは、ついこの三日ばかりのことです。

記憶なんか回復しなければよいのにと思うこともありますが、まずわたしがしたことは、事件うけもちのフォーブズ氏に電報をうつことでした。フォーブズ氏はここまでやってきてくれて、あらゆるてはつくしたが、なんの手がかりも見つからない、というのです。小使い夫婦をあらゆる角度からしらべてみたが、事件に光明をあたえるようなものは、でてこなかった。

そこで、警察のうたがいは、ゴローという若い男にかかりました。さきほどお話しした、あの晩、役所にいのこっていた男です。しかし事実からいって、わたしがしごとをはじめたのはゴローがかえったあとですし、とにかく、ゴローはぜんぜん関係のないことがわかり、捜査はゆきづまってしまいました。

ホームズさん、まったくさいごのたのみの綱として、あなたにおすがりするのです。あなたが力になってくださらなければ、わたしの名誉も地位も、永久にうしなわれてしまうのです。」

病人はながい物語につかれはてて、ぐったりとクッションの上にたおれ、看護のアニーがなにか気つけ薬を一ぱい飲ませた。ホームズは、頭をあおむけて目をとじ、だまってすわっている。知らない人には、無関心な態度とも見えるだろうが、これこそ、もっともはげしく精神を集中しているしるしだということが、わたしにはわかるのだった。

やっと、ホームズが口をひらいた。

「お話はたいへん明確でしたから、おたずねすることもほとんどありません。ですが、ただひとつ、きわめて重大な質問があります。このとくべつのしごとをすることについて、だれかに話されましたか？」

「いいえ、だれにも。」

「たとえば、このアニーさんにも？」

「もちろんです。命令をうけてから、しごとにかかるまでのあいだ、ウォーキングにかえってはいないのですから。」

「ご一家で、役所のなかの間取りなんかごぞんじの方がありますか？」

「それは、みんな知っています。案内して見せたことがありますから。」

「小使いについて、なにか知っておられることは？」

「ええ、もと兵隊だったということがいがいは。」

「なに連隊ですか？」

「あ、それは聞いています。近衛連隊です。」

「ありがとう。フォーブズからくわしいことを聞けるだろうと思います。警察というところは、つかいこなせるわけじゃないくせに、資料をあつめることは、じつにうまいですからね。バラの花は、なんてきれいなものだろう！」

ホームズは、あけはなたれた窓のところへいき、八重咲きバラのしなった茎を手にとった。ホームズが自然の事物によい関心などしめすのを、わたしは、それまで見たことがなかった。

フェルプスとアニーの顔には、がっかりしたいろが、ありありとうかんだ。ホームズは八重咲きバラを指にはさんだまま、ものおもいにおちいってしまう。それが数分とはつづかないうちに、アニーがとつぜん口をだした。

「ホームズさま、この事件のなぞをとく見こみがおありになりまして？」

ホームズは、はっとわれにかえったようにこたえた。

「ああ、事件ですか。そう、これは、たいへんむずかしく、複雑な事件です。とにかく、これから調査をはじめるつもりです。」

「なにか、手がかりはございまして？」

「お話のなかに七つばかりありましたが、よく吟味したうえでなければ、その価値については、なんともうしあげられません。」

「だれをうたがっていらっしゃいますの？」

「わたし自身です。」

「なんですって！」

「あまりに早く結論に到達したからです。」

「では、ロンドンへおかえりになって、結論をおたしかめになればよろしいわ。」

ホームズは、腰をあげながらいう。

「ごもっともなご注意です。ワトスンくん、それがいちばんいいようだ。フェルプスさん、見当ちがいの希望に胸をふくらませてはいけません。事件は、たいへんこみいったものですから。」

フェルプスは、いたいたしい声でいった。

「こんどお目にかかるまでに、また熱にやられるかもしれません。」

「なあに、あすまた、おなじ汽車でやってきます。どうも、あまりかんばしい報告はできそうにありませんが。」

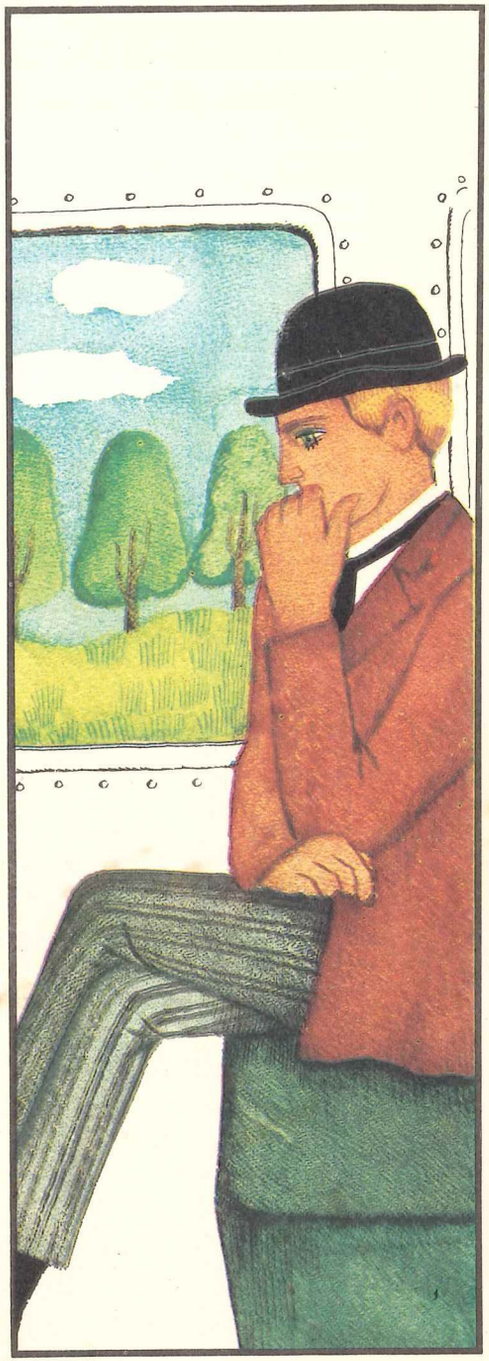
「お約束くださって、ほんとうにありがとう。なにかしてくださっていると知るだけで、生きかえる思いです。ところで、ホールダースト卿から手紙がきているのですが。」

「ほう、なんといってきましたか。」

「冷淡ですが、きびしくはありません。わたしの重病のせいで、そうきついこともいえなかったのだと思います。問題ははなはだ重大であるとくりかえし、わたしの健康が回復して、この事件のつぐないをしないかぎり、将来のことでめんどうはみてやれないとつけくわえています。これはむろん、免職を意味するのです。」

「そう、それは、道理にかなった、思いやりのあるお手紙ですよ。さあ、ワトスンくん、たっぷり一日ぶんのしごとが、ロンドンにまっている。」

ジョーゼフ・ハリスン氏が、馬車で駅までおくってくれ、わたしたちは、まもなくポーツマス線の車中にいた。ホーム



ズはふかい考えにしずみこんでしまい、クラパムののりかえ駅をすぎたころになって、やっと口をひらいた。

「かわいそうに、フェルプスは、じっさいたいへんな苦境におちこんでいるのだが、われわれの手ですくいあげてやれるかどうか、これは問題だよ。アニーのことをどう思うかね？」

「つよい性格のむすめだね。」

「うん、でも、ぼくの目にくるいがなければ、いい人間だよ。あのきょうだいは、北のほうのノーサンバランドあたりの鉄工場主の、ふたりきりの子どもだ。フェルプスがこの冬旅行したとき婚約ができて、アニーはフェルプスの家族と顔をあわせるために、兄につきそわれてやってきた。そこへこの大事件がふりかかったので、妹は恋人の看護のためにのこるし、兄のほうも、なかなか居心地がいいので、とまっている。さっきは、われわれだけで、ちょっとしたしらべをやったわけだ。だが、きょうは、まる一日捜査の日だぜ。」

「ぼくの本職のほうは、いま、一年じゅうでいちばん不景気なときだから、一日や二日は、どうにでもなる。」

「じゃ、いっしょにしらべよう。まず手はじめに、フォーブズにあうんだ。必要な事項をぜんぶ話してくれるだろうから、どっちから手をつけたらよいか、方針がたつと思う。」

「さっき、なにか手がかりがあるといったね。」

「そう、いくつもあるが、もっとよくしらべてからでないと、その値うちのほどはわからない。つきとめることがもっとも困難な犯罪は、無目的の犯罪だ。ところで、こいつは無目的ではない。これで得をする者は、だれだろうか？　フランス大使、ロシア大使、そのどっちかに書類を売りつけようという人間、それから、ホールダースト卿という人がいる。」

「ホールダースト卿だって！」

「うん、政治家が、ああいった文書がぐうぜんなくなってみると、かえってつごうがいいというような立場におかれることもある、ということは考えられるからね。」

「ホールダースト卿のような名誉ある経歴の政治家に、そんなことは考えられないが。」

「いや、これだってありうることで、見のがすわけにはいかない。きょう閣下にあって、なんというか話をきいてみよう。ところで、ぼくは、もう捜査にとりかかったんだぜ。」

「もうだって？」

「うん、ウォーキングの駅から、ロンドンじゅうの夕刊新聞に電報をうっておいた。この広告がどの夕刊にもでる。」

手帳から一まいやぶって、わたしに手わたした。それには、えんぴつで、つぎのように書きなぐってある。

『賞金十ポンド――五月二十三日夜十時十五分まえ、チャールズ街外務省玄関前、または付近で客をおろした馬車の番号。ベーカー街二二一番地Bへお知らせこう。』

「どろぼうは馬車できたと思うのかね？」

「へやにもろうかにもかくれ場所はない、というフェルプスくんのことばが正しければ、賊は、やはり、外からきたのでなければならない。あの雨の晩に、外からやってきて、リノリウムの床になんのぬれたあともこさなかったとすれば、馬車できたと考えるのが、きわめて自然じゃないか。」

「なるほど、もっともらしく聞こえる。」

「これが、ぼくのいう手がかりのひとつだ。ここから、なにかわかってくるかもしれない。つぎに、いうまでもないが、ベルの問題がある。これが、この事件のもっともめだったてんだ。ベルはなぜ鳴ったか？　どろぼうがこけおどしにやったのか？　それとも、だれかそのどろぼうといっしょにいた者が、犯罪をじゃまするために鳴らしたのか？　あるいは、ただのぐうぜんか？　それともまた――。」

ホームズは、ふたたび、さきほどまでのように、だまってじっと考えこんでしまった。

ロンドンについたのは、三時二十分だった。構内食堂で昼食をかきこみ、警視庁へいそいだ。ホームズから電報がうってあったので、フォーブズは、わたしたちをまちかまえていた。小がらで、ぬけめのなさそうな、どうみてもあいそのない顔つきをしていた。わたしたちにたいする態度は、まったくひややかで、ことに、用むきを聞いてからは、なおさらだった。

「あんたのやりくちのことは、まえから聞いています、ホームズさん。あんたときたら、警察が提供するだけの情報をぜんぶ利用して、それでもって事件を解決して、わたしらの顔をつぶすんですからねえ。」

「それどころか、ぼくが近年あつかった五十三の事件のうち、ぼくの名がでたのは四どきり、あとの四十九件は、みな警察の手がらになったんですよ。きみが知らないのを責めはしない。若いし、経験があさいんだから。しかし、この新しい職務で成功したかったら、ぼくを敵にまわしたりしないで、いっしょにしごとするんですな。」

刑事は、態度をあらためていった。

「なにかヒントをあたえてくださると、たいへんありがたいですが。いままでのところ、この事件で、手がらをたてるようなことはひとつもやっていないんです。」

「どんなてをうったんですか？」

「小使いのタンギーには、尾行がつけてあります。近衛連隊をやめるときに、りっぱな人物証明書をもらっているし、不利になるような材料は、まったく見つかりません。だが、細君のほうは、がらがわるいです。あんがい、もっとなにか知ってるだろうとにらんでいます。」

「尾行をつけた？」

「婦人警官をつけてあります。タンギーのおかみは、酒飲みなんで、飲んでいるときに二どばかり近よってみたが、なにも聞きだせなかったそうです。」

「あの家には、取りたて人がでいりしているようだが？」

「ええ、だが、金はきれいにはらいました。」

「その金は、どこからでたんだろうか？」

「そのてん、不審はありません。亭主の恩給の受取日がきたんです。たくわえなぞあるふうには、まったくみえません。」

「フェルプス氏がコーヒーをたのもうとベルを鳴らしたとき、あがっていったことについて、おかみは、なんともうしひらきをしていますか？」

「亭主がひどくつかれているので、休ませてやりたいと思った、といっています。」

「なるほど、ちょっとあとで、亭主がいすの上で眠っていたのと、話はあうな。おかみの性格が問題になるだけで、ほかに、あやしいてんはないわけだ。あの晩、おかみが、なぜいそいでかえったか、きいてみましたか？　いそいでいるのが、警官の目にもとまったようだが。」

「いつもよりおそかったので、早くかえりたかったんだそうです。」

「きみとフェルプス氏とが、すくなくとも二十分はあとからでたのに、おかみよりさきに家についたというてんを、指摘してやりましたか？」

「乗り合い馬車のほうが、辻馬車よりおそいからだろうといってます。」

「家にかえるなり裏の台所にかけこんだ理由を、ちゃんと説明しましたか？」

「取りたて人にはらう金がおいてあったのだといいます。」

「とにかく、なににでも、いちおうの返答はもっているわけだな。ほかには、どんなことをしています？」

「事務官のゴローに、この九週間ずっと尾行をつけましたが、なにもあがりません。この男に不利な証拠というものはないわけです。」

「あのベルが鳴ったことについて、なにかりくつがつきましたか？」

「しょうじきなところ、あれには、まったく降参です。だれだかしらんが、あんなふうに、わざわざ警報をはっするなんて、ずぶといやつですよ。」

「そう、奇妙なことをやったものだ。いろいろとおしえてもらって、ありがとう。犯人をわたすことができるようになったら、かならず知らせます。さあいこう、ワトスン。」

へやをでながら、わたしはたずねた。

「こんどは、どこへいくんだい？」

「現内閣の一員であり、未来の総理大臣たる、ホールダースト卿に面会をもうしこむのだ。」

さいわいにして、ホールダースト卿は、まだダウニング街の大臣室におり、ホームズとわたしは、すぐとおされた。大臣は、古風なていねいさでわたしたちをむかえ、だん炉の両がわにおかれたりっぱな安楽いすをすすめた。

卿は、背がすらりと高く、輪郭のはっきりした、思慮ぶか

そうな顔つきで、波うつ髪には、早くも白いものが見えており、いかにも貴族らしいかんじだった。卿は、ほほえみながらいった。

「ホームズさん、お名まえは、よくぞんじております。むろんのこと、おいでのご用むきは、わかっています。だれにたのまれてしらべておられるのでしょうか？」

「パーシ・フェルプス氏のご依頼です。」

「ああ、おいもかわいそうです。しんせきであるだけに、かばってやることが、かえってむずかしいのです。この事件は、あれの将来に、きわめて不利な効果をおよぼすでしょう。」

「しかし、文書が見つかりましたら？」

「そうなれば、むろん、話はちがってきます。」

「閣下、おたずねしたいことが二、三ございますが、よろしいでしょうか？」

「知っているかぎり、よろこんでおこたえしましょう。」

「うつしをとるために、条約文書をもちださせるご意向を、だれかにもらされましたか？」

「いいや、けっして。」

「それでは、閣下もおもらしにならず、フェルプス氏もそうだったのですから、ほかには、だれもこのことを知らぬわけで、賊があのへやにはいったのは、まったくのぐうぜんということになります。あれを見て、もっけのさいわいとばかりぬすんだのです。」

大臣は微笑をうかべた。

「そうなると、もう、わたしのはたけではありませんな。」

ホームズは、ちょっと考えこんだ。

「もうひとつ、ごいっしょにくらべたい重要なてんがあります。閣下は、条約の内容が知れたばあい、たいへんなことになると、心配しておられましたね？」

大臣の顔を、暗い影がよぎった。

「まさに、たいへんなことがおこります。」

「もう、それがおこっていますか？」

「まだ、おこっていません。」

「もしこの条約が、たとえばフランスかロシアかの外務省の手にわたりましたら、そのことについて、なにか情報がはいるとお思いですか？」

「はいると思います。」

「そうしますと、あれから十週間もたっているのに、お手もとになんの情報もないところからみて、条約は、なんらかの理由で、まだ先方にわたっていないと考えられますね。」

ホールダースト卿は、肩をすくめた。

「しかしホームズくん、盗賊が、額にいれてかかげるために条約をとったとは、考えられぬが。」

「たぶん、値がでるのをまっているのでしょう。」

「もうしばらくまつとすれば、まったく無価値になります。二、三か月後には、公開されることになっておるのだから。」

「それは、きわめてたいせつなてんです。では、閣下、貴重なお時間を、もうずいぶんおじゃまいたしましたから、これでおいとましたいとぞんじます。」

「犯人が何者であれ、捜査のご成功をいのってやみません。」

卿はこたえ、ドアのところであいさつして、わたしたちをおくりだした。

ホワイトホール街にでると、ホームズはいった。

「りっぱな人物だね。しかし、あれで、自分の地位をまもるのに、けんめいなんだ。ぜんぜん金持ちじゃないうえ、なにかと出費がおおい。きみもむろん気がついたろうが、靴の底がはりかえてあったよ。ところでワトスンくん、これで、もう、きみの本職にかえりたまえ。ぼくも、例の馬車の広告にへんじでもこないかぎり、きょうは、もう、することがない。だが、あすは、けさとおなじ汽車で、ウォーキングへいっしょにいってくれると、たいへんありがたいんだが。」

というわけで、よく朝ホームズとおちあって、ウォーキングへいった。広告にへんじもなかったし、ほかに新しい手がかりもでてこなかったという。ホームズという男は、そのつもりになると、アメリカ・インディアンのように、顔すじひとつうごかさぬ無表情になってしまうので、事件の現状にまんぞくしているのかいないのか、顔つきからは判断できなかった。フェルプスは、まだ、アニーの心をこめた看護をうけていたが、前日よりずっといいようにみえた。わたしたちがはいっていったときも、ソファから楽に身をおこしてあいさつし、ねっしんにたずねた。

「なにかわかりましたか？」

「わたしの報告は、やはり、かんばしいものじゃありません。フォーブズにあい、おじうえにもお目にかかりましたし、一つ二つ、なにかでてきそうな捜査のすじに、手をつけてはみたのですが。」

「じゃあ、あきらめてはいらっしゃいませんね？」

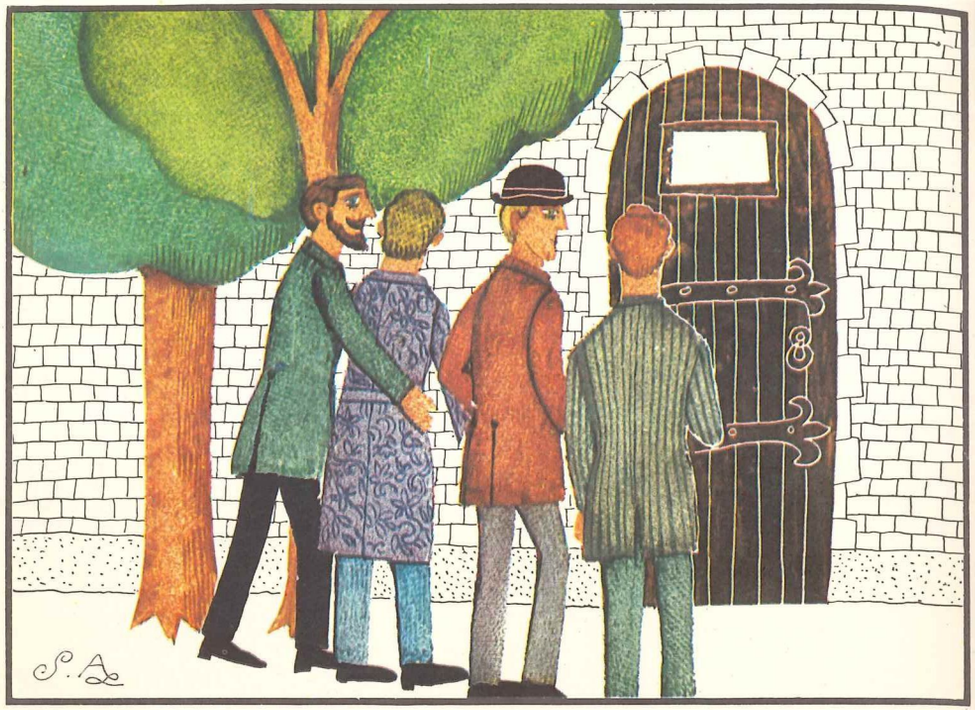
「けっして。」

アニーがさけんだ。

「うれしいわ、そういってくださると！　勇気と忍耐とをも

ってすすんでいけば、真実は、きっとわかってきますわ。」
ソファの上にすわりなおしながら、フェルプスがいった。
「あなたよりも、わたしのほうからお話ししたいことがたくさんあるんです。」
「なにかあるだろうと期待していました。」
「じつは、さく夜、またひと事件あったのですが、どうやら、重大な意味がありそうなんです。」
話しながら、かれの表情はしんけんになり、目には、恐怖に似たいろがあらわれた。
「わたしは知らないうちに、なにかおそろしい陰謀のなかにまきこまれているんじゃないか、名誉だけでなく、いのちまでもねらわれているんじゃないか、と思いはじめたのです。」
ホームズが声をあげた。
「ほう！」
「信じられないみたいです。この世に敵なんかもったおぼえはないんですから。でも、さく夜の経験からすると、ほかに考えようがありません。」
「どうぞ、話してください。」
「まず、さく夜はじめて付きそいなしに寝たのだということを、もうしあげておきましょう。だいぶよくなったので、ひとりでもだいじょうぶだと思ったのです。でも、あかりだけは、つけっぱなしておきました。さて、朝の二時ごろでしたか、うとうと眠っているとき、とつぜん、かすかな音で目がさめました。
すると、音はだんだん大きくなり、やがて、窓のあたりで、きゅうに、カチッと金属性のするどい音がします。わたしは、びっくりしておきなおりました。なんの音だか、もう、うたがう余地はありません。さいしょのかすかな音は、窓わくのすきまに、なにか道具をこじいれた音で、あとのは、かけ金のはずれた音です。
それから十分ばかり、わたしがもの音で目をさましたかどうか、うかがっているらしく、音はとだえていました。それから、窓をそうっとおしあげる、かすかなきしりが聞こえました。こうなると、もうがまんなりません。神経がたかぶっているときではありますし、ベッドからとびだして、よろい戸をあけはなちました。ひとりの男が、窓ぎわにうずくまっています。とぶようにしてにげていったので、どんな男かよく見えませんでした。マントのようなものに身をつつんで、それで、顔の下半分をかくしていました。ただひとつ、凶器を手にしていたこと、これだけはたしかです。長いナイフのようなものでした。にげようとしてふりむいたとき、きらりと光ったのが、はっきりと見えました。」
「たいへん興味あるお話です。で、それから、どうされましたか？」
「元気なからだだったら、ひらいた窓からとびだして、おいかけるんでした。しかし、なにしろこの状態なので、ベルを鳴らして家の者をおこしました。ベルは台所で鳴るのに、召使いたちは、みな二階に寝ていますから、ちょっとてまどります。そこで大きな声をだしますと、ジョーゼフがおりてきて、みなをおこしてくれました。ジョーゼフと馬丁とで、窓の外の花壇に足あとを見つけましたが、なにしろちかごろの日照りつづきですから、しばふまでいくと、足あとはわからなくなったそうです。しかし、道路ぞいの木のへいに一か所、だれかがのりこえようとして横木の上のほうをへしおったあとがある、といっています。まず、あなたのご意見をうかがってから、と思ったものですから、近くの警察には、まだなにも知らせてありません。」
依頼人のこの話は、シャーロック・ホームズに、なみなみならぬ効果をおよぼしたらしい。いすから立ちあがり、興奮をおさえきれぬまま、へやを歩きまわった。
「フェルプスさん、ぼくといっしょに、家のまわりを歩くことはできないでしょうか？」
「ええ、すこし日にあたりたいですから。ジョーゼフもきてくれるでしょう。」
アニーがいった。
「わたしもまいりますわ。」
ホームズは、頭をふっていう。
「ざんねんですが、あなたには、その場所にそのまますわっていていただきましょう。」
アニーは、不満のていで腰をおろした。しかし、兄のほうがくわわって、わたしたちは、四人いっしょにでかけた。しばふをまわって、フェルプスの窓の外へきた。話のとおり、花壇には、足あとがあるが、どうしようもないほどぼんやりしたものだ。ホームズは、そのうえにちょっとかがみこんだが、すぐ腰をのばして、肩をそびやかした。
「これじゃ、だれが見たって、役にはたちませんな。家をひとまわりして、どろぼうが、なぜ、とくにこのへやをえらんだのか、見るとしましょう。応接間や食堂の大きな窓のほうが、もっとどろぼうをひきつけそうなものだと思いますが。」
ジョーゼフがいった。

「そのほうが、道路からもよく見えますしね。」
「ああ、むろんそうです。ここに、どろぼうが目をつけそうなドアがありますね。なんのドアですか？」
「商人用の勝手口です。もちろん、夜はかぎをかけます。」
ホームズは両手をポケットにつっこみ、ふだんには見なれない、むとんじゃくなようすで、家のまわりをぶらぶら歩いていたが、やがて、ジョーゼフ・ハリスンにむかっていった。
「ところで、どろぼうがへいをよじのぼったあとを見つけられたそうですね。ちょっと見せていただけませんか？」
ジョーゼフは、へいの横木が一本上のほうがおれている場所へ案内した。小さな木のおれはしがぶらさがっている。ホームズはそれをむしりとって、たんねんにあらためた。
「これは、ゆうべおれたんでしょうか？　おれくちが、古いように見えませんか？」
「はあ、そうですね。」
「むこうがわへとびおりた形跡もありません。いや、ここでは、えるところもないようです。寝室へかえって、よく話しあいましょう。」
パーシ・フェルプスは、未来の義兄の腕にすがって、ゆっくりと歩いていく。ホームズは足速にしばふをつっきり、わたしたちは、あとのふたりよりずっと早く、寝室のあけはなたれた窓ぎわに立った。
ホームズは、しんけんな態度で、アニーに話しかけた。
「一日じゅう、そこにじっとしていてください。どんなことがあっても、一日じゅうそこをうごいちゃいけません。これは、きわめて重大なことなのです。」
むすめは、びっくりしながらこたえた。
「いいですわ、ホームズさん、たってとおっしゃるのなら。」
「おやすみにいらっしゃるときは、外からこのへやにかぎをかけて、そのかぎをもっていてください。お約束ねがいます。」
「でも、パーシは？」
「わたしたちと、ロンドンへいきます。」
「で、わたしはのこりますの？」
「あの人のためです。約束してください。」
かの女がしょうちのしるしにうなずいたとき、ちょうど、ふたりがやってきた。兄が声をかけた。
「アニー、どうして、そんなところにふさぎこんでるんだい？　日なたへでてこないか。」



「いえ、いいのよ、ジョーゼフ。ちょっと頭痛がするし、このへやはすずしくって、とても気持ちがいいんですもの。」
フェルプスがたずねた。
「さて、つぎはなにをしますか？　ホームズさん。」
「そう、この小事件に気をとられて、かんじんの捜査をわすれてはなりません。ロンドンへいっしょにきていただけると、たいへん助かるのですが。」
「よほど元気がでてきましたから、ほんとにお役にたつのなら。」
「それはもう、ひじょうに。」
「今晩は、あちらでとまることになるのでしょうね？」
「そうおねがいしようと思っていたところです。」
「すると、ゆうべのお客さんが、今晩またやってきても、えものはいないというわけですね。で、ジョーゼフも、わたしのつきそいに、きてもらったほうがいいでしょうね。」
「いやいや、ワトスンくんが、ごぞんじのとおり、医者ですから、あなたのことをみてくれます。ごめいわくでなければ、こちらで昼食をいただいて、それから、三人でロンドンへでかけましょう。」
すべてはホームズのさしずどおりにはこび、アニーも、い

いつけられたとおり、いいわけをこしらえて、寝室をはなれなかった。どんな目的で友人がこんな策略をするのか、わたしには見当もつかなかった。ところがホームズは、またまた、わたしたちをびっくりさせるのだった。というのは、停車場までいっしょにきて、ふたりを車内におくりこんでから、自分はウォーキングをはなれるつもりはないと、すました顔でいうのだ。

「ここをさるまえに、あきらかにしておきたいことが、こまかなてんで、二、三あるものですから。それには、フェルプスさん、あなたのいないことが、なかなか役にたつのです。ワトスンくん、ロンドンについたら、車で、この方をベーカー街へおつれして、ぼくがいくまで、いっしょにいてあげてくれたまえ。さいわい、古い学校友だちだから、話もたくさんあるだろう。フェルプスさんは、今晩予備の寝室をおつかいになるといい。ぼくは、朝八時にウォータールー着の汽車があるから、朝食にはまにあうと思うよ。」

フェルプスは、がっかりしていった。

「それじゃ、ロンドンでの捜査はどうなるんですか？」

「それは、あすでもできます。それより、いまここで、もっとさしせまったことがあるんです。」

汽車のなかで、フェルプスとわたしとは、いましがたのことについて話しあったが、ふたりとも、ホームズの行動について、なっとくのいく理由を考えだすことはできなかった。

「ゆうべのどろぼうについて、なにか手がかりを見つけようというんだろう。ぼくには、あれがふつうのものとりとは思えないが。」

「じゃ、なんだというんだね？」

「きみは神経がたっているせいにするかもしれないが、ぼくは、ほんとうに、自分のまわりに重大な政治的陰謀がくわだてられていて、なにかわからない理由で、いのちをつけねらわれていると信じているんだ。事実を考えてみてくれたまえ。なんだって、ただのどろぼうが、なにもぬすめそうにない寝室の窓からおしいろうなどとするのだろうか？　それも、長いナイフなんかもって。」

「ホームズもおなじ意見ならば、いまの行動の説明がつくわけだね。きみの推定が正しいとして、ゆうべきみをおそった男をホームズがとらえるとすれば、それで、もう、海軍条約をぬすんだやつがわかったようなものだ。ぬすんだやつときみをねらったやつは、おなじにちがいない。とにかく、ホームズとはずいぶんながいつきあいだが、あの男がちゃんとした理由なしに行動するようなことは、いちどもなかったよ。」

わたしはいい、それっきり、話題はほかのことにうつっていった。しかし、わたしにとっては、ほんとうにうんざりする一日だった。フェルプスはながいわずらいのあとで、まだ衰弱しており、うちつづく災難に、ぐちっぽく、気むずかしくなっていた。

いろいろな話題をもちだして、フェルプスの気をそらせようとしてみたのだが、どうにもならない。すぐまた、紛失した条約に話をもどして、ホームズはなにをやっているのだろう、ホールダースト卿は、どんなてをうっているだろう、あすの朝は、どんな報告が聞けるだろう、などと、しきりに気をもんだりするのだ。夜がふけるにつれて、フェルプスの興奮は、いたましいばかりになった。

「フェルプスくん。ぼくたちが、いくらやきもきしたって、事件解決のたしにはならないんだから、どうだ、もう寝ることにしては。あすはなにがやってくるか知らないが、気持ちを新しくしてむかえようじゃないか。」

わたしは、やっとのことで、友人を忠告にしたがわせはしたものの、なにしろ、あの興奮状態では、とても眠れはすまいとわかっていた。

じっさい、フェルプスの気分がうつって、わたしも、ほとんど夜どおし寝がえりをうちつづけながら、このふしぎな事件に思いをめぐらした。

なぜ、ホームズはウォーキングにのこったか？　なぜアニーに、終日病室にいてくれとたのんだのか？　わたしは頭をしぼりつづけるうちに、眠りこんでしまった。

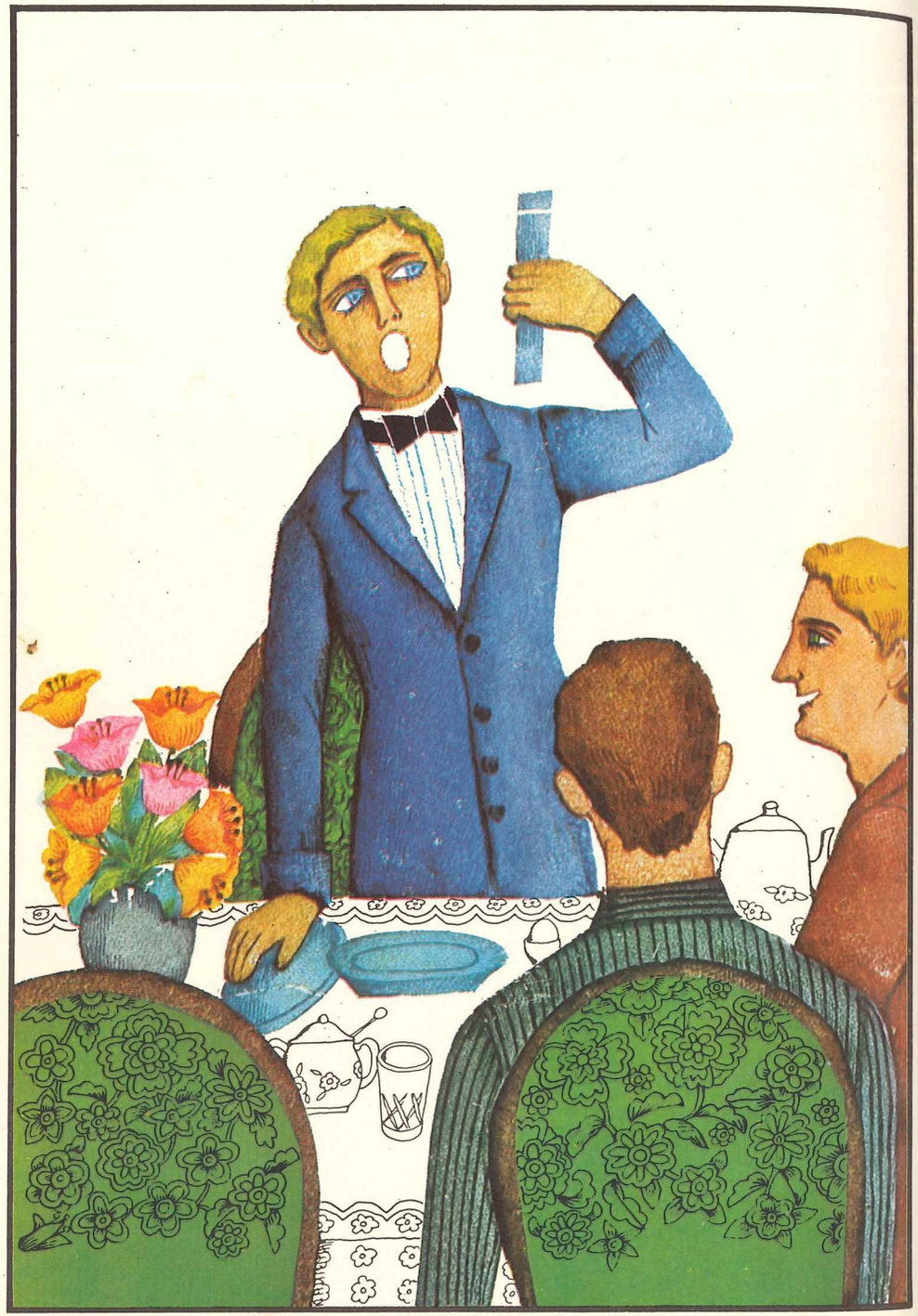
目をさますと七時で、すぐさまフェルプスのへやへいってみたが、眠られなかったらしく、つかれきって、やつれた顔をしていた。フェルプスのさいしょの質問は、ホームズはもうかえったか、というのであった。

「約束の時間にかえってくるよ。それより早くも、おそくもない。」

わたしのことばにまちがいはなく、八時ちょっとすぎに、一台の辻馬車が、いきおいよく玄関にのりつけ、なかからホームズがでてきた。ふたりで窓から見ていたのだが、左手にほうたいをまき、あおざめた、おそろしい顔をしている。家へはいってきたが、二階へあがってくるまで、すこしひまがかかった。

フェルプスが声をだした。

「やられてきた人間の顔つきだね。」



わたしも、反対するわけにはいかなかった。
「けっきょく、事件の手がかりは、ロンドンということらしい。」
フェルプスはうなった。
「どういうことだか知らないが、ぼくは、ホームズさんのかえりに期待をかけすぎていたようだ。それにしても、きのうは、あんなほうたいなんかしていなかった。いったい、どうしたのかな？」
へやへはいってきた友に、わたしはたずねた。
「けがをしたのじゃないのか、ホームズ？」
ホームズは、お早うというしるしに、うなずきながらこたえた。
「なあに、ほんのかすり傷さ、ちょいとへまをやったんでね。」
わたしがいった。
「そのほうたいで、冒険のほどはわかる。なにがあったんだか、話してくれないか。」
「朝食のあとにしよう、ワトスンくん。馬車の広告に、へんじはきてないだろうな。いや、けっこう、そういつも、うまくいくわけのもんじゃない。」
食卓の用意はできており、わたしがベルを鳴らそうとしたところへ、家政婦のハドスンさんが、紅茶とコーヒーとをもってはいってきた。しばらくして、ハドスンさんが食器をならべたので、わたしたちはテーブルにつき、ホームズはがつがつ食い、わたしは好奇心をかきたてられ、フェルプスはといえば、このうえなく陰気にふさぎこんでいる。
ホームズは、チキンカレーのふたをとりながらいう。
「ハドスンさんは、なかなか気がきくね。料理の種類はかぎられているが、朝食のこんだてにかけちゃ、スコットランドの女に負けない。あなたはなんにします、フェルプスさん？　チキンカレーですか？　たまごですか？　それとも、自分でおとりになりますか？」
「ありがとう、なにもほしくないんです。」
「おやおや！　その皿のものだけでもどうです？」
「ありがとう。でも、ほんとにほしくないんです。」
ホームズは、いたずらっぽい目つきでいった。
「それでは、ぼくがちょうだいしてもかまいませんね？」
フェルプスはふたをとったが、そのとたんに「あっ、」とさけんで、目の前の皿の色にもおとらぬ、まっさおな顔で、じっと見いっている。皿のまんなかに、灰色の小さな紙筒が

はいっているのだ。フェルプスはそれをつかんで、むさぼるようにながめていたが、やがて胸におしあてると、うれしさのあまり、とてつもない声をあげながら、くるったようにへやのなかをおどり歩いた。それから、感動のあまり、ぐったりとなって、ひじかけいすにたおれこんだ。わたしたちは、気絶されてはたいへんと、ブランデーをながしこんでやらねばならぬしまつだった。ホームズは、肩をかるくたたいて、おちつかせながらいった。

「やぶからぼうにもちだして、どうもわるいことをしました。だが、ワストンくんはよく知っていますが、わたしはいつも、ちょっとばかり芝居がからずにはいられないのです。」

フェルプスは、その手をとってキスした。

「あなたに神のめぐみがありますように！　あなたは、わたしの名誉をすくってくださった。」

「いや、わたしの名誉もあやういところでしたよ。あなたも職務じょうでへまをやるのは、いやでしょうが、わたしだって、捜査に失敗するのは、ほんとうにいやですからね。」

フェルプスは、貴重な書類を、上着の内ポケットの奥ふかくしまいこんだ。

「これ以上お食事のじゃまをしたくありませんが、これを、どこから、どうやってとりもどされたのか、聞きたくてしようがないんです。」

シャーロック・ホームズは、コーヒーを飲みほしてから、ハム・エッグズにむかった。それから立ちあがって、パイプに火をつけ、自分のいすに腰をすえる。

「まず、ぼくがなにをやったか、つぎに、どうしたわけでそうすることになったか、について話しましょう。駅でおわかれしてから、美しいけしきのなかを、じつに気持ちよく歩いて、リプレーという、小さい村につき、そこの茶店でお茶を飲み、それから、水筒に飲みものをつめ、サンドイッチをひとつつみポケットにいれ、用意をととのえました。夕方になるのをまって、ウォーキングへでかけ、日暮れになるすぐまえ、ブライアブレーの外をとおる街道まできたのです。

それから、人どおりがなくなるまでまって、へいをのりこえて、やしきうちにはいりました。」

フェルプスが、ふいに口をいれる。

「まだ、門はあいていたでしょうに。」

「ええ。でもぼくは、こういったことに、とくに趣味があるのでね。モミの木が三本はえているところをえらんで、そのかげにかくれてのりこえたので、家のなかのだれからも見られる心配はなかったわけです。それから庭のしげみのなかにかがみこんで、そのしげみのひとつからまたひとつへと、はうようにしてすすみ、やっとのことで、あなたの寝室の窓のまむかいの、シャクナゲのしげみにたどりつきました。そこにうずくまって、ことがおこるのをまったのです。

よろい戸がおりていないので、アニーさんがテーブルのそばで本を読んでいるのが見えます。十時十五分になると、本をとじ、よろい戸をしめて、寝にいきました。ドアをしめる音が聞こえましたし、じょうまえにかぎをかけたのが、たしかにわかりました。」

フェルプスが、また声をあげた。

「かぎですって？」

「そうです。寝にいくとき、外からかぎをかけて、かぎをもっていってください、とたのんでおいたのです。アニーさんは、ぼくのさしずを、いちいち正確に実行してくれたのですが、あの人の協力がなかったら、書類は、あなたの上着のポケットにもどらなかったかもしれない。さて、アニーさんは立ちさり、あかりはきえて、ぼくがシャクナゲのしげみに身をひそめているだけとなりました。

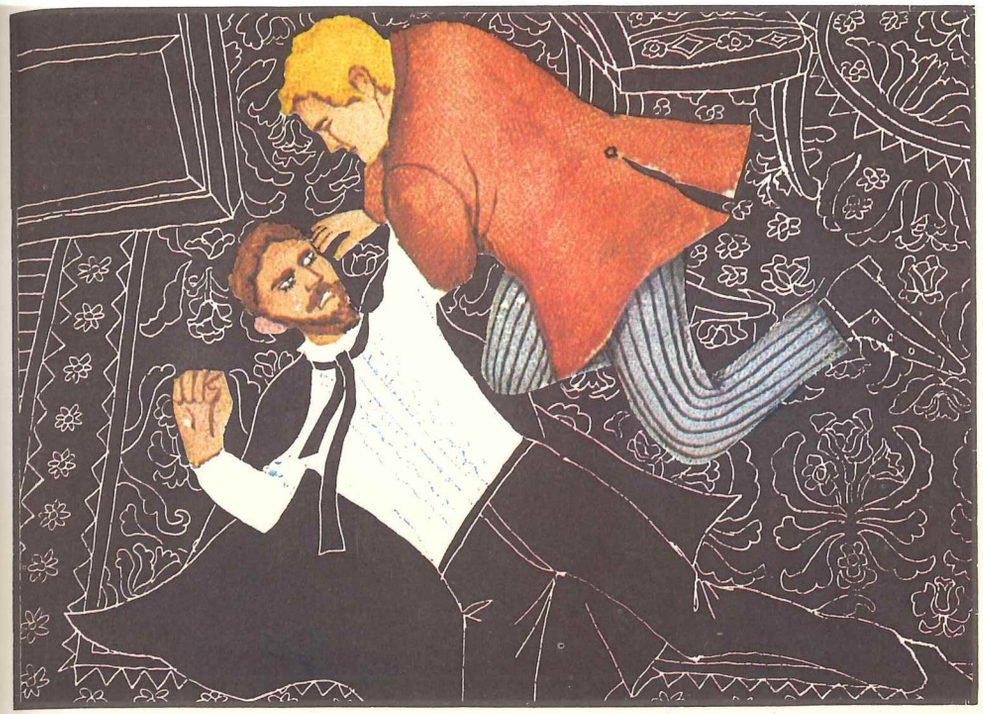
いい夜だったが、やっぱり、寝ずの番はいやでしたね。むろん、狩猟家が水路のわきにひそんで、大きなえものをまつときに味わうような、一種の興奮はありました。しかし、なにがいことは、ながかった。

ワトスンくん、『まだらのひも』というけちな事件をしらべたとき、あのぶきみなへやのなかで、ふたりしてまったろう。まあ、あれにおとらぬながさかげんだ。ウォーキングの教会の時計が十五分おきにうつのだが、いちどならず、時計がとまったんじゃないかと思ったくらいだった。だが、ついに、朝の二時ごろ、かけ金をそうっとはずす音がとつぜん聞こえ、それから、かぎをまわす音がしました。すぐ召使い用のドアがあいて、ジョーゼフ・ハリスン氏が、月光のなかへあゆみでたのでした。」

フェルプスがさけんだ。

「ジョーゼフが！」

「帽子はかぶっていないが、黒いマントを肩にひっかけて、いざというときには、いつでも顔をかくせるようにしています。壁のかげをつたって、ぬき足さし足、窓までやってくると、刃の長いナイフを窓わくにさしこんで、かけ金をはずした。それから窓をひらき、よろい戸のすきにナイフをいれて、さんをつきあげると、これも、さっとひらいた。



ぼくのいる場所からは、へやのなかのようすやジョーゼフの動作が、手にとるように見えたのです。ジョーゼフは炉棚の上の二本のろうそくに火をつけると、ドアのそばの、じゅうたんのすみをめくりあげた。すぐさまかがみこんで、鉛管工がガス管のつぎめをいじれるようにこしらえてある四角な板をはずす。このかくし場所から、その小さな紙筒をとりだすと、ふたをしめ、じゅうたんをなおし、ろうそくをふきけして、窓の外でまっているぼくの腕のなかへ、まっすぐとびこんできたのです。

思ったよりもたちの悪い人でしたよ、このジョーゼフ先生は。ナイフをふるってとびかかってきたので、二どばかりなぐりたおしてやらなきゃならなかったし、こっちも指の関節をやられたりして、ようやくとりおさえた。格闘がおわっても、目で、『殺してやる』といわんばかりだったが、道理はききわけてくれて、書類をよこしたのです。書類をもらったので、本人ははなしてやったのだが、けさ、フォーブズに電報をうって、ことのしだいをくわしく知らせておいたわけです。手ばやくつかまえれば、大できというところですがね。しかしながら、ぼくの思うのでは、いってみたらもぬけのからというようなことだろうが、まあ、そのほうが、政府にも

好つごうなわけだ。ホールダースト卿にしても、パーシ・フェルプス氏にしても、事件が警察ざたにならないほうがいいのではないだろうか。」

フェルプスは、あえぐようにいった。

「なんてことだ！　死ぬような思いをしたこの十週間のながいあいだ、ぬすまれた書類が、ずっと自分のへやにあったとは！」

「じじつ、そのとおり。」

「しかもジョーゼフが！　ジョーゼフが悪党で、どろぼうだなんて！」

「そう、ジョーゼフは、見かけによらず、悪がしこい危険な人物ですよ。けさ本人に聞いたところからさっするに、株に手などだして、ひどく損をしたので、得になることなら、なんでもやる気になっているのです。まったく自分のことしか考えない男で、いいチャンスとばかり、もう妹の幸福も、あなたの名誉も、まるでかえりみなかったのです。」

パーシ・フェルプスは、いすのなかにぐったりしずみこんだ。

「頭がぐらぐらする。お話を聞いて、気がとおくなりました。」

ホームズは、教訓をたれるような態度でいった。

「あなたの事件のおもな難点は、証拠がありすぎたということなのです。かんじんなものが、無関係なもののかげになって、かくされてしまっていました。あたえられたおおくの事実のなかから、本質的と思われるものをぬきだし、それを正しくつなぎあわせて、できごとのおどろくべきつながりをくみたてなおすことが必要でした。

あの晩あなたが、ハリスンといっしょにかえるつもりだったと聞いたときから、わたしはもう、ジョーゼフをうたがいはじめたわけだった。というのは、ハリスンは外務省のかっても知っているのだし、かえりがけにあなたをさそいによるということは、じゅうぶん考えられますからね。

あなたが医者につれられてかえったので、ジョーゼフがあのへやをおいだされた、というお話でしたから、ジョーゼフよりほかに、ものをかくす人間などありえないあの寝室に、何者かがはいりこもうとくわだてた、と聞いたとき、ぼくのうたがいは、確信にかわりました。とりわけ、看護の人がいなくなったさいしょの晩に、このくわだてがなされたということは、侵入者が、家の事情にあかるいものであることを証明しています。」

「ぼくは、なんてめくらだったんだろう？」

「この事件のしだいは、ぼくのわりだしたところでは、つぎのようになるのです。ジョーゼフ・ハリスンは、チャールズ街の口から役所にはいり、かってを知っているから、まっすぐあなたのへやにいったが、それは、あなたのでたすぐあとだった。だれもいないので、すぐベルを鳴らすが、そのしゅんかん、机の上の書類が目にとまる。

ひと目見て、たいへん価値のある国家の文書が、ぐうぜん目の前におかれてあると知り、ただちに、それをポケットにいれて立ちさる。おぼえておられるとおり、寝ぼけた小使いが、ベルのことであなたに注意をうながすまで、二、三分たっており、これが、どろぼうに、にげるのに必要な時間をあたえたわけです。

それからすぐ、つぎの汽車でウォーキングへかえり、えものをあらためてみると、じじつ、大きな価値のものだとわかったので、きわめて安全と思われる場所にかくしておき、一両日ちゅうにまたとりだして、フランス大使館なりどこなり、たかい値で買いそうなところへもちこもうと考えます。そこへ、とつぜんあなたがかえってくる。すぐに、自分のへやをおいたてられ、それからというものは、いつでも、あのへやには、すくなくともふたりの人がいて、宝物をとりだすすきがありません。ジョーゼフには、気もくるわんばかりの状況だったにちがいない。だが、ついに、機会はきたと考えます。しのびこもうとするが、あなたがよく眠っていなかったおかげで、失敗します。あの晩、いつもの薬を飲まなかったのをおぼえているでしょう。」

「おぼえています。」

「薬はよくきくようにしておいたのだろうと思われるのですが、それで、あなたはよく眠っていることと安心しきっていたのでしょう。もちろん、だめだとみれば、なんどでもやるだろうことはあきらかです。あなたがへやをあけたので、まっていたチャンスがきたのでした。そこで、アニーさんに、一日じゅうあのへやにいてもらって、せんてをうたれないようにしたのです。

それから、もうじゃまはなくなったと思わせておいて、さっきお話ししたようなぐあいに、わたしがあみをはっていたわけです。書類が、おそらくあのへやにあることは、もうわかっていましたが、床板や羽目板をすっかりはいだりしてさがす気はなかった。だから、本人にかくし場所からとりださせて、おおいにてまをはぶきました。なにか、まだ、お話しすることがありますか？」

わたしが、たずねた。

「さいしょのとき、どうして、窓からはいろうとしたんだろう？　ドアからでもはいれただろうに。」

「ドアへくるまでに、七つも寝室の前をとおってこなくちゃならない。いっぽう、しばふの上へとびおりるのは、わけないからね。ほかになにか？」

フェルプスがたずねた。

「わたしを殺すつもりだったとは、お考えにならないでしょうね。ナイフは、ただの道具のつもりだったんでしょう？」

ホームズは、肩をすくめながらこたえた。

「まあ、そうかもしれません。ただ、ジョーゼフ・ハリスン氏が、どんなことでもやりかねない人だということだけは、確信をもってもうしあげられます。」

技師の親指

これからものがたろうとする事件がおこったのは、一八八九年の夏で、わたしが結婚してまもないころだった。結婚後、わたしは、ホームズをひとりのこして、ベーカー街のアパートをひきはらったが、ホームズをたずねることは、やめていなかった。

わたしの医者のしごとは、しだいにはんじょうしていった。家がパディントン駅の近くにあったので、二、三の駅員が患者になった。なかでも、ひとりの男は、苦しいながわずらいをなおしてもらったということで、しきりに、わたしのうでまえを宣伝してくれるのだった。

ある朝、七時すこしまえに、女中がドアをたたいて、パディントン駅からふたりの男がきて、診察室でまっている、という。いそいで服を着て、おりてみると、例のなじみの車掌が診察室からでてきて、あとをぴったりしめ、親指で肩ごしにうしろをさしながら、小声でいった。

「新しい患者ですよ。つれてきたほうがよかろうと思いまして。じゃ、先生、失礼します。おたがいにしごとがありますから。」

そして、わたしが礼をいうまもなく、さっさとでていった。

診察室にはいってみると、ひとりの紳士が、机の横に腰をおろしている。かた手にハンカチをまいているのだが、それに、血がにじみでている。まだ二十五歳にはなっていまいと思われる青年で、たくましく、男らしい顔つきだが、おそろしくあおざめている。なにかおそろしいめにあって、心がすっかりみだれてしまったらしい。

「先生、こんなに朝早くからおおこしして、もうしわけありません。でも、ゆうべ、たいへんな災難にあったものですから。けさ、汽車でパディントン駅について、どこかお医者さんは、とたずねますと、しんせつな駅員が、ここまでおくってきてくれました。」

わたしは、テーブルの上の名刺を手にとって、ながめた。

『ビクター・ハザリ、水力技師、ビクトリア街一六のA（四階）』

と、書いてある。わたしは、診察いすに腰をかけながらいった。

「夜汽車でおつきになったところですね。さぞかし、たいくつだったでしょう。」

「いや、それが、たいくつどころではなかったのです。」

ハザリ青年は、そういうと、ふいにわらいだした。いすにそりかえり、わき腹をふるわせて、かんだかい声で、腹のそこからわらうのだ。わたしは、医者だけに、これはあぶないと思った。

「気をしずめてください。」

わたしはそういって、水さしから水をついで、飲ませた。ハザリは、やっと正気にかえったが、ひどくつかれたようすで、まっさおな顔をして、あえぎあえぎいった。

「まったく、ばかなところをお目にかけまして。」

「そんなことはありません。まあ、これをお飲みください。」

水に、いくらかブランデーをおとして飲ませると、あおざめた顔に、血のいろがもどってきた。

「気分がよくなりました。では、先生、親指を——いえ、まえに親指のあったところを見てくださいませんか。」

ハザリは自分でハンカチをといて、手をさしだした。わたしは、そんなことには、ずいぶんなれているはずだが、やはり、身ぶるいせずにはいられなかった。親指のあるべきところが、まっかなカイメンみたいになっている。つけ根からたたき切られたか、ひきちぎられたかしたのだ。

「これはひどい。おそろしい傷ですね。ずいぶん血がでたでしょう？」

「ええ、でました。やられたときふらふらとなって、それから、ながいあいだ、気絶していたように思います。息をふきかえしてもまだ出血していましたから、手首はハンカチのはしで、しっかりしばり、小枝をはさんでしめつけました。」

「それは、おみごとでした。外科医の資格がありますよ。」

わたしは、傷口をしらべながら、いった。

「この傷は、おもくて切れ味のいい刃物で切ったのですね。」

「肉切りぼうちょうのようなものです。」

「あやまちでしょうね。」

「いや、とんでもない。」

「なんですって？　殺すつもりで切りつけたんですか？」
「まさに、そのとおりです。」
「なんておそろしい。」
傷口をカイメンでぬぐって手当てをしてから、ガーゼをあてがい、石炭酸消毒のほうたいをした。ハザリはいすにもたれて、じっとこらえていたが、ときおり、いたそうに、くちびるをかんだ。
「ぐあいはいかがですか？」
「とてもいいようです。ブランデーとほうたいのおかげで、すっかり生まれかわったみたいです。だいぶまいっていましたが、なにしろ、たいへんなめにあったのですから。」
「そのお話は、なさらないほうがいいでしょう。きっと、神経にさわりますから。」
「そうです。いま話そうとは思いません。いずれ、警察へいって話さなければならないでしょう。もっとも、この傷というはっきりした証拠がなかったら、警察がぼくの話を信じてくれるかどうか、あやしいものです。なにしろ、これは、とほうもない話だし、証拠になるようなものも、ほかにはほとんどありませんからね。」
「ほう。そういう問題の解決をおのぞみだったら、警察へいくまえに、ぼくの友人のシャーロック・ホームズという男のところへおいでになることですよ。」
「ああ、その方のことなら、聞いたことがあります。もちろん、警察にもたのまなければなりませんが、あの方がひきうけてくだされば、ほんとにうれしい。紹介していただけますか？」
「いうまでもないことです。ぼくが、これからおつれいたしましょう。」
「ありがとうございます。」
「馬車をよんで、いっしょにいきましょう。いまいけば、ちょうど、いっしょに朝食をすることができます。」
わたしは二階へかけあがって、妻に、事情を手みじかに説明し、五分後には、ハザリといっしょに辻馬車におさまって、ベーカー街めざして走らせていた。
シャーロック・ホームズは、いつものとおり、新聞のたずね人広告に目をとおしながら、パイプをくわえて、ガウンすがたで居間を歩きまわっていたが、おだやかな、あいそのよい態度でわたしたちをむかえ、ベーコン・エッグをつくらせて、いっしょに、うまい食事をとった。食事がおわると、ホームズはハザリをソファにおちつかせ、頭の下にまくらをあ

てがい、手のとどくところに水をわったブランデーのグラスをおいてやってからいった。
「ハザリさん。あなたの経験された事件が、世間にありふれたものでないことは、よくわかりますよ。どうぞ、横になって、すっかり気楽にしてください。できるだけくわしく話していただくんですが、つかれたら話をやめて、そこの気つけを飲んで元気をだしてください。」
「ありがとうございます。しかし、先生にすっかり手当てしていただいて、生まれかわったみたいになりました。では、さっそく、ぼくのふしぎな経験をお話しすることにしましょう。」
ホームズは、大きなひじかけいすに腰をおろし、だるそうに目をふせたが、じつは、するどく注意をはたらかせながら、ハザリのことばに耳をかたむけていた。ハザリは、話しはじめた。
「ぼくは、父も母もありません。そして、ロンドンの下宿に、ひとりで暮らしているのです。職業は水力技師で、グリニッジにある有名な商会で七年間見習いをやりましたから経験は、かなりつんでいるわけです。二年まえ、年季があけたとき、ちょうど、父が死んで、かなりまとまった金を相続しましたので、自分でしごとをはじめようと思い、ビクトリア街に事務所をもちました。
だれでも、独立して事業をはじめたばかりのときは、みじめな思いをするものだそうですが、ぼくは、とりわけ、それがひどかったのです。二年のあいだに相談が三かい、雑用みたいなものが一かい、もちこまれたしごとは、これっきりでした。
ところが、きのうのこと、そろそろかえろうかと思っているところへ、うちの店員がはいってきて、ひとりの紳士がしごとのことで面会したいといっている、ともうします。もってきた名刺には『陸軍大佐、ライサンダー・スターク』と印刷してありました。
店員のすぐうしろから、その大佐がすがたをあらわしたのを見ると、背はふつうより高いほうですが、なみはずれてやせています。あんなにやせた人は見たことがありません。それでいて、このやせかたは、生まれつきのものらしいのです。病気でそうなったのではない証拠に、目はつよくかがやき、歩きぶりも活発で、態度にも自信があふれていました。質素ですが、さっぱりした身なりをしており、年は、四十歳にちかいというところでした。大佐は、いくらかドイツなま

りをひびかせながら、いいました。
『ハザリさんですね。あなたは、しごとのほうもなれているうえに、ものわかりがよくて、ひみつをまもってくださるとうかがってまいったのです。』
『失礼ですが、そんなふうにほめてくださったのは、どなたでしょうか？』
『いや、それは、いまもうしあげないほうがよろしいでしょう。おなじ人から、あなたはご両親がなくて、ロンドンでひとり暮らしをしておられると聞いてきました。』
『ええ、まったくそのとおりです。でも、そのことが、ぼくの職業とどういう関係があるのですか？　しごとの相談でおいでになったのでしょう？』
『そのとおりです。わたしは、しごとをたのみにうかがったのだが、ぜったいにひみつをまもってほしいのです。だからもちろん、それについては、家族といっしょに暮らしている人より、ひとり暮らしのほうが、つごうがいいわけです。』
『ひみつをまもると、いったんお約束しましたら、ぜったい信らいしてくださってだいじょうぶです。』
大佐は、ぼくの顔をしげしげと見つめていましたが、あんなにうたぐりぶかい顔は、見たことがないような気がしました。やがて、大佐はいいました。
『では、約束してくれるんですな？』
『はい、お約束します。』
『しごとをはじめるまえも、しごとちゅうも、そのあとも、ぜったいにひみつをまもるのですぞ。』
『きっとお約束します。』
『よろしい。』
大佐はふいに立ちあがったかとおもうと、電光のようにへやのなかを走っていって、さっとドアをおしひらきました。ろうかに人などいませんでした。大佐は、もどってきて、いいました。
『うん、だいじょうぶだ。店員というものは、とかく主人のすることを知りたがるものでしてな。これで、安心して話せます。』
大佐は、いすを、ぼくのすぐそばへひいてきて、また、あのうたがいぶかい目で、しげしげと、ぼくの顔を見つめるのでした。
ぼくは、このげっそりやせた男の、あやしいそぶりを見ているうちに、あるふゆかいさとおそれのようなものをかんじはじめました。客をのがしたらたいへんだと思いながらも、

つい、いらいらした気持ちを、おもてにだしてしまいました。
『どうぞ、用件をおっしゃっていただきましょう。ぼくは、たいへんいそがしいのですから。』
『ひと晩きりのしごとだが、五十ギニーではどうですか？』
『たいへんけっこうです。』
『ひと晩きりのしごとといったが、一時間ぐらいといったほうが、ちかいかもしれない。ちょうしのわるくなった水圧機を、しらべてもらいたいのです。どこがわるいかいってもらえれば、あとは、われわれで修理します。こういったしごとは、いかがお思いですかな？』
『しごとはかんたんなようだし、報酬もすばらしいですね。』
『そのとおりです。今晩の終列車できていただきましょう。』
『どこへですか？』
『バークシャのアイフォードです。パディントン駅からのって、むこうに十一時十五分ごろつく汽車があります。』
『しょうちしました。』
『馬車で、むかえにでています。』
『すると、それから、まだいくらかあるんですね？』
『そうです。わたしたちのすまいは、すっかりいなかでしてね。アイフォードの駅から、たっぷり十キロはあります。』
『じゃ、ま夜中までにはつけませんでしょう。かえりの汽車はとてもだめですから、とまらなければならないわけですね？』
『ですから、まにあわせのベッドぐらいは、用意してあげますよ。』
『どうも、めんどうですね。もっとつごうのいい八時ごろにまいるわけにはいかないでしょうか？』
『わたしどもの考えでは、夜おそくきていただくほうがいい、ということになったのでしてな。こんなふべんな事情があるからこそ、一流の技師にしらべてもらえるほどの報酬を、あなたのような無名の青年におはらいしようというわけなのだ。けれども、むろんのこと、この件から手をひきたいといわれるなら、まだ、そのまはありますよ。』
ぼくは五十ギニーのことを考え、それだけのものがあればどんなに役にたつだろうと思いました。
『手をひくなんて、とんでもない。よろこんで、おひきうけしますよ。しかし、そのしごとがどんなものか、もうすこしはっきりうかがっておきたいですね。』
『ごもっともです。ところで、このへやは、ぬすみ聞きされる危険はないでしょうな？』

『まったくありません。』

『では、もうしましょう。毛織物の仕あげにつかう漂布土というのは、たいへん高価なもので、イングランドでは、二、三か所にしか産しないことは、ごぞんじでしょうな。』

『それは、聞いてます。』

『すこしまえに、わたしは、レディングから十五キロほどのところに、小さな土地を買いました。すると、幸運なことに地所のいちぶに漂布土の層のあるのが見つかったのです。ところが、これをしらべてみると、この層そのものはそんなに大きなものではなく、その左右に大きな層がある、ということがわかりました。

けれども、右の層も左の層も、となりの人の地所にあるのです。ところで、おとなりさんたちは、自分の土地の下に金鉱ほども値うちのある漂布土層があるとは知らずにいます。おとなりさんたちが自分の土地のほんとの値うちに気づかないうちに地所を買いとってしまえば、たいへんもうかるのですが、ざんねんなことに、まとまった金がありません。

しかし、二、三の友人にひみつをうちあけたところ、それなら自分の地所にある層を、ひみつにそっとほって、それで、となりの土地を買う金をつくるのがよかろう、といってくれたのです。そこで、しばらくまえから、そのとおりにやっているのですが、能率をあげるために水圧機をすえつけたのです。この水圧機が、さっきいったように故障したので、あなたにみてもらって、ご助言をねがおうというわけなのです。

しかし、わたしどもは、ひみつがもれないようにと、用心おこたりないわけでしてな。家へ水力技師のきたことが知れようものなら、たちまちうたがわれてしまうだろうし、そうしてことがあらわれてしまえば、地所を買うことも、まるでのぞみがなくなってしまいます。というわけで、今夜のアイフォードいきを、だれにも口外しない、とあなたに約束してもらったのです。これで、すっかりはっきりしたと思うのですが。』

『よくわかります。ただ、ひとつだけ、よくわからないてんがあります。漂布土というのは、じゃりのようにしてほりだすものだと思いますが、そのしごとに、水圧機が、どういう役にたつのでしょう？』

大佐は、むぞうさにいいました。

『ああ、それですか。わたしどもどくとくのやり方でしてね、土をれんがのようにかためて、なんだか見わけられないようにして、はこびだすのです。だが、こんなことは、たいしたことじゃない。これで、すっかりひみつをおうちあけしたわけですぞ、ハザリさん。あなたをどれほど信用しておるか、おわかりでしょう。では、十一時十五分に、アイフォードでおまちします。』

『はい、かならずまいります。』

『ひとことも、もらしてはなりませんぞ。』

大佐は、もういちど、さぐるような目つきを、じっとぼくにそそぎ、それから、つめたい汗ばんだ手であく手して、いそいでていきました。

さて、おちついてよく考えてみますと、このしごとがたいへんふうがわりなものに思われてきました。むろん、いっぽうでは、よろこびもしました。というのは、報酬が、ふつうの額の十ばいですし、これがきっかけになって、つぎつぎにしごとの口がかかってこないものでもあるまい、と思ったからです。

しかし、またいっぽうでは、客の顔つきや態度からうけた不快な印象がのこっていましたし、漂布土の説明だけでは、なぜま夜中にでかけていかなければならないのか、また、このことを他人にもらされるのを、どうしてあんなに心配しているのか、なっとくがいきません。けれども、よけいな心配をするのはやめにして、パディントン駅に馬車を走らせ、口をきくなという命令をかたくまもって出発しました。

十一時すぎに、小さなうす暗い駅につきました。この駅におりた客は、ぼくだけで、プラットホームには、赤帽がひとり、眠そうな顔をしてカンテラをさげて立っているだけです。しかし、停車場の戸口をでますと、けさの男が、むかいの暗がりにまっているのが見えました。なにもいわずにぼくの腕をつかむと、ドアをあけはなしてあった馬車に、ぼくをおしこみました。両がわの窓をしめて、馬車のしきり板をノックすると、馬車は、全速力で走りだしました。」

ホームズが、ことばをはさんだ。

「馬は、一頭だったのですか？」

「ええ、一頭だけでした。」

「馬の色に気がつきましたか？」

「ええ、のりこむとき、わきのあかりで見ました。クリ毛です。」

「つかれているふうでしたか？　それとも、元気でしたか？」

「元気で、つやつやしていました。」

「ありがとう。話のじゃまをしたりして、すみません。おつ

づけねがいましょう、なかなかおもしろい話です。」

「それからどんどん走りつづけて、すくなくとも一時間はのっていたと思います。ライサンダー・スターク大佐の話では、たった十キロということでしたが、ぼくのみたところ、あの速さとかかった時間とからいって、二十キロちかくはあったにちがいありません。

そのへんのいなかは、なかなか道路のわるいところとみえて、馬車は、おそろしいいきおいで、かしいだりゆれたりしました。いったいどんなところを走っているのか見当をつけようと思っても、窓は、あいにく、すりガラスがはまっていて、ときおりとおりすぎるあかりが、ぼんやり見えるだけです。

それでも、どうやらがたがた道がつきて、車はパリパリ音をたてて、なめらかなじゃり道にはいり、やがて、とまりました。大佐は、馬車からとびおりるなり、つづいておりましたぼくを、目の前にひらかれている玄関へひっぱりこみました。つまり、馬車からまっすぐ玄関へとびこんだわけで、家の正面をちらりと見るまもありませんでした。しきいをまたいだとたんに、ドアがギーッとしまり、馬車の立ちさる音が、かすかに聞こえました。

家のなかはまっ暗で、大佐は小声でぶつぶついいながら、手さぐりでマッチをさがしました。とつぜん、ろうかの奥のドアがあいて、細長い金色の光が、さっとこちらへながれました。光がしだいにひろがってきたかとおもうと、ひとりの女が、ランプを手にしてあらわれ、あかりを頭の上に高くかざしながら、顔を、つきだすようにして、ぼくたちをしきりに見つめるのです。きれいな女でした。

その女が、ぼくの知らない外国語で二こと三こと質問するようなちょうしでいいますと、大佐は、つっけんどんに、ひとことこたえましたが、女は、それを聞くと、ランプをとりおとさんばかりにぎくっとしたようでした。大佐は、そのそばへあゆみよって、耳もとでなにかささやき、でてきたへやへおしもどすと、ランプをもって、また、ぼくのほうへやってきました。

『しばらく、こちらのへやでおまちねがいましょうか。』

大佐はいって、もうひとつのドアをあけました。質素にしつらえた静かな小べやで、中央のテーブルの上に、ドイツ語の本が数さつちらばっています。大佐は、ランプをドアのそばの足ぶみオルガンの上におきました。

『一分とまたせはしませんよ。』

そういいのこして、暗やみのなかへきえていきました。

テーブルの上の本を見ますと、ドイツ語は知りませんが、その二さつが科学論文で、あとは詩集だとわかりました。いなかのけしきが、すこしは見えるかもしれないと思って、窓ぎわに立ってみましたが、カシの木のよろい戸がおりていて、しっかりとかけ金でとめてあります。ふしぎなほど静まりかえった家でした。ろうかのどこかで、古い柱時計が、カチカチと鳴っているだけ、ほかにはもの音ひとつせず、死人の家のような静けさです。

なんとなく不安になってきました。このドイツ人たちは、何者だろう、そして、こんな人里はなれた、奇妙な場所に住んで、なにをしているのだろう？　ここは、いったいどこなのだろう？　アイフォードから十五キロばかりの場所だということはわかっているが、その北か、南か、東か、西かということは、まるで見当がつかない。ぼくは、へやのなかをいったりきたりしながら、気をひきたたせるために鼻歌をうたったり、とにかく、まるまる五十ギニーかせぐところなんだと、心に思ってみたりしました。

とつぜん、ぼくのいるへやのドアが、音もなく、ゆっくりとひらきました。さっきの女が、暗やみを背にして入り口に立っており、へやのランプの黄色い光が、その美しい顔をてらしだしています。はげしい恐怖におののいているのが、ひと目でわかり、ぼくは、心臓がこおりつくような気がしました。女はふるえる指をたてて、ものをいうなと、ぼくに合図し、かたことの英語で、早口に、二こと三こととささやいては、おびえた馬のような目で、うしろの暗やみを、しきりにふりかえるのです。

『にげます。にげます。ここにいるのは、いけません。あなたに、よいことすこしもありません。』

『でも奥さん、まだ、用事がすんでいないのです。機械をみるまでは、かえるわけにはいきませんよ。』

『おまちになること、むだです。このドアとおれます。だれもじゃましません。』

そして、ぼくがほほえみながら頭をふるのを見ると、女はもう、えんりょなどふりすててしまい、へやのなかへ一歩すすみでて、両の手をふりしぼるのです。

『ね、おねがいです。早くおにげなさい、いまなら、まにあいますから。』

ぼくは、生まれつき、きかん気なほうで、ことに、じゃまがはいると、かえってやりとおしたくなるたちなのです。五

十ギニーの報酬のことや、さっきのたいくつな道中のことや、これからふゆかいな一夜をすごさなければならないことなどが、つぎつぎと頭にうかびました。これだけのことが、いっさいむだになってもよいものだろうか？　たのまれたしごともせず、とうぜん、うけとるべき報酬も手にしないで、しっぽをまいてにげだすなんてことがあるだろうか？　ひょっとすると、この女は、気ちがいかもしれない。

　というわけで、女の態度を見て、心のなかではこわくなっていたくせに、強情をはりとおして、首を横にふりつづけ、どうしてもここにいるつもりだと、きっぱりいいました。女がかさねてうったえはじめようとしたとき、頭の上で、バタンとドアのしまる音がして、階段からガタガタと足音がひびいてきました。女は、はっと耳をそばだてると、もうだめだというように、両手をひろげてみせ、それから、あらわれたときとおなじように、さっと音もなくきえてしまいました。

　いれかわって、スターク大佐が、二重あごで、ウサギみたいなひげをはやした背の低いずんぐりした男をつれてはいってきて、紹介しました。

『ファーガスンといって、わたしの支配人です。では、さっそくしごとにとりかかったほうがよいでしょうな。ファーガスンくんとふたりで、機械のところへおつれしましょう。』

『帽子をかぶっていったほうがよいでしょうね？』

『いや、家のなかにあるんです。』

『なんですって？　家のなかで漂布土をほっておられるんですか？』

『ちがう、ちがう。ここは、土を圧さくするだけですよ。しかし、そんなことは、かまいなさるな。あんたは機械を検査してくれて、どこがわるいか、おしえてくれればそれでよろしいのだ。』

　ランプを手にした大佐を先頭に、ふとった支配人、ぼく、とつづいて階段をのぼりました。迷路みたいにいりくんだむかしふうの家で、ろうかがあり、ほそい通路があり、せまいらせん階段があり、低い小さなドアがあり、といったぐあいで、そのドアのしきいは、ながいこと人にふまれて、くぼみができています。二階から上は、敷物もなければ、家具らしいもののかげも見あたらず、壁からは、しっくいがはげおちており、湿気がにじみでて、コケのような緑色のしみができています。

　ぼくは、できるだけなにくわぬ顔をしていましたが、あの女の警告が、やはり気にかかっていたので、ふたりのつれにだすことができそうです。ところが、外がわへまわって、運転用のレバーをおしさげると、シューという音がしたので、どこかに小さな水もれがあって、水が、パイプのなかでぎゃくもどりしているのだと、すぐ見当がつきました。

　しらべてみますと、運転棒のさきについているゴム輪がちぢんで、受け口とのあいだに、すきまができているのです。圧力のへる原因は、これにちがいありませんから、ぼくが、このてんをふたりに指摘してやりますと、かれらはたいへん注意ぶかく、その説明に耳をかたむけ、修理のしかたについて、いくらか質問をしました。

　すっかりわからせてやってから、もういちど圧さく室にもどって、好奇心をまんぞくさせるために、内部をよく見まわしました。漂布土の話がまったくのつくり話であることは、ひと目であきらかです。そんな目的に、こんな強力な機械をつかうなんて、考えるだけばかばかしい話です。

　四方の壁は、木造ですが、床は大きな鉄板のようになっていて、気をつけて見ると、床一面に、金属製のうす皮のようなものがこびりついています。身をかがめて、なんだか、はっきり見ようと、ガリガリかいていると、ドイツ語でひくくさけぶような声が聞こえたので、見あげると、大佐の死人み

警戒の目を光らせていました。ファーガスンは、むっつりした口数のすくない男ですが、耳にはさんだことばから、ぼくとおなじイギリス人だということだけはわかりました。

　スターク大佐は、やがて、とある低いドアの前に立ちどまって、かぎをあけました。なかは小さな四角いへやで、三人が、いちどきにはいるわけにはいきません。ファーガスンが外にのこり、大佐が、ぼくをつれてなかにはいりました。

『われわれは、水圧機の内部にいるわけでして、いま、もしだれかが機械をうごかしでもしたら、それこそひどいことになりますよ。この小べやの天じょうが、ピストンの下の面になっているので、おりてくれば、何トンというすごい圧力で、この金属の床をおしつけるのです。この外がわに、ほそいパイプが何本かあって、うけとった水圧をピストンにつたえるわけだが、そのしかけは、ごぞんじのとおりだ。機械はちゃんとうごいているのですが、うごきがかたくなっているようなところがあって、圧力がすこしへっているのです。ひとつおしらべくださって、どうしたらなおるか、おしえていただきましょう。』

　ぼくは、大佐からランプをうけとって、機械をすみずみまでしらべました。ほんとうに巨大な水圧機で、すごい圧力を

たいな顔がぼくをにらみおろしているではありませんか。

『そこで、なにをしているのかね？』

『おたくの漂布土にかんしんしているところです。この機械のつかい道が正確にわかっていれば、もっとお役にたつ助言をしてさしあげられたでしょうに。』

こう口ばしったとたん、ぼくは、自分の口のかるさをこうかいしました。大佐の顔はきゅうにこわばり、灰色の目が、いじわるそうに、きらりと光りました。

『よろしい。この機械のことを、すっかりのみこませてやろう。』

そういうと、ひと足あとへさがって、小さなドアをぴしゃりとしめ、すかさず、かぎをかけてしまいました。ぼくは、ドアにかけよって、とっ手をひっぱってみましたが、びくともしませんし、おしてもけっても、なんの手ごたえもないのです。ぼくはさけびました。

『もしもし、大佐。だしてくださいったら。』

だが、そのときに、とつぜん静けさをやぶって聞こえてきたもの音に、ぼくは、ぎょっとなってちぢみあがりました。レバーのガタンという音につづいて、例の水もりするパイプのシュッシュッという音が聞こえてきたのです。大佐が機械を運転しはじめたのです。ランプは、さっき床をしらべたときおいた場所にそのままあります。その光で、黒い天じょうがすこしずつ、ぐっぐっとおりてくるのがはっきりと見えました。一分とたたないうちに、ぼくの身はこなごなにくだけて、かたちもない肉のかたまりになってしまうでしょう。

ぼくは、悲鳴をあげながら、ドアにからだをぶっつけ、じょうをつめでひっかきました。だしてくれと大佐にうったえてみても、レバーのガタガタいう音が、なさけようしゃなく、ぼくの声をうちけしてしまいます。天じょうは、頭上五、六十センチのところまでおりてきて、手をあげれば、そのかたいざらざらした表面にさわれるほどになりました。

そのとき、頭をかすめたのは、死ぬときのからだの位置によって苦しみがずいぶんちがうのではなかろうか、という考えです。うつぶせになっていれば、背骨に圧力がかかってくるでしょうが、そのときのボキボキいう音を思うと、身ぶるいがでました。

ぎゃくの姿勢のほうが、あるいは楽かもしれない。とはいうものの、あおむけになって、まっ黒なおそろしいものの影が自分の上におおいかぶさってくるのを見あげているだけの気力があるだろうか？　もはや、まっすぐに立っていることもできなくなったとき、ぼくは、ふと、あるものに目をとめて、心に希望がわきあがりました。

もうしあげたように、天じょうと床とは鉄ですが、四方の壁は木でできているのです。はめ板のすきまからひとすじの黄色い光がもれていて、おりてくる天じょうにおされて、板がそりかえり、すきまが、しだいにひろがっていくのが見えたのです。

はじめは、助かるなどと、とても信じられない気持ちでしたが、つぎのしゅんかんには、身をなげつけてそこをつきぬけ、なかば気をうしなって、むこうがわにたおれていました。はめ板は、またとじましたが、ランプのつぶれる音につづいて二まいの鉄板のあわさる音が聞こえました。ほんとうに危機一髪だったのです。

むちゃくちゃに手首をひっぱられて、正気にかえってみると、ぼくは、せまいろうかの石だたみの上に横たわっており、ひとりの女がぼくの上にかがみこんで、左手でぼくの手首をひき、右手には、ろうそくをかざしているのです。さきほど、ぼくに忠告してくれた、あのしんせつな女でした。女は、息をきらしてさけびました。

『こちらへ。こちらへ。あの人たちがきます。あなたがあそこにいないことを知るでしょう。さあ、だいじな時間をむだにしないで、くるのです。』

こんどは、さすがにぼくも、女の忠告をないがしろにはしませんでした。よろよろしながら立ちあがると、女のあとについて、ろうかを走り、らせん階段を走りおりました。

階段の下は、広いろうかになっていて、そこまでおりてきたかとおもうと、走る足音と、ふたりの男のさけぶ声が聞こえてきました。ひとりは、ぼくたちとおなじ階から、もうひとりは、下の階から、たがいにさけびかわしながら、やってくるのです。

女は足をとめて、とほうにくれたようすで、あたりを見まわしました。それから、そばのドアをあけはなしました。なかは寝室で、窓からは月の光があかあかとさしこんでいます。

『ここからにげるしかありません。高いけれど、なんとかとびおりられるでしょう。』

女がそういったとき、ろうかのむこうのはしにさっとあかりがさし、スターク大佐のやせた影が、かた手にカンテラをもち、もうひとつの手に肉屋の大ぼうちょうのようなものをもって、こちらへつっぱしってくるのが見えました。ぼくは寝室にかけこみ、窓をおしひらいて外をながめました。月の

光をあびた庭は、なんと静かで、美しく、健康なようすをしていたことでしょう。窓の下はせいぜい十メートルばかりと思われました。

ぼくは、窓のふちによじのぼりましたが、いのちの恩人とぼくをおってくる悪漢とのやりとりを聞きとどけるまではと思い、しばらくとびおりるのをためらっていました。女に害がくわえられるようなことでもあれば、どんな危険をおかしてでも助けにもどろうと思ったのです。でも、こんな考えがぼくの頭にうかぶかうかばないかに、大佐は戸口をかけぬけ、あの女の人の前をとおろうとしていました。しかし、女は両手で大佐にしがみついて、ひきもどそうとしました。女は、英語でさけんでいます。

『フリッツ！　フリッツ！　このまえのときの約束を思いだしてください。もう二どとしないっておっしゃったじゃありませんか。この人、きっとだまっています。ええ、きっとだまっています。』

『エリーゼ、気でもくるったのか。おれたちを破めつさせる気だな。あいつは、いろんなことを見てしまったんだ。さ、はなせというのに。』

大佐は女の腕をはなそうとして、もがきながらどなりました。とうとう女をつきのけて、窓に走りよるなり、重い刃物で、ぼくに切りつけました。ぼくはすでに、にげじたくをしており、窓の下わくに手をかけてぶらさがっていたところへ、この打げきがふってきたのです。手に、にぶいいたみをかんじたかとおもうと、手がはなれて、そのまま、下の庭へおちていきました。

ショックはうけましたが、けがはしませんでした。危険がさったわけではありませんから、すぐさまおきあがると、力をふりしぼって庭のしげみのなかへかけこみました。しかし、走っているうちに、ふいにはげしい目まいをかんじ、はきけにおそわれました。さきほどからうずいていた手に目をやってみて、このとき、はじめて気がつきました。親指が切りおとされていて、血がどくどくながれでているのです。ハンカチで傷口をしばろうとしたのですが、耳鳴りがしはじめ、死んだようになって、バラのしげみのかげにたおれてしまいました。

どれほどのあいだ気をうしなっていたか、はっきりはわかりませんが、そうとうながかったにちがいありません。われにかえってみると、月は、もうしずんでおり、はれやかな朝が明けかけていたのですから。服は夜霧にぬれ、上着のそで口は、傷からながれでる血で、べっとりよごれています。そのはげしいいたみで、すぐさま、ゆうべの冒険のいちぶしじゅうを思いだして、さっとはねおきました。まだ、おってをのがれてしまったわけではないのです。

ところが、おどろいたことに、あたりを見まわしても、ゆうべの家や庭が見あたりません。どこかの街道にそった生垣のかどに寝ていたわけなのですが、すこしむこうに長い建物があったので、近くへいってみると、それが、なんと、ゆうべ、ぼくのついたアイフォード駅だったのです。手のおそろしい傷さえなかったら、あの恐怖にみちた何時間かのできごとも、こわい夢としか思えなかったことでしょう。

なかばぼうっとした状態で、駅へはいっていき、朝の汽車のことを聞いてみました。一時間たらずまてば、汽車があるといいます。ゆうべついたとき見かけたのとおなじ赤帽が、はたらいています。スターク大佐の名を聞いたことがあるかとたずねてみましたが、そんな名は知らないとこたえます。

『ゆうべ、馬車が、駅前でぼくをまっていたのを見たか？』

『いいえ、気がつきませんでした。』

『この近くに警察はないか？』

『五キロばかりはなれたところにあります。』

こんなによわっていては、五キロなんて、とても歩けません。ロンドンへかえってから、警察へ話をしにいこうときめました。六時すこしまえについて、まず傷の手当てをしていただきにうかがったところ、先生が、わざわざここまでおつれくださったのです。この事件は、すっかりおまかせして、なんなりと、おさしずどおりにするつもりでおります。」

このあやしい話を聞きおわって、ふたりとも、しばらく口をきかずにすわっていた。やがて、シャーロック・ホームズは、書棚のぶ厚いメモのなかから、新聞のきりぬきをはったやつを一さつとりだした。

「ここに、あなたの事件に関係のありそうな広告がありますよ。一年ほどまえに、あらゆる新聞にでていたものです。読んでみましょう――。

『ゆくえ不明。今月九日、ジェレマイア・ヘーリング、二十六歳、水力技師。午後十時に下宿をで、そのあとゆくえがわからなくなる。服装は――。』

なるほど！　大佐がこのまえに水圧機の検査をやらせたのは、この青年らしい。」

ハザリはさけんだ。

「おお、それで、あの女の人のいったことがわかります。」

「ちがいありません。あの大佐はむごたらしい男で、自分のけしからんしごとのじゃまになりそうな人間は、みんな殺してしまうのです。さあ、こうなっては、一刻も、ぐずぐずできません。元気がおありだったら、アイフォードへでかける準備をして、これから、ごいっしょに警視庁へいきましょう。」

それから三時間あまりして、わたしたちは、汽車にゆられていた。一行は、シャーロック・ホームズと、警視庁のブラッドストリート警部、私服刑事一名、それにわたしだった。警部は座席にこの州の陸地測量部地図をひろげ、アイフォードを中心にコンパスでせっせと円をかいていた。

「さあ、ごらんなさい。この円は、村を中心に、半径十五キロでかいたのです。めざす場所は、円周の付近になければなりません。たしか、十五キロといわれましたね、ハザリさん。」

「馬車で、一時間はたっぷりかかりました。」

「そして、意識をうしなっているあいだに、やつらが、それだけの道のりをかついで、はこびもどしてくれた、と思われるのですね。」

「そうしたにちがいありません。そういえば、もちあげられて、どこかへはこばれていったような記憶が、ぼんやりのこっています。」

わたしが口をはさんだ。

「ひとつわからないことがあるんですが、あなたが気をうしなって庭にたおれているのを見たとして、どうして、いのちをとらなかったのでしょう？　女の人のうったえで、悪党があわれみの心をおこしたとでもいうのでしょうか？」

「そんなことは考えられません。あんなにむじひな顔は、見たことがありませんからね。」

ブラッドストリート警部がいった。

「ああ、そんなことは、いずれわかります。さあ、円がかけているんですから、めざす者たちが、この円のどの点にいるか、あとは、それが知りたいだけです。」

ホームズが、おだやかにいった。

「その位置なら、指でおさえてみせてあげられますよ。」

警部は、声をあげた。

「なんですって？　もう、説をたてたんですか。では、だれの説があなたのといっちするか、みんなでいってみましょう。わたしの考えでは、南です。こっちのほうがさびしいところだから。」

ハザリがいった。

「いや、東だと思います。」

私服刑事がいった。

「わたしは西にします。西のほうには、静かで小さな村がいくつかありますから。」

「ぼくは北にしよう。というのは、こっちには丘がないからですが、ハザリさんの話にも、馬車がのぼり道にかかったというようなことはなかったでしょう。」

と、わたしがいうと、警部が、わらいながらいった。

「おや、おや、みごとに意見がわかれましたな。東西南北を四人でまわしちまったわけだ。あなたは、だれにさんせいしますかな。」

「みんなまちがっています。」

「しかし、みんなということはないでしょう。」

ホームズは、円の中心を指さきでおさえた。

「いや、それがそうなんです。ぼくの点はここだ。やつらは、ここにいるはずです。」

ハザリは、息をきらしていった。

「じゃ、二十キロも走ったのは、どうなります。」

「十キロいって、十キロもどる。これほどかんたんなことはありません。馬車にのったとき、馬は元気でつやつやしていたとおっしゃったでしょう。わるい道を二十キロも走ってきたとは考えられませんね。」

ブラッドストリート警部は、考えこんだようすでいった。

「なるほど。いかにもやつらのやりそうな策略だ。むろん、この一味がどんな犯罪をおかしているかは、はっきりしているのだから。」

ホームズはいった。

「はっきりしています。やつらは、大規模なにせ金づくりたちで、あの機械は、銀のかわりの合金をつくるためにつかったのだ。」

「手ぎわのあざやかな一味が活やくしていることは、だいぶまえからわかっていました。半クラウンのにせ銀貨を、いく千となくつくっていたのです。あるところまでは、あとをたどっていたのですが、そのさきがつづかないんです。なかなかのしたたか者ですよ。しかし、こういうありがたいチャンスがやってきて、とうとう、やつらをものにすることができたようです。」

だが、警部はまちがっていた。この一味は、法の手におち

るような運命にはならなかったのだ。汽車がアイフォードの駅についたとき、近くの小さな森のかげから、巨大な煙の柱が立ちのぼり、あたり一面のけしきの上に、大きなダチョウの羽根のようにかかっていた。

おりた汽車がふたたびうごきはじめたとき、ブラッドストリートが駅長にたずねた。

「火事ですね。」

「ええ、そうです。」

「いつもえだしました?」

「夜のうちからだと聞いていますが、もえひろがって、まるやけになりました。」

「だれの家ですか?」

「ベッカ博士のお宅です。」

ハザリが口をいれた。

「ベッカ博士というのは、ドイツ人で、ひどくやせた、鼻の長くてとがった人じゃありませんか?」

駅長は、ゆかいそうにわらった。

「どういたしまして。ベッカ博士は、イギリス人でしてな、ここの教区で、博士ほどみごとなかっぷくの人はいませんよ。もっとも、あの家に滞在している紳士がおりまして、博士の患者だと思いますが、これは外国人で、バークシャのじょうとうの牛肉をすこしくらい食べさせたって、どうにもならんほどやせていますよ。」

駅長のことばがおわるかおわらないうちに、わたしたちは、火事場の方角へかけだした。道が低い丘をのぼりきると、目の前に、はばの広い白塗りの家があらわれた。庭に消防車が三台ならんで消火につとめているが、効果がないようだった。

ハザリがすっかり興奮してさけんだ。

「この家だ。じゃりをしいた馬車道もあるし、ぼくのたおれていたバラのしげみもある。あの二番めの窓からとびおりたんです。」

ホームズはいった。

「まあ、とにかく、きみは復しゅうだけはとげたわけです。きみのおいてきた石油ランプが水圧機におしつぶされたときに、まわりの木の壁に火がうつったのにちがいありません。ところが、やつらは、きみをおうのにむちゅうで、そのときは気がつかなかったのです。この見物人のなかに、ゆうべのやつらがいないかどうか、目を光らせて見てください。もっとも、いまごろは、百キロもさきへいってるんじゃないかと思いますが、これは外国人で、バークシャのじょうとうの牛肉をすこしくらい食べさせたって、どうにもならんほどやせていますよ。」

は思います。」

ホームズの心配は、事実となってあらわれた。あの日からいまにいたるまで、あの美しい女性のことも、人相のわるいドイツ人や、むっつりしたイギリス人のことも、まるでわかっていないのだ。あの朝早く、数人の人間と数個のかさばった箱をのせた馬車が、あわただしく走っていくのを、ひとりの農夫が見かけたということだが、犯人たちの足どりは、そこでたえてしまい、ホームズの知恵をもってしても、そのゆくえについては、なんの手がかりも発見されなかった。

消防夫たちは、建物のなかの見なれない設備に、たいへんおどろいていたが、三階の窓のしきいに切りとられたばかりの人間の親指を発見して、ますますびっくりしたようだった。それはともかく、夕暮れちかくに、火の手だけはおさまったが、屋根はすでにおちたあとで、建物ぜんたいが、まったくのがらんどうとなり、水圧機も、何本かのねじれた円筒と鉄管だけをのこして、あとかたもなくなっていた。倉庫に、たくさんのニッケルやすずが発見されたけれども、貨幣は一まいもでてこなかった。たぶん、一味がもっていった大きな箱にはいっていたのだろう。

水力技師が、庭から気をとりもどした場所まで、どのようにしてはこばれたかということは、庭の土がやわらかだったおかげで、はっきりわかった。あきらかにふたりの人間にはこばれたのだが、そのひとりは、きわめて小さな足の持ち主で、もうひとりは、人なみはずれて大きな足をしている。おそらく、無口なイギリス人は、大佐ほどむじひでなかったので、あの婦人に手をかして、気をうしなっている技師を、危険のない場所まではこびだしたのであろう。

ロンドンへかえる汽車に腰をおちつけたとき、ハザリは、くやしそうな顔をしていった。

「やれやれ、とんだけっこうなしごとでした。親指はなくすし、五十ギニーの報酬は、ふいになるし、いったい、なんの得があったでしょう。」

ホームズが、わらいながらいった。

「経験です。経験は、それとなく役にたつものですよ。きみは、こんどの経験をことばにして話すだけで、これから一生のあいだ、すばらしい話しあいてだというひょうばんをとることができます。」

宇宙戦争

H・G・ウエルズ
荒　正人　訳

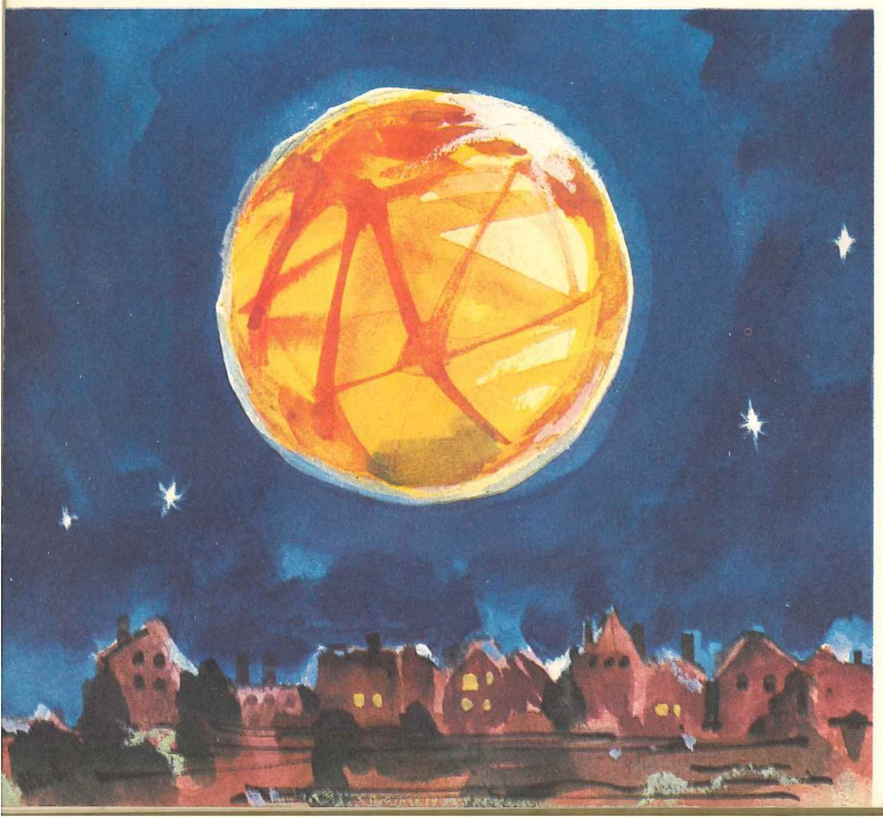
第一部　火星人来たる

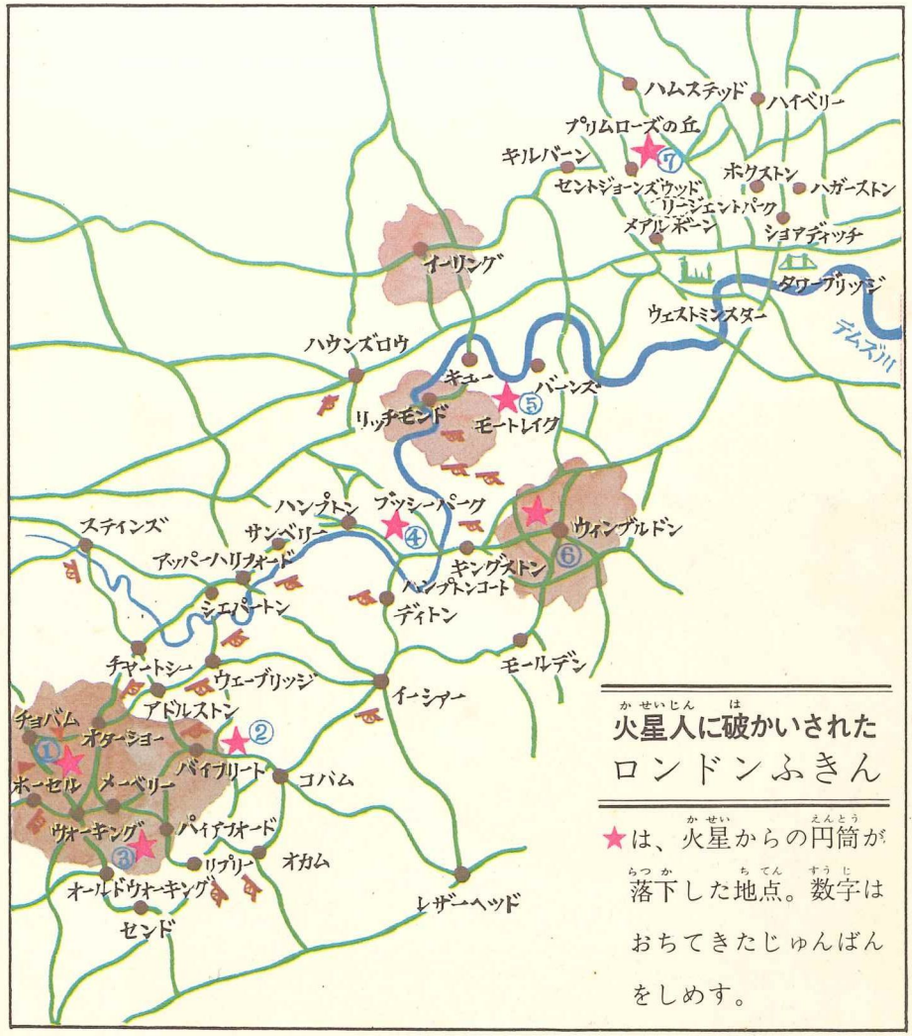
1　戦争の前夜

十九世紀のすえには、こんなことはだれも信じる人はいなかっただろう。人間の世界のできごとは、人間よりもいちだんと知恵のすすんだ生物に、するどくみつめられていたのであった。その生物は、まるで人間が顕微鏡でひとしずくの水のなかにうようよふえていくこまかい生物を観察するように、遠くから人間の生活を観察し研究していたのであった。

それなのに人間のほうでは、ちっぽけな問題にかかりきって、地球の上をうろつきながら、自分たちが世界を支配しているものと思いこんでいた。

だから、この宇宙にある、地球よりもっと古い天体が、人類に危険をおよぼすようになるだろうなどとは、思ってもみなかった。地球のほかの天体のことを考えたとしても、そこ





火星人に破かいされたロンドンふきん

★は、火星からの円筒が落下した地点。数字はおちてきたじゅんばんをしめす。

には生物などいないものときめこんでいた。

地球人がせいぜい想像したことといえば、火星には人間のような生物がいるかもしれぬが、その生物は人間よりおとり、こちらから使節団でもおくれば、よろこんでむかえるだろう、というのだった。

ところが、その火星の上では、人間の知恵が動物よりすぐれているのとおなじに、人間より知能のすぐれた残酷な生物が、この地球をものほしそうな目でみつめながら、人類攻撃の計画を、たゆみなくすすめていたのだ。

こんなわけで、二十世紀のはじめに、地球にはたいへんな災難がおこった。

火星は、地球とおなじに太陽の惑星で、太陽のまわりをまわっているが、太陽からの距離は二億二千万キロあまりで、地球より、一倍半くらい遠くにある。

だから、火星が太陽からうける光と熱は、地球が太陽からうける光と熱の半分くらいである。

だから、火星は、地球よりずっとまえに、ひえてかたまり、生物も発生したにちがいない。火星の体積は、地球の七分の一たらずだから、ひえかたは、なおさらはやかったはずである。

なお、火星には、空気も水もあり、生物が生きていくのに必要なものは、みんなそろっている。

つまり、火星の生物は、地球人よりずっとながい歴史をもっていて、それだけ進歩していると想像される。

火星はじりじりとひえている。火星の赤道の上での正午の温度でさえ、イギリスのま冬の温度よりひくいのだ。

また、火星の空気は、地球の大気よりずっとうすく、火星の海は、火星の表面の三分の一をおおっているにすぎない。

つまり、火星には、もう、生物が住みにくくなりかけているのだ。地球がこんな状態におちいるのは、まだはるかとおい未来のことだが、火星の住民にとっては、その状態が目のまえにせまっていた。

火星の生物は、早くどこかべつの住みやすい惑星にでも移住してしまわないと、死にたえてしまうだろう。

火星の住民は、こんな苦しい立場においこまれたので、知力はするどくなり、心はいよいよ残酷になった。

そして、わたしたちには思いもよらぬすぐれた道具と知力をはたらかせて、広い宇宙を観測しているうちに、自分たちより五千五百万キロばかり内がわに、火星よりはるかに温暖で、移住するのにかなった一つの惑星を発見した。

この惑星は、むろん、わたしたちの地球だった。そこは、緑色の植物と灰色の水でおおわれ、大気には灰色の雲がただよい、いかにもゆたかなかんじであった。陸地には、生物がいくつも大群をなして住み、海洋には、いろんなのりものがひしめいていた。

わたしたち人間は、サルやキツネザルを、自分たちとはことなった低級な生物と考えているが、それとおなじように、火星人も、この地球に住む生物である人間を、自分たちとはことなる、低級な生物と想像しているにちがいない。

そこで、火星人は、そのおとった生物を征服して、地球に移住しようと計画した。じつのところ、火星人にとっては、しだいにせまってくる破めつから身をまもるためには、太陽系の内がわの惑星に攻撃をしかけるしかなかったのだ。

だが、わたしたち人間は、火星人のこうしたやりかたを、あたまごなしにやっつける権利はない。なぜなら、人間は、ヤギュウやドードーチョウのような動物をむじひに狩りたてほろぼしてしまったばかりでなく、人間なかまのおくれた種族まで、おなじようなめにあわせてきたからだ。

火星人は、地球攻撃の計画を、おどろくほど正確に計算していたらしい。火星人の数学にかんする知識が、わたしたち人間よりはるかにすぐれていることは、あきらかである。

わたしたちの観測機械がもっとすぐれていたら、火星人の攻撃がせまっていることを、十九世紀もずっとはじめのうちに知ることができただろう。

まえおきがながくなったが、火星人の攻撃がおこなわれたのは、いまから六年まえのことである。

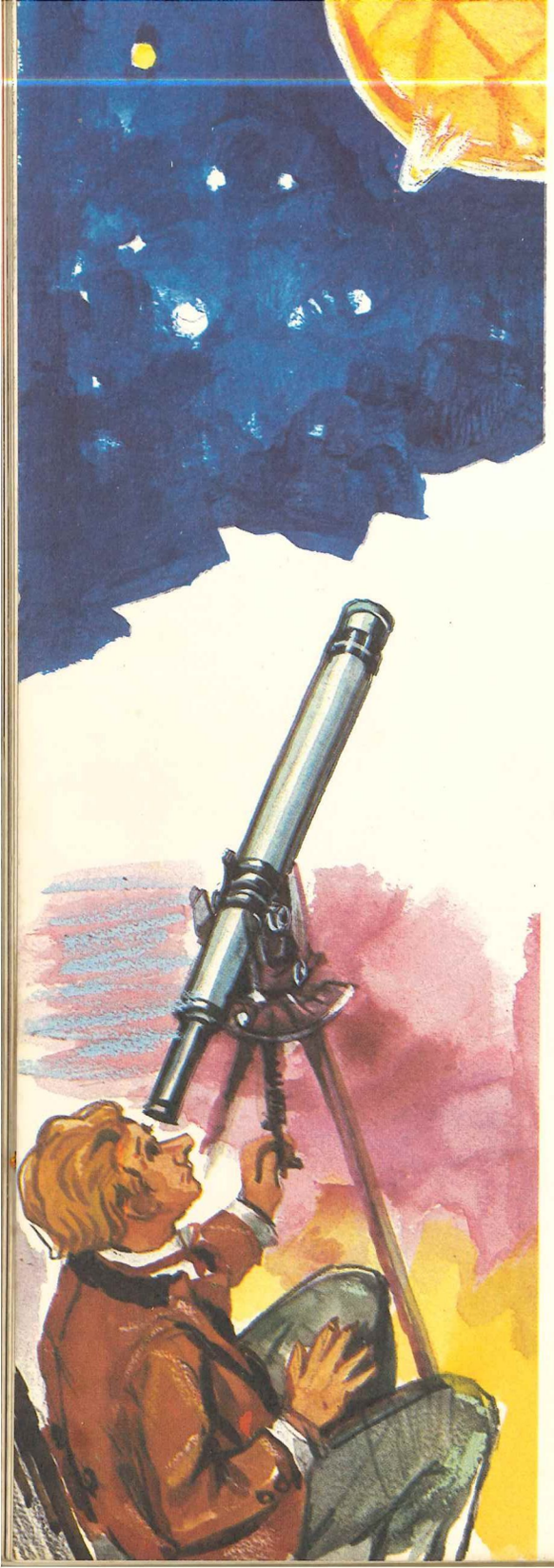
火星が地球から見て太陽の正反対の位置に近づいたころ、天文学者ラベルは、火星の表面に白熱したガス体の大爆発を観測し、そのおどろくべき情報を、天文情報交換所に電信でつたえてきた。

この現象のおこったのは、ま夜中ちかくだった。ラベルがただちに分光器で分析すると、おもに水素からなる白熱したガスのかたまりが、おそろしい速度で地球へむかって突進してくることがわかった。

このふきだす火のかたまりは、十二時十五分ごろには見えなくなった。

ラベルはそれについて、「大砲から燃えるガスがほとばしるように、」火星から大きい炎のかたまりが、ふいに、はげしく噴出をはじめた、と報告した。

のちにわかったことだが、このことばは、おどろくほどあ



たっていた。

つぎの日の新聞には、しかし、この事件についてほとんどなにひとつ発表されていなかったので、世間は、人類がこれまで経験したこともないような危険にせまられていることを、すこしも知らずにいた。

わたしも、火星上のこのガス爆発について、はじめはなにも聞かなかった。

わたしは、哲学者で、ロンドンの南西三十キロばかりのところにあるメーベリーという村に住んでいるが、この日、近くの村オターショーで、友だちの有名な天文学者オーグルビーにであった。

オーグルビーは、火星上のガス爆発のニューズにひどく興奮していて、わたしにそのことをつたえてからいった。

「今夜、ぼくといっしょに火星の観測をしてみないか？」

わたしは、このさそいをうけたが、その夜の観測のことは、いまでもはっきりおぼえている。

観測所は、まっ暗でしんとしていた。へやのすみには、おおいをかけたカンテラが、床にうすい光をなげていた。望遠鏡にとりつけた時計が、たゆみなく時をきざんでいた。屋根にあいた長方形のすきまからは、星くずをちりばめた夜空がのぞいていた。

オーグルビーは、歩きまわっていた。かれのすがたは見えず、足音だけが聞こえていた。

望遠鏡をのぞくと、こい青いまるい視野のなかに、小さなまるい惑星がういていた。それは、ひじょうに小さく、たいそう明るく、表面に横じまがかすかに見え、かんぜんな球体よりちょっとひらべったかった。

火星は、かすかにふるえているように見えたが、じつは、ときとともに移動していく火星を望遠鏡の視野にとらえておくための時計じかけのはたらきで、望遠鏡そのものがふるえているのだった。

火星のまわりは、はかりしれぬまっ暗な空間につつまれていた。寒い冬の夜に、星をちりばめたやみ空がどんなにふかく見えるかは、だれでも知っているけれども、望遠鏡のなかでは、それはいちだんとおくふかく思えるのであった。

火星人がわたしたちをめがけて送ったなにものかは、はるかな遠い空間を横ぎって、まい分何千キロという高速度で、しだいに近づいてきていた。それは、地球に多くの苦しみやわざわいをもたらそうとしているのだった。

そのとき、わたしは、火星を観測しながら、そんなことは夢にも考えてみなかったし、地球上のだれも、このミサイルが、そんなに正確に発射されたなどと、想像してもみなかったのである。

また、その夜は、火星上でもうひとつガス爆発があった。わたしは、それを自分の目で見たのであった。

精密時計がちょうど十二時をうったとき、火星のふちに赤味がかった光がひらめき、そのぶぶんが、ごくわずかだけ外へとびだした。そのことを知らせると、オーグルビーは、急にわたしにかわって望遠鏡をのぞいた。

わたしは、のどがかわいたので、やみのなかを手さぐりで歩いていって、氷さしのおいてある食卓に近づいた。

そのとき、オーグルビーがさけんだ。

「白熱ガスのかたまりが、地球のほうへ飛んでくるぞ。」

もうひとつのミサイルが、火星から地球へむけて発射されたのだった。第一のミサイルの発射ののち、二十四時間たっていた。

オーグルビーは、一時までで観測をうちきった。わたしたちは、歩いてオーグルビーの家にもどった。目の下の暗やみには、オターショーの村があり、何百人もの村人たちが、平和に眠っているのだった。

その夜、オーグルビーは、火星の状態について、さまざまの想像をのべた。

「火星に生物がいて、われわれに信号しているなんていう説もあるが、そんなことはばかげているよ。ぼくの考えだと、いま火星では、隕石が雨のようにふりそそいでいるか、火山の大爆発がおこっているか、どっちかだろう。火星に、人間に似た生物がいる可能性は、百万にひとつもないな。」

ところが、その夜も、つぎの夜も、何百という観測者が、まい夜ひとつずつガス爆発をみとめ、そういうことが十日つづいた。

これは火星人によるミサイル発射であることがのちにわかったわけだが、十日め以後発射が中止された理由については、地球上のだれも説明しようとした者はいない。

発射にともなうガスが、火星人のじゃまになったのかもしれない。地球からは、強力な望遠鏡をつかっても、ゆれうごく灰色の小さいしみとしか見えなかったが、煙かちりのこい雲が、火星のすみきった大気のなかにひろがって、おなじみの形をぼんやりぼかしてしまったからだ。

ついに、新聞もこのかわったできごとに気づき、火星の火山についての一般むきな記事が、あちこちにでるようになった。この知らせは、政治まんがにまで利用された。

こうして、世間のまったく知らないうちに、火星人が発射したミサイルは、まい秒数キロの速度で宇宙を横ぎって、一時間一時間、そして、一日一日と、わが地球にむかって近づいていたのである。

2 流星の落下

そのうちに、第一の流星が落下した。明けがた、ロンドンの南西百キロばかりのところにある町ウィンチェスターのはるか上空を東にむけて、ひとすじの光がはしるのが見えた。

何百人かの人たちがそれを見たが、ふつうの流星と考えたにちがいない。ある人は、それが緑がかった光の尾をひいて飛び、その尾が数秒もかがやいていたとつたえた。

そのころ、わたしはメーベリーの自分の家にいて、書斎で書きものをしていた。窓は、オターショーのある北がわをむいていて、よろい戸はあけてあったが、わたしはその流星を見かけなかった。

流星を見た人のなかには、それがひゅーっという音をたてて飛んだという者もあるが、わたしには、そういう音も聞こえなかった。

流星の落下を見た人たちも「また隕石がおちたな。」と、かるく考えたくらいで、その夜のうちにそれをさがしにでかけた者はひとりもいなかったらしい。

だが、オーグルビーは、流星を見かけて、それがホーセル、オターショー、ウォーキングの三つの村にかこまれた共用地（共同で使用する土地）のどこかにおちたものと判断したので、それを発見するつもりで、朝まだごく早いうちにおきだした。

はたして、砂とり場からあまり遠くないところで、それが発見された。地面にぶつかったいきおいで、とてつもなく大きい穴ができ、砂やじゃりが、ヒースの原の四方八方にとびちって、二キロさきから見えるようなもりあがりができていた。東がわのヒースに火がうつって、うす青い煙が夜明けの空にたちのぼっていた。

落下したものは、砂のなかにほとんどめりこんでいて、まわりには、それがおちたはずみでばらばらにくだかれたモミの木のはへんがちらばっていた。

そのものの地面からあらわれているぶぶんは大きい円筒形をしているが、うろこのような厚いこげ茶色の殻がいちめんにこびりついているので、形がぼやけて見えた。円筒の直径は、三十メートルもある。

オーグルビーは、その物体に近づいて、まず大きさにびっくりしたが、形には、なおさらどぎもをぬかれた。なぜなら、ふつう、隕石というものは、たいていのものが、かんぜ

んな球形をしているからだ。だが、そのものの形状はまったくちがっていた。

そのものは、空中を高速度で飛んできたので、空気のまさつで高熱の状態になっていて、あまり近よることができなかった。

円筒のなかでは、なにかがうごくような音がしていたが、オーグルビーは、円筒の表面のひえかたが平均していないので、そういう音がするのだろうと考えた。そのときには、円筒のなかがうつろになっているなどということは、思いもおよばなかったからだ。

オーグルビーは、そのものがつくった穴のふちに立って、そのふつうでない形や色をふしぎに思いながら、それが地球に到着したのには、なにか理由があるのではないかということを、おぼろげにかんじた。

朝早くの共用地は、おどろくほどしずかで、太陽はたったいまウェーブリッジ村のほうのマツ林からのぼったところだったが、あたりは、もう、あたたかになっていた。

鳥の声も聞こえず、そよ風さえふかなかった。もの音といえば、燃えがらにおおわれた円筒のなかで、かすかに、なにかもののうごく音が聞こえてくるにすぎなかった。共用地にいるのは、オーグルビーひとりきりだった。

そのときふいに、オーグルビーは、はっとした。隕石をおおっている灰色の燃えがらが、円筒の円形になったはしのところでくずれおちたのだ。それは、こまかにくだけておち、砂の上にふりそそいでいた。

ふいにまた、大きいかけらがするどい音をたててておち、オーグルビーは、心臓がとびあがるほどびっくりした。

そのしゅんかん、オーグルビーはあっけにとられていたが、やがてわれにかえった。はげしい熱にもかまわず、その物体をもっとくわしく見ようとして、穴のなかにはいおりていった。

円筒のはしのほうからだけ燃えがらがおちてくることはふしぎにかんじられた。物体がひえていくためにしょうじたことかもしれぬと思われた。

そのうちに、円筒の円形のはしが、ごくゆっくりと回転しているのに気づいた。それは、目につかぬほどゆっくりした回転であった。五分まえには、円のこちらがわにあった黒いしみが、いまはむこうがわになっていたので、はじめて、そのものが回転していることがわかったのだ。

そのときになってもなお、それがなにを意味しているのか

わからなかったが、やがて、にぶくきしる音がして、黒いしみが二、三センチとびだしてきた。

そのとき、オーグルビーは、はっと思いあたった。この円筒は、つくられたものだ——なかがうつろになっている——ねじで開閉するふたがついている。そして、円筒のなかで、なにかがふたをねじあけようとしているのだ。

オーグルビーは、大声でさけんだ。

「たいへんだ。このなかには人間がいる。焼け死にそうになって、にげだそうとしているのだ。」

たちまち考えがとんで、この物体が火星上のガス爆発と関係があるのではないかと想像した。

円筒のなかに生物がとじこめられていると思うと、いたたまれなくなった。熱さもわすれて円筒に近より、ねじをまわすのを手つだってやろうとした。

だが、円筒から発する熱があまりひどいので、おもわずあとずさりした。さもなければ、まだ赤く焼けている金属で、手をやけどしてしまっただろう。

しばらくまよったように立ちすくんでいたが、ふいにくるりと背をむけると、穴をよじのぼって、ウォーキング村のほうへ、気ちがいのように走りだした。

時間は、六時ごろだったにちがいない。とちゅうで馬車にであい、その御者にいま見てきたことを話して聞かせたが、あまりとっぴな話だし、オーグルビーのかっこうも、ぼうしがとんでいたし、ひどくとりみだしていたので、とりあってくれなかった。

ホーセル橋にきかかると、そばの居酒屋で小僧が入り口をあけているところだったので、その小僧にも話してみたが、やはりうまくいかなかった。

小僧は、オーグルビーを精神病院からにげだした気ちがいかしらと思いこんで、酒場のなかにとじこめようとした。

オーグルビーは、そんなことで、すこしおちつきをとりもどした。ロンドンで新聞記者をやっているヘンダースンが庭にいるのを見かけて、かきねごしによびかけた。

「ヘンダースン、ゆうべの流星を見たかい？」

「それがどうしたね？」

「そいつが、ホーセルの共用地におちてるんだよ。」

「ほう、隕石だって。それはおもしろい。」

「いや、それが、ただの隕石じゃないんだ。円筒形でね——それも、人工の円筒なんだよ。おまけに、なかになにかがいるんだよ。」

ヘンダースンは、シャベルを手にしたまま立ちあがった。
「なんだって？」
ヘンダースンは、かた耳がとおかったのだ。
オーグルビーは、自分の見てきたことをすっかり話した。
ヘンダースンは、一分もかからぬうちに、話の意味がわかった。そして、シャベルをほうりだすと、上着をひっつかんで、道路へとびだした。
ふたりは、すぐさま共用地にかけつけた。円筒は、まだおなじ位置に横たわっていた。しかし、内がわの音はもうやんでいて、円筒のふたと胴のあいだに、ぴかぴか光る金属のほそい輪があらわれていた。
ふたのかたわらで空気がはいるのかもれるのか、かすかなしゅうっという音がしていた。
ふたりは、耳をすましながら、うろこのような燃えがらにおおわれた円筒をステッキでたたいてみたが、なんのこたえもなかった。
「なかの人間は、気ぜつしているか、死んでいるか、どっちかだな。」
ふたりには、どうすることもできなかったので、大声で、がんばれとはげましておいてから、助けをもとめるために、もういちど村にかけもどった。
ふたりは砂まみれになり、気がたかぶり、とりみだしたようすで、朝日にてらされたほそい道をかけていった。ちょうど、商店ではおもて戸をあけ、住宅では寝室の窓をひらいているところだった。
ヘンダースンは、大いそぎで駅にとびこみ、電報でロンドンへニュースをつたえた。このところ、新聞では火星についての記事をのせていたから、読者の心には、このようなニュースをうけいれる用意ができているわけだった。
「火星から人間がきたが、死んでしまった。」
というううわさは、たちまちあたりにひろがった。そして、八時ごろには、少年たちや失業者たちがおおぜい、それを見物するために、共用地へとむかっていた。
わたしも、九時十五分まえごろ、新聞をとりにでたとき、新聞配達の少年からそのうわさを聞かされた。
むろん、わたしはひどくものめずらしい気持ちになったので、すぐに家をでてオーター ショー橋をわたり、砂とり場のほうへといそいでいった。

3　砂とり場で

わたしが砂とり場につくと、円筒の横たわっている大きな穴のまわりには、もう二十人ばかりの人があつまっていた。そのまわりの草やじゃりは、火薬の爆発でこげたように黒くなっていた。
ヘンダースンとオーグルビーのすがたはなかった。さしあたりは、どうすることもできないと思って、食事をしにもどったのだろう。
穴のかたわらには、四、五人の少年が腰をおろして、足をぶらぶらさせながら、大きい円筒に石をぶつけてふざけていた。わたしは、それをやめさせた。
見物人は、このあたりの庭師、あかんぼうをいだいた少女、肉屋のグレッグ、浮浪人、ゴルフのキャディーなどで、だれもほとんど口をきかなかった。
そのころ一般のイギリス人は、天文学のかんたんな知識さえ、ほとんどなかったのだ。
たいていの者は、円筒の大きなまるテーブルのようなはしを、だまってみつめていた。この人たちは、黒こげの死体がつみかさなっているものと思ってやってきたのに、大きい金属のかたまりがじっとしているだけなので、がっかりしたのだろう。
わたしがいるあいだにも、何人かはひきあげていったが、また、ほかの者がやってきていた。
わたしは、穴のなかへはいおりてみたが、足もとで、なにかがかすかにうごく音がしたように思った。円筒のふたは、まったく回転しなくなっていた。
はじめちょっと見ただけでは、ひっくりかえった馬車か、ふきたおされた木ぐらいにしかかんじられなかった。さびたガス・タンクが、半分ほど地面にうまっているように見えた。
円筒をおおった灰色の燃えがらは、ふつうの酸化物らしくなかったし、円筒とふたのあいだのすきまで光っている黄白色の金属の色は、ふうがわりなものであったが、そういうことは、かなりの科学的知識がないとわからなかった。
地球外の物質といっても、たいていの見物人には、なんのことかすこしもわからなかったのだ。
わたしには、そのときすでに、この円筒が火星からやってきたのだということがはっきりしていた。だが、そのなかに

生物がいることは、ありそうもないと考えた。ふたの回転は、自動装置なのだろうと思ったのだ。

オーグルビーは、火星には人間に似た生物などいないと主張したが、わたしは、はんたいであった。

わたしは、あれこれと想像をめぐらした。この円筒には、通信がはいっているかもしれぬが、それを翻訳するのはむずかしいだろう。それから、貨幣や模型のようなものがはいっているかもしれない。

だが、こういう想像が確実だというためには、円筒がすこし大きすぎた。わたしは、円筒がひらかれるのを見たくて、じりじりした。

十一時ごろになっても、なにもおこりそうになかったので、わたしはメーベリーの家へ歩いてもどった。しかし、おちついて哲学の研究をする気にはなれなかった。

午後、わたしはまた砂とり場にでかけていった。その場のようすは、だいぶかわっていた。夕刊につぎのような大見出しがでて、ロンドン市民をびっくりさせたのだ。

火星から通信到着
ウォーキング村のおどろくべき事件

円筒の上に立っているところからすると、円筒はずっと熱がさめてきたらしい。それでも、ステントは顔をまっかにして、汗をながしていた。

円筒はかなりほりだされていたが、下のほうはまだ土にうまっていた。

オーグルビーは、穴のふちにならんで見物している人ごみのなかにわたしを見つけて、よびかけた。

「おりてきたまえ。」

わたしがおりていくと、オーグルビーはいった。

「この土地の持ち主のヒルトン卿のところへいってくれないか？　見物がいよいよふえて、円筒をほりだす仕事のじゃまになってきた。とくに、子どもたちがじゃまだ。それで、ちょっとした柵をつくって、見物が近づけないようにしたいんだ。

円筒のなかでは、まだときどき、かすかなうごきが聞こえる。人夫たちがふたをねじろうとしたが、手がかりがないので、うまくいかなかったよ。

円筒はすごく厚いようだから、あのもの音は、外ではかすかにしか聞こえぬが、なかでは、たいへんなさわぎなのかもしれん。」

わたしは、オーグルビーのたのみをよろこんでひきうけた。そして、ヒルトン卿のやしきにでかけたが、ロンドンにでかけていて、ウォータールー駅六時発の汽車でもどるとのことだった。

そのときの時間は、五時十五分ごろだったので、わたしは家にもどって茶を飲んでから、ヒルトン卿をむかえに駅へでかけていった。

おまけに、オーグルビーが天文情報交換所におくった電信のおかげで、イギリスじゅうの観測所がいろめきたった。

砂とり場のそばの道路には、馬車が七、八台とまっていた。そのほか、近くの村から歩いてきた人たちも多いらしく、かなりの人だかりができていた。

焼けつくような暑さで、空にはひときれの雲もなく、風は、そよともふかなかった。

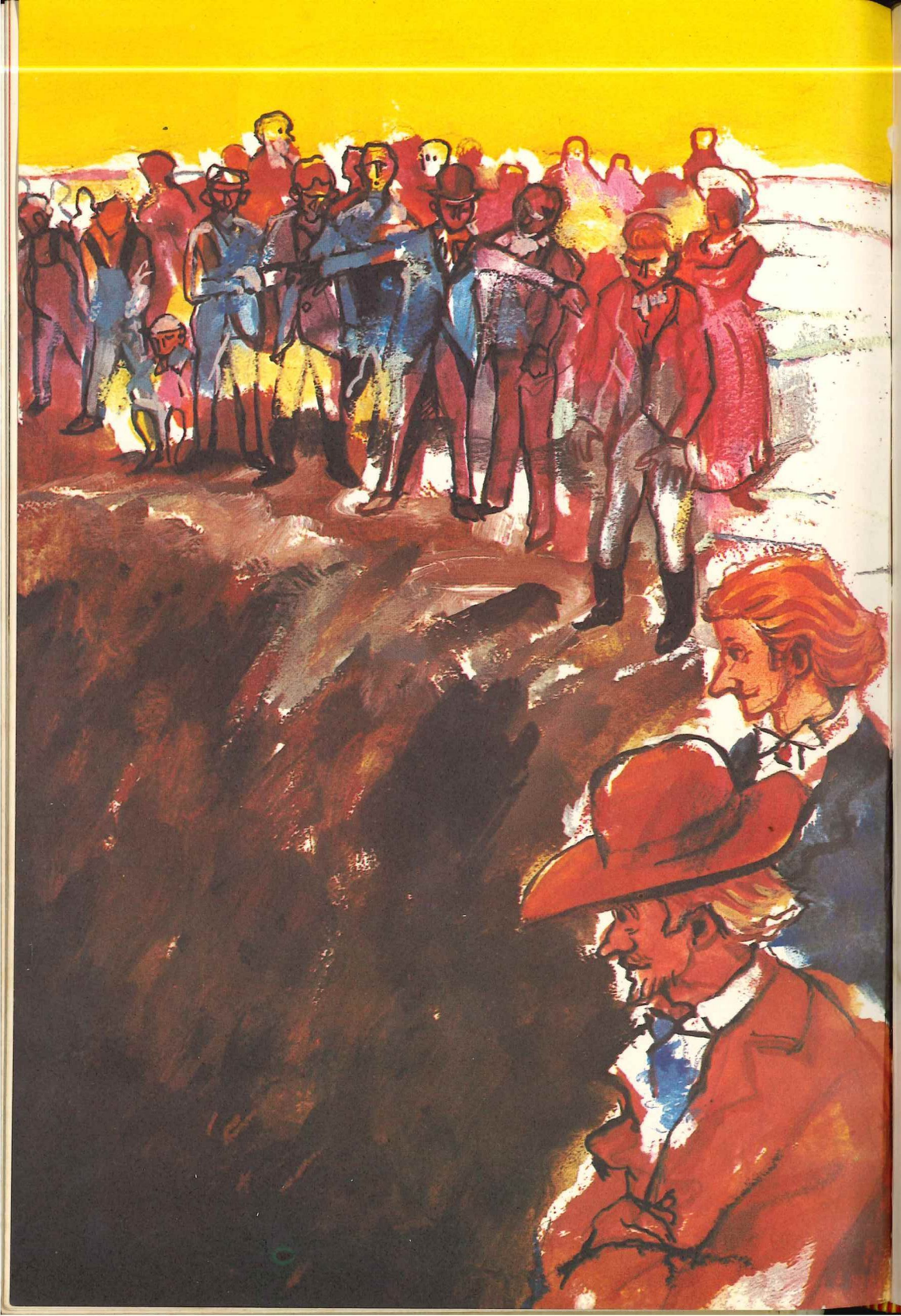
燃えていたヒースは、けしとめられていたが、北のオターショー村のほうにひろがった平地は、見わたすかぎり黒くこげて、まだ、煙がいくすじかたちのぼっていた。

西のチョバム通りにある菓子屋の主人は、商売じょうずなので、青いリンゴとジンジャー・ビールを手車にいっぱいつんで、むすこにはこばせて売りによこした。

穴の近くまでいってみると、なかには六、七人の男がおりていた。

新聞記者のヘンダースン、天文学者のオーグルビー、おなじ天文学者のステントの三人のほかに、三、四人の人夫がシャベルやつるはしをふるっているのだった。

ステントは、かんだかい声でてきぱきさしずをしていた。



4 円筒ひらく

わたしは、ヒルトン卿にあってから、また共用地へもどったが、そのときは、日がしずみかけていた。

穴のまわりの見物は、さらにふえていた。二百人くらいもいただろう。そのなかから、たくさんのさけび声がおこり、なにか、あらそいでもはじまっているようだった。

わたしは、なんとなく胸さわぎがした。近づくと、ステントの声が聞こえた。

「さがれ。さがるんだ。」

ひとりの少年が、わたしのほうへ走ってきて、わきをかけぬけながらいった。

「うごきだしたよ。ふたがまわって、はずれかけてる。こわいから、うちへかえろう。」

わたしは、人ごみにわけいった。二、三百の人間が、たがいにおしあいへしあいしていた。

だれかがどなった。

「あいつ、穴におちたぞ。」

何人かがさけんだ。

「さがれ、さがれ。」

わたしは、人だかりをひじでかきわけてすすんだ。だれもかれも、ひどく興奮しているようだった。穴のなかから、へんなぶんぶんいう音がひびいてくる。

オーグルビーがさけんでいる。

「このばか者たちをさがらしてくれ。円筒のなかに、どんなものがいるかわからんのだから。」

穴をのぞくと、店員らしいひとりの青年が、円筒の上に立って、外へはいだそうとしていた。人ごみにおしおとされたのだ。

円筒のふたは、内がわからねじあけられつつあった。きらきら光るねじのぶぶんが、六十センチちかくつきだしていた。

だれかが、わたしにぶつかってきた。わたしは、あぶなく円筒のふたにつきとばされるところだった。

わたしがふりむいたとたん、ねじがはずれたとみえて、円筒のふたが大きな音をたててじゃりの上におちた。

わたしは、うしろの男をひじでおしもどしてから、また円筒のほうをふりむいた。

ちょっとのあいだ、円筒の内がわは、まっ暗に見えた。わたしは、夕日とむきあっていたからだ。

だれもかれも、円筒のなかから人間に似た生物があらわれるものと予想していたにちがいない。すくなくとも、わたしはそう予想していた。

ところが、目をこらしているうちに、暗がりのなかで、なにかがうごめいているのが見えてきた。灰色で、かさなりあって波のようにうねうねうごいていて、目らしい二つのまるいものが光っている。

それから、ステッキぐらいのふとさの灰色のヘビみたいなものが、中央のからみあったかたまりからほどけて、にょろにょろと空中をのびてきた。つづいて、もう一本。

わたしは、ふいに、背すじが寒くなった。うしろにいた女が、悲鳴をあげた。わたしは、半分背をむけながら、まだ円筒に目をすえていた。そこからは、さらに何本かの触手がのびてきた。わたしは、人びとをおしもどして、穴のそばからしりぞきはじめた。

まわりの人びとの顔つきは、おどろきから、おそれにかわっていった。四方八方から、わけのわからないさけび声があがった。人びとは、いっせいにあとずさりした。

さっきの店員は、まだ穴のふちでもがいていた。わたしは、ひとりだけとりのこされた。穴のむこうがわの人びとも、にげだしていた。ステントも、そのひとりだった。

わたしは、もういちど円筒をふりむいたが、おさえられないおそれにとらえられ、目を見はったまま、石になったように立ちすくんだ。

円筒のなかから、クマぐらいの大きさで灰色をしたまるいかたまりが、のろのろと苦しそうにはいあがってきた。そして、円筒の口にせりだして光をうけると、ぬれた皮のようにぶく光った。

二つの大きな黒っぽい目が、じっとわたしをみつめている。

それは、まるい顔のようなものをもっている。目の下には、口があり、そのへりは、ふるえたりあえいだりしながら、よだれをたらしていた。

からだは、ひきつるように波うっていた。ほそ長い触手のようなものが、ひとつは円筒のふちをつかみ、もうひとつは空中でゆれていた。

生きている火星人を見たことのない人には、そのすがたの奇妙なおそろしさがわかるまい。

口はきみのわるいV字型で、上くちびるがつきでている。まゆはなく、くさび型をした下くちびるの下には、あごがない。その口は、たえまなくふるえている。

触手は、ヘビのかたまりのようで、肺は、ことなった大気のなかで、はげしくあえいでいる。地球のほうが火星より重力が大きいので、うごきは、いかにものろくさして、つらそうだ。

とりわけおそろしいのは、大きな目のあやしいかがやきで、見ているとむかむかしてくるほどだった。

油をぬったように光る茶色の肌は、どこかキノコに似ていて、ぎこちないのろのろしたうごきは、いいあらわしようがないほどいやらしかった。

わたしは、火星人をはじめてちらりと見ただけだったが、ぶきみさとおそろしさにうちのめされてしまった。

とつぜんに、怪物はすがたをけした。円筒のふちをこしてひっくりかえり、穴のなかにおちこんだのだった。大きな皮のかたまりがおちたときのような、どさっという音がした。

怪物は、奇妙なにぶいさけび声をたてた。つづいて、もうひとつの怪物が、円筒の暗い口にあらわれた。

わたしは、おそれでからだがこわばっていたが、そのとたんにこわばりがとけた。そして、くるりと背をむけると、百メートルばかりむこうのしげみめざして、くるったように走りだした。しかし、わたしはなかばふりむきながら、つまずきつまずき走った。あの怪物から目をはなせなかったのだ。

わたしは、しげみのなかであえぎながら立ちどまって、これからどういうことがおこるかと、まちうけた。

砂とり場のまわりには、そこここにいた人びとがちらばっていた。その人びとは、わたしとおなじように、おそれともつめのめずらしさのいりまじった気持ちで怪物のほうをみつめていた。といっても、見えるのは、怪物のいる穴のふちにもりあがったじゃりの山だけだった。

そのうちに、穴のふちで、まるくて黒いものが、でたりひっこんだりしているのに気づいた。それは、穴からはいあがろうとしている店員の頭だった。

店員は、肩まですがたをあらわし、さらにひざまであらわしたが、またすべりおちたらしく、頭だけしか見えなくなった。その頭も、ふいに見えなくなったとおもうと、かすかな悲鳴が聞こえたような気がした。

わたしは、あともどりして助けてやりたいといっしゅん思ったが、おそろしさにまけてしまった。

こうして、なにも見えなくなった。円筒が落下してできたふかい穴と砂の山にかくされてしまったのだ。

見物の数はへったが、それでも百人以上の人びとが、大きい不規則な輪になって、みぞのなかや、やぶのかげにひそみながら、ときどきみじかいさけび声をたてるだけで、砂の山をじっとみつめていた。

ジンジャー・ビールをつんだ手車が、ほったらかされて、燃えるように赤い夕空を背に、黒くうきだしていた。

砂とり場には、おきざりになった数台の馬車が列をなしていた。そして馬たちは、えぶくろのえさを食べたり、ひづめで地面をひっかいたりしていた。

5 熱線

わたしは、火星人が円筒からあらわれるのを見たとたんに、なにかにとりつかれたようになって、身うごきもできなくなった。そして、ひざまでかくれるヒースのなかに立ちすくんだまま、火星人がかくれている砂山をみつめていた。心のなかでは、おそれとものめずらしさとが、はげしくあらそっていた。

穴のほうへもどっていく勇気はなかったが、なかをのぞいてみたいという望みもはげしかった。

そこで、ずっと遠まわりして、ものかげに身をかくしながら、火星人たちをかくしている砂山に目をすえたまま、すすみはじめた。

いちどだけ、タコの足のようにほそくてしなやかな黒いものが三本、夕空を背に、ちらりと見えて、またすぐひっこめられた。

そのあとで、さきに円盤がついてぐらぐらまわっているほそい棒が、ひとふしつきだしてきた。あそこでは、いったいなにがおこっているのであろうか。

見物の大ぶぶんは、二つの群れにわかれてあつまっていた。ひとつの群れは、南よりのウォーキング村のほうに、もうひとつの群れは、西よりのチョバム村のほうにかまえていた。

みんなが、わたしとおなじように、おそれとものめずらしさのいりまじった気持ちでいることはたしかであった。

わたしの近くには、ごくわずかな人びとしかいなかった。わたしは、ひとりの男に近よった。それは、近所に住む人間だったが、名まえは知らなかった。

わたしは、声をかけてみたが、あいては、うわのそらで、こんなことばをくりかえした。

「なんてみっともない生きものだ。いやはや、なんてみっともない生きものだ。」

そこで、わたしは男のそばをはなれて、すこしでもよく見えるように、一メートルばかり高くなっているところにうつった。

日はおちて、夕やみがせまってきたが、そのほかにかわったことは、なにもおこらなかった。

ずっと左での、ウォーキング村のほうにあつまった人びとは、しだいにふえてきたとみえて、そこからかすかにざわめ

きが聞こえだした。チョバム村のほうの人びとは、ちりぢりににげさった。

穴のあたりでは、なんのうごきもかんじられなかった。

人びとは、そのことで勇気づけられた。ウォーキングのほうから新しい見物人がやってきたことでも、はげまされた。

夕やみがせまるにつれて、砂とり場にちらばっていた人びとは、そろそろうごきだした。二、三人ずつかたまった黒い人かげが、穴を中心に三日月型をつくって、すすんでは立ちどまり、立ちどまってはすすんでいくのだった。わたしも、自分なりに穴の近くに近よってみた。

それから、何人かの御者たちが、だいたんに砂とり場へはいっていくのが見え、ひづめの音や車輪のきしる音がした。ひとりの青年が、リンゴをつんだ手車をごろごろおしていった。つづいて、穴から三十メートルたらずのところを、ひとかたまりの人びとがすすんでくるのに気づいた。その先頭の人間は、白旗をふっている。

これは、使節団だった。人びとは、いそいで相談して、火星人はきみわるいすがたはしているが、知恵のすすんだ生物であるから、信号を発しながら近づき、自分たちも知恵のすすんだ生物だと知らせようということになったのだった。

使節団は、はじめは右に、つぎに左にと、白旗をふっていた。あまり遠くて、そのなかにだれがいるのか、わたしには見わけられなかったが、のちになって、オーグルビー、ステント、ヘンダースンの三人もくわわっていたということがわかった。

この小さい一団がすすむにつれて、とりまきの人びとの輪も、すこしずつ前へすすんでいった。

そのとき、ふいに、光がさっとひらめいて、穴のなかから、緑色に光る煙が三どふきだし、つぎつぎに空へたちのぼった。この煙は、炎といったほうがよかったが、とても明るかったので、それがたちのぼってきえると、あたりは、空も地面も、いちだんと暗くなったように見えた。どうじに、しゅうっという音がかすかに聞こえてきた。

穴のむこうがわでは、白旗をかざした人びとが、このありさまを見て立ちすくんだ。緑色の煙がたちのぼるとともに、人びとの顔は青白くてらしだされたが、それがきえると、またたかげってしまった。

しゅうしゅういう音は、しだいにつよまってぶんぶんいう音になり、やがて、うなるような大きい音になった。そのとき、穴から、こぶのようなものがゆっくりあらわれ、ひとすじの光が、ほとばしるように見えた。

それにつづいて、まわりにちらばった人びとのなかから、つぎつぎに目もくらむような炎がひらめいた。なにか目に見えぬものが放射されて、それが人びとにぶつかり、白い炎をあげるかのようだった。ひとりひとりが、あっというまに火にかかわってしまったように見えた。

そして、その人びとと自身が燃える光で、その人びとがよろめいてたおれるのが見えた。たおれた人をささえようとした人は、背をむけてにげだした。

わたしは、立ちすくんでみつめていたが、すこしはなれているので、その小人数の人びとが、そうしてつぎつぎに死んでいるのだということが、すぐにはわからなかった。なにかかわったことがおこっているとかんじただけだった。

目もくらむような光が音もなくひらめくと、人がばったりたおれて、うごかなくなった。そして、目に見えぬ熱線が人びとの上をとおりすぎると、マツの木が燃えあがり、かわいたハリエニシダのしげみが、ぼっと音をたてて炎のかたまりになった。また、はるかむこうの丘のあたりで、木やかきねや木造の家が燃えひろがるのも見えた。

この死の炎、目に見えない熱の剣は、ふれるものをすばやく確実になぎはらった。近くのしげみが燃えあがった。熱線がわたしのほうへむかってきたのだ。わたしは、おどろきのあまり、身うごきもできなかった。砂とり場のほうで、火がぱちぱち燃えるのが聞こえた。

とつぜん、馬の悲鳴がおこり、また急にしずかになった。目には見えぬが、すさまじく熱い線が、わたしと火星人のあいだのヒースをつきぬけたようだった。砂とり場のほとりの曲線にそって、暗い地面が煙をふき、ぱちぱちと音をたてていた。

ずっと左てのあたり、ウォーキング駅からの道路が共用地にはいるところで、なにかががらがらと音をたててたおれた。それとともに、しゅうしゅういう音やぶんぶんいう音がやんで、黒いまる屋根のようなものが、ゆっくり穴のなかにしずんで見えなくなった。

以上のことは、すべて、いっしゅんのできごとだった。そのあいだ、わたしは、おどろきのあまり身うごきもできず、光に目がくらんで、だまって立っていた。

死の熱線がかんぜんな円周をえがいて付近をなぎはらっていたら、わたしはおどろいているうちに殺されてしまっただ

ろう。だが、それは、わたしからそれてとおりすぎたので、助かった。わたしの周囲は、とつぜんに暗くぶきみになった。

火星人の機械は、ほそい柱のいただきで鏡が休みなくまわっているほかは、なんにも見えなくなった。

そこここのしげみや木は、まだ煙をあげて燃えていた。ウォーキング駅のほうの家いえも、しずかな夕空に炎がたちのぼっていた。

わたしは、この暗い共用地に、まもってくれるものはなにひとつなく、ただひとりのこされていることに気づいた。ふいに、まるでものがおちかかるように、わたしは急におそろしくなってしまった。

わたしは、やっとのことで身をひるがえすと、ヒースの原をつまずきながら走りだした。わたしは、ただもうおそろしかった。火星人がこわいばかりでなく、自分の周囲のしずまりかえった夕やみまでこわくなった。

わたしは、すっかりいくじなしになってしまって、子どもみたいに、すすり泣きながら走っていった。いったん背をむけてしまうと、もう二どとふりむく勇気もなかった。

これで安心だと思ったとたんに、あのあやしい死が、光のように急におそいかかって、わたしをうちのめしてしまうのではないかと思った。

6　チョバム通りのみな殺し

火星人が、あんなに急激に、あんなに音もたてないで人間を殺せる理由は、わたしたちにはいまでもやはりなぞである。

多くの人たちの説によると、火星人は、ほとんどかんぜんに絶縁された小箱のなかで、なにかの方法によって、すさまじい熱を発生させることができるのだという。

そのはげしい熱は、ある曲面鏡で、どんな目標にでも、平行な熱線のたばを投射することができる。曲面鏡がどんなしかけになっているかはわからぬが、灯台の曲面鏡が平行な光線のたばを投射するのとおなじ原理であろう。

しかし、こうした問題をすみずみまで、よくわかるように説明できた者はいない。いずれにしても、なぞの兵器が熱線だということはたしかだ。それも、光のように目にみえるのではなく、目にみえぬ熱線である。

それがふれたとたんに、燃えるものならなんでも、ぱっと炎をあげる。なまりは水のようにとけてながれ、鉄はぐにゃぐにゃになり、ガラスはわれてとける。水はたちまち蒸気となって爆発するのだ。

その夜は、四十人ばかりの人が、穴のまわりに横たわって、星あかりにてらされていた。みんな、だれとも見わけのつかぬほど黒こげになっていた。ホーセルからメーベリーへかけての共用地は、夜どおし、人かげもなく、あちらこちらで火があかあかと燃えていた。

この人たちの殺されたのは、八時半ごろだったが、そのころには、穴の近くに三百人ばかりの見物人があつまっていただろう。そのほかには、警官が三人いて、ステントのさしずをうけながら、人びとをあとにさがらせようと、それだけがせいいっぱいであった。

人があつまると、いつもさわぎたてたがるおろか者がいるものだが、このばあいも、そういうてあいがごたごたをおこしていた。

ステントとオーグルビーは、そうしたさわぎがおこるかもしれぬと予想したので、火星人があらわれるとすぐ、ホーセル村から兵営に電報をうって、この奇妙な生物がやじうまに乱暴されるのをふせぐために、一個中隊の兵士をだしてほしいとたのんでおいた。

そのあと、ふたりは穴のところにもどって、あの不運な使節団の先頭にたつことになったのだ。この人たちの死んだようすについては、すでにのべたとおりだが、にげのびた者たちが見たことは、わたしが見たこととほとんどおなじだった。つまり、三ど緑色の煙がたちのぼり、ぶんぶんいうひくい音がしたとおもうと、炎があがったのだ。

しかし、ほかの人びとは、わたしよりずっとあぶないめにあっていた。ヒースのしげった小山が熱線の下のぶぶんをさえぎったからこそ、やっと助かったのだ。もし曲面鏡がもう二、三メートルも高くかかげられていたら、だれも生きのびて事件の真相をつたえることはできなかったろう。

にげのびた人たちは、炎があがり人びとがたおれるのを見た。まるで、目に見えぬ手が、しげみに火をつけながら、急にこちらに近よってくるかと思われた。

それから、ぶんぶんいう音のほかに、ひゅうっという音がしたとおもうと、熱線が頭すれすれになぎはらい、道にそった木々のこずえが燃えあがったり、家いえがくずれたりした。

人びとは、おそろしさのあまり、しばらくは、だまったまま立ちすくんでいたらしい。

木の葉や小枝が燃えながら地面におちはじめた。ぼうしやきものに火がうつった。

悲鳴やさけび声がどっとあがった。馬にのった警官がひとり、頭をかかえてわめきながら、人ごみをわけてかけてきた。

ひとりの女がさけんだ。

「こっちへくるわ。」

たちまちみんながうしろをふりむき、ウォーキング村のほうへ、われさきににげだした。それは、ヒツジの群れが、めくらめっぽう走るときに似ていた。

道が土手にはさまれて、せまく暗くなっているところへくると、人びとはひしめきあって、死にものぐるいにもがいて、ぬけ道を見つけようとした。

このあらそいのなかで、女がふたりと少年がひとり、ふみ殺されておきざりになってしまった。

7 家にたどりつく

わたし自身も、どのようにして、そこからにげのびたか、おぼえていない。ただ、木にぶつかったり、ヒースのしげみにつまずいたりしたことだけはたしかであった。心は、火星人へのえたいの知れぬおそれでいっぱいだった。あの残酷な熱の剣が、いまにもふりおろされて、うちくだかれるのではないかとしんぱいした。

なんとか道にでたので、それにそって走りつづけたが、ついに一歩もすすめなくなった。心をはげしくゆさぶられたのと、からだをやたらにうごかしたのとで、へとへとになり、よろめいて道ばたにたおれてしまった。

そこは、ガス工場のそばで、運河にかかっている橋の近くだった。わたしは、じっと横たわっていた。

しばらくして、やっとおきあがったものの、奇妙にとまどった気持ちだった。しばらくのあいだ、自分がなぜここにいるのか、わけがわからなかった。

まるで、こわい夢を見ていたような気がした。さっきのことは、ほんとうにおこったのだろうか。

わたしは、立ちあがって、橋の急な坂をよろめきながらあがっていった。頭のなかはからっぽだった。筋肉や神経は、すっかり力をなくしてしまった。

わたしは、やっと橋をわたりおえた。すると家の門の前で、何人かの人たちがのんびり話しあっていた。これは、いつも見なれたながめだった。

わたしは、よびかけてみた。

「共用地から、なにか知らせがありましたか？」

門のところには、ふたりの男とひとりの女がいた。いっぽうの男がききかえした。

「なんですかね？」

「共用地から、なにか知らせがあったかというんです。」

「あんた、そこにいってきたんじゃありませんかい？」

女がいった。

「共用地の事件では、みんな頭がへんになったみたいね。いったい、どうしたっていうんです？」

わたしはいった。

「火星から人間がきたという話は、まだ聞いていませんか？火星からやってきた生物ですよ。」

女はしゃべった。

「そんなばかげた話は、もうたくさんですよ。ごくろうさまなことだわ。」

三人とも、どっとわらった。

わたしは、ばかにされたかんじで腹がたった。自分が見てきたことを話してきかそうとしたが、うまくいかなかった。三人は、わたしのしどろもどろの話しぶりを聞いて、またわらいだした。

わたしは、いっそうむっとした。

「いまに、もっとくわしいことがわかるさ。」

そして、家へむかって歩きだした。

妻は、わたしを玄関にでむかえて、びっくりした。わたしの顔は、それほどげっそりしていたらしい。

食堂にはいって腰をおろし、ぶどう酒を飲んだ。そして、すこし気がおちつくとすぐ、さっき見たことを話してきかせた。

わたしの妻があまりこわがったので、わたしは、やわらげるためにつけくわえた。

「しかし、ひとつだけいっておきたいことがある。やつらは、のろのろはいまわることができるだけだ。穴にとじこもって、近づいた者を殺しはしても、穴からでることはできない。だが、おそろしいやつらだ。」

妻は、まゆをひそめ、わたしの手をとっていった。

「やめて、あなた。」

「気のどくにな。オーグルビーは、あそこにたおれているんだ。死んでしまったんだ。」

妻は、わたしの経験をありえないこととは思わなかったのだ。わたしは、妻の顔が死人のようにあおざめているのに気づいて、ふいに話をやめた。

妻は、くりかえしていった。

「火星人は、ここまでくるかもしれないわ。」

わたしは、妻にぶどう酒をすすめて、安心させようとつとめた。

「やつらは、ほとんどうごけないんだ。オーグルビーもいっていたが、火星人は地球に住みつくことはできない。やつらにとって、とくにじゃまになるのは、重力の問題だ。地球の表面の重力は、火星の表面の三倍もある。だから、火星人の体重は、地球上では、火星上の三倍になる。ところが、筋肉の力は、もとのままなのだ。

そういうわけで、火星人は、自分のからだがなまりのかた

まりみたいにおもくかんじるだろう。」

じつのところ、世間でも、火星人にたいしてこんな考えをいだいていた。つぎの朝の新聞には、そういう意見ものべられていたのだ。

だが、わたしたちは、二つのことがらを見おとしていた。地球の大気は、火星の大気よりはるかに多くの酸素をふくんでいる。このこい酸素のおかげで、火星人のからだは元気づいて、体重のふえたことをおぎなうにちがいない。

つぎに、火星人はすぐれた機械じかけをもっているから、いざというときには、筋肉のはたらきをおぎなうことができるのだ。

だが、そのときのわたしは、そういうことがらを考えにいれなかったので、火星人には、まったく勝ちみがないときめてしまった。

わたしは、自分の家の食卓について、ぶどう酒を飲み食事をとっていることで、しだいに勇気とおちつきをとりもどした。

わたしは、ぶどう酒のグラスをもてあそびながらいった。

「やつらは、ばかなことをしたものだ。やつらのほうも、おそろしくて見さかいがなくなっているにちがいない。だから、あんなに危険なのだ。

たぶん、やつらは、この地球に生物がいるとは思っていなかったのだろう。まして、知恵のすすんだ生物がいるとはね。

最悪のばあいには、穴に弾丸をぶちこめば、やつらはみな殺しさ。」

そんなことはわたしには思いもよらぬことだったが、これが文明人らしい食事のさいごになって、それから何日も、奇妙でおそろしいはめにあわねばならなくなったのだ。

8 金曜日の夜

これは、金曜日のことだった。じつにふしぎな話だが、こんな大事件がおこっているというのに、世間の人びとは、ほとんどいつもとおなじ生活をしていた。

円筒が落下した穴を中心として半径八キロの円をかいたとすると、その円の外がわにいる人びとは、金曜日の夜までは、火星人のしゅう来で、ふだんの気分や習慣をいくらかでもかえた者は、まず、ひとりもいなかったろう。

むろん、多くの人たちが円筒のことを聞いていたが、それをむだ話のたねにするくらいのことだった。

熱線で殺された新聞記者のヘンダースンは、円筒のふたがしだいにひらきかけているという電報をうったが、ロンドンの新聞社では、それをなにかのまちがいだと考えて、ヘンダースンにといあわせの電報をうった。

ところが、ヘンダースンからは、なんの応答もなかった。そのころには、もう、殺されてしまっていたのだ。新聞社は、そんなことは知らずに、号外をだすことをやめてしまった。

穴を中心にした半径八キロの円の範囲でさえ、たいていの人びとはぼんやりしていた。いつものように夕食をとったあと、おとなは庭いじりなどをし、若い人たちは散歩にでかけ、学生は本を読み、子どもたちはベッドにおいこまれていた。

それでも、村の通りや居酒屋では、火星人についてのうわさがかわされ、人びとは、ついさっきの事件にかんして、それをじっさいに見た者たちの話で興奮していた。

チョバム橋とホーセン橋には、人びとの群れが不安そうにたたずんでいた。

あとになってわかったことだが、冒険ずきな者がひとりふたり、暗やみのなかを火星人たちのすぐそばまではいよっていった。しかし、かれらは、二どともどってこなかった。というのは、ときどき軍艦のサーチライトのような光線が共用地をなぎはらい、そのあとから、ただちに熱線が放射されるようになっていたからだ。

そのほかは、広い共用地は暗く、がらんとしていた。そして、ここかしこに、黒こげの死体が、星あかりに横たわっていた。多くの人びとは、穴のなかでハンマーをふるうような

音がするのを聞いた。

その晩、火星人たちは眠りもせず、たゆみなくハンマーをふるって、機械をこしらえているらしかった。ときどき、緑色がかった白い煙が、星空にたちのぼった。

十一時ごろ、一個中隊の兵士が、ホーセル村をとおりぬけて共用地につき、そのかたわらにひろがって警戒線をはっていた。

そのあとで、べつな一個中隊が、チョバム村をとおりぬけてすすみ、共用地の北がわにひろがった。

いまや、軍も状況の重大さに気づいたのだった。さらに、軽騎兵一個大隊、機関銃二ちょう、兵士四百人が、共用地をめがけて出発をはじめた。

十二時二三秒すぎ、ウォーキング村の人びとは、北西部のマツ林に、ふたたび流星のおちるのを見た。それは、緑色の光をはなって落下し、夏の電光のようにひらめいた。第二の円筒が到着したのであった。

9 戦闘開始

つぎの土曜日は、不安にみちた日で、いまでも記憶に、はっきりとのこっている。

わたしはあまり眠れなかったので、朝早くおきだした。朝食まえに庭にでて耳をすましたが、共用地からは、ヒバリの声が聞こえてくるばかりだった。

いつものように牛乳配達がやってくる音がしたので、横門へまわっていって声をかけた。

「火星人について、なにか新しいニューズがあったかい？」

「夜のうちに、火星人は軍隊にとりまかれました。じきに、大砲もくるそうです。でも、できればやつらを殺さないでおくんだそうで。」

となりの家の主人が庭の手いれをしているのが見えたので、しばらく話をした。となりの主人はいった。

「軍隊は、きょうのうちに、火星人どもをつかまえるか、みな殺しにするかできるでしょう。やつらが人間をまるで近よせぬのは、なんともぎんねんなことです。やつらが、火星で

どんな生活をしているか、それを知るのも、おもしろいでしょうに。まなぶべきことがらも、ひとつやふたつはあるかもしれませんからね。

ところで、ゆうべ、あのけしからん円筒がもうひとつ、バイフリートのゴルフ場におちて、マツ林が燃えあがったそうですよ。ひとつだけでもたくさんなんですがな。」

こんな口をききながら、たいそうきげんよくわらっていた。

朝食のあと、わたしは仕事をせずに、共用地のほうへいってみることにした。

鉄橋の下には、一団の兵士がいた。工兵らしい。兵士のひとりが、わたしにいった。

「運河のむこうへは、だれもいってはいけないことになってますよ。」

道にそって橋のほうを見ると、歩哨が立っていた。

わたしは、兵士たちとしばらく話をして、前日の夕がた火星人を目撃したことを話した。兵士たちは、まだ火星人を見ていなかったので、わたしにいろんな質問をあびせた。

わたしが熱線のことを説明すると、兵士たちは、たがいに議論をはじめた。

「熱線をさえぎるもので、すがたをかくして突撃することだ。」

「ばかをいえ。そんな熱をさえぎれるものなんかあるものか。地形を利用して、できるだけ近よってから、ざんごうをほるしかないよ。」

「ざんごうなんかふっとばしちまえ。おまえときたら、いつでもざんごうをほることばかりいう。ウサギにでも生まれてくりゃよかったんだ。」

ひとりの兵士が、わたしをふりむいた。

「やつらには、首がないんですね。」

わたしは、説明をくりかえした。兵士はうなずいていった。

「タコみたいなもんですな。それにしても、なぜ、大砲をぶちこんでかたづけちまわないんだろう。ほっとけば、なにをされるかわかったもんじゃない。」

ほかの兵士がいった。

「どこに大砲があるんだ。ぐずぐずしてはいられん。突撃するんだ。それを、いますぐやることだ。」

兵士たちは、こんなふうに議論していた。しばらくして、わたしは駅へいって、できるだけ多くの朝刊を買いあつめ

た。

だが、つまるところ、わたしは共用地のようすをひと目も見ることができなかった。共用地のまわりは、すっかり軍隊にかこまれて、だれもたちいれぬようになっていたからである。

けれど、町の人びとは、軍隊が出動したおかげで、すっかり安心をとりもどしていた。

ホーセル村のはずれに住む人びとは、軍の命令で、家をしめきって、たちのきはじめていた。

四時半ごろ、わたしはまた駅へでかけて夕刊を買った。朝刊には、ステント、ヘンダースン、オーグルビーたちが死んだことについて、不正確な記事しかでていなかったからだ。だが、夕刊の記事も、わたしの知っているようなことがらばかりだった。

どの新聞を読んでも、きまってつぎのような記事がかかげられていた。

火星人は、まったくすがたを見せない。穴のなかでなにか仕事をしているらしく、ハンマーをうつような音が聞こえ、たえず緑色の煙がたちのぼっている。あきらかに、戦闘の準備をととのえているにちがいない。火星人への連らくも、さらにつづけてみたけれども、成功しなかった。

ある工兵がわたしに話してくれたところによると、火星人への連らくは、みぞのなかにかくれながら、長いさおにつけた旗をふっておこなわれたが、火星人のほうでは、まるであいてにしなかったという。

火星人との戦闘がせまっていることは、たしかだった。しかし、わたしは、火星人があっさりほろぼされるものと信じきっていた。火星人は、穴のなかでうごきがとれないでいるように思えたからだ。

三時ごろ、北東の方角で、大砲のひびきが、きまったかんかくをおいて、聞こえてきた。第二の円筒が落下したマツ林が、砲撃されているのであった。円筒のふたがひらくまえに、破壊してしまおうというのであった。

だが、第一の円筒の火星人を攻撃するための大砲がチョバム村についたのは、五時ごろになってからだった。

夕がたの六時ごろ、わたしは妻とお茶を飲みながら、ま近にせまった戦闘について、ねっしんに話しあっていた。

すると、共用地のほうから、にぶい爆発音がひびいてきた

が、そのすぐあとから、ひとしきり射撃の音が聞こえてきた。

とつぜん、わたしたちのすぐ近くで、はげしくもののくずれる音がして、地面がゆれうごいた。しばふにとびだしてみると、学校のそばの木々のこずえが、煙まじりの赤い炎につつまれ、そのとなりの教会の塔が、くずれおちていた。学校の屋根も、大砲のたまが命中したように、すっかり破壊されていた。

わたしの家のえんとつまで、弾丸にやられたようにくだけてとびちり、そのはへんが、がらがら音をたてて屋根からころげおちて、書斎の窓下に、赤いれんがの小山ができているのであった。

わたしも妻も、びっくりして立ちすくんでいた。やがて、わたしは、正気をとりもどした。学校が破壊されたとなると、このメーベリー丘のいただきには、火星人の熱線がじかにとどくにちがいない。

わたしは、いきなり妻の腕をつかんで、道路へつれだした。

「もう、ここにぐずぐずしてはいられないよ。」

わたしがそういっているうちに、共用地のあたりで、またしばらく射撃の音がひびいてきた。

妻は、おびえあがって、たずねた。

「でも、どこへいったらいいのかしら?」

わたしは思いまよったが、いとこがメーベリーから二十キロばかり西にあるレザーヘッド村にいることを思いだして、あたりのはげしいもの音にまけぬようにさけんだ。

「レザーヘッドへいくんだ。」

妻は、わたしから目をそらして、坂の下のほうを見やった。人びとが、びっくりして家からとびだしていた。

妻はいった。

「どうやってレザーヘッドへいきますの?」

丘の下では、三人の軽騎兵が、学校のひらいた門をかけぬけていった。ほかのふたりは、馬をおりて、家から家へと走りまわりはじめた。

木々のこずえから煙がまいあがり、それをすかしてかがやく太陽は、血のようにまっかで、地上のあらゆるものに、きみのわるい光をなげかけていた。

わたしは、妻にむかっていった。

「ここにおいで。ここにいれば安全だから。」

そしてすぐ、「まだら犬亭」という居酒屋にむかった。そ

この主人が、馬と二輪馬車をもっていることを知っていたからだ。わたしは走った。丘のこちらがわにいる者たちは、まもなくみんなにげだすだろう。そうなれば、馬も馬車も手にはいるまい。

「まだら犬亭」につくと、主人は、外でなにがおこっているかも気づかずに、酒場でひとりの男と話していた。

「一ポンドはいただかなきゃなりません。それに、うちには、あいつをかりたてていくものはいませんぜ。」

わたしは、主人が馬と馬車の話をしているのだと思って、口をはさんだ。

「わたしは、二ポンドだすよ。」

主人は、ふしぎそうにききかえした。

「なにに二ポンドだすっていうんです?」

「夜中までにもどしにくるよ。」

「やれやれ。なんでそんなにいそいでおいでですね。わしは、このお客さんに、ブタを一ぴき売ってるとこなんです。二ポンドですって? それに、もどしてくれるんですって? いったい、どんなことがおこってるんです。」

「家をたちのかなければならなくなったので、馬車がいるんだ。」

じつのところ、そのときのわたしには、ここの主人も、すぐ店をたちのく必要があるとは思えなかったのだ。

わたしは、馬車を借りると、それにのって、すぐ家の前にもどり、妻と女中にあずけておいて、自分は家のなかにとびこんだ。そして、だいじなものをまとめたりしているうちにも、庭のブナの木が、すでに燃えはじめていた。

そこへ、馬をおりた軽騎兵がひとりかけあがってきた。家いえをまわって、人びとにたちのくようにすすめているのだ。わたしが、荷物をテーブルかけにつつんで玄関にでていくと、ちょうど、その男がとおりかかったので、声をかけた。

「なにか新しい知らせはありますか?」

軽騎兵はふりむくと、わたしをみつめながら、わめくようにいった。

「やつらは、皿おおいみたいなものをかぶって、はいだしてきたぞ。」

そういって、むこうの家のほうへとかけだしていった。ふいに、黒い煙が道を横ぎってながれてきて、そのすがたをかくしてしまった。

わたしは、馬車のところにもどると、妻のわきの御者席にとびのって、馬にむちをあてた。馬車は、煙と騒音にみちた通りをつきぬけて、南のほうへとかけおりていった。

丘のふもとでふりむくと、黒い煙が、もうもうとながれるなかに、赤い炎がいくすじかまじって、しずかな空にたちのぼっていた。道には、こっちへ走ってくる人たちのすがたがちらばっている。

遠くで、かすかに機関銃のひびきがしたが、またすぐにしずまりかえった。小銃の音も、とぎれとぎれに聞こえた。火星人は、熱線がとどくかぎりのものを焼きはらっているにちがいない。

わたしは、うまい御者ではなかったが、せいいっぱい馬をはげまして、レザーヘッド村へむかう道を、いちもくさんに走らせたのだった。

10　あらしのなかで

めざすレザーヘッド村は、メーベリー村から二十キロばかりはなれていた。

わたしたちの馬車は、青あおとした牧場のあいだを走っていた。メーベリーでは、あんなさわぎがおこっていたのに、ここはまったく平和で、ものしずかだった。

夜の九時ごろ、わたしたちはぶじにレザーヘッドにたどりついた。

馬車が走っているあいだ、妻は、みょうにだまりこくっていた。なにかわざわいがせまっているというかんじに心がふさいでいたのだろう。妻としては、わたしが「まだら犬亭」の主人と約束してさえいなければ、わたしにレザーヘッドにいてもらいたいらしかった。あとになってわかったことだが、そうしていればどんなによかっただろう。

わたしは、妻のことをいとこによろしくたのんで、またメーベリーへむけて出発したが、見おくりにでた妻の顔は、あおざめていた。

だが、そのときのわたしは、メーベリーにもどることをこわいとは、すこしも思わなかった。夕がたメーベリーをたちのくときに聞いた砲声で、火星人がほろぼされてしまったものと思っていたからである。

かえり道についたときは、もう十一時になっていた。まっ暗な夜で、昼間とおなじようにむし暑かった。頭のうえでは、雲のうごきが速かったが、地上では、そよとの風もなかった。

メーベリーまで半分くらいのところまできたとき、西の地平線にそって、血のように赤いかがやきが見えてきた。その赤いかがやきは、じりじり空にはいあがっていって、走っていく雲とまじりあった。

馬車が谷間へくだったので、赤い光はちょっと見えなくなったが、谷をでて小さな丘にのぼると、また見えるようになった。まわりの木々は、あらしがせまってきたので、おののいていた。

そのとき、近くの村の教会から、十二時をつげる鐘の音が聞こえた。ゆくては、赤い空を背に、メーベリーの丘が、木木や家いえまで見わけられるほど、はっきりとうかびあがって見えた。

そのようすをみつめているうちに、きみのわるい緑色の光があたりをてらした。馬がびくりとして、たづなをひっぱって、にげようとした。緑色の光の糸が空をはしる雲をつらぬき、左での野原におちた。第三の流星が落下したのであった。

それにつづいて、目もくらむようなむらさき色の光がひらめいた。せまっているあらしをつげる稲妻だった。頭のうえで、雷鳴がはげしくとどろいた。馬は、いきりたって、どっと走りだした。馬車は、メーベリー丘のふもとまでつづくなだらかな坂を、がらがらとくだっていった。

はじめの稲妻のあと、見たこともないようなはげしさで、たてつづけに稲妻がひらめいた。こまかいあられが、顔にびしびしふきつけてきた。

はじめのうち、わたしはゆくての道にばかり気をとられていたが、ふいに、べつなものに注意をひきつけられた。メーベリー丘の斜面を、なにかがぐんぐんとうごいていくのであった。

ちょっと見たときは、家の屋根がぬれて光っているのだと思ったが、つぎつぎにひらめく稲妻でたしかめると、それが、急速に回転していることがわかった。

その形を見きわめるのは、むずかしかった。いっしゅんま っ暗になったとおもうと、稲妻が昼のようにあかるくひらめき、丘のいただきやマツの緑色のこずえといっしょに、そのなぞめいたものが、くっきりとうかびでた。

わたしは、そのものをはっきり見た。だが、それは、いいあらわしようのないほど奇妙なものだった。ふつうの家よりずっと背の高い、三脚台のような怪物が、若いマツの木をまたぎこえ、ふみにじっていくのである。きらきら光る金属でできた、歩く機械である。いまは、ヒースの原を横ぎっていく。関節のある金属のつなが何本もたれさがっていて、歩くにつれてがらがらと雷鳴にまけないような音をたてる。

稲妻がひらめくと、二本足を空中にあげて、かたむきながらすすんでいるすがたが、くっきりとうきあがり、そのあと、稲妻がつづいてあたりをてらしたときには、百メートルも近よっている。乳しぼり台が、かたむきながらはげしく地面をころがっているというのが、わたしのうけたかんじであった。しかし、三脚台の上には、腰かけ板のかわりに、大きい機械がのっているのだ。

そのときふいに、わたしのゆくてのマツ林がかきわけられた。まるで、もろいアシが人間にかきわけられるようなかんじで、ぽきぽきとおれて、はねとばされたのだ。そして、第二の三脚台があらわれた。わたしのほうへ、まっしぐらに突進してくるように見える。

第二の怪物を見たとたん、わたしの神経は、すっかりまいってしまった。わたしは、二どとふりむこうとせずに、馬の首を、ぐっと右にまわした。つぎのしゅんかん、馬車は馬の上にひっくりかえり、わたしはななめにほうりだされて、あさい水たまりにどっとおちこんだ。

わたしは、ほとんどすぐにおきあがり、水に足をひたしたまま、ハリエニシダのしげみのかげにうずくまった。馬は、身うごきもせずに横たわっていた。かわいそうに、首がおれてしまったのだ。

そのとき、稲妻がひらめき、大きい歩く機械が、わたしのそばを大またにとおりすぎるすがたが目にうつった。

近くで見ると、信じられぬほど奇妙なしろものだった。感覚のない機械がすすんでいくような感じではなかったのだ。機械にはちがいない。すすむにつれて金属の音が鳴りひびき、奇妙な胴体のまわりで、長くしなやかなぴかぴか光る触手が、やかましい音をたてながら、ゆれうごいている。一本の触手は、若いマツの木の枝をつかんでいた。

それは、大またにすすみながら、道をえらんでいた。その上にのっている金属のぼうしのようなものは、まるで頭があたりを見まわすように、前後にゆれうごいた。

胴体のうしろには、白い金属の大きなびくのようなものがあった。怪物がわたしのわきをとおりすぎるとき、足の関節から、緑色の煙がふきだしているのが見えた。怪物は、あっというまにとおりすぎた。

このときには、それだけしか見わけられなかった。稲妻が目もくらむほどひらめいたとおもうと、またすぐまっ暗になるので、くわしく観察できなかったのだ。

怪物は、とおりすぎながら、雷鳴のひびきさえかきけすほどの、さわがしいかんだかい声をたてながら、勝ちほこったようにさけんだ。

「あるう、あるう。」

そして、一分ほどのちには、もうひとりの怪物といっしょになって、一キロばかりむこうの野原で、なにかの上に身をかがめていた。それは、火星人が地球におくりこんだ十この円筒のうち、三番めのものにちがいなかった。

数分のあいだ、わたしは暗やみのなかで雨にうたれて横たわりながら、遠くのほうで金属の怪物たちがうごきまわっていた。

つぎのひらめきで、それはがっしりした男だとわかった。からだの下に頭がおりまげられ、かきねにへばりつくようにたおれている。まるで、はげしくたたきつけられたようだ。

わたしは、死体にふれたことがなかったので、いやでたまらなかったが、その気持ちをおさえて、男のからだをひっくりかえし、心臓に手をあててみた。

男は、死にたえていた。首の骨がおれてしまったらしい。

三どめに稲妻がひらめいて、男の顔がてらされた。わたしは、とびあがった。「まだら大亭」の主人ではないか。わたしは、この男の馬車をとりあげてしまったのだ。

わたしは、うやうやしく死体をまたぎこえ、なおも丘のいただきへむかった。丘の斜面で燃えている家はなかったが、共用地では、まだ赤い炎やうずまく煙が、あられのふりしきる空にたちのぼっている。

やっと家にたどりつき、かぎでとびらをあけてはいってから、またかぎをかけた。よろめきながら階段ののぼり口にいって、そこに腰をおろした。

わたしの心は、大またでのし歩くあの金属の怪物と、かきねにたたきつけられていた死体のことでいっぱいだった。

いるのを、かきねごしにみつめていた。

わたしは、ふりかかるあられと水たまりの水のために、ぐっしょりとぬれたまま、おどろきのあまりぼうっとしていたが、やっとわれにかえって、自分の身に危険がせまっていることをさとった。そこで、みぞに身をふせてはいすすみ、怪物の機械に見つけられることもなく、メーベリーよりのマツ林にはいりこむことができた。

それから、寒さに身ぶるいしながらも、このマツ林にかくれたまま、自分の家のほうへとすすんでいった。

わたしに火星人のおそろしさがほんとうにわかっていれば、すぐにむきをかえてレザーヘッドの妻のところへもどっていたろう。だが、その夜は、ひどくふしぎなことにぶつかったうえ、からだもくたくたにつかれていたので、まともにものを考えることができなかったのだ。

わたしは、なんとかして家にかえりつきたいと、ぼんやり考えていた。木々のあいだをよろめいていくうちに、みぞにおちたり、板ぎれでひざをすりむいたりしたけれどもくっせずに前進をつづけていた。

丘のいただき近くまできたとき、なにかやわらかいものに

11 窓ぎわで

しばらくすると、いくらか気がしずまってきた。からだはびしょぬれで、ぞくぞく寒けがする。わたしは、ぎこちなく立ちあがって食堂へいき、すこしウィスキーを飲んだ。

それから、ぬれた服を着かえて、二階の書斎にはっていった。書斎の窓からは、ホーセル共用地のほうが見えた。わたしたちが大いそぎでたちのいたので、窓はあけはなしになっていた。わたしは、戸口のところで、はっとして立ちどまった。

雷雨はすぎさっていた。学校の塔やそのまわりのマツの木はきえさってしまい、はるかむこうに砂とり場のあたりが、赤い光でありありとてらしだされて見えた。その光のなかで、大きなきみのわるい黒ぐろとしたすがたがいくつか、いそがしくいったりきたりしていた。

まったくのところ、そのあたりいったいの土地が燃えているように見えた。広い丘の斜面には、小さい炎の舌がいちめんにちらばり、あらしのなごりの風でゆらぎながら、空をはしる雲を赤くてらしていた。

ときどき、もっとてまえの火事からたちのぼる煙が窓をかすめて、火星人の三脚機械のすがたをかくした。なにをしているのかもわからず、せっせといじりまわしている黒いものが、なにかもわからなかった。

わたしは、そっと窓ぎわに近よった。すると、見はらしがずっとひらけて、左はウォーキング駅から右はバイフリートまで、マツ林が黒く燃えているのが見えてきた。

丘のふもとのメーベリー駅は黒く焼けおちて、そのそばに、ほそ長い黄色いものが一列につらなっている。よく見ると、破壊された列車だった。

じつに奇妙なながめだった。黒くひろがった土地のいたるところで、炎があがっているのだ。

わたしがながいこと平和にすごしてきたこの小さい世界が、炎につつまれているのだ。この七時間ばかりのあいだに、どんなことがおこったのか、わたしにはわからなかった。また、あの機械の巨人と円筒からはいだしたぐにゃぐにゃの生物とが、どんな関係があるのかも、はっきりしなかった。

わたしは、自分にかかわりのないことでも見るような奇妙にものめずらしい気持ちになった。いすを窓ぎわにひきよせて腰をおろして、砂とり場のあたりで三人の機械巨人がいったりきたりしているのを、じっとみつめていた。

巨人たちは、ひどくいそがしそうだった。わたしは、自分の心にたずねた。あれは、いったいなんだろう？　知恵をもった機械か？　そんなものはありうるはずがない。

では、ちょうど人間の脳がからだのいただきに座をしめて人間を支配しているように、それぞれの巨人のからだのいただきに火星人がひとりずつのって、支配し、さしずしているのだろうか？

人間より知恵のおとった動物からすれば、人間のつかう軍艦や蒸気機関車も、こんなふうに見えるのではないか。

あらしはすぎさって、空ははれわたっていた。そして、煙をあげて燃える地面のむこうには、ピンの頭ほどの火星が、西の地平線にしずもうとしていた。

そのとき、かきねのところで、かすかにひっかくような音がした。わたしは、うつらうつらしかけていたが、はっとわれにかえった。見おろすと、ひとりの兵士がかきねをのりこえようとしていた。

わたしは、窓からのりだしてささやいた。

「しっ。」

兵士は、かきねにまたがったまま、あやしむようにうかがったが、やがてかきねをこえて庭を横ぎった。そして、窓の下に立ちながら、やはり、ささやき声でいった。

「だれだい？」

「どこへいくんだね？」

「自分でもわからないんだ。」

「かくれるつもりかい？」

「そうさ。」

「なかへはいりたまえ。」

わたしは一階におりていき、入り口のかぎをあけて、兵士をなかへいれてから、またかぎをかけた。暗いので、兵士の顔はわからなかったが、ぼうしはなく、上着のボタンははずれていた。兵士は、家にはいりながらいった。

「ひどいもんだ。」

「なにがおこったのかね？」

兵士は、どうにもならないというような身ぶりをしてこたえた。

「なにがおこったですって？　やつらにやられちまったんです。とことんまでやられちまったんで。」

わたしは、兵士を食堂へつれていって、ウィスキーをすすめた。

「一ぱいやりたまえ。」

兵士は、それを飲みほすと、とつぜん腕に顔をふせて、小さい子どもみたいにむせび泣きはじめた。ふいに感情がこみあげてきたらしい。わたしは、自分のさっきのおそろしい経験もわすれて、ものめずらしい気持ちで兵士をみつめていた。

しばらくすると、兵士はやっと気がしずまって、わたしの質問にこたえられるようになったが、それでも、いうことがしどろもどろだった。それをまとめると、つぎのようなことだった。

「わたしは、砲兵です。七時ごろ戦闘にくわわりました。そのときには、砲撃がはじまっていて、はじめの円筒で到着した火星人たちが、金属の防御物にかくれながら、第二の円筒のほうへそろそろ移動しているということでした。

その金属の防御物は、しばらくすると、三本の足でゆらゆら立ちあがったんです。

わたしたちの大砲が砲撃をはじめようとしたとたんに、弾薬が爆発して、あたりが火の海みたいになりました。わたしは気ぜつしましたが、気がついてみると、黒こげの人間や馬の死体の下になっていたんです。

わたしたちは、すっかりやられちまったんです。それに、あのにおいときたら——いやはや、まるで焼き肉みたいでしたよ。

ほんの一分まえまでは、観兵式そのままにきちんとしてたのに、ずしん、ばたんといったとおもったら、めちゃめちゃになってしまったんです。

わたしは、ながいこと死んだ馬の下になったまま、共用地をこっそりのぞいていました。歩兵が突撃しましたが、たちまち熱線でなぎはらわれてしまいました。

そのあと、怪物が三本足で立ちあがって、共用地を大またにいったりきたりしはじめたんです。いただきにある頭みたいなものが、人間のかっこうそっくりにまわってました。腕みたいなものが、こみいった金属の箱をもちまわっていました。そのまわりから、緑色の光がちらちらして、口みたいなところから、熱線が放射されてるようでした。

わたしに見えるかぎりでは、ほんの二、三分のうちに、共用地の上に生きのこっている人間はすがたをけしてました。そして、それまで燃えてなかったしげみや木も、ひとつのこらず燃えていました。ちょっとのあいだ、機関銃がかたかたいってましたが、たちまちしずかになってしまいました。

すると、怪物は熱線をけして、二番めの円筒がおちたマツ林のほうへむかって歩きはじめました。そのうちに、こっちの穴のなかから、ぴかぴかした巨人がもうひとりせりあがってきたのです。

二番めの怪物も、はじめの怪物のあとをおっていきました。わたしはそこで、馬の死体の下からはいだして、くすぶっているヒースの原っぱを、注意しながら横ぎりました。

それから、なんとか道ばたのみぞにたどりついて、それをつたってウォーキングへにげのびたんです。

ウォーキングは、めちゃめちゃに焼けてしまっていて、とおりぬけられぬほどでした。生きのこった者も、すこしはいるようでしたが、たいていはやけどして、気ちがいみたいになっていました。

わたしが火におわれて、くずれた壁のかげにかくれていると、ひとりの怪物がもどってきました。怪物は、ひとりの男をおいかけて、金属の触手でつかまえるなり、マツの幹にその頭をたたきつけました。

すっかり暗くなってから、わたしはこっそりかくれ場所を

ぬけだして、メーベリーにむかいました。ロンドンのほうへおちのびようと思ったんです。

のどがかわいてたまりませんでしたが、鉄橋の近くで、水道管が破れつして水が泉みたいにふきだしているのを見つけました。」

兵士は、こういうことをぽつりぽつり話したのだった。かれは、話しているうちに、しだいにおちついてきた。

兵士は、昼からなにも食べていないということだったので、わたしは、食料室からヒツジの肉とパンをもってきてやった。火星人に気づかれぬように、ランプをつけなかったので、ふたりはパンや肉をとろうとして、なんども手をふれあわせた。

そのうちに、やみに目がなれてきて、兵士の顔がわかるようになった。それは、黒ずんでやつれていた。わたしの顔も、おなじようになっていたにちがいない。

食事がすむと、わたしたちは、こっそり二階の書斎にもどり、あけはなした窓から、もういちど外を見やった。

ひと晩のうちに、村は灰の谷にかわってしまった。火は、もうしずまっていた。くずれた家いえや焼けこげた木々が、明けがたの光にいたいたしくさらされていた。

むかしからたくさんの戦争があったが、これほどあらゆるものがしらみつぶしにこわされたことはない。

円筒がおちた穴のまわりには、三人の金属の巨人が、東からのぼる日の光にてらされて、きらきら光っていた。巨人の頭は、自分たちがやってのけた破壊のあとを観察するように、ぐるぐるとまわっていた。

例の穴は、ひろげられたように見えた。あざやかな緑色の蒸気が、あかつきの空にむけてなんどもたちのぼり、うずをまいて、くだけては、きえていった。

12 あいつぐ破壊

日がのぼって明るくなったので、わたしたちは窓からさがって、そっと一階へおりていった。

そこでわたしはいった。

「家のなかにいつまでもいるわけにはいかないね。」

砲兵はうなずいた。

「そうです。わたしは、ロンドンのほうへすすんで、本隊へもどるつもりです。」

「わたしは、すぐレザーヘッドにもどることにするよ。火星人があんなおそろしい力をもっていることがわかったからには、妻をつれて、すぐ外国へにげようと思うんだ。やつらをやっつけてしまうまでに、ロンドンのまわりは、きっとはげしい戦場になるだろうからね。」

だが、このメーベリーとレザーヘッドのあいだには、第三の円筒が横たわっていて、金属の巨人が警戒にあたっている。わたしがひとりだったら、危険をおかしてまっすぐレザーヘッドにむかっただろう。

けれど、砲兵はわたしの計画にはんたいした。

「そんなことをしたら、きっと殺されてしまいます。おくさんをやもめにしてしまうなんて、ほんとうにかわいそうですよ。わたしといっしょに、ロンドンのほうをまわっていくことです。」

とにかく、わたしは砲兵といっしょにいくことにした。森づたいに北へすすみ、ロンドンの近くまでいってから、砲兵とわかれて南東にくだり、大きく遠まわりしてレザーヘッドにたどりつくつもりだった。

わたしたちは、水筒にウィスキーをみたし、ポケットにビスケットやハムをつめこんでから、家をこっそりはいだし、ゆうべの坂道を、いちもくさんにかけおりた。

家いえには、人のけはいはなかった。道には、熱線にやられて黒こげになった死体が三つほど、ひとかたまりになってころがっていた。あちらこちらに、人びとがおとしていった品物がちらばっていた。時計、スリッパ、銀のスプーンといったようなものだ。

丘のふもとまでおりて、森にはいった。森づたいに、鉄道のほうへといそいだ。線路のむこうがわの森は、いちめんに黒く焼けただれていたが、こちらのがわは、線路ぞいの木が

こげたくらいだった。
風はそよともふかず、あたりはきみがわるいほどひっそりしていた。鳥さえ声をたてなかった。
やがて、道路にでた。すると、ひづめのぱかぱかいう音がして、三人の騎兵がゆっくり馬をすすめていくすがたが、木木のあいだをすかして見えた。
わたしたちが声をかけると、騎兵たちは立ちどまって、わたしたちがおいつくのをまった。
ひとりは中尉で、ふたりは兵隊だった。日光信号機をもっている。日光を鏡で反射させて、その光で信号をおくる機械だ。
中尉が口をきった。
「けさ、この道で人にあったのは、きみたちがはじめてだ。いったい、なにがおこったのかね？」
中尉は、声も顔つきもしんけんだった。ふたりの兵隊は、わたしたちをもののめずらしそうにじろじろ見ていた。
砲兵は、土手から道路にとびおりて敬礼した。
「わたしの隊の大砲は、ゆうべ破壊されました。わたしは、そのあとかくれておりましたが、いま中隊にもどろうとしているところです。この道を一キロほどいくと、火星人を見ることができると思います。」
中尉はたずねた。
「やつらは、どんなかっこうをしているんだね？」
「よろいをつけた巨人です。背は三十メートルもあり、三本足で、胴体はアルミニュームのようであります。大きい頭には、ぼうしのようなものをかぶっています。」
中尉がさけんだ。
「ばかな。なんてとほうもないでたらめをいうんだ。」
「いまにおわかりになります。やつらは、箱のようなものをはこんでいて、それからふきだす火にあたると、殺されてしまうのです。」
「なんだって？　それは銃のことかい？」
「いや、ちがうんであります。」
砲兵は、熱線のことをくわしく説明しはじめた。そして半分くらいまで話したとき、中尉は砲兵の話をさえぎって、わたしを見あげた。
「きみも見たのですか？」
わたしはこたえた。
「この男のいうことは、まったくほんとうです。」
中尉はいった。

「では、それを自分でたしかめるのが、わたしの任務だ。」

そういいながら、砲兵をふりむいた。

「われわれは、住民をたちのかせるためにはけんされたのだ。おまえは、師団長閣下のところへ報告にいけ。そして、知っていることをすっかりもうしあげるのだ。閣下は、ウェーブリッジにおられる。道はわかるか？」

わたしがこたえた。

「わかります。」

中尉は、また南のほうに馬をむけながらたずねた。

「一キロもいけば火星人が見えるといったな？」

そして、ふたりの兵隊といっしょに、馬をすすめていった。わたしは、それきりこの三人を見かけなかった。火星人に殺されてしまったにちがいない。

メーベリーの北東五キロばかりのところにあるバイフリートに近づくと、たいらな牧場に、大きい大砲が六門、南西をむいて、おなじへだたりで、きちんとならんでいるのが見えた。

大砲のそばには、砲手が立って、命令をまっていた。弾薬車も、ずらりとならんでいる。

わたしはさけんだ。

「これはすごい。あれなら、なんとか一発はあたるだろう。」

砲兵は、そっけなくいった。

「どっちみち、稲妻に弓矢でたちむかうようなものさ。あいつらは、まだ熱線を見てないんだから。」

バイフリートの町は、ごったがえしていた。住民は、たちのきのために荷づくりしており、そのあいだを、数十人の軽騎兵がかけまわって、早くたちのくようにせきたてている。

しわだらけの老人が、ランの鉢をたくさんかかえて、ひとりの兵士とはげしくいいあらそっていた。兵士が鉢をおいてにげろというのに、老人がしょうちしないらしい。

わたしは、老人の腕をつかむと、南西のマツ林のほうを指さしながらいった。

「あそこで、どんなことがおこっているか知っていますか？」

老人は、ふりむいた。

「なんですって？　わしは、この兵隊に、この鉢がみんなだいじなものだと説明しておったのです。」

わたしはさけんだ。

「いまに、死がやってくるんですよ。死が。」

そして、老人をほったらかしたまま、砲兵のあとをおいかけた。町かどでふりむくと、老人は、ランの鉢のそばに立ったまま、マツ林のほうをぼんやりみつめていた。

バイフリートからまた五キロほど北にあるウェーブリッジの町についたが、師団司令部がどこにあるか、だれも知らなかった。

どこもかしこも、これまで見たこともないほど混乱していた。いたるところに、馬車や荷車があふれていた。

わたしたちは、この町に正午までとどまり、やがて、北へむけて出発した。テムズ川をわたって、シェパートンの町へでようというのだった。

川岸についてみると、ここでも避難する人たちの群れがごったがえしていた。わたし船がのこらずかりだされて、川をいったりきたりしていたが、とてもはこびきれるものではなかった。

さけび声があちこちで聞こえ、じょうだんをとばしている男もあった。

「火星人は、おそろしいやつらかもしれんが、さいごには、人間にやられてしまうさ。」

わたしは、やっとわたし船にのりこんだ。船がむこう岸についたとき、船頭がさけんだ。

「あれはなんだ？」

西のチャートシーの方向で、大砲の音が聞こえたのだった。

戦闘がはじまったのだ。と思うまもなく、川むこうの林のなかにかくれていた砲兵隊が、はげしく砲撃をはじめた。

女たちは、かなきり声をあげた。だれもが、ふいにはじまった戦闘にどぎもをぬかれていた。

わたしのそばにいた女が、心ぼそそうにいった。

「兵隊さんたちが、あいつらをくいとめてくれるでしょうね。」

そのときとつぜんに、川のはるかむこうで、煙がはげしくたちのぼった。と思うまもなく、足もとの地面が大きくなみうって、ものすごい爆音が空気をふるわし、近くの家いえの窓ガラスがくだけとんだ。わたしたちは、びっくりして立ちすくんだ。

ひとりの男がさけんだ。

「やってきたぞ。あっちのほうだ。見えるか？」

川をへだてたはるかむこうの林のうえに、金属の巨人がつぎつぎにあらわれた。ひとり、ふたり、三人、四人。そして、チャートシーのほうにひろがっている牧場を横ぎって、

川のほうへ大またにいそいでくるのだった。
はじめは、小さいぼうしのように見えていたが、ころがるようなうごきをくりかえしながら、鳥が飛ぶような速さですすんできた。
つづいて、第五の巨人があらわれて、わたしたちのほうへななめにむかってきた。
巨人たちの金属の胴体は、日の光できらきらかがやいた。砲兵陣地のほうへすばやくせまっていく。そのすがたは、近づくにつれてぐんぐん大きくなった。
いちばん西よりにいた巨人、つまりいちばん遠くのやつが、大きな箱を空中にふりあげると、あのおそろしい熱線がチャートシーにおそいかかり、町は破壊されてしまった。
水ぎわにいた人びとは、この怪物を見ておそれにうちのめされたようだった。悲鳴やさけび声はまったくあがらず、ただ、しずまりかえっていた。
やがて、となりにいた女が、わたしをつきとばして走りだした。ほかの人びとも、いっせいににげだした。
わたしも背をむけたが、われをわすれるほどおびえてはいなかった。あのおそろしい熱線のことが心にうかんだ。
水のなかにもぐろう。それしかない。
「水にもぐるんだ。」
わたしはさけんだが、だれも耳をかさなかった。
わたしは、もういちどふりむくと、近づいてくる巨人のほうへ走りだした。小石まじりの川岸をかけぬけて、まっすぐ水にとびこんだ。
ほかの人たちも、おなじようにした。ボートにのっていた者も、水にとびこんだ。
川底の石は、コケがついてつるつるしていた。水はとてもあさく、岸から五、六メートルはなれても、腰までしかなかった。
そのとき、二百メートルばかりむこうに、ひとりの巨人がそびえたっているのが見えた。わたしは、身をなげて水にもぐった。
両岸では、人びとがあわてて岸にかけあがった。しかし、機械の巨人は、あちこちににげまどう人びとには、まるで注意をむけなかった。まるで、人間がアリの巣をけとばして、にげまどうアリに目もくれないでいるようだった。
わたしは、息がつまりそうになったので、水から顔をだしてみると、巨人は、熱線の放射器をふりまわしながら、こちら岸の砲兵陣地をめがけてすすんできた。

川のむこう岸についたとおもうと、ひとまたぎで川の中流あたりまでふみこんだ。つぎに、前足をこちら岸にかけておりまげたが、つぎのしゅんかんには、シェパートン村の近くで、すっくと立ちあがっていた。
すると、村はずれにかくされていた六門の大砲が、いっせいに火をふいた。一発の砲弾は、巨人の頭のうえ五メートルばかりのところで破れつした。そのとき、巨人はもう熱線放射器の箱を高くさしあげていた。
さらに二発の砲弾が、巨人の近くの空中で破れつした。巨人は、すばやく頭をひねってそれをさけた。しかし、四つめの砲弾は、身をかわすひまがなかった。
その砲弾は、巨人の頭に、みごとに命中した。ぼうしみたいな頭は、ふくれあがって火をふき、ずたずたにさかれて、赤い肉ときらきら光る金属のはへんをさらした。
「あたったぞ。」
わたしは、悲鳴とも歓声ともつかぬさけび声をあげた。
まわりの水のなかで、人びとのさけびかえすのが聞こえた。わたしは、よろこびのあまり、水からとびだしそうになった。
首をきられた巨人は、よっぱらったようによろめいたけれども、そのままたおれはしなかった。あやうくつりあいをとりもどすと、熱線放射器をささえたまま、シェパートンのほうへふらふらとすすみだした。
だが、巨人の頭のなかで巨人をうごかしていたほんとうの火星人は、殺されて空中にとびちってしまったので、巨人は、もうまともにうごくことができなかった。
めくらめっぽうすすんでいくと、シェパートン教会の塔にぶつかって、それをうちくだいた。そのはずみでむきをかえたかとおもうと、そのままよろめいていって、川のなかへすさまじい音をたててぶったおれてしまった。
空気はすさまじい爆発でふるえた。水柱があがり、水しぶきやどろや金属のはへんが、空高くまいあがった。
熱線放射器が水をうつと、水はたちまち蒸発した。つぎのしゅんかん、わきかえるほど熱いどろ水の大波が、どっと川上のほうからおしよせた。
人びとが、あらそって岸にはいあがるのが見えた。水のにえくりかえる音にまじって、人びとの悲鳴が聞こえた。
しばらくのあいだ、わたしは熱さも危険もわすれていた。ざわめく水のなかをかきわけて川上へすすんでいくと、ぶったおれた巨人のすがたが見えてきた。そのからだは、川を横

ぎるようにたおれて、ほとんどが水の下にかくれていた。
こわれた胴体のまわりから、こい蒸気の雲がたちのぼっていたが、そのうずまく湯気のきれめから、大きい手足が水やどろを空にはねとばしているのが見えた。触手は生きている腕のように水をたたいていた。
まるで、傷をおったけものが、水のなかで死にものぐるいにもがいているようだった。巨人のからだからは、ものすごい量の赤茶けた液体がほとばしっていた。
そのとき、工場のサイレンのようなけたたましいさけびが聞こえた。はっとしてふりむくと、ほかの巨人たちが、チャートシーのほうから川岸へむけて、大またにくだってくるのが見えた。
わたしは、あわてて水にもぐった。やっとがまんができるまで息をつめながら、水のなかをもがきすすんでいった。まわりの水は、はげしくゆれて、ぐんぐん熱くなってきた。
息をつくために水から顔をあげると、うずまく蒸気をすかして、巨人たちのすがたがぼんやり見えた。灰色の大きいかげが、わたしのそばをとおっていくのだ。ふたりの巨人は、川のなかでのたうっている自分たちのなかまのほうに身をかがめた。
ほかのふたりの巨人は、水のなかに立って、熱線放射器を高くかかげていた。熱線がしゅうっと音をたてて、右に左になぎはらった。
空中には、さまざまの音がいりみだれて、耳をつんざくほどだった。巨人の金属のからだが鳴りひびく音、家がくずれる音、木がたおれる音、火がぱちぱち燃えくるう音。
こい黒煙がまいあがって、川からたちのぼる蒸気とまじりあった。熱線がはしるたびに、目もくらむような光がひらめき、たちまち青白い炎がふきだした。
わたしは、にえくりかえるほど熱い湯に胸までつかって、われをわすれてつっ立っていた。
そのときふいに、熱線の白い光が、わたしのほうにひらめいた。そして、あちらこちらとにげまどう人びとをなめつくし、わたしから五十メートルとはなれていない水ぎわまでくると、川をさっとなぎはらってシェパートンのほうへむかった。
熱線のとおり道にあたった水は、わきあがってみみずばれのようにふくれ、はげしく蒸気をたてた。
つぎに、にえくりかえる熱い大波が、わたしをおそってきた。わたしは、大声をおもわずあげた。からだじゅうにやけどをおい、目が半分見えなくなって、痛みにもがきながらも、岸をめがけて、よろめきよろめき走りだした。つまずいたら、それっきりだったにちがいない。
わたしは、ウェー川とテムズ川がであうところにある三角州にたどりつくと、さえぎるものもない岸べにぶったおれた。もう、死ぬことしか考えなかった。
かすかにおぼえているのは、巨人の足が、わたしの頭から二十メートルばかりのところでじゃりをふみつけ、それがくるりと回転して、またひきあげられたことだ。
しばらくして気がつくと、四人の巨人が、なかまのこわれたからだをかかえて、広びろとした牧場を横ぎっていくのが、煙のベールをすかして、かすかに見えた。
そのうちに、わたしは自分が奇跡的に助かったのだということが、すこしずつわかってきた。

13 牧師とであう

火星人たちは、ホーセル共用地にひきあげたのだった。こわれた巨人機械のあとしまつに気をとられていたので、わたしのようにぽつんととりのこされた者は、見おとしてしまったのだろう。
このとき、火星人たちが、こわれた巨人にかまわずにすすんでいれば、ロンドンはまだろくに戦闘準備ができていなかったから、やすやすとふみにじられてしまっただろう。
だが、火星人たちはいそがなかった。円筒は、二十四時間ごとに、つぎからつぎへと落下してきた。
いっぽう、陸軍も海軍も、火星人のおそろしい力がよくわかったので、全力をあげて戦闘準備をととのえた。
そういうわけで、その日の夕暮れまでに、ロンドンの南西のはしにある丘や雑木林には、いたるところに砲兵陣地がもうけられて、火星人の攻撃を、いまやおそしとまちかまえていた。
だが、火星人のほうでも、地球人の大砲の力を知っていた

ので、むやみに攻撃をしかけようとしなかった。

その日の午後、巨人機械たちは、第二、第三の円筒から、いろいろなものをホーセル共用地のほうへはこぶのにせわしかった。

そのあと、火星人は、ひとりの巨人を見はりにたてておいて穴のなかにひっこんだ。そして、夜おそくまで、そこでせっせとはたらいていた。穴からこい緑色の煙がたえずたちのぼっているのが、遠くから見てとれた。

こうして、火星人と地球人がそれぞれ戦闘準備をととのえているあいだに、わたしはひどく苦しみながらロンドンへむけてすすんでいた。

三角州の上でやっとおきあがれるようになったとき、すてられたボートがながれていくのが見えた。わたしは、そのボートをつかまえて、それにのって川をくだっていった。

ボートにはオールがなかったので、やけどした手でせいいっぱい水をかいて、のろのろすすんでいったのだ。

川の水はまだ熱く、二キロばかりのあいだは、たちこめる蒸気で両岸が見えぬくらいだった。

こうしてしばらく川をくだるうちに、わたしはつかれと傷の痛みで、とうとうがまんできなくなった。そこで、川岸にやっとはいあがって、高い草のなかに横たわった。

時間は、午後の四時か五時ごろだったと思う。しばらくして、おきあがって歩きだしたが、一キロほどいくあいだに、ひとりの人間にもであわなかった。

わたしは、かきねのかげでまた横になった。のどがかわいてたまらなかった。おかしなことに、妻にたいしてひどく腹がたった。なぜか理由はわからないが、レザーヘッドへいけぬので、いらだっていたためだろう。

やがて、わたしは眠ってしまったらしい。気がつくと、ひとりの男が、わたしのそばに腰をおろしていた。上着はなく、シャツはほこりまみれだ。ひげをきれいにそった顔を上にむけて、空をみつめている。その空には、かすかな光がちらちらしていた。

わたしがおきあがると、男はふりむいた。わたしは、いきなりたずねた。

「水をおもちですか？」

男は首をふった。

「あなたは、一時間もまえから、水がほしい、水がほしい、とうわごとをいっていましたよ。」

しばらくのあいだ、ふたりはだまってあいてをみつめていた。わたしのすがたは、男の目にはひどくかわって見えただろう。なにしろ、身につけているものといえば、ずぶぬれになったズボンと靴下だけで、肌は焼けただれて、黒くすすけているのだ。

いっぽう、男はいかにもよわよわしい顔をしていた。あごがほそく、髪はちぢれ毛で黄色く、目はうすい青色だった。

男は、わたしから目をそらすと、とつぜんに口をきった。

「これはどういうことなのです？　このおそろしいできごとは、なにを意味しているのでしょう？」

わたしはこたえなかった。男は、ほそい白い手をさしのべて、なげくようにしゃべりはじめた。

「なぜ、こんなおそろしいことがゆるされるのでしょう？　わたしたちは、どんな罪をおかしたというのでしょう？　わたしは、朝のお祈りをおえて、散歩していました。すると、いきなり火がふきだし、地震がおこり、死がおそってきたのです。まるで地獄です。火星人というのは、いったい何者ですか？」

男は、口をつぐんでうなだれていたが、また、急に手をふりながら話しだした。

「すべての仕事がだめになってしまいました。日曜学校も、なにもかも。わたしたちが、どんな罪をおかしたというのです。ウェーブリッジの町が、どんな悪いことをしたというのです。なにもかもうちこわされてしまいました。教会もきえてしまったのです。いったいなぜでしょう？」

そして、くるったようにさけんだ。

「教会の燃える煙が、どこまでものぼっていく。どこまでも、どこまでも。」

男は、目をぎらぎらさせながら、ウェーブリッジのほうを指さした。

わたしは、この男がどういう人間かわかりはじめた。この男は、ウェーブリッジ教会の牧師で、焼けだされてにげてきたにちがいない。おそれと悲しみで、気がくるいそうになっているのだ。

わたしは、しずかに話した。

「しっかりしてください。まだ、望みはあるのですから。」

「望みですって？」

「そうです。あきらめてはいけません。」

わたしは、現在の状況について、自分の意見をのべはじめた。牧師は、はじめは耳をかたむけていたが、やがてぼんやりした目つきになってつぶやいた。

「これはきっと、世界がほろびるはじまりです。神さまが、わたしたち罪ふかい人間に、罰をおくだしになったのです。」

わたしは、牧師の肩をつかんでいった。

「男らしくしなさい。きみは、おびえきっている。災難にあってくじけてしまうようでは、宗教がなんの役にたつのです。これまでにも、人類は地震やこう水や戦争に、たびたび見まわれているが、それでも生きのびてきたではありませんか？」

牧師は、しばらくはぽかんとしていたが、やがてたずねた。

「でも、どうすればこの災難からまぬがれられるのです。やつらは不死身だし、あんなに残酷です。」

「いや、不死身ではありませんよ。やつらの巨人機械のうちのひとりは、三時間ほどまえに、破壊されたのです。」

「破壊されたですって？　神の使いが破壊されるだろうか？」

「わたしは、この目で見たのです。」

牧師は、とつぜん空を見あげていった。

「あそこで、ちらちら光っているのはなんです？」

「あれは、日光信号機です。地球人のほうも、火星人にたいして、しだいに戦闘準備をととのえているのです。やがて、火星人はこちらへやってくるでしょう。」

そのとき、牧師がふいにとびあがった。

「お聞きなさい。」

川むこうのひくい丘のほうから、にぶい大砲のひびきと、きみわるいさけび声が聞こえてきたのだ。しかし、それもすぐにしずまってしまった。

コガネムシが一ぴき、ぶうんと音をたてて、かきねをこえていった。西の空には、しずかな夕焼け空に、青白い三日月がでていた。

わたしはつぶやいた。

「この道を、北へむかってすすむのがよさそうだな。」

14　ロンドンで

火星人の円筒がウォーキングに落下したとき、わたしの弟はロンドンにいた。弟は医学生で、さしせまった試験の準備をしていたために、土曜の朝までは、火星人の到着についてなにも知らなかった。

土曜の朝刊には、火星人について、みじかくてはっきりしない電文がかかげられていたきりだった。

火星人は、見物が近よってきたのにおどろいて、一種の速射砲でたくさんの人を殺した、というような内容だった。

そして、この電文は、つぎのようなことばでむすばれていた。

火星人はたしかにおそろしいものらしいが、円筒が落下した穴から、まだぬけだしていない。じっさいのところ、ぬけだすことができないように思われる。これは、地球の重力のほうが、火星の重力より大きいためであろう。

弟が学校にいってみると、学生たちは火星人についてひじょうに興味をもっていた。だが、町では、とくに興奮しているもようはなかった。

午後の新聞には、大見出しで、きれぎれなニュースがのっていたが、軍隊が共用地をとりまいたことがのべられているくらいで、くわしいことはわからなかった。

弟は、円筒のおちた場所がわたしの家から四キロぐらいはなれているらしいということが、新聞の記事でわかったので、わたしたちのことは、べつに心配もしなかった。

だが、火星人が殺されるまえに見ておきたいと思ったので、その夜、わたしたちのところへくることにした。そして、四時ごろにわたしに電報をうったが、その電報はとどかなかった。そのころには、火星人の熱線で電話がたたれてしまっていたからだ。

弟は、そうとは知らずに、夕がたになると、馬車でウォータールー駅にいった。そして、ホームでまっているうちに、ウォーキングへいく汽車が、事故のためにでぬことがわかった。しかし、どういう事故なのかは、はっきりしなかった。

じっさい、そのころには、鉄道のほうでも、事故の原因を

知らなかったのだ。バイフリート駅とウォーキング駅のあいだがとおれなくなっているということしかわからなかった。

弟は、あきらめて家にもどった。

日曜の朝は、ロンドンの新聞に、つぎのような記事がでた。

昨夜七時ごろ、火星人は円筒からでて、金属のたてにかくれながらうごきまわり、ウォーキング駅と近くの家いえをかんぜんに破壊し、一個大隊をぜんめつさせた。詳細はわからぬが、この金属のたてには、機関銃も大砲も歯がたたなかった。火星人は、北西へむかってじりじりすすんでいるらしい。軍では、火星人をくいとめるために、ロンドンの東南いったいに陣地をきずいている。

ロンドン市民は、しかし、この記事を読んでも、あまりおどろかなかった。ロンドン市民には、自分さえ安全ならいいという、かってな考えの者が多かったせいもあるし、新聞もおおげさに書きたてているのだと思ったせいもある。

ロンドンでは、火星人の正体を知っている者は、ひとりもいなかった。人びとは、この怪物が、のろのろしたナメクジたちが、火星人がくるからすぐたちのけと、ふれ歩いたそうです。これは、どういうわけなんでしょう？　火星人は、穴からでられないということだったのに！」

五時ごろになると、大砲をつんだ貨車や、兵士をぎっしりのせた客車が通過した。人びとは、しだいに不安になって興奮してきた。

そのうちに、警官隊が駅にきて、人びとをホームからおいだしはじめた。

弟は、また町にでた。教会の鐘が鳴りひびいていた。橋の上では、ひまな人びとがあつまって、さわいでいた。へんな茶色のうきかすが、川のおもてをながれてくるというのだった。

日がちょうどしずみかけていて、時計台と国会議事堂が、しずかな夕空にうきだして見えた。

川を死体がながれてくるというううわさがひろがった。

弟がさきへ歩いていくと、ある町かどで、新聞売りがかけてくるのにであった。

「大事件だ。ウェーブリッジで戦闘がはじまった。ここにくわしく書いてある。ロンドンに危険がせまった。」

弟は、その号外を買った。そのとき、はじめて火星人のみたいなものだと思いこんでいた。ほとんどの新聞が、火星人のうごきかたを、「はいまわっている」とか「苦しげにのたくる」とかいうことばで説明していたからだ。

しかし、弟は、新聞を読んでわたしたちのことが気がかりになったので、汽車がとおるようになったかどうかたしかめようとして、またウォータールー駅にでかけていった。

すると、ロンドンから南西へむかう線が、みんな不通になっているということを聞かされた。

赤帽が、こんなことを話してくれた。

「けさ、バイフリート駅とチャートシー駅から、なんどか重要な電信がはいりましたが、それが、とつぜんとだえてしまったというので現在では、ウェーブリッジの近くで戦闘がおこなわれているらしいです。」

そのうちに、まだうごいている線の汽車がついて、乗客がぞろぞろとおりてきた。その人たちは、火星人について、いろんなニュースを聞きこんでいた。

ひとりの男が、弟にいった。

「あのあたりの人たちは、こっちのほうへぞくぞくにげてきています。その人たちの話だと、チャートシーのあたりで大砲の音が聞こえているそうです。それから、馬にのった兵隊

大きいクモのような機械で、高さは三十メートルもあり、急行列車ほどの速度でうごいて、強力な熱線を放射することができる。

この機械が五つ、テムズ川にむかってすすんできた。そのうちのひとつは、運よく撃破したが、ほかの四つには弾丸があたらず、砲兵陣地は、熱線で、たちまちのうちに撃めつされてしまい、たくさんの戦死者がでた。

しかし、火星人は、ついに撃退された。ロンドンの東南いったいには、砲兵陣地がきずかれている。これほど大がかりな防備がととのえられたことは、これまでにないことであった。

状況が重大なことはたしかだが、けっきょく、火星人は撃めつされるにちがいない。円筒は、そのごも落下しているらしいが、巨人機械の数は、せいぜい二十たらずだろ実力と恐怖が、はっきりわかったのであった。

火星人は、ナメクジのようにのろまな生物ではなかった。大きい機械をあやつって、すばやくうごくことができ、その機械には、大砲でもたちうちできないのだ。

新聞には、つぎのように書いてあった。

う。それにたいして、わが軍は、何万といるのである。

新聞は、特別に大きい活字で印刷されていて、インクがまだかわいていなかった。

通りを歩いている人たちは、みんなこの新聞をひろげて読みふけっていた。

そのうちに、南のほうから避難者たちがくるのにであった。荷馬車に荷物をつみ、妻とふたりの子どもをつれた男もいた。ほし草車にのったりっぱな身なりの人たちもいた。だれもかれも、げっそりやつれた顔をしていた。

弟は、ことによると、この人びとのなかにわたしがいるかもしれぬと考えた。

避難者のなかには、火星人の巨人機械をじっさいに見たという者もいた。

「ボイラーが竹馬にのったみたいで、人間のように歩くんですよ。」

夜になるにつれて、避難者の数はいよいよふえ、しまいには、通りがいっぱいになった。弟は、何人かの避難者にたずねてみたが、まんぞくなへんじをしてくれた人はいなかった。

ひとりの男はこたえた。

「わたしは、バイフリートからきましたよ。けさ早く、自転車にのった男が町にきて、早くたちのくように、一けん一けんふれまわっていました。そのあと、兵隊たちがきたのです。」

外へでてみると、南のほうに煙が雲のようにたちのぼっていたのです。それから、チャートシーのほうで大砲の音が聞こえました。やがて、ウェーブリッジの人たちがにげてきました。それで、家をくぎづけにして、やっとにげだしたのです。」

そのうちに、あつまった人たちのあいだから、政府や軍の悪口をいう声がたかまってきた。

「こんなさわぎにならぬうちに、なぜ火星人をやっつけられなかったんだ。」

八時ごろになると、ロンドンの南いったいで、はげしい砲声がはっきり聞こえた。

弟は、夜もおそくなってから、自分のアパートにもどった。もう、わたしのことがひどく心配になっていたし、たいへんなことになったという不安もあった。

その夜は、むしあつかった。大砲の音は、とぎれとぎれに

聞こえていた。

弟は、新聞をなんども読みかえしては、わたしにいちばん悪いことがおきたのではないかとおそれた。試験勉強をして気をまぎらわそうとしたが、だめだった。

まだ夜が明けないうちに、おそろしい夢で目をさました。ドアをたたく音、通りを走る足音、けたたましい鐘のひびきなどが聞こえていた。

弟は、はっとしてベッドをとびだし、窓ぎわにかけよった。

首をだしてみると、ほかの窓もつぎつぎにひらいて、寝まきすがたの人びとが顔をあらわした。

道路では、警官がドアをたたきながらさけんでいた。

「火星人がやってくるぞ。」

そして、つぎの家へ走っていくのだった。

兵営のほうから、たいこらっぱの音が聞こえてきた。すべての教会が、はげしく鐘を鳴らしていた。家いえのドアがひらき、窓に黄色いあかりがともりはじめた。

通りのむこうから、箱馬車が一台走ってきた。その音は、町かどでふいに大きくなり、窓の下のところで、われるようにひびいたとおもうと、だんだん遠ざかって聞こえなくなった。そのあとすぐ、二台の馬車が走ってきて、さらにつぎつぎと車の列がつづいた。

馬車は、チョーク・ファーム駅へむかっているのだった。そこから、北東へむかう汽車にのって、避難しようというのだ。

弟は、ながいことあっけにとられて外をながめていた。やがて、うしろのドアがあいて、むかいのへやにいる男がはいってきた。シャツとズボンをつけただけで、ズボンつりが腰からたれさがっている。おきたばかりとみえて、髪の毛がみだれている。

「いったいどうしたんです？　火事ですか？　なにをさわいでいるんです？」

通りでは、家からでてきた人びとがあつまって、話しあっていた。弟は、男の質問にみじかくこたえておいて、服を着はじめた。通りのさわぎがますますたかまるので、一まい着るごとに、窓にかけよってのぞいた。

やがて、新聞売り子が、いつもよりずっと早くすがたをあらわしてさけびはじめた。

「ロンドンが危険だ。南の防御線がやぶられた。テムズ川ぞ

いで、おそろしいみな殺し。」

そして、下のへやでも、道の両がわの家いえでも、いや、ロンドンじゅうで、人びとがざわめきはじめた。ねむい目をこすり、窓をあけて外をのぞき、とんちんかんな質問をし、あわてて着がえをはじめるのだった。

そのあいだにも、ま近にせまったおそろしいあらしの、はじめのまえぶれが、町をふきぬけていった。

弟は、下におりて外へでた。家いえのひさしのあいだから見える空は、夜明けの光で赤くそまっていた。にげていく人は、いよいよふえてきた。徒歩の人も、車の人もいた。人びとが、口ぐちにさけんでいた。

「黒い煙だ。」

人びとの心をとらえた恐怖は、はてしもなくひろがっていった。弟が戸口に立っていると、新聞売り子が近よってきたので、新聞を買った。売り子は、にげながら一部一シリングで新聞を売っていた。欲と道づれでにげているのだ。新聞には、総司令部の絶望的な発表がでていた。

火星人は、ロケットの力で、黒い雲のような毒ガスを放射する。われわれの砲兵隊は、この毒ガスでぜんめつし、リッチモンド、キングストン、ウィンブルドンなどの町が破壊されてしまった。

いまや、火星人は、ロンドンにむかってじりじりすすんでいる。これをふせぎとめることは不可能である。黒い毒ガスからまぬがれるためには、にげるほかには方法がない。

発表はこれだけだったが、人びとをおびやかすには、これでじゅうぶんだった。六百万のロンドン市民は、はげしく動揺し、ひとかたまりになって北へながれだそうとしていた。

運転をあやまった馬車が、道ばたの水そうにぶつかってくだけ、悲鳴とののしり声がみだれとぶ。かけぬけていく馬車のなかには、まだランプをつけているものもあった。

弟は、ことの重大さがわかったので、いそいでへやへひきかえし、十ポンドばかりのあり金をのこらずポケットにいれて、また外へとあわただしくでていった。

15 黒い毒ガス

火星人がふたたび攻撃をはじめたのは、わたしが道ばたで牧師と話しているころだった。そのとき、弟のほうは、ロンドンの通りで、南からの避難者の群れにであっていた。

夕暮れちかく、三人の巨人機械が共用地のほうからあらわれて、ゆっくりウェーブリッジのほうへすすんでいった。そのあたりでまちかまえていた砲兵陣地をまえにして、夕日を背にしてあらわれたのだった。

三人の巨人はひとかたまりにはならず、おたがいに二キロくらいのへだたりをたもって、一直線になってすすんできた。かれらは、サイレンのようなほえ声をたかくしたりひくくしたりしながら、おたがいに知らせあっていた。

わたしと牧師が、道ばたで耳にしたのは、この大声と大砲の音だったのだ。

巨人がはじめに近づいた砲兵陣地の砲手は、訓練のよくできていない志願兵だったので、巨人がじゅうぶん近よらぬうちに、かれらをめがけてめくらめっぽうに発射しただけで、さっさとにげだしてしまった。

そこで、巨人は熱線を使用するまでもなく、大またに大砲をまたいですすんでいった。

だが、つぎの陣地の兵士たちは、訓練がよくできていて、士気が旺盛であった。陣地は、マツ林にかくされていたので、いちばん近くにきた巨人も、それと気づかなかったらしい。陣地では、巨人が千メートルくらいまで近づくのをまってから発射した。

砲弾は、巨人のまわりで破れつした。巨人は、二、三歩よろめいたと思うと、ばったりとたおれてしまった。兵士たちは、どっとはやしたて、大いそぎで砲弾をつめなおした。

たおれた巨人は、ながく尾をひくさけび声をあげた。すると、第二の巨人がすぐそれにこたえて、南の林の上に、きらきら光るすがたをあらわした。

たおれた巨人は、三本足の一本を砲弾でくだかれたらしい。この巨人めがけて、二どめのいっせい射撃がおこなわれたが、みんな、ねらいが大きくはずれてしまった。

それとどうじに、ほかのふたりの巨人は、熱線を陣地に放射してきた。弾薬が爆発し、まわりのマツの木は、ぱっと赤く燃えあがった。あやうく助かった兵士は、わずか、ひとり

かふたりだった。

そのあと、ふたりの巨人は、たおれた巨人のかたわらへいって相談をはじめた。見はりの兵士の報告によると、巨人たちは、三十分ばかりじっとしていたという。

たおれた巨人の頭から、火星人がはいだした。そして、こわされたぶぶんを修理しているようだったが、やがて、また立ちあがった。

そのうちに、ほかの四人の巨人が、ふとくて黒い管をもってやってきた。はじめの三人にもおなじような管を、ひとつずつわたした。

七人の巨人は、おなじ距離をとってまるくひろがり、いっせいにすすみはじめた。すると、その前の丘から、のろしが十ほどうちあげられた。このあたりにちらばっている砲兵陣地に、火星人が近づいたことを知らせたのだ。

と思うまもなく、黒い管をかかえた四人の巨人が、川をわたりはじめた。そのとき、わたしと牧師は、北につうじる道をとぼとぼ歩いていたが、この巨人たちのうちのふたりが、西空を背にして、黒ぐろと見えてきた。巨人たちは、雲の上を歩いているように見えた。というのは、乳色のもやが野原をおおって、巨人の足を下から三分の一ばかりかくしていたからである。

牧師は、これを見て、のどの奥でかすかにさけび声をたてて走りだした。だが、わたしは、この巨人からにげてもむだだとわかっていたので、道ばたのみぞにはいこんだ。牧師はふりむいて、わたしのしていることを見ると、あともどりして、わたしのまねをした。

ふたりの巨人は立ちどまった。巨人たちは、もうほえるのをやめてしまっていた。七人の巨人は、三日月形にひろがっていたが、そのはしからはしまでは、二十キロちかくあった。その三日月形の正面には、丘の上や林のなかに、砲兵陣地がまちかまえていた。合図ののろしがあがると、それらの陣地は、いっせいにいろめきたった。

巨人たちが砲弾のとどくところまで近づけば、ずらりとならんだ大砲が、いっせいに火をふくのだ。

わたしは、巨人たちのすがたを見まもりながら、心のなかでいろいろなことを思いめぐらした。

火星人は、わたしたち地球人のことを、どれくらい知っているのだろう。地球人の反撃については、巣をつつかれたハチがおこっておそいかかったくらいにしか思っていないのだろうか。ロンドンでは、戦闘準備ができているだろうか。

かなりながい時間がすぎたように思われた。そのとき、遠くで、大砲のとどろくような音がした。つづいてもう一発、もう一発。一発ごとに、音は近くなってきた。

やがて、わたしたちの近くにいる巨人が、黒い管を高くかかげて、大砲のように発射した。おもおもしいとどろきが、地面をゆさぶった。もうひとりの巨人が、おなじように発射した。

わたしは、この奇妙な大砲の発射を見て、ひどく興奮し、身の安全も手のやけどもわすれてかきねによじのぼり、はじめに砲声がしたほうをながめた。いまの砲撃で、煙か火の手があがっていると思ったのだ。

ところが、地平線には、白いもやがひろがっているばかりだった。なんの爆発もおこらなかった。あたりは、しずまりかえっていた。

牧師が、わたしのそばでたずねた。

「なにがおこったのです？」

「わかりませんな。」

コウモリが、音をたてて飛びさった。火星人のほうを見やると、川岸にそって東のほうへ、あの回転するようなうごきですすんでいくところだった。

いまに、かくれた砲兵陣地からいっせい射撃がおこるだろう。わたしは、そう思って、いまかいまかとまっていたが、夜の静寂はやぶられなかった。

火星人のすがたは、遠くへさるにつれて、だんだん小さくなり、やがて、もやと、たれこめてきた夕やみにのまれてしまった。

わたしたちは、いいあわせたように、もっと上へよじのぼった。むこうの地平線に、円錐形の丘のようなものが、黒くもりあがっていた。もっと遠くに、もうひとつ、おなじようなものが見えた。

この黒い丘は、わたしたちが見ているうちに、しだいにひろがっていった。

さらに目を横にうつすと、そこにも、三つめの丘がもりあがっていた。

あたりは、しずまりかえっていた。はるかかなたで、火星人たちがさけびあっているのが聞こえた。やがて、またあの大砲のような音がとどろいたが、砲兵陣地からは、なんの反撃もなかった。

そのときのわたしたちは、事情がまるでわからなかったが、のちになって、あのきみのわるい小山の意味を教えられ

た。

火星人たちは、丘といわず、林といわず、村といわず、砲兵陣地がかくれていそうなところめがけて、あの黒い筒から大きな砲弾を発射したのだった。

この弾丸は、地面にあたるとくだけるが、爆発はしない。たちまちインキのように黒くおもい蒸気をもうもうとふきだす。蒸気は、黒い雲のようにうずまきながら、たちのぼる。この蒸気の丘は、ひとりでにしずんで、ゆっくりとまわりにひろがっていく。この蒸気をすいこんだ者は、たちまち息がつまって死んでしまうのだ。

この蒸気は、どんな煙よりもおもく、はじめのショックでまいあがったのち、空中をしずんで、気体というより液体のように地面をながれ、谷や川やみぞにくだっていく。

この蒸気は、水にふれると、なにかの化学反応をおこし、黒いかすとなって、水の表面にうく。ふしぎなことだが、蒸気をすうとたちまち死んでしまうのに、このかすをこした水を飲んでも、なんの害もないのであった。

これは、地球にはない四つの元素からできているらしいが、それがどんなものかはわかっていない。

黒い煙は、いちどはふきあがるが、しだいにしずんで地面にひくくたれこめるので、高い屋根の上とか、大きな木のいただきとか、地上十五メートル以上のところにいれば、危険をまぬがれることができる。

じつのところ、そのようにして命をとりとめた男がいる。その男は、教会の塔にのぼっていたおかげで助かったのだ。塔の上から見おろすと、インキ色の蒸気がうずまきながれ、そのなかに村の家いえがゆうれいのようにうきだして見えた。

男は、つかれと飢えに苦しみ、日に焼かれながら、一日半も、塔の上にとどまっていた。

だが、たいていのばあい、火星人は、黒い毒ガスでそのいったいの人間をみな殺しにしてしまうと、またそこへでかけて水蒸気を放射し、空気ちゅうからそれをとりのぞいてしまうのだった。

こうして火星人たちは、人間がジバチを煙でいぶすように、このおそろしい毒ガスをまきちらしながら、ロンドンに近づいていったのだ。

火星人にむかって、まとまった攻撃をおこなったのは、この日曜の夜がおわりであった。それからは、火星人にまともにたちむかう者はだれひとりもいなかった。

16 ロンドン脱出

こうして、日曜の明けがたには、世界でいちばん大きい都市であるロンドンは、すさまじい恐怖の波にあらわれていた。

避難者のながれは、だんだんはげしくなり、駅のまわりでうずまき、テムズ川の船つき場におしよせてもみあった。

列車はすしづめで、さらにわりこもうとする人びとが、死にものぐるいであらそっていた。ふみつぶされる者までいた。交通整理にあたった警官までが、あまりのつかれにのぼせあがって、市民の頭をうちわったりした。

汽車にのれぬ人びとは、北にむかう道路にあふれだしていた。

昼ごろになると、火星人の巨人機械がひとり、ロンドンの南のはずれにあらわれて、例の毒ガス弾を発射した。黒い煙は、テムズ川にそってながれ、橋をわたってにげる道をふさいでしまった。

わたしの弟は、北へむかう道路にでてすすむうちに、自転車屋の前で、血まよった人びとが自転車をうばいあっているところで、一台の自転車を、うまく手にいれることができた。

自転車は、あらそいのはずみで、前の車輪がバンクしてしまったが、そんなことにはかまっていられぬので、そのままそれにのって出発した。

そんなわけで、弟はひどい混雑をさっさとぬけだし、飢えとつかれに苦しみながらも、ほかの人びとよりさきをすすんでいった。

だが、とうとう自転車の車輪がうごかなくなったので、道ばたにすてて、とぼとぼ歩きだした。

エッジウェア村にきかかると、村人たちが道ばたや戸口に立って、なにごとがおこったのかというように、避難者たちをながめていた。弟は、ここの旅館で、食物を手にいれることができた。

からだを休めて、つぎにどうしたものかとまよっているうちに、避難者の数がしだいにふえてきた。だが、その人たちも、火星人についての新しいニュースはなにも知らなかった。

弟は、ロンドンの北東四十キロばかりのところにあるチ

エルムスフォードの友人のところへいくことにした。
北東にむかう小道をたどりはじめたが、避難者のすがたはほとんどなかった。
道のまがっているところに近づくと、そのむこうから、女の悲鳴が聞こえてきた。いそいでまがりかどにかけつけてみると、男がふたりがかりで、小型馬車からふたりの女をひきずりおろそうとしていた。三人めの男は、おどろいてあばれる小馬の首をおさえていた。
女のひとりは、白いドレスを着た背のひくい人で、ただ悲鳴をあげるばかりだった。もうひとりは、黒い服を着たほっそりした人で、自分の腕をつかんでいる男を、手にしたむちでうっていた。
弟は、さけびながらそのほうへかけていった。女をひきずりおろそうとしていた男のひとりが、手をとめて弟をふりむいた。
かれは、拳闘には自信があったので、いきなりその男にとびかかって、なぐりたおし、急所をけりつけて、気ぜつさせてから、黒服の女の腕をひっぱっていた男のえり首をつかんだ。
そのとき、馬の首をおさえていた男が、弟のみけんをむちでなぐりつけた。弟につかまえられていた男は、そのすきに身をふりほどいて、小道をにげていった。
弟は、ちょっと目がくらんでいたが、気をとりなおしてみると、三番めの男とむきあっていた。
馬車は、がたがたとゆれながら走りだしており、馬車にのった女は、身をのりだしてふりむいていた。
目の前の男は、がっしりしたあばれ者で、はげしくとびかかってきたが、弟は身をかわして、顔に一発くらわした。そして、くるりと背をむけて、馬車のあとからかけだした。がっしりした男は、おいかけてきた。さっきにげた男も、あともどりして、ずっとうしろからおってきた。
弟は、石につまずいてたおれた。すぐあとの男も、ひっくりかえった。弟が立ちあがると、おくれていた男がおいついて、敵はふたりになっていた。
このままだったら、弟はやられてしまっただろう。ところが、あのほっそりした女は、だいたんにも馬をとめて、弟を助けにもどってきた。
女は、ピストルを手にしていた。さっきは、とつぜんに三人の男におそわれたので、とりだすひまがなかったらしい。
女は、六メートルばかりむこうから、ピストルをうった。

弾丸は、弟をかすめた。あのおくびょうな男が、まずにげだした。がっしりした男は、それをののしりながら、やはり自分もにげだした。ふたりは、もうひとりの男が気ぜつしてたおれているところで立ちどまった。
ほっそりした女は、弟に自分のピストルをさしだしていった。
「これをおもちなさい。」
弟は、きれたくちびるの血をぬぐいながらいった。
「馬車におもどりなさい。」
女は、ひとこともいわずに背をむけた。ふたりは、馬車のところへもどっていった。白い服を着た女は、おびえた小馬をおさえようと、ほねをおっていた。
弟がふりかえってみると、どろぼうたちは、こそこそひきあげようとしていた。すっかりまいってしまったらしい。
弟は、女たちにいった。
「よろしければ、前の席にすわらせてもらいます。」
弟が席につくと、黒服の女は、馬にむちをあてた。馬車は走りだして、かどをまがった。三人の男のすがたは見えなくなった。
こうして、弟は、思いがけぬことで、ふたりの女の道づれになった。
黒い服の女は、自分たちのことをつぎのように説明した。
「わたしは、スタンモアに住むエルフィンストーンという医者の妹で、こちらは兄よめです。兄は、ゆうべおそく急病人を見まったかえり道で、火星人がおそってきたことを聞きました。そこで、いそいで家にもどって、わたしたちをおこし、馬車でエッジウェアまでいって、そこから汽車で避難するようにいいつけました。
兄は、あとにのこって家のかたづけをすませてから、わたしたちをおいかけるというのでした。明けがたには、わたしたちにおいつくだろうといっていましたが、もう九時になるのに、まだすがたが見えません。
エッジウェアでは、避難者の数がふえて、馬車をとめておけなくなったので、このわき道にはいったのです。」
弟はいった。
「おにいさんがいらっしゃるまでは、あなたたちといっしょにいますよ。もし、おにいさんがいつまでもいらっしゃらなかったら、それからさきのことも、ご相談にのります。」
それから、自分がロンドンからぬけだしてきたようすと、火星人について知っていることをのこらず話して、つけくわ

えた。

「そういうわけですから、このあたりでいつまでもぐずぐずしているのは危険です。なるべく早く遠くまで避難してしまうのがいいと思います。」

医者の妹、つまりエルフィンストーン嬢はいった。

「わたしたち、お金をもっていますわ。三十五ポンドばかりありますから、汽車のきっぷを買うにはまにあうでしょう。」

「わたしも、十ポンドばかりもっています。だが、ロンドンの駅でのさわぎから考えると、汽車にのるのは、まずむりでしょう。わたしの考えでは、馬車で北東へすすんで、ハリッジあたりの港から、外国へにげだすのがいちばんよさそうです。」

医者の妻、つまりエルフィンストーン夫人は、弟のいうことも耳にはいらぬようすで、心ぼそそうに夫の名まえをつぶやいていたが、エルフィンストーン嬢のほうは、おちついてしっかりしていた。

「わたしも、それがいいと思いますわ。」

三人は、そこで、北東へむかって馬車をすすめていくことにした。

17 水雷艇の活躍

火星人が、破壊することだけを目的にしていたとしたら、月曜日のうちに、ロンドンの全市民をみな殺しにしてしまっていただろう。だが、火星人は、どういうつもりか、いっきにロンドンを攻撃しようとはしなかった。

もし、この月曜の朝、気球で大空にのぼってロンドンを見おろしたら、さぞかし、かわったながめだったにちがいない。

ロンドンから北東へむかうすべての通りは、避難者のながれで黒っぽく見えただろう。秩序をうしなった六百万の人間が、ゆくさきもわからずににげだしたのだ。

いっぽう、ロンドン市内は、人っ子ひとりいなくなって、あみのめのようにいりくんだ通りも、がらんとして、人通りはとだえていた。

ロンドンの南にひろがる緑の平野には、地図の上にペン先からインキをふりかけたように、黒い毒ガス弾のおちたあとが、ぽつりぽつりと見える。その黒いしみは、すいとり紙にインキがにじむように、じりじりひろがっている。

そのあたりには、きらきら光る巨人機械が、いったりきたりしながら、黒い毒ガスをせっせとまきちらしている。しかし、毒ガスが目的をはたすと、こんどは蒸気を放射して、毒ガスをけしてしまうのだ。

火星人は、自分たちに反抗する者はのこらず破壊してしまうが、反抗しない者までみな殺しにするつもりはないらしかった。

午後の一時ごろになると、ついに巨人機械がテムズ川の南岸にあらわれ、川をわたってロンドンにはいってきた。

いっぽう、円筒は二十四時間のあいだをおいて、ひきつづき落下してきた。五番めの円筒がおちた場所は、わたしとふかい関係があるので、のちにくわしくのべるが、六番めの円筒は、ウィンブルドンにおちた。

そのとき、わたしの弟は、ロンドンから北東へ数十キロはなれたある牧場で、馬車をとめ、ふたりの女が眠っているかたわらで見はりをしていたが、はるか南の地平線に、緑色の光がひらめきながらおちるのを見かけたのだった。

火曜日も、弟たちは北東へすすみつづけた。火星人がロンドンを占領したというニュースがつたわってきた。

その夜、七番めの円筒が、ロンドン市内に落下した。こんどは、エルフィンストーン嬢が見はりに立っていてそれを見た。

水曜日に、弟たちはチェルムスフォードの町についた。すると、公共物資配給委員会と名のる人びとがやってきて、馬車につけた小馬を食料としてとりあげてしまった。

町には、火星人が南からせまっているというわさがながれていた。弟は、ぐずぐずしていられぬと考えて、すぐ徒歩で出発することにした。

昼ちかく、とつぜん海が見えてきた。いろんな種類の船が、おどろくほどたくさんあつまっていた。それらの船は、避難者たちを外国にはこぶためにまちかまえているのだった。小型の漁船、蒸気船、帆船から、大型の貨物船、客船にいたるまで、ありとあらゆる船が見うけられた。

海岸には、ボートがむらがって、岸にいる避難者たちと、運賃をかけあっているらしかった。

三キロばかり沖に、一せきの軍艦がういているのが見えた。これは、水雷艇サンダーチャイルド号だった。

近くにいる軍艦はこれだけだったが、ずっと沖のほうには、艦隊が戦闘準備をととのえてひかえていた。

エルフィンストーン夫人は、海を見ると、すっかりとりみ

だしてしまった。

「わたし、これまで、外国にいったことがないんです。外国でひとりさびしく暮らすくらいなら、死んだほうがましです。スタンモアの家へもどって、主人にひと目あいたいわ。」

エルフィンストーン嬢が、なぐさめたりはげましたりしたが、夫人はしきりに泣きごとをのべた。

弟とエルフィンストーン嬢は、やっとのことで夫人をときふせて、海岸につれていった。そこには、テムズ川からまわってきた外輪蒸気船のボートがいて、話をもちかけてきた。

「ベルギーのオステンド港まで、三人で三十六ポンドではこんであげるが、どうですね？」

弟は、べらぼうにたかいとは思ったが、危険がせまっていたので、やむをえずしょうちすることにした。

「よし、たのもう。」

三人は、そのボートで蒸気船にはこばれ、乗船口で船賃をはらって、のりこんだ。午後の二時ごろだった。

もう四、五十人の船客がのっていたが、船長は、五時ごろまでいかりをおろして、船が船客でぎっしりになるのをまっていた。

そのうちに、南のほうで大砲のとどろきが聞こえだしたので、欲ばりな船長も、あわてていかりをあげさせた。さもなければ、もっとがんばっていただろう。

砲声は、しだいに大きくなってきた。南の地平線にたなびいたもやのなかから、ひとすじの煙が、かすかにたちのぼった。

弟たちをのせた小型蒸気船は、大きい船がとまっているあいだを、東へむけてすすんでいった。岸がだんだん青くかすんできた。

そのとき、火星人の例の巨人機械がひとりあらわれた。まだ遠くで小さくしか見えないが、海岸を北にむかってすすんでくるのだった。

船長は、それを見ると、おびえあがって、大声でさけんだ。

「ちくしょう、もっと早く出発しておくんだった。」

船の外輪は、はげしく水をかきはじめた。

船客たちは、船べりにずらりとならんで、こわごわと巨人のほうをながめていた。巨人は、陸地の木や教会の塔より高くそびえたって、ゆっくり大またに近づいてきた。

弟が火星人を見たのは、これがはじめてだった。おそれとおどろきのいりまじった気持ちでみつめているうちに、巨人は海にふみこんで、しだいにふかいところへすすんできた。

つづいて、もうひとりの巨人が、海岸にすがたをあらわした。さらにもうひとり。巨人たちは、この港にあつまっている船のにげだすのをとめようとしているらしい。

弟たちの船の外輪は、気のくるったようにしぶきをはねかえして回転していた。だが、巨人は海のなかをこちらへぐんぐん近よってきた。それで、船があともどりしているのではないかと、思われた。

港にむらがった多くの船は、早くにげだそうと、うろたえていた。蒸気船はもうもうと煙をはき、帆船はいそがしげに帆をかかげた。

弟は、岸のほうに気をとられていて、沖には目をむけなかったが、船がとつぜんはげしくゆれたので、立っていた座席からどっとほうりだされてしまった。まわりの人びとは、うれしそうに足をふみならした。なにかいいことがおこったらしい。

弟は、おきあがって右がわを見た。船から百メートルとはなれていないところを、ナイフみたいにするどくとがった大きい鉄の船体が、あわだつ波をかきわけてつきすすんでいくのが見えた。

その波がぶつかったために、船がはげしくゆれたのだった。船が大きくかたむいたので、かたがわの外輪は水からでて、からまわりし、反対がわの船べりは、水のなかにひたりそうになった。

水雷艇サンダーチャイルド号が、巨人にむかっておそいかかったのだ。甲板の大砲は、ぱっと大きく火をふいた。

弟は、ゆれうごく甲板に立って、船べりにつかまりながら、また巨人のほうを見やった。巨人は、いまや三人いっしょにかたまって、長い三本足がすっかりかくれるほど沖へでていた。水面にでているのは、ぼうしのような形の頭だけなので、そのほうへつきすすんでいく水雷艇とくらべると、それほどおそろしくは見えなかった。

巨人たちは、この新しい敵にとまどっているらしい。水雷艇は大砲を発射せず、全速力で巨人たちにせまっていった。そんなに近くよれたのは、大砲をうたなかったからだろう。

火星人は、この新しい敵をどうあつかったらいいかわからぬようだった。水雷艇が一発でも発射すれば、火星人は、それに対抗して、熱線を放射し、たちまち水雷艇をやっつけたにちがいない。

水雷艇は、一分間のうちに、弟たちの船と巨人たちとのなかほどまでつきすすんだ。

とつぜんに、先頭の巨人が黒い管をひくくかまえて、水雷艇めがけて黒い毒ガス弾を発射した。

毒ガス弾は、水雷艇の船べりにあたった。インキのような黒い煙をふきだし、うずまきながら海面にひろがった。と思うまもなく、その黒雲をつきやぶって、水雷艇がすがたをあらわした。

三人の巨人は、ばらばらにわかれて、岸のほうへひきあげはじめた。そのひとりが、カメラのような形の熱線放射器を高くさしあげて、ななめ下にむけて放射した。

熱線は、水雷艇の船べり近くの水面をうち、水蒸気が雲のようにわきあがった。その熱線は、白熱した鉄の棒が紙をつきやぶるように、水雷艇の船べりをつらぬいたにちがいない。

そのとき、わきあがる蒸気のなかに、ひとすじの炎がひらめいた。水雷艇が大砲を発射したのだ。

巨人は、ぐらぐらとよろめいたとおもうと、どっと海中にたおれた。大きな水柱と蒸気が、空高くふきあがった。

蒸気船にぎっしりつまった船客は、巨人がたおれたのを見て、どっとはやしたてた。

そのとき、白い蒸気のうずのなかから、水雷艇の黒い船体があらわれた。船べりから、炎の尾をひきながらも、突進していくのだ。船客は、またよろこびの声をあげた。

水雷艇は、まだ舵もきくし、エンジンもうごいているようだった。第二の巨人めがけて、まっしぐらにせまっていった。二百メートルたらずのところへきたとき、巨人が熱線を放射した。

水雷艇の上ではげしい爆発がおこり、目もくらむような光といっしょに、甲板や煙突がとびちった。火星人は、この爆発のあおりでよろめいた。と思うまもなく、水雷艇は、炎につつまれたままつきすすみ、巨人にぶつかった。巨人は、ボール紙細工みたいにくだけて、ぶったおれた。

弟は、おもわずさけび声をたてた。たちまち、蒸気が雲のようにうずまきを立ててあがり、すべてをおおいかくしてしまった。

船長がさけんだ。

「ふたりやっつけたぞ。」

船じゅうの者が、くるったようにはやしたてた。どの船もどの船も、よろこびのどよめきにつつまれた。

蒸気が水面にひろがって、第三の巨人も海岸もおおいかくされてしまった。そのあいだ、船は沖へむかってたえずすすみつづけ、戦場から遠ざかっていった。

しばらくして、黒い煙や水蒸気がしずまってみると、水雷艇サンダーチャイルド号のすがたは、あとかたもなくなっていた。

太陽がしずみかけ、西の地平線は、金色に光るもやにつつまれていた。

そのときふいに、大砲のとどろきがつたわってきた。船客は、あらそって手すりにしがみついて、西のほうをながめやったが、なにも見わけられなかった。煙がななめにたちのぼって、太陽の表面にすじをつけた。

やがて日がおちて、空はしだいに暗くなってきた。よいの明星が、ちらちら光りはじめた。

すると、船長がさけび声をあげて西の地平線を指さした。

「見なさい。」

弟は目をこらした。夕もやのなかから、なにかが空に飛びあがっていた。それは、雲の上に見える青くすんだ高い空へ、はげしい速さで、ななめにかけあがっていった。

それははばのひろいたいらなもので、空に大きい曲線をえがいて飛びながら、しだいにひくくおりてきたが、また地平線の夕もやのなかにすがたをけしてしまった。

第二部　火星人の支配

1　火星人の足もとで

話がしばらく弟のほうへそれてしまったが、また自分のことにもどりたい。

日曜日の夜、わたしと牧師は、黒い毒ガスをのがれて、ロンドンから二十キロばかり南西にあるハリフォード町のあき家ににげこんだ。そして、その夜とつぎの日いっぱい、黒い煙で外の世界からへだてられて、そこにひそんでいた。

わたしは、妻のことが心配でならなかった。妻は、レザーヘッドにとじこめられて、恐怖におののきながら、わたしがすでに死んだものと考えて、なげいているにちがいない。

妻をあずかっているわたしのいとこは、おくびょうではないが、頭のはたらきのはやいほうではない。いまは、勇かんな態度よりも、用心ぶかい心がまえが必要なのである。

ただひとつの気やすめは、火星人がロンドンのほうにむかっていることだった。つまり、妻のいるレザーヘッドからは遠ざかっているのだ。

それでも、わたしは、自分の心配を、おもてにあらわしはしなかった。ところが、牧師のほうでは、たえずおおげさなため息をついては、おとならしくもない泣きごとをならべるのだった。わたしは、かれの子どもじみた態度に腹をたてて、べつのへやにとじこもった。

黒い煙は、月曜の午前ちゅうずっと、川のほうへゆっくりながれつづけ、とうとう、わたしたちのかくれている家の外の道までひたしてしまった。

昼ごろ、巨人機械のひとりが、野原を横ぎってあらわれ、熱い蒸気を放射して黒い煙をけした。

蒸気は、わたしたちのいる家にもはげしくふきつけられ、窓ガラスがうちくだかれた。牧師はあわててにげだしたけれども、熱い蒸気で手にやけどをしてしまった。

巨人がたちさったあと、わたしたちは窓から外をのぞいてみた。あたりは、黒いふぶきがとおりすぎたあとみたいだった。川のほうをながめると、まっ黒に焼けた牧場に、なにかわからぬ赤いものがまじって見えた。

わたしたちは、これでやっと、黒い煙の危険からまぬがれることができたのだ。

わたしは、すぐに出発しようといったが、牧師は、気がぬけたようにぼんやりとしていて、くりかえしいうのだった。

「ここにいれば安全ですよ。ここは安全ですよ。」

わたしは、牧師をおいていくことにして、でかけるしたくをはじめた。すると、牧師は、急にそわそわして、いっしょにいこうといいだした。わたしたちは、五時ごろ出発し、北東への道をたどっていった。

サンベリーの町では、人間や馬の死体が、ひきつれたようなかっこうでころがっていた。それらの死体も、ひっくりかえった馬車や、なげだされた荷物も、みんな黒いほこりをかぶっていた。

なおすすんでいくと、やっと緑の草木が見えてきた。このあたりは、黒い煙をまぬがれたのだ。

ぽつぽつ道で人を見かけるようになった。たいていの者は、わたしたちとおなじに、つぎの避難場所を見つけようとしているのだった。

八時半ごろ、わたしたちはリッチモンド橋をわたった。水面を見ると、さしわたし二、三メートルもある赤いかたまりがながれていくのが見えたが、それがなんだかわからなかった。

この町でも、黒いほこりが地面をおおい、死体がごろごろしていた。

リッチモンドをとおりすぎて、キューの町に近づいたとき、とつぜん、むこうからたくさんの人びとが走ってきた。はっとするまもなく、ゆくての屋根の上に、巨人機械の上部があらわれた。わたしたちから百メートルとはなれていない。わたしも牧師も、あっけにとられて立ちすくんだ。そのとき、巨人が下を見ていたら、わたしたちはその場で殺されていただろう。

おどろきからさめると、わき道にとびこんで、ある家の庭の小屋にかくれた。牧師は、そこにうずくまって、おとなのくせに、さめざめと泣いているばかりで、いつまでたっても立ちあがろうとしなかった。

わたしは、しかし、レザーヘッドへいかなければならぬと

思いつめていたので、夕がたになると、小屋をでていった。すると、牧師は、あわててわたしのあとからおいかけてきた。

わたしのしたことは、まったくむこうみずだった。なぜなら、火星人がわたしたちの近くにいることは、はっきりしていたからだ。

はたして、牧師がおいつくかおいつかないうちに、巨人機械がひとり、牧場を横ぎってすすんでいくのが見えた。その前を、四、五人の人かげが走っていく。

巨人は、その人びとをおいかけているのだ。大またに三歩すすむと、もう人かげにおいついた。しかし、熱線は放射せずに、触手でひとりずつつまみあげた。そして、背中につきでた大きな金属のかごに、ぽんぽんとほうりこんでしまった。

わたしは、このときはじめて、あることに思いあたって、急にぞっとした。火星人は、人間を殺すほかにも、なにかおそろしい目的をもっているのではないだろうか。

わたしは、くるりとふりむくと、そばの門から庭ににげこんで、みぞに身をかくした。牧師も、あとにつづいた。

わたしたちは、星が見えはじめるころまで、ものもいわず、身うごきもせずに、ちぢこまっていた。

夜も十一時ごろ、わたしは勇気をふるって、また出発することにした。もう、通りをすすむのはやめて、かきねや植木のかげづたいにたどっていった。巨人がどこにいるかわからぬので、牧師は右、わたしは左と、やみにむかってするどく気をくばりながらいくのだった。

やがて、シーンについた。この町は、こわされずにすんだらしいが、どの家もしずまりかえっていて、人間はいないようだった。

牧師が急につかれとかわきをうったえはじめたので、ふたりで、このあたりの家をあさってみることにした。

はじめにはいった家には、かびたチーズのほかは、なにも見つからなかったが、水だけはあった。

つぎにはいったのは、石べいをめぐらした白い家だった。食料室にはいると、食べものが見つかった。パンが二つ、肉が一まい、ハムが半本。こんなにくわしくおぼえているのは、それから二週間ほど、これだけのものですごさなければならなかったからだ。

そのほか、びんづめのビールがあり、インゲンマメが二ふくろと、しなびたレタスものこっていた。

食料室は、台所につうじていて、台所には、たきぎがあった。台所の戸だなには、ぶどう酒が一ダースばかりと、サケのかんづめと、ビスケットが二かんあった。

わたしたちは、台所に腰をおろした。火星人に見とがめられるのがこわかったので、あかりはつけなかった。パンとハムを食べ、ビールをひとびん飲んだ。

牧師は、さっきまでびくびくしていたのだが、おかしなことにひどくいきおいこんでいった。

「ひとやすみしたら、また出発しましょう。」

「それはいいが、じゅうぶんに食べて、力をつけてからのことですよ。まだ、ま夜中にはまがあるだろう。」

わたしがそういったとき、目もくらむような緑色の光がひらめいた。台所にあるものが、緑と黒にはっきり色わけされて、てらしだされ、たちまち、またまっ暗になった。

つぎのしゅんかん、家じゅうがすさまじくゆれうごいた。窓ガラスがわれ、壁がくずれ、天じょうのしっくいが、ばらばら頭にふりそそいだ。わたしは、床にたたきつけられ、かまどにぶつかって気をうしなってしまった。

わたしは、ながいこと気ぜつしたままだったらしい。気がつくと、あたりは、やはりまっ暗だった。牧師が、わたしの顔をぬらしてくれていた。

しばらくのあいだ、わたしはなにがおこったのか思いだせなかった。そのうちに、だんだん頭がはっきりしてきたが、どうじに、こめかみの傷がいたみだした。

牧師が、ささやき声でいった。

「よくなりましたか？」

わたしは、やっとこたえて、おきなおった。

牧師が、注意した。

「うごいてはいけません。戸だなから食器のかけらがおちて、床にちらばっているんです。うごくと音がします。おもてには、火星人がいるにちがいありませんからね。」

ふたりは、だまってすわっていた。家のなかは、死んだようにしずまりかえっていた。いちどだけ、わたしたちのわきで、しっくいかれんがのかけらのようなものが、ごろごろ音をたててすべりおちた。

外では、すぐ近くで、金属がぶつかるような、がらがらいう音が、とぎれとぎれに聞こえていた。

牧師がつぶやいた。

「あれをお聞きなさい。」

「うん、しかし、なんだろう。」

「火星人ですよ。」

わたしは、聞き耳をたてた。

「熱線の音とはちがうようだな。巨人機械が、この建物にぶちあたったのかもしれん。」

わたしたちは、どういう事情なのかまるでわからないので、それから三、四時間して夜の明けるまで、ほとんどうごかないで、じっとしていた。

やがて、朝の光がかすかにさしてきた。その光は、窓からさしてくるのではなかった。窓は、外にもりあがった土で、すっかりおおいかくされていたのだ。わたしたちのうしろの壁がくずれてできたれんがの山と、天じょうの横げたのあいだに、三角形のすきまができていて、光は、そこからさしこんでくるのだった。

そのよわい光で、台所のなかがぼんやりと見えてきた。たくさんの庭土が、窓ガラスをやぶってとびこんだらしく、食卓も床も土でおおわれていた。窓の外には、土が土手のようにもりあがっている。

台所からおも屋へつづく個所は、めちゃめちゃにくずれて、すきまから光がさしこんでいる。どうやら、おも屋は、すっかりつぶれてしまったらしい。

明るさがますにつれて、壁のわれめから、巨人機械が見はりにたっているのが見えてきた。そこで、わたしたちは、うす明るい台所から、まっ暗な洗い場のほうへと、できるだけしずかにひっこんでいった。

わたしには、とつぜん事情がはっきりした。牧師にこうささやいた。

「五番めの円筒だよ。火星から発射した五番めのものが、この家に命中して、わたしたちは、がらくたの下にうめられてしまったのだ。」

牧師は、しばらくだまっていたが、急につぶやいた。

「神よ、わたしたちを、おあわれみください。」

やがて、牧師のすすり泣く声がした。その声のほかは、あたりはしんとしていた。わたしのほうは、息さえしのばせて、台所の戸口にさしこむかすかなあかりを見すえていた。

外では、がんがんという音がひびきはじめた。それから、汽笛のような大きな音が聞こえ、しばらくしずかになったが、こんどは、エンジンのうなるような音がしはじめた。

時間がたつにつれて、音の種類がふえてくるようだった。そのうちに、規則的なずしんずしんという音とともに、あたりがはげしくゆれうごきはじめた。

そういうことが何時間もつづいた。わたしたちは、ふるえながらうずくまっていたが、ついにはげしいつかれにまけて、うとうと眠りこんでしまった。

やっと目をさますと、ひどく腹がへっていた。昼のあいだずっと眠っていたのだろう。飢えはますますひどくなった。わたしは、がまんできなくなって、牧師にささやいた。

「食べものをさがしてくるよ。」

手さぐりで食料室のほうへ歩いていった。牧師は、ひとこともこたえなかったが、わたしが食べる音が聞こえたとみえて、そっと近づいてきた。

2　くずれた家からのぞく

わたしたちは、食べおえると、洗い場へもどった。そのあと、わたしはまたうたた寝したらしい。ふと気がついてあたりを見まわすと、牧師のすがたはなく、わたしはひとりぼっちだった。

どしん、どしんという地ひびきは、まだがんこにつづいていた。二、三ど、ひくい声で牧師をよんでみたが、へんじがないので、手さぐりで台所の戸口のほうへいってみた。

まだ日が暮れていないらしく、あの三角形の穴からあかりがさしていた。わが牧師は、その穴にへばりついて外をのぞいていた。

まるでエンジン室のなかにいるように、いろいろな音が聞こえてきた。そのひびきで、あたりがゆれている。壁にできたすきまから、夕日で金色にそまった木のこずえと、しずかな夕空のあたたかい青い色が見えた。

わたしは、一分ばかり牧師のうしろすがたをながめていたが、やがて、床にちらばった食器のかけらをふみつけぬように気をつけながら、腰をかがめてすすんでいった。

わたしは、牧師の足にさわった。すると、牧師はびっくりしてとびあがったので、外がわでしっくいのかたまりがすべりおち、大きい音をたてた。わたしは、牧師がさけび声をたてぬように、腕をつかんだ。

わたしたちふたりは、ながいこと身うごきもせずにうずくまっていた。やがて、壁のくずれぐあいをしらべてみた。しっくいのおちたところには、たてのさけめができていた。

用心しながら身をおこすと、そのさけめから、外のようすが見えた。あたりのながめは、がらりとかわっていた。

五番めの円筒は、わたしたちがはじめにはいりこんだ家のまんなかに命中したらしい。建物は、きえてなくなっていた。こなごなにくだけてしまったのだ。

円筒は、はじめにめりこんだところよりずっとふかいところに横たわっていた。その穴は、わたしがウォーキングでのぞいた穴より、はるかに大きくほりひろげられていた。

円筒はおそろしいいきおいで落下したので、そのはずみに土が穴のまわりにはねとばされて、山のようにもりあがっていた。

わたしたちのいる家は、うしろにくずれていた。穴に近い

ほう、つまりおも屋のぶぶんは、一階まですっかりつぶされていた。台所と洗い場だけは、運よくつぶれずにすんだが、まわりは、何十トンという土でうずめられていた。火星人がつくっている大きい穴のふちすれすれにひっかかっているのだった。

なにかをうちこむみたいなおもおもしいひびきは、わたしたちのうしろのほうからくるらしく、ときどき、まぶしい緑色の蒸気が、のぞき穴を横ぎってベールのようにたちのぼった。

穴の中央では、円筒がすでにひらいていた。そして、穴のむこうがわの林のなかには、あの巨人機械がひとり、夕空を背にして、ごつごつしたすがたでそびえていた。いまは、火星人がのっていないらしい。

説明のつごうで、穴と円筒のことをさきに書いたが、じつをいうと、そういうものをくわしく見たのは、あとのことだった。まず目をひきつけられたのは、ほかのものだった。

穴のなかでは、ぴかぴか光る奇妙な機械が、せっせと土をほり、そのそばにつみあげられた土の山の上には、あのきみのわるい火星人が、苦しげにはいまわっていたのだ。

その機械は、金属でできた大きいクモといったかんじで、節のある五本の足を、たくみにうごかしていた。胴には、節のあるレバーやバール、のびたりちぢんだりしてものをつかむことのできる触手などがたくさんついていた。

機械のうごきが、あまりすばやくたくみだったので、はじめのうち、わたしはそれが機械とは思えなかった。巨人機械は戦闘用のもので、やはりおどろくほどうまくあやつられるが、この機械のうごきは、それよりはるかにすぐれていた。

さっきは、この機械のことを、金属でできた大きなクモといったが、金属のカニというような感じもあった。

だが、これが機械で、火星人にあやつられていることはたしかだった。そこで、わたしはほんものの火星人に注意をむけた。

わたしは、火星人をすでに一ど見ていたので、はじめのときほどぞっとしないで、くわしく観察することができた。それに、こんどはものかげにかくれているので、あわててにげることもなかった。

見れば見るほど、火星人は、この世の生きものとは思えなかった。頭は、直径一メートル二十センチくらいもあって、その正面が顔になっている。顔には、鼻がない。じっさい、火星人には、においの感覚がないらしい。

二つの目は、黒っぽくてとても大きい。そのすぐ下に、肉のくちばしのようなものがある。

頭のうしろには、たいこの皮みたいにぴんとはった膜がついている。のちに、生物学者が火星人を解剖してみてわかったのだが、この膜は耳の役めをはたしていた。だが、地球のこい空気のなかでは、ほとんど役にたたなかったらしい。

口のまわりには、ほそいむちのような触手が八本ずつ二たば、しめて十六本はえている。これは、手足の役をするわけだが、地球の重力が火星の重力より大きいために、自分のからだをささえることができぬのだった。だが、火星の上では、この触手をつかって、らくらくとうごきまわっているにちがいない。

ついでに説明しておくが、のちに火星人を解剖してわかったところでは、からだの内部の構造は、ごく単純なものだった。

大きな脳からは、ふとい神経が目や耳や触手にはしっていた。そのほかに、肺、心臓、血管があったが、この肺は、地球の濃厚な空気のなかで、はたらきがよわっていたらしい。

人間のからだでは、胃とか腸とか肝臓とかいう消化器官が大きなぶぶんをしめているが、奇妙なことに、火星人には、こういうものがまるでなかった。

だから、火星人は、食物を口からとりいれることがなく、したがって消化することもない。そのかわり、ほかの生物から新鮮な血をとって、自分の血管に注射するのだ。

わたしは、火星人がそれをしているところをじっさいに見た。あとで、それについて話すつもりだが、残酷で見ていられなかったくらいなので、くわしく説明する気にはなれない。

かんたんにいうと、火星人は、まだ生きている人間や動物から血をすいとって、ほそい管で、直接血管にそそぎいれるのである。

これは、わたしたち人間にとっては、むろん、おそろしくいやなことだ。しかし、もしウサギにものを判断する力があったら、わたしたちがウサギの肉を食べるのを、おなじようにおそろしく思ったことだろう。

人間は、食事したり消化したりすることで、たくさんの時間やエネルギーをついやしているが、火星人は、注射で栄養をとるので、そういうむだをしないですむ。

人間は、胃や肝臓がじょうぶかどうかで、健康にもなれば不健康にもなり、それにしたがって、気分もほがらかになっ

たりふさいだりする。ところが、火星人は、消化器官のちょうしで健康や気分にえいきょうをうけずにすむのだ。

火星人は、地球の生物のなかでは、人間の血がいちばんすきらしかったが、そのわけは、火星人が火星から円筒ではこんできた食用生物を見てわかった。

この食用生物は、のちに円筒のなかでしなびた死体が発見されたのだが、いくらか人間に似た二本足の動物で、背は二メートルばかりだった。どの円筒にも、この動物が二、三びきずつのせられていたが、円筒が地球につくまでに、みんな殺されてしまったらしい。

このほか、火星人のからだについてのちにあきらかになったことを、もうすこし説明しておこう。

人間の心臓は、眠っているあいだもうごいているが、火星人は、心臓ばかりでなく、からだぜんたいが、眠ることがない。筋肉が少ないので、眠りによって筋肉のつかれをとりのぞく必要もないのだ。

じっさい、火星人は、つかれをかんじることがないらしい。地球では、からだをうごかすのにほねがおれたが、休むということをしなかった。アリのように、二十四時間ぶっとおしではたらいたのだ。

火星人のからだについて説明しているうちに、思いだしたことがある。火星人のしゅう来よりずっとまえのことだが、ある空想ずきの思想家が、人間の未来のすがたを予言していた。それが、火星人のすがたにひどく似たものだったのだ。

その思想家の説によると、機械が発達して人間をどこへでもすぐはこんでくれるようになれば、おしまいには足がいらなくなり、化学が進歩してすぐれた栄養剤ができるようになれば、消化器官もいらなくなる。おなじ理由で、髪の毛、鼻、歯、耳、あごのようなものもいらなくなるというのだった。

すると、動物のからだのうちで不必要になったものや、つかわなくなったものは、しだいにおとろえてなくなってしまうという自然の法則にしたがい、人間のそうした器官は、しだいにおとろえていくだろう。

だが、脳だけは、なくてはならぬものだから、もちろんのこる。それともうひとつ、手は脳が命令したことをやってのける器官だから、ほかのぶぶんが小さくなっていくのとはんたいに、ますます大きくなっていくだろう。

思想家の説は、いくらかおどけたちょうしのものだったが、たしかにあたっているところもある。

わたしの考えでは、火星人もずっとむかしは、人間に似たかっこうをしていたが、脳と手がしだいに発達して、とうとういまのようなすがたになったのだと思われる。

火星人のからだが地球人のからだといちじるしくちがっているてんが、もうひとつある。地球上では、微生物がいろいろな病気の原因になっているが、火星では、そういう微生物がまったくいない。これは、もともといなかったのか、さもなければ、火星人の衛生科学が異様なほど発達していたために、ずっとまえにほろびつくしてしまったのだろう。

だから、火星人は、熱病、伝染病、結核、がんなどの病気にかかったことがなかったらしい。

それから、火星人そのものことではないが、火星の赤い植物のことを、ここで説明しておこう。

地球の植物は、おもに緑色だが、火星の植物は、おもに血のようにあざやかな赤色をしている。とにかく、円筒ではこばれてきた植物は、みんな赤い色をしていた。だが、それらのうち、地球の植物との競争に勝って生きのこったものは、赤草とよばれるものだけだった。

この赤いつる草は、わずかのあいだおいしげっていただけなので、じっさいにそれを見た人はあまりいない。しかし、そのみじかいあいだ、赤草はおどろくほどのいきおいでひろがった。

わたしたちがくずれた家にとじこめられてから三日めか四日めには、赤草が穴のまわりにはえだした。それが、水のながれのあるところを中心に、ぐんぐんひろがっていったのだ。

ところで、わたしほど火星人がじっさいにうごきまわるのを見た人間はいないだろう。これは、ぐうぜんにそうなったのだから、じまんするつもりもないが、じじつそうなのだ。

わたしは、火星人をねっしんに観察した。四、五人あつまるが、音や身ぶりで連らくすることもなく、かれらは、ひどくむずかしい仕事をゆっくりやってのけた。

栄養をおぎなうときは、きまって奇妙なさけび声をたてた。なんのちょうしもないところからすると、血を血管にいれるまえに、肺の空気をいれかえる運動だったのだろう。

火星人は、声や身ぶりをつかわないでおたがいの考えをつたえあうことができるらしい。つまり、精神感応ができるのだ。

火星人は、衣服をまったくつけていない。人間とちがって、礼儀とかおしゃれとかの考えがないらしい。また、気温や気圧の変化も、あまりかんじぬにちがいない。

火星人の科学は、人間の科学よりずっと進歩しているが、火星人のつかう機械は、人間のつかう機械とひどくちがっているところがある。

それは、車輪というものがないということだ。火星人が地球にもってきた機械で、車輪をつかったものはひとつもなかった。

また、火星人の機械には、固定した軸がなかった。固定した軸では、回転がそれを中心としたひとつの平面にかぎられてしまうからであろう。

機械のつぎめは、すべて、美しい曲線をもったまさつ軸うけの表面をすべる、こみいったしかけになっている。

くわしく説明すると、機械についている長い節は、弾力のあるさやにはまった円盤形の筋肉のようなものでうごかされるのだ。この円盤は、電流がつうじると、磁力をおびてつよくひきあう。こうして、動物そっくりのなめらかな運動がおこなわれるわけである。

このような人工筋肉は、カニに似たあの工作機械にもたくさんついていた。ほんとうの火星人は、太陽の光のなかであえぎながら、のろのろ触手をうごかしていたが、それにくらべると、この機械のほうが、ずっといきいきして見えた。

わたしが火星人や機械のうごきを観察していると、牧師が腕をつよくひっぱった。牧師は、しかめっつらをしていた。なにもいわなかったが、その顔つきで、どういうことを考えているかわかった。牧師は、自分もわれめからのぞいてみたかったのだ。

われめは小さくて、いちどにひとりしかのぞくことができなかった。そこで、わたしは、牧師にしぶしぶ席をゆずったのだ。

3　とらわれの日々

そのうちに、ふたりめの巨人機械がやってきたので、わたしたちは、のぞき穴から洗い場へにげもどった。巨人は、目の位置が高いので、わたしたちがくずれかけた壁のかげにいるのを見おろせるかもしれぬ、としんぱいしたのだ。

だが、しばらくすると、わたしたちは、巨人に見つかる危険をあまりかんじなくなった。なぜなら、火星人の目は、太陽のまぶしい光にさらされているので、わたしたちがかくされているところは、まっ暗に見えるにちがいなかったからである。はじめのうちは、そのことに気づかなかったので、巨人が近づいてきそうになるたびに、胸をどきどきさせて、洗い場ににげこむのだった。

それに、危険をおかすのがどれほどおそろしくても、のぞいてみたいという気持ちは、とてもおさえきれぬほどつよかった。わたしたちは、飢え死にするか、火星人に見つけられてそれ以上おそろしい死にかたをするか、どちらかというような危険なたちばにいながら、のぞき見する権利をめぐって、はげしくあらそった。

見たくてたまらぬが、音をたてるのがこわいものだから、おかしなかっこうで台所をかけぬけ、なぐりあったり、おしあったり、けりあったりするのだった。

こういうことになったのは、わたしと牧師がまるで気があわぬうえに、ふたりだけで危険にさらされていることで、そのくいちがいが、いっそうひどくなったためだ。

わたしは、牧師とはじめてあったときから、牧師が絶望的なさけび声をたてるくせがあることや、ものの考えかたがおろかしく、かたくるしいのが、きらいだった。

このようにとじこめられたままで、牧師のはてしない泣きごとを聞いていると、気がくるいそうに腹がたった。

牧師は、おろかな女みたいに、自分をおさえることができなかった。何時間でも泣きつづけていることがあった。まるで、わがままな子どものように、泣けばなにか効果があると思いこんでいるらしかった。

牧師は、わたしよりよく食べた。わたしがいくらいってきかせても、むだだった。じっさいのところ、わたしたちが助かるただひとつの方法は、火星人が穴をしあげるまで、このかくれ場所にひそんでいることだが、そのあいだに食料がなくなってしまえば、飢え死にすることになるかもしれぬのだ。

ところが、牧師は、なにかにとりつかれたみたいに、おもいきり食べたり飲んだりするのだった。夜もほとんど眠らなかった。

日がたつにつれて、牧師は、いちだんと不注意なふるまいをするようになった。そのため、わたしたちのたちばは、いよいよ危険になってきた。そこで、気はすすまなかったが、牧師をおどしたりなぐったりしなければならなかった。すると、牧師も、しばらくはおとなしくなるのだった。

こんなことを思いだしたり書きしるしたりするのはいやなことだが、この物語の目的は、事実をありのままに書きとめることである。

ほんとうにみじめでおそろしいめにあったことのない人たちは、わたしのやりかたを、残酷だといって責めるかもしれぬ。だが、人間というものは、なにが悪いことかを知っていても、生きるか死ぬかのところにおいつめられると、どんなことでもやってのけるのだ。

こうして、わたしたちが、暗いかくれ場所のなかで、声をひそめていがみあい、食べものや飲みものをうばいあい、つかみあったりなぐりあったりしているあいだに、外では、六月のはげしい日ざしのなかで、火星人たちの奇怪な作業がつづけられていたのだ。

ここで、わたしがはじめの日に見たことに話をもどそう。しばらくして、わたしがおもいきってのぞき穴のところへもどってみると、三人の巨人機械が穴のまわりにいた。そして、それらの巨人たちがもってきたなにかの新しい機械が、円筒のそばにきちんとならんでいた。

もう、二つめの工作機械ができあがっていて、巨人がもってきた新しい機械のひとつを、せっせとはたらかせていた。その機械は、牛乳かんみたいな胴体の上に、ナシの形をした容器が振動していて、そこから白い粉が下の鉢になかれおちていた。

その振動は、工作機械の触手のひとつによってつたえられていた。工作機械は、へらに似た二本の手で粘土をほりだし、ナシの形をした容器になげいれていた。

もう一本の手は、ときどき機械の胴についた戸をあけて、黒っぽいかすをとりだしていた。

さらにもう一本の触手は、鉢にたまった粉を、といづたいに、青っぽいくずの山のむこうにある容器におくりこんでい

た。

その容器は、くずの山にさえぎられて見えなかったが、そこから、糸のようにほそい緑色の煙が、しずかな空にまっすぐたちのぼっていた。

なおもみつめていると、工作機械は、ずんぐりとつきでた腕を、望遠鏡みたいにするするのばした。そのさきが粘土の山のかげにかくれたとおもうと、つぎのしゅんかん、くもりなくかがやくアルミニュームの棒を、一本つかみあげて、穴のそばにつんであるおなじような棒の山の上にのせた。

日がおちてから星が光りはじめるまでに、このたくみにできた機械は、ただの粘土からアルミニュームの棒を百本以上つくりだしたにちがいない。青っぽいくずの山は、しだいにまして、とうとう穴のふちより高くなった。

これらの機械の、すばやくてたくみなうごきと、それをあやつっている火星人の、のろのろしたぎこちない動作は、たいそうきわだって見えた。どう考えても、機械のほうが生きものだというような気がしてくるのだった。

牧師が壁のわれめからのぞき見しているあいだ、わたしは下に腰をおろして、聞き耳をたてていた。

そのときとつぜん、牧師は身をひいた。わたしは、自分たちが見つかってしまったのかと思って、ぞっとした。

牧師は、がらくたの上からすべりおりてくると、わたしにはいよって、なにか知らせようとするらしく、しきりに身ぶりをしてみせた。ひどくおびえているようなので、わたしもおそろしくなった。

だが、しばらくすると、わたしは、こわいもの見たさで勇気がでてきた。そこで、牧師をまたいで、のぞき穴によじのぼっていった。

わたしはのぞいてみたが、なぜ牧師がおびえたのか、はじめは、わけがわからなかった。もう夕やみがただよって、星がかすかに光っていたが、アルミニュームをつくるのにつかわれている緑色の光のために、穴は明るくてらされていた。緑色の光で、ものの形がくっきりうきだしてみえるせいか、ふしぎに心にのこるながめだった。

穴の上やなかには、コウモリがひらひら飛んでいた。さっきまではいまわっていた火星人のすがたは、もう見えなかった。青っぽいくずの山で、かくされてしまったからだ。そして、穴のすみには、巨人機械がひとり、足をちぢめて小さくたたまれていた。

そのうちに、巨人ががたがたと身うごきする音にまじって、人間の声らしいものが聞こえてきた。わたしは、気のせいだと思った。

わたしは、巨人を注意ぶかくみつめた。そのときはじめて、巨人のぼうしのような頭に火星人がのっていることを、はっきりたしかめた。緑色の炎がたちのぼるにつれて、火星人の肌のあぶらぎったつやと、目の光が見えたのだ。

とつぜん、さけび声がおこった。見ると、巨人が一本の長い触手を肩ごしにのばして、背中につきだした金属のかごから、なにかはげしくもがくものを空高くつまみあげた。

そのものは、星空を背にして黒っぽく見えたが、触手が下におりてくると、緑色の光にてらされて、人間だということがわかった。

赤ら顔のがっしりした中年の男で、身なりもきちんとしていた。三日まえまでは、かなり重要な人間として、おもんじられていたにちがいない。おそろしさに目を見ひらいているのがわかった。かざりボタンと時計のくさりが、光って見えた。

男のすがたは、たちまち粉の山のかげにきえた。すこしのあいだしずかだったが、とつぜん悲鳴があがり、つづいて、火星人がうれしそうに、ながいさけび声をたてているのが聞こえた。

わたしは、がらくたの山をすべりおりると、耳にふたをしながら、洗い場ににげこんだ。牧師は、頭を両手でかかえて、じっとうずくまっていたが、わたしがとおりすぎると顔をあげた。そして、おきざりにされるとでも思ったのか、大きな声でさけんで、わたしのあとについてきた。

その夜、わたしたちは、洗い場にひっこんでいた。おそろしくはあったが、もういちどのぞいてみたいという好気心もはげしかった。

わたしは、すぐにもにげださなければならぬとわかっていたが、どうすればにげられるのか、考えつかなかった。

しかし、つぎの日になると、わたしは、自分たちがどういうたちばにいるかが、はっきりしてきた。

牧師は、まるで相談あいてにならなかった。恐怖のあまり、人間からただの動物になりさがって、考える力がなくなってしまったのだ。

けれど、わたしはおちつきをうしなわなかった。自分たちのたちばは、ひじょうにおそろしいものではあるが、まだ、すっかりあきらめるには早いとかんじた。

火星人は、この穴をいちじ的な足場にしているのかもしれ

ぬ。そうだとすれば、わたしたちが助かる見こみはある。

火星人が、この穴にいつまでもとどまるとしても、かかさず見はりをつづける必要はないと考えるかもしれぬ。そうなれば、やはりにげだす機会があるわけだ。

穴とはんたいの方向に地下道をほるという方法もある。しかし、これは見はりの巨人に見とがめられる危険が大きいと思われた。それに、地下道は、わたしひとりでほらなければならぬだろう。牧師はまったくあてにならぬからだ。

はっきりおぼえていないが、たぶん三日めのことだったと思う。わたしは、ひとりの若い男が火星人に殺されるのを見た。じっさいに火星人が栄養をとるのを見たのは、このときだけだった。

こういうおそろしいものを見たので、わたしはその日いっぱい、壁の穴からのぞかなかった。そして、洗い場にひっこんで、できるかぎりしずかに、手おので地下道をほって何時間かすごした。

だが、一メートルばかりほりさげたとき、ゆるんだ土が音をたててくずれたので、仕事をつづける勇気がなくなってしまった。そして、うごく元気もなくなって、ながいこと洗い場の床に横になっていた。

こうして、わたしは、地下道をほってにげだすという計画を、すっかりあきらめてしまった。

四日めか五日めの夜、はげしい砲声らしい音がした。のぞき穴からのぞくと、月が明るくかがやいていた。穴のむこうがわの土手に、巨人機械がひとり立っているだけで、ほかには、機械も火星人も見あたらなかった。

犬のほえる声がした。わたしは、そのなつかしい声に、耳をかたむけた。そのあと、大砲のとどろくような、どおんという音が、はっきり聞こえてきた。はじめに六発、つづいてまた六発。それだけで、あたりは、またしずかになった。

4 牧師の死

くずれた家にとじこめられてから六日めのこと、わたしは、いつものように壁のすきまから外をのぞいた。

そのうちに、そばに牧師のいないことに気がついた。いつもは、わたしにくっついてきて、のぞき穴からひきずりおろそうとするのに、きょうは、洗い場にひきこもったまま、でてこぬのだ。

わたしは、とつぜんあることに思いあたったので、こっそり洗い場にもどっていった。暗やみのなかで、牧師がなにかを飲んでいる音がした。ひったくってみると、それはぶどう酒のびんだった。

わたしたちは、とっくみあいをはじめた。びんが、床におちてこわれた。わたしは、牧師をつきはなして立ちあがった。おたがいに、あえぎあえぎにらみあっていた。

わたしは、牧師と食料のあいだに立ちはだかって、きびしくいった。

「これからは、食料をわりあて式にするぞ。のこった食料を、十日分にわけて、まい日一日分以上は食べぬのだ。」

午後になってわたしがうとうとしていると、牧師はまたも、こそこそと食料に手をだした。わたしは、はっと気がついて、牧師をおさえつけた。

それから、おたがいに昼も夜もにらみあいながらすわっていた。

わたしはつかれたが、がんとして決心をまげなかった。牧師は、腹がへったといって、泣いたりこぼしたりしていた。

こうして、わたしと牧師のなかは、ますます悪くなり、とうとう、正面からの衝突になってしまった。

二日のあいだ、ふたりは小声でいがみあったり、とっくみあいをしたりした。わたしは、はげしく牧師をなぐりつけてみたり、なだめてときふせようとしたりした。

だが、力ずくでもしんせつでも、きめはなかった。牧師は、まともにものを考えることができなくなっていた。食料に手をだすことも、ぶつぶつひとりごとをいうことも、やめなかった。もう、ほとんど気がくるっているらしかった。

このころのことは、はっきりと思いだせぬが、わたし自身も、ときどき気がくるったようになったことがある。眠るたびに、奇妙なおそろしい夢を見た。

へんに聞こえるだろうが、わたしが気がくるわないですんだのは、牧師が意志がよわくて、さきに気がちがってしまったために、あんなになってはいけないと心をひきしめたためかもしれない。

八日めになると、牧師はささやくのをやめて、大きい声でしゃべりはじめた。どうなだめても、声をひくめようとしなかった。牧師は、くりかえしてさけんだ。

「こうなるのがあたりまえなんだ。おお、神さまよ。わたしたちのうえに、罰がくだされたのだ。わたしたちは、罪をおかした。世のなかには、貧しさや悲しみがたえなかった。貧しい人びとは、ちりのなかでふみにじられてきた。

それなのに、わたしはなにもしなかった。わたしは、耳あたりのよい、たわごとをといたのだ。おお、神さまよ、なんということでしょう。わたしは、死をもおそれずに立ちあがって、人びとにくいあらためるようにとくべきだったのです。」

そうかとおもうと、ふいに話をかえて、わたしが食料を制限していることについて、祈ったり、うったえたり、泣いたり、おどしたりするのだった。

そんなとき、わたしが「たのむから声をひくくしてくれ。」というと、牧師は、わたしをわざとこまらせようとして、「火星人をよぶぞ。」とおどかした。

わたしは、牧師がほんとうにそんなことをするのではないかとひやひやしたが、その日は、なんとかぶじにすんだ。

九日めになると、牧師のすることは、いよいよ気ちがいじみてきた。ひと眠りしておきると、声をはりあげて祈りはじめた。わたしは、うったえるようにいった。

「しずかにしなさい。」

牧師は、すわっていたが、これを聞くと、ひざをついておきなおった。そして、火星人に聞こえるような大声でいった。

「わたしは、ずいぶんながいあいだ、しずかにしてきた。いまこそ、神にかわって語らなければならぬ。このいつわりの都に、わざわいあれ、わざわいあれ。あやまった道をあゆむ民に、わざわいあれ――。」

「だまれ。」

わたしは立ってさけんだが、火星人に聞こえては、と声をひそめた。

「たのむから――。」

牧師も立ちあがると、両手をひろげて、ありったけの声でさけんだ。

「いやだ。わたしは、神のみことばを語っているのだ。」

そして、台所にぬける入り口のほうへ歩きだしながらつづけた。

「わたしは、神にかわって語らねばならぬ。わたしはいく。いまでも、おそすぎるくらいだ。」

わたしは、手をのばして、壁にかかっている肉切りぼうちょうをとると、すぐ牧師のあとをおった。牧師が外へでれば、それでおしまいだ。わたしは、恐怖で、気ちがいのようになっていた。

台所の半分までいかぬうちに、牧師においついた。わたしは、まだちょっぴり人情がのこっていたのか、ほうちょうをひっくりかえして、牧師にみねうちをくわせた。

牧師は、前にのめって床にたおれた。わたしは、そのからだにつまずいて、あえぎながらたちどまった。牧師は、じっと横たわったままだった。

ふいに、外でしっくいのすべりおちて、くだける音がした。そして、壁の三角形のわれめが暗くなった。見あげると、工作機械の下のぶぶんが、われめのほうへゆっくりと近づいてきた。

われめから、一本の足がさしこまれて、がらくたの山をさぐりだした。もう一本の足があらわれて、たおれた横材の上をすってくる。わたしは、石のように立ちずくんで、目を見はるばかりであった。

すると、機械の胴体のはし近くにある、ガラスらしいものをはった小窓から、火星人の大きな黒い目がのぞいて、やがて金属のヘビのような触手が一本、われめからさしこまれて、ゆっくりさぐりながらのびてきた。

わたしは、ようやく身をひるがえすと、牧師のからだをつまずきながらまたいで、洗い場の入り口のところで立ちどまった。

触手はもう、へやのなかに二メートルあまりのびていて、あちこちと、きみわるくねじれたり、まがりくねったりしていた。

しばらくのあいだ、わたしは、のろくてふるえるような触手のうごきに目をすいよせられていたが、ふいに、ひくくしわがれたさけび声をたてると、洗い場にとびこんだ。からだははげしくふるえ、まっすぐに立っていられなかった。

石炭庫の入り口をあけて、その暗やみのなかに立ち、かすかに明るい戸口から台所のほうを見やって、耳をすましてい

た。火星人は、わたしを見ただろうか？　いま、なにをしているのだろうか？

台所では、なにかが、かすかな音をたててうごきまわっていた。それは、ときどき壁にふれたり、かぎたばのかぎがふれあうような小さい音をたてたりした。そのうちに、なにかおもいものが、台所の床をひきずられて、壁のわれめのほうへもっていかれた。わたしは、がまんできなくなって戸口にはいより、台所をのぞきこんだ。

三角形のわれめからさす明るい日ざしのなかで、カニみたいな工作機械のなかにいる火星人が、牧師の頭部をしらべているのが見えた。わたしは、はっとした。牧師の頭に傷がついていることから、ほかの人間、つまり、わたしがいることがわかるのではないか。

わたしは、石炭庫にはいもどって入り口をしめると、暗やみのなかで、できるだけ音をたてぬようにしながら、たきぎや石炭のなかに身をかくしはじめた。火星人がまたあのわれめから触手をさしこんできはせぬかと、こわごわ耳をすました。

そのとき、またかすかに金属的な音が聞こえてきた。台所の床をさぐっているらしい。やがて、音はもっと近づいてきた。洗い場をさぐっているにちがいない。

だが、あの触手の長さでは、ここまではとどかぬだろう。

わたしは、いっしんに、そう祈った。

触手は、石炭庫の入り口をかすかになでてすぎた。たえられぬような不安が、はてしなくつづくように思われた。すると、入り口のかけがねを手さぐりしている音が聞こえた。入り口を見つけたのだ。火星人は、入り口のことを知っているのだ。

かけがねが一分ほどかちかち音をたてていたと思うと、すっと戸がひらいた。

暗やみのなかで、そのものが見えてきた。ゾウの鼻に似ている。壁や石炭やたきぎや天じょうにさわってしらべながら、ふらふらとわたしのほうへのびてきた。黒いミミズが、目のない頭をあちこちにふっているようでもあった。

いちどは、長靴のかかとにさわりさえした。わたしは、あぶなくさけび声をたてるところだったが、自分の手をかみしめてこらえた。

すこしのあいだ、しずかになった。ひっこんでしまったのかと思っていると、かちっと音がして、なにかをつかまえ。わたしは、自分がつかまえられたみたいにびくりと

触手は、石炭庫からでていったようすであった。石炭のかたまりをもっていって、しらべているにちがいない。

わたしは、すこしわきにうつって、耳をすました。どうかぶじでいられるようにと、むちゅうで祈った。

やがて、触手が、もういちど、わたしのほうにゆっくりはいよってくる音がした。ゆっくり、ゆっくり、近づいてきた。壁面にさわったり、家具をたたいたりした。

どうなることかとびくびくしているうちに、触手は石炭庫の入り口をはげしくたたいて、ぱたりととじた。食料室にはいっていくのが聞こえた。ビスケットのはいったかんが、がらがら音をたて、びんはくだけてしまった。そのあと、石炭庫の入り口に、なにかおもいものがぶつかる音がした。そして、しずかになった。不安な時間が、いつまでもつづいた。

いってしまったのだろうか？

いってしまったにちがいない。

触手は、もう洗い場にはいってこなかったが、わたしは、つぎの日いっぱい、じめじめした暗やみのなかに横たわっていた。石炭やたきぎのなかに身をうずめて、どんなに水が飲みたくても、はいでていこうとはしなかった。わたしが、おもいきって石炭庫からでたのは、十一日めのことだった。

5　しずけさ

わたしは、石炭庫をでると、まず台所と洗い場のあいだのとびらをかたくしめてから、食料室にはいった。

しかし、食料室はからっぽだった。ひときれの食料も見つからなかった。きのう、火星人がぜんぶもっていってしまったにちがいない。わたしは、がっかりした。こうして、十一日めも十二日めも、飲まず食わずだった。

まず、口とのどがからからになって、力が目に見えておとろえていった。洗い場の暗やみに、しょげきってすわっていた。食べることしか考えなかった。

わたしは、つんぼになったのではないかと思った。というのは、外の穴のほうから聞こえていたあのおなじみのもの音が、すっかりやんでしまっていたからだ。

しかし、のぞき穴のところへはっていく勇気はなかった。

十二日めには、のどがひあがって、いたいほどになった。火星人に見つかったら見つかったときのことだとかくごをきめて、ながしのそばの雨水ポンプのところへいき、黒くにご

った雨水を、コップに二はいほど飲んだ。

これで、とても元気がついた。それに、ポンプがきいきいきしったのに、触手がさぐりにこなかったことから、だいたんにもなった。

十三日めに、わたしはまた水を飲んだ。そして、うとうとしながら、食べもののことや、どうしたらここからにげだせるかというようなことを、とりとめもなく考えていた。まどろむたびに、牧師のさいごのすがたが夢にあらわれた。

洗い場にさしこむ光は、それまでのように灰色ではなく、赤っぽい色をしていた。わたしのみだれた頭には、それが血の色のように思われるのだった。

十四日めに、わたしは台所にはいっていった。すると、おどろいたことに、壁のわれめのまんなかに、赤草のつるがはいこんで、あたりのうす暗がりを、赤くそめていた。

十五日めの朝早く、台所から、聞きおぼえのある音がつたわってきた。耳をすますと、犬が鼻を鳴らしながら、足でひっかいている音なのだ。

台所にいってみると、赤い葉のあいだから、犬の鼻がのぞいていた。わたしは、おもいがけぬことにびっくりした。犬は、わたしのにおいをかぎつけて、みじかくほえた。

わたしは、たちまち考えた。もし、犬をここへそっとひきいれることができれば、殺して食べられる。それに、犬にここらをうろつかれたのでは、火星人の注意をひくことになるかもしれぬから、どのみち殺したほうがいい。

そこで、わたしは犬の前へはっていって、やさしくよびかけた。

「おいで。」

だが、犬は、とつぜん頭をひっこめて、いってしまった。

わたしは、耳をすました。つんぼになっているわけではないのに、火星人の穴からは、なんのもの音も聞こえてこない。鳥が羽ばたくような音がした。しゃがれた鳴き声も聞こえた。しかし、それだけだった。

ながいこと、わたしはのぞき穴のわきに身をよせていた。だが、穴をおおっている赤い葉をかきわけるだけの勇気はなかった。

一、二ど、すぐ外がわで、犬があちこち歩きまわるような、ぴたぴたという音がかすかにしたし、そのほかに鳥の鳴き声らしいものが聞こえたが、もの音はそれだけだった。

ついに、わたしはあたりのしずけさに勇気づけられて、外をのぞいた。

穴のすみのほうで、火星人に血をすわれた死体の上に、たくさんのカラスがむらがっていた。だが、そのほかには、生きものすがたはなかった。

わたしは、自分の目が信じられぬほどだった。機械は、すっかりなくなっていた。穴のいっぽうのすみに、うす青色の粉の大きな山があり、もういっぽうのすみに、アルミニュームの棒がいくらかつみあげてあったが、それをのぞけば、穴はからっぽだった。

わたしは、赤草のなかからそろそろ身をのりだし、がらくたの山の上に立ちあがった。あたりには、火星人のいそうなけはいはなかった。にげだす機会がおとずれたのだ。わたしは、興奮でからだがふるえてきた。

しばらくためらっていたが、ついに必死のかくごをかため、胸をはげしくどきどきさせながら、穴のまわりにもりあがった土の山にかけのぼった。

わたしは、すばやくあたりを見まわした。やはり、どこにも火星人のすがたはない。

このシーンの町は、わたしがさいごに見たときには、広い道の両がわに、気持ちのいい家いえがたちならび、こんもりしげった木立ちが、ふかい影をおとしていた。だが、いまや、わたしのまわりは、うちくだかれたれんがや石ころの山だった。

いたるところに、サボテンのような形の赤い草が、ひざくらいの高さにおいしげり、地球の植物は枯れはてていた。近くの家いえは、みんな破壊されていたが、ひとつも焼けてはいなかった。なかには、壁だけのこっている家もあった。その屋根のないへやには、赤草がおいしげっていた。

わたしの足もとには、大きな穴があり、カラスやほかの鳥がそのなかを飛びまわっていた。はるかむこうの壁のそばを、やせほそったネコが一ぴき歩いているのが見えたが、人間のいるけはいは、まったくなかった。

わたしは、ながいこと暗いところにとじこめられていたので、外の明るさに目がくらみそうだった。

空は、どこまでも青くすんでいた。かすかな風が、いたるところにおいしげった赤草の上を、しずかになびいていた。ああ、空気がなんとおいしいことだろう。

6 五日間におこったこと

しばらくのあいだ、わたしは自分が安全なのかどうかもわすれて、がらくたの山の上に、ふらふらしながら立っていた。

いまでてきたあのいやなかくれ場所のなかでは、わたしは自分のことばかり気にしていた。外の世界でどんなことがおこっているかも知らず、こんなおどろくべき変化があろうとは、思いもよらなかった。あたりのながめは、きみわるくおそろしかった。地球ではなく、ほかの惑星にいるように思われた。

わたしは、とつぜんに自分がみじめな動物になってしまったような気がした。ウサギが自分の巣にもどってきて、人間が家をたてるために巣をほりくずしているのを見たとしたら、こんな気持ちがするのではないだろうか。

たしかに、わたしたち人間は、もはや地球の主人ではなく、火星人の足もとにひざまずく動物にすぎぬのだ。わたしたちも、動物とおなじように、おそるおそる火星人のようすをうかがい、こそこそにげかくれするようになるだろう。

しかし、この奇妙な感情も、たちまちすぎさった。そして、ながいことなにも食べなかったことからくる、はげしい飢えがおそってきた。

ふと見ると、赤草でおおわれた壁のむこうに、庭のいちぶが、がらくたにおおわれずにのぞいていた。

わたしは、あることを思いついたので、ひざまである赤草をかきわけて歩いていった。壁は二メートルくらいの高さで、よじのぼろうとしたが、どうしても足がてっぺんにかからなかった。

そこで、壁にそってまがりかどまでいくと、小高く土をもったところがあったので、それを足場にして壁にのぼり、めざす庭にとびおりた。

この庭で、いくつかの若いタマネギとグラジオラスの球根と、ニンジンが手にはいった。それから、また壁をのりこえて、キュー町のほうへ歩きだした。枯れた並木には、赤いつる草がからみついて、まるで血がしたたっているようだった。

わたしの心は、二つの考えでしめられていた。ひとつは、もっと多くの食物を手にいれることで、もうひとつは、このまでのがれたいということだった。

しばらくいくと、草地にひとかたまりのキノコがはえているのが見つかったので、それをむさぼり食った。

もと牧場だったところにきかかったが、いちめんにあさいにごった水でおおわれていた。あとでわかったのだが、このこう水は、赤草が原因だった。この奇妙な草は、水にであうと、ものすごいいきおいでおいしげる。そのために、ウェー川やテムズ川がせきとめられて、水があふれだしたのだ。

水がひろがるにつれて、赤草も水のあとをおってしげり、ついにテムズ川の谷は、いちじ、この赤い草でおおいつくされてしまった。わたしは、この赤い沼のへりにそってすすんでいったのだ。

しかし、赤草は、ひろがるのも速かったが、ほろびるのも速かった。ある種のバクテリアにとりつかれて、枯れてしまったらしい。地球の植物は、バクテリアに抵抗する力をもっているが、火星にはバクテリアがいないとみえて、赤草には、そういう抵抗力がまるでなかった。

バクテリアにとりつかれた赤草は、葉が茶色っぽくなり、しなびてぼろぼろになっていった。その枯れたなきがらは、のろわれた穴のそばから、できるだけ早く、できるだけ遠く水で海へおしながされてしまったのだ。

ところで、わたしは、水のあふれたところへくると、まずがぶがぶ飲んで、かわきをいやした。そのあと、赤草の葉を口にいれてかんでみたが、水っぽくて、むかむかするような金属的な味がした。

水は、歩いてわたれるくらいあさかったが、赤草が足にからみついて、歩きにくかった。そして、川に近づくにつれて、しだいに水がふかくなった。

そこで、わたしはモートレークのほうにひきかえした。ところどころに、くずれた別荘やかきねがのこっているので、それをたよりに道をたどって、やがてこう水地域をぬけだした。

それから、丘にのぼってすすみ、パトニー共用地にでた。ここまでくると、けしきはいくらか見なれたものになった。ところどころに破壊され、ふみにじられたあとがあったが、そのあいだは、まったくあらされていなかった。家いえは、よろい戸がおり、とびらがしまっていたが、ほんのちょっとるすになっただけのように見えた。

赤草はずっとすくなくなり、高い木にも、赤いつる草がからみついていない。木々のあいだをうろついて食物をさがし

たが、なにも見つからなかった。

人気のない家を二、三げんおそってみたが、もうだれかがあさっていったあとらしく、なにものこっていなかった。

からだがよわって、つかれきっていたので、それ以上すすむのはやめて、その日ののこりは、しげみのなかで休んだ。

そのあいだずっと、人間のすがたも見あたらず、火星人のけはいもなかった。飢えた犬を二ひき見かけたが、二ひきとも、わたしが近づくと、こそこそにげていった。

とちゅうで人間の死体を二つ見かけたが、すっかり肉をしゃぶられたらしく、骨だけになっていた。

日がしずんでから、わたしはパトニー村へつうじる道をとぼとぼ歩いていった。パトニーでは、どういうわけか、火星人が熱線をつかったらしく、家いえが見るかげもなく焼けくずれていた。

ある庭で、まだじゅくさないジャガイモを、たくさん手にいれた。飢えをしのぐには、それでじゅうぶんだった。

この庭から、テムズ川の谷を見おろすことができた。夕やみのなかにひろがるこのけしきは、すさまじくあれはてていた。焼けた木やくずれた家が、黒ずんで見える。丘のふもとはいちめんのこう水で、その表面は、赤草におおわれていた。そして、あたりはしずまりかえっているのだった。

しかも、こうした破壊は、どんなにすみやかにもたらされたことだろう。そう思うと、わたしは、いいあらわしようのない恐怖にみたされた。

しばらくのあいだ、わたしは暗いもの思いにしずんでいた。人類は、みな殺しにされてしまったにちがいない。そして、わたしは、ただひとり生きのこったのだ。

火星人たちは、たちさってしまったのだろう。このあれはてた国を見すてて、どこかへ食物をもとめにいってしまったのだろう。いまごろは、ロンドンかパリを破壊しているかもしれない。

7　パトニー丘の男

その夜、わたしは、パトニー丘のいただきの、だれもいない旅館ですごした。まともなベッドに寝ることができたが、そういうことは、第一の円筒が落下した夜からはじめてのことだった。

寝るまえに、ひとへやひとへや食物をさがしまわったが、なにも見つからなかった。あきらめかけたとき、女中べやらしいところで、ネズミのかじったパンのかけらと、パイナップルのかんづめが見つかった。

おまけに、そのあとで、ビスケットとサンドイッチが見つかった。サンドイッチは、いたんでいて食べられなかったが、ビスケットはだいじょうぶだった。腹いっぱい食べたうえ、両方のポケットにつめこんだ。

わたしは、ランプをつけなかった。火星人が、えものをもとめて、このあたりへやってこぬともかぎらぬと思ったからだ。ベッドにはいるまえ、心がおちつかないままに、窓から窓へとまわって歩きながら、火星人のけはいでもしないかとのぞいてみた。

ベッドにはいっても、ほとんど眠れずに、はてしない思いにふけっていた。しかし、ものを食べて元気づいたせいか、頭がはっきりしていた。

わたしの心は、三つのことがらでしめられていた。牧師を殺したこと、火星人はどこへいったかということ、そして、妻がどういう運命をたどったかということ。

牧師を殺したことについては、思いだしても、恐怖も後悔もかんじなかった。おきてしまったことはしかたがない、という気持ちだった。あのときのわたしは、ほかにどうすることもできなかったのだ。

火星人については、判断の材料がなにもなかった。あれこれと想像をめぐらしているうちに、妻のことが思いあわされて、いたたまれぬような気持ちになった。

わたしは、いつのまにか、ベッドの上におきなおって、暗やみをみつめていた。妻は、火星人に殺されたかもしれぬ。どうせ殺されたのなら、熱線でひと思いに殺されたのであってほしい。

わたしは、知らず知らず、ねっしんに祈っていた。レザーヘッドからひきかえしてきた夜いらい、わたしは祈るという

ことをしなかった。そのまえには祈ったことがあるが、みんな口さきだけの祈りだった。しかし、いまのわたしは、心からしんけんに祈ったのだ。

夜が明けるとどうじに、わたしは、ネズミが巣からはいだすように旅館をでた。まったく、わたしは、火星人から見れば、ネズミとおなじように小さく、力のない動物で、火星人の気まぐれひとつで殺されてしまうのだ。

わたしたち人類が、火星人との戦いでまなんだことがあるとしたら、それは、自分たちよりおとった動物にたいするあわれみの気持ちだ。わたしたちが火星人に支配されて苦しんだように、この無力な動物たちも、わたしたちに支配されて苦しんでいるのだから。

かがやかしく晴れた朝だった。東の空は、うす赤く光って、小さな金色の雲がういていた。

パトニー丘からウィンブルドンにつうじる道には、避難者たちがのこしていったあとがたくさん見られた。

こわれた二輪馬車が、トランクといっしょにころがっていた。むぎわらぼうしがひとつ、どろのなかにふみにじられていた。血のついたガラスのかけらがちらばっているところもあった。

わたしは、足のはこびがにぶかった。これからさきどうしたらいいか、まるでけんとうがつかなかった。

妻にあえる見こみは、ほとんどないとわかっていたが、レザーヘッドへいくつもりだった。妻やいとこは、とつぜんに殺されたのでなければ、きっとあの町からにげだしただろう。だが、あそこへいけば、妻たちがどこへにげたかがわかるかもしれない。

わたしは、妻を見つけたくてたまらず、妻のことを思うと、胸がうずくのだったが、どうすればさがしだせるかわからなかった。

見わたすかぎり、人のすがたはなかった。わたしは、まったくのひとりぼっちだった。はるかゆくてに、ウィンブルドン共用地がひろがっている。そのほうへむけて、わたしは、とぼとぼすすんでいった。

日が高くなり、あたりいちめんに、いきいきしたかんじがみなぎった。木にかこまれた沼地をとおりかかると、カエルの群れがいそがしそうにうごいていた。立ちどまってながめているうちに、この小さな生きものが、こうしてたくましく生きているのに、おしえられるような気持ちになった。

そのときふと、だれかに見られているような気がしてふりむいた。しげみのなかに、なにかがうずくまっている。

しばらくじっとみつめてから、そのほうへひと足ふみだすと、そのものも立ちあがった。

短剣をもった男だった。わたしは、ゆっくり近づいていった。男は、だまって身うごきもせずに、わたしをみつめていた。

男も、わたしとおなじように、ほこりまみれのよごれたみなりをしていた。まるで、下水のなかをひきずられてきたようだ。

黒い髪の毛は、目の上までたれさがり、顔は黒くよごれていたので、顔つきもはっきりしなかった。顔の下のほうには、赤い切り傷がひとつあった。

わたしが十メートルくらいまで近よると、男はしゃがれ声でさけんだ。

「とまれ、どこからきたんだ。」

わたしは、男の顔をみつめながらいった。

「モートレークからきた。火星人の円筒がおちてできた穴のそばにうめられていたのだ。やっとぬけだして、にげてきたのさ。」

「ここには、食いものはないぜ。ここは、おれのなわばりなんだ。この丘ぜんぶと、あの川のあたりまでな。食いものは、ひとり分しかない。どこへいくつもりだ。」

わたしは、ゆっくりこたえた。

「わからぬ。十三日か十四日のあいだ、くずれた家の下にうめられていたのだ。いったい、どういうことになっているのかね。」

男は、うたがわしそうにわたしを見ていたが、とつぜんびっくりしたような顔をした。

わたしは、つづけていった。

「ここに足をとめるつもりはないよ。レザーヘッドにいこうと思っているのだ。妻がそこにいるはずなのでね。」

男は、わたしを指さしてさけんだ。

「あなたですか。ウォーキングからきた人でしょう。じゃあ、ウェーブリッジで殺されなかったんですね。」

そういわれるとどうじに、わたしにも男がだれかわかった。

「きみは、わたしの庭にはいってきた砲兵だな。よかった。わたしたちは運がよかったのだ。こんなところできみにあおうとは思わなかった。」

砲兵は、手をさしだした。わたしは、その手をにぎった。

砲兵はいった。

「わたしは、みぞをはってにげたんです。みんながみんな殺されたわけじゃない。やつらがいっちまってから、わたしは野原をつっきって、こっちへきたんです。それにしても、あれから二週間ぐらいしかたっていないのに、あなたは髪の毛が白くなってしまいましたね。」

そして、はっとしたようにうしろをふりむいてからいった。

「ただのカラスだ。しかし、ここはちょっとあけっぴろげだから、あのやぶにもぐって話しましょう。」

「火星人を見たかね？　わたしのほうは、かくれ場所からはいだしたあと――。」

砲兵が口をはさんだ。

「やつらは、ロンドンへいってしまいましたよ。たぶん、あそこで、もっと大がかりな陣地をつくってるんでしょう。夜になると、あっちのほういったいの空が、やつらのあかりでてらされて、大きな都市の空みたいになりますよ。そして、そのあかりのなかで、やつらがうごいているのが見えるんです。昼間は見えませんがね。だが、このところしばらく、やつらのすがたを見かけていない。なん日になるかな――。」

砲兵は、指をおってかぞえた。

「五日になりますよ。五日まえに、あの巨人がふたり、なにか大きなものをはこんでいくのを見かけた。それから、おとといの夜は――。」

砲兵は、ちょっとことばをきってから、力をこめていった。

「目のせいかもしれぬが、なにかが空にあがりました。やつらは、空飛ぶ機械をつくって、飛ぶ練習をしてるにちがいない。」

わたしは、四つんばいになってしげみにはいこもうとしていたが、とまってたずねた。

「空を飛ぶんだって？」

「そう、飛ぶんです。」

わたしは、しげみのなかにはいって腰をおろしながらいった。

「それでは、人間はもうおしまいだ。やつらにそんなことができるとすれば、かんたんに世界をまわれるからな。」

砲兵はうなずいた。

「やつらなら、そのくらいのことはするでしょう。だが、そうなれば、このあたりは、ちょっと息がつけるわけさ。ところで、あんたには、人類がこれでおしまいだということがわからないんですかい。わたしにはわかってますよ。人類はやられたんだ。負けてしまったんだ。」

わたしは、目を見はった。奇妙に思えるかもしれぬが、わたしは、まだその事実がよくわかっていなかったのだ。だが、砲兵がそれを口にしたとたんに、はっきりわかった。

わたしは、それまで、まだかすかながら人類に希望をもっていた。というより、生まれてからずっと習慣づけられていた考えかたで考えていたのだ。

砲兵は、おなじことばをくりかえした。

「人類は、負けてしまったんです。」

心からそう信じこんでいるようなちょうしだった。

砲兵は、つづけていった。

「もう、なにもかもおしまいさ。やつらは、巨人をたったひとりやられただけだ。それだけで、しっかり足場をかためて、世界でいちばんつよいこのイギリスを、手も足もだせなくしてしまったんだ。やつらは、おれたちをふみこえていってしまった。ウェーブリッジで巨人がひとりやっつけられたのは、ほんのもののはずみだったんだ。

これまでにきたやつらは、ただのさきぶれです。やつらは、どんどんやってくるでしょう。あの緑の流星は、この五、六日、ひとつも見かけぬが、まい晩どこかにおちてるにちがいないんだ。どうしようもないさ。人間は、ふみつぶされたんだ。負けてしまったんだ。」

わたしは、ひとこともこたえなかった。目のまえをみつめて、なんとかもっと明るい見とおしを考えてみようとしたが、思いつかなかった。

砲兵はいった。

「これは、戦争なんてものじゃありません。まるで、戦争なんてものじゃなかった。人間とアリのけんかが、戦争じゃないのとおなじことですよ。」

わたしはふと、あの天体観測所でオーグルビーといっしょに火星を観測したときのことを思いだした。

「火星人は、円筒を十発発射したきりで、やめてしまったのだ。すくなくとも、第一の円筒が地球に落下するまでは、十発しか発射しなかった。」

砲兵はたずねた。

「どうして、そんなことがわかるんです？」

わたしは、そのわけを説明した。

砲兵は、考えながらいった。

「円筒を発射する大砲が、故障したのかもしれぬ。だが、

それがどうしたというんです。すぐなおせるじゃありませんか。なおすのに時間がかかったところで、つまりはおなじことでしょう。たしかに、人間とアリのけんかみたいなものです。

アリだって、町をつくったり、戦争をしたりしてるんだ。だが、人間がおしかけてくりゃ、アリはひっこまなきゃならぬ。いまの人間は、それですよ。アリとおんなじことだ。ただ、人間はアリを食わぬが、火星人は人間を食う。それだけのちがいですよ。」

ふたりは、顔を見あわせていた。

やがて、わたしがいった。

「やつらは、われわれ人間を、どうしようというのだろう?」

「わたしも、それを考えていたんです。ウェーブリッジから・南へにげながら、考えに考えましたよ。わたしは、どういうことがおこったか、じっさいに知っています。

たいていの者は、わめきたてて興奮していた。だが、わたしは、ひいひいわめきたてるのはすきじゃない。一どや二どは、死ぬようなめにもあってます。おもちゃの兵隊じゃないんだ。よくいっても、わるくいっても死ぬ。ただ死ぬだけさ。そして、しょっちゅう頭をはたらかせてる者だけが、生きのびられるんだ。

わたしは、みんなが南のほうににげていくのを見て、自分にいいきかせた。

あっちへいったんじゃ、食いものがながつづきしない、ってね。

そして、すぐにひきかえしてきたわけさ。スズメは人間のいるところへいくが、わたしも、それとおなじように、火星人のいるところへむかったんだ。」

砲兵は、南の地平線のほうに手をふりながらつづけた。

「あっちのほうじゃ、みんな、山とかさなって飢え死にしかけてるんだ。おたがいに、おしあったり、ふみつけあったりしてね。

ところが、このあたりには、食料がある。店屋には、かんづめも、ぶどう酒もウィスキーもある。おまけに、水道の本管や下水道は、からっぽになっています。そうだ、わたしが考えてたことを話していたんでしたね。わたしは考えました。

火星人のやつらは、知恵のすすんだ生物だ。そして、やつらは、人間を食料にしようとしてるらしい。やつらは、まず人間をたたきつぶすだろう。船も、機械も、大砲も、町も、のこらずぶちこわすだろう。これは、まちがいのないところだ、ってね。そうじゃありませんか。」

わたしがうなずくと、砲兵はなおも話をつづけた。

「そうなんです。わたしは、すっかり考えぬいたんです。それから、つぎには、こんなことを考えました。

いまのところ、火星人は、食料が必要になるたびに、人間をつかまえている。ほんのちょっと歩きまわれば、にげていく人間をつかまえることができるんだから。

だが、やつらは、いつまでもそんなことをつづけやしないだろう。大砲や船や鉄道をみんなぶちこわしてしまえば、さっそく、人間を大がかりにつかまえにかかるだろう。そして、そのなかでもいちばんうまそうなやつをえらんで、かごかなにかにたくわえておくだろう。いまはまだ、そういうことをはじめてないが、いまにはじめるだろう。

わたしは、そんなことを考えたんです。そうは思いませんか?」

わたしは、おもわずさけんだ。

「まだはじめていない、だって?」

「はじめていませんさ。いままでにやつらがこういうぶちこわしをやってのけたのは、人間が、おとなしくしてなかったためですよ。大砲だなんだといって、ばかげたことでやつらをうるさがらせたからなんだ。おまけに、人間は、群れをなしてにげだした。どこまでにげたって、おなじことなのにね。

火星人は、まだ人間をあまりさわがせたくないんだ。いまのところ、やつらは、火星からはこんでこられなかったような機械をつくって、あとからくるなかまをむかえる準備をしているんです。

円筒が飛んでくるのがしばらくやんだのだって、これまでに地球についているやつとぶつかるのを心配したからにちがいありませんよ。

そういうわけだから、われわれ人間も、やたらににげまどったり、爆薬をしかけてふきとばそうとしたりするかわりに、この新しい情勢に、うまくちょうしをあわせるようにしなければならない。

これが、わたしの考えついたことなんです。人間にとっては、ありがたいことじゃないが、事実は、だいたいそういったところですよ。わたしは、そういう考えにしたがって、やってきたわけです。

都市も、国家も、文明も、みんなだめになってしまった。

もう、勝負はおわった。人間は、負けてしまったんです。」

わたしは、ききかえした。

「しかし、もしそういうことが事実なら、人間は、生きているねうちがないじゃないか。」

砲兵は、ちょっとわたしをみつめてから、いった。

「これから百万年ぐらいは、もう音楽会なんてものはないでしょう。絵の展覧会もなければ、レストランにいって気のきいた食事をすることもなくなるでしょう。あんたがそういうたのしみがほしいっていうなら、むだなことさ。

お上品な作法をありがたがって、ナイフでマメを食べたり、下品なことばづかいをしたりするのがいやだというんだったら、考えなおすことですぜ。そんなものは、もうなんの役にもたちやしないんだから。」

「というと、つまり――。」

「つまり、わたしみたいな人間だけが生きのびられるんですよ。人類の未来のためにね。じつのところ、わたしは、なにがなんでも生きのびなきゃならぬと決心してるんです。わたしの目がまちがってなけりゃ、あんたにもそういう根性があると思いますがね。

人間は、根だやしにされやしません。といっても、つかまって、牛みたいにおりのなかでふとらされながら生きのびるっていうんじゃありませんよ。とんでもない。あんな茶色のぐにゃぐにゃしたばけものに飼いならされるなんて、まっぴらさ。」

「きみの計画というのは、まさか――。」

「わたしはやりますよ。ぐんぐんやっていきます。やつらのすぐ足もとで、やってのけるんです。もう、ちゃんと計画してある。すっかり考えたんです。

われわれ人間は負けた。われわれには、知識がたりぬ。まなべるうちにまなんでおく必要がある。そして、生きのびなきゃならぬ。まなびながら、独立をたもっていくのだ。そうでしょう？　そうするべきなんです。」

わたしは、おどろいて目を見はった。そして、砲兵のかたい決心にふかくうごかされながら、さけんだ。

「すてきだ。きみはほんとうの男だ。」

わたしは、いきなり砲兵の手をにぎりしめた。

砲兵は、目をかがやかせていった。

「どうです。すっかり計画したといったでしょう。」

「話をつづけてくれたまえ。」

「ところで、やつらにつかまりたくない者は、それだけの準

備をしなけりゃなりません。で、わたしは、その準備をしてるんです。いいですか、われわれは、みんながみんな、野生の動物みたいになれるわけじゃない。ところが、われわれは、そうならなけりゃならんのです。

はじめにあんたをじろじろ見ていたのも、そのためです。この男が、野生の動物みたいになれるかしらんと気になったんです。あんたは、やせっぽちで、ひょろひょろしているからね。あんただってことも、あんたが土の下にうめられてたことも、知らなかった。

あんなきちんとした家に住んで、それなりのきちんとした暮らしをしている連中は、みんな役にたたんのです。そいつらには、根性ってものがない。大きな夢もなければ、大きな欲もない。そういうもののない人間は、ただのおくびょう者ですよ。

そいつらは、しょっちゅう仕事にあくせくしてる。わたしは、さんざん見てきましたよ。朝食ののこりを弁当にして、うすぎたない通勤列車にのりおくれぬように、すっとんでいくんだ。おくれたら、くびになるんじゃないかとびくびくしてね。

仕事をしたって、わかろうとほねをおるじゃなし、仕事がおわれば、夕食にまにあうように、すっとんでかえってくる。食事がすめば、遊びにでかける勇気もなくて、家にひきこもっていて、そのまま寝てしまう。

女房にしたところで、その女がすきだからいっしょになったわけじゃなくて、すこしばかり金をもっていたから、ほそぼそとけちな一生をおくっていけると思っただけのことだ。

そして、日曜になれば、死んでから天国へいかしてもらおうっていうんで、教会へでかけていく。

ところで、こういう人間どもは、火星人を神さまのお使いみたいにありがたがるかもしれませんぜ。

火星人は、えさにする人間を、小ざっぱりした広いおりにいれて、肉のつくえさを食わして、いきとどいた世話をするだろうから、生活の心配はないわけだ。

いまいったような連中なら、一週間かそこら、すき腹をかかえて野原をにげまわれば、自分からすすんでつかまえられにもどってくるでしょうよ。

そして、しばらく火星人に飼われているうちに、そういう身のうえにすっかりまんぞくしちゃって、むかしは人間がどんな生活をしていたか思いだしもしなくなりますさ。そういうことが、いまから目に見えるようだ。」

砲兵は、自分のことばの正しさをみとめるようにうなずいて、なおも話しつづけた。

「人間が火星人に飼われるようになれば、宗教がはやると思いますよ。そんな身のうえを、どうすることもできぬものとあきらめて、ブタみたいにふとっていくやつが多いでしょう。

もちろん、こういう生活はまちがっているからなんとかしなければならぬ、と考えてなやむ者だって多いでしょう。だが、この連中も、いくじがないものだから、なやむばかりで、なにもできない。

そこで、『なにもしない宗教』というようなものを信じはじめる。つまり、信心ばかりしていて、どんなにいじめられても、それが、神のみ心だとかいって、おとなしくしてるわけです。こういう連中がいるから、おりのなかは、賛美歌やらお祈りやらで、さぞにぎやかなことでしょうよ。」

砲兵は、ことばをとぎらせてから、またはじめた。

「火星人は、こういう連中の何人かを、ペットにするでしょう。芸をしこんだりしてね。そして、そのペットが気にいってしまって、殺すのはかわいそうだなんてことにならぬともかぎりませんぜ。それから、人間を訓練して、おなじ人間なかまを狩りたてるのにつかうかもしれん。」

わたしは、がまんできなくなってさけんだ。

「そんなことはない。人間が人間を狩りたてるなんて――。」

砲兵はさえぎった。

「そんなごまかしが、なんになります。あんただって、わかってるんだ。そういうことを、よろこんでやる人間が、いるものですよ。そんなことはないとごまかしてもだめだ。」

わたしも、砲兵のいうことが正しいとみとめぬわけにいかなかった。

砲兵はいった。

「そういうやつらが、おいかけてきやがったら、ただじゃおかんぞ。」

わたしは、砲兵がのべたてたことを、考えなおしてみたが、この男のりくつにはんたいするりくつを思いつくことができなかった。

火星人がしゅう来するまえだったら、だれでも、わたしのほうがこの男より学問があるということをうたがいはしなかったろう。わたしは、世間からみとめられた哲学者なのに、この男は、ありきたりの兵隊だった。ところがいま、わたしがこの状況をどう判断したらいいのかわからずにいるとき

に、この男は、もう、はっきりした判断をくだしているのだ。

やがて、わたしはたずねた。

「きみはいま、なにをしているのだ？　どんな計画をたてているのかね？」

砲兵は、ちょっとためらってから、いった。

「こんなぐあいに考えているんです。われわれは、どんなことをしなければならぬか。それは、人間が生きて、子どもを生んで、その子どもたちを安全にそだてられるような生きかたを考えだすことです。

そうです。まあ、まってください。もっとはっきり説明するから。

まず、飼いならされた人間は、飼いならされた動物みたいになっていくでしょう。二、三代もたつうちに、大きくてきれいで、血はたっぷりあるが、うすのろな、人間のくずになってしまうんです。

しかし、われわれみたいに、火星人につかまらずに野ばなしでいる人間は、野蛮になる危険がある。大きなネズミみたいになってしまうかもしれないんです。

それでわかるでしょうが、火星人が支配する世界で、独立して生きていくためには、地下しかない。わたしは、下水道で生活していこうと考えてるんです。

ロンドンの地下には、下水道が何百キロもはしってます。下水道を知らぬ人は、きたないとこだと思うだろうが、いまロンドンはからっぽなんだから、雨が二、三日もふれば、きたないものはすっかり洗いながされちまいます。

下水道の本管は、けっこう住めるだけの広さがあって、空気もかよってる。それに、地下室や、鉄道のトンネルや、地下鉄にかくれることもできる。どうです、わかってきましたか？

そして、われわれは、自由人の団体をつくるんです。身も心も健康な人間でね。くずみたいなやつらがまぎれこんできたって、いれてなんかやりません。よわむしは、またでていくんです。

その団体にはいった者は、命令にしたがうんです。それから、身も心も健康な女も必要です。母となり教師となるためにね。気どった女はだめだ。しなびたばあさんもいけない。よわむしやばか者は、おことわりだ。

こうして、またほんとの生活がはじまるんです。役にたたぬ者や害になる者は、死なきゃならん。そういうやつら

は、わるい子孫をのこしますからね。

こうして、われわれ自由人の団体は、地下のいたるところで暮らすんです。やがて、地下の町がロンドンになるでしょう。

われわれは、見はりをたてて、火星人がいないあいだは、地上をとびまわることができます。クリケットだって、できるかもしれない。

われわれは、こうして子孫をのこしていくわけだ。どうです。できそうなことでしょう。だが、子孫をのこすだけじゃ、なんにもならぬ。まえにもいったように、それだけでは、ネズミとおなじことですからね。

だいじなのは、人間がこれまでに手にいれた知識をたもって、それを発達させていくことだ。そこで、あんたのような人間が必要になるんです。

本もいるし、模型もいる。地下のふかいところに、大きい安全な場所をもうけて、そこにありったけの本をあつめなきゃならん。ただし、小説や詩みたいなくだらぬものじゃなく、思想や科学にかんするものです。

あんたは、大英博物館にでかけていって、そういう本をすっかりえらびだすんです。とくに、科学の知識をまもりぬかなけりゃならん。そして、もっと研究することです。

それから、火星人を見はる必要がある。スパイもおくりこまなけりゃならんでしょう。ここでだいじなのは、火星人をそっとしておくことです。やつらのものをぬすんじゃいけない。やつらは、われわれがじゃまになれば、かたづけてしまうでしょう。

われわれが、なんにも害にならぬということを、やつらに知らすことだ。やつらは、ほしいものが手にはいって、われわれがじゃまにならぬということがわかれば、われわれを狩りたてたりせんでしょう。」

砲兵は、日に焼けた茶色い手をわたしの腕にのせていた。

「とにかく、われわれは、火星人の兵器のあつかいかたを、やすやすとおぼえられるかもしれぬ。こんなところを想像してみなさい。やつらの巨人機械が四、五台、とつぜんうごきだして、熱線をあっちこっちと放射する。

ところが、その巨人には、火星人はひとりものっていないで、人間がのってるんだ。機械のあつかいかたをおぼえた人間がね。わたしが生きてるうちにも、そんなことがおこるかもしれん。

考えてもみなさい。あのすてきな機械をぶんどって、熱線

をおもいきり放射できたらなあ。あれが、われわれのものになればなあ。さんざんあばれまわれれば、そのあとで、こなごなにくだかれたってかまわんじゃないですか。

火星人は、あのでかい目をなおさらでかくしておどろくでしょうよ。目にうかぶようだ。やつらは、あわてふためいて、息せききって、ほかの機械のとこへすっとんでいくだろう。そして、やつらがもたもたしているところへ、熱線がおそってくる。しゅうっ、ばあん、がらがら、しゅうっ。そこで、人間が、またもとのすがたにもどるわけだ。」

しばらくのあいだ、わたしは、この砲兵のとぼうもない空想と、自信にみちた話しぶりに、心をうばわれてしまった。

わたしたちは、朝のうちずっと、こうして話していたが、やがて、しげみからはいだした。そして、火星人がいないことをたしかめてから、砲兵がすみかにしている、パトニー丘の上の家めざして、まっしぐらに走っていった。

砲兵は、その家の地下の石炭庫から地下道をほって、パトニー丘の下水道本管にでようとしているのだった。

わたしは、その石炭庫へおりてみたが、一週間もほっているというのに、穴のふかさは、十メートルにもたりなかった。

この穴を見たとき、わたしは、砲兵が口さきばかりで、じっさいに仕事のできない人間ではないかと、うすうすかんじた。それでも、まだこの男を信用していたので、昼すぎまで、穴ほりの仕事を手つだった。

しかし、はたらきながら、心のなかで砲兵の計画を思いめぐらしているうちに、いろいろなうたがいがうかんできた。

ここから下水道本管までは、どのくらいはなれているのだろう？　地下道がそれにぶつからずに、それてしまうようなことはないのだろうか？　この家は、本管からはなれすぎているようだから、不必要に長い地下道をほらなければならぬのではないだろうか？

そんなことを考えていたとき、砲兵がほるのをやめて、わたしを見た。

「だいぶはかどったな。すこし休みましょう。もうそろそろ、屋根にあがって、火星人のようすをさぐらなきゃならん。それに、はたらきづめでは、からだがまいってしまう。」

わたしは、このことばを聞いたとたんに、砲兵の人がらがわかった。この男は、やはり口さきだけの人間だったのだ。

砲兵は、シャベルをもったままもじもじしていたが、またくりかえした。

「さあ、ていさつしてみよう。火星人が近くにくれば、シャベルの音を聞きつけて、ふいうちをくわせるかもしれん。」

わたしは、もう、はんたいするはりあいもなかったので、いっしょに屋根うらべやにいき、天窓から外をのぞいた。火星人の機械は、ひとつも見あたらなかった。わたしたちは、屋根にでて、あたりを見わたした。

目の下には、テムズ川の谷がひろがっていた。谷には水があふれだし、赤草がおいしげっていた。はるかロンドンのほうに、煙がたちのぼっていた。

しばらくして、わたしたちは、また地下室へおりていったが、ふたりとも、もう土ほりをする気はなかった。そこで、砲兵が食事にしようといいだすと、わたしもよろこんで賛成した。

わたしたちは、たっぷりした食事をとり、シャンペンを飲んだ。そのあと、砲兵のすすめで、トランプがはじまった。ふたりは、ロンドンを二つにわけ、わたしは北半分、砲兵は南半分をかけて、勝負をあらそった。そして、われながらあきれたことに、わたしは、この遊びがとてもおもしろかった。

人間の心というのは、ふしぎなものだ。人類がほろびつくそうとしており、自分の命もあぶないとわかっていながら、トランプをたのしむことができるのだから。

夜になってから、わたしは葉巻きをふかしながら、二階にあがっていった。ロンドンのほうを見わたすと、ところどころに赤い火が燃えていたが、そのほかはまっ暗だった。

そのとき、ずっとてまえに、奇妙なあかりが見えるのに気づいた。谷のあたりで、ほたる火のようなうすむらさきの光が、夜風にふわふわゆれているのだ。

しばらくは、それがなんだかわからなかったが、まもなく、赤草が光っているのだとさとった。

そのとたん、どうしたわけか、わたしは、はっと目がさめたような気持ちになった。昼間のうちにやった穴ほりやらトランプ遊びやらが、ひどくおろかしいことに思われた。自分がつくづくいやになった。妻をうらぎったようなうしろめたさをかんじた。

わたしは、後悔でいっぱいになった。そして、あの空想ずきの砲兵をほったらかして、ひとりでロンドンにいってみようと決心した。そうすれば、火星人がそこでなにをしているかも、ロンドン市民がどうなったかもわかるだろう。

8 死の都ロンドン

つぎの朝、わたしは砲兵にわかれをつげると、パトニー丘をくだって北にむかった。そのころは、赤草がいちばんおいしげっているときで、橋へつうじる道がおおいかくされてしまうほどだった。

しかし、赤草の葉は、ところどころ白くかわりはじめていた。それは、ある種のバクテリアがとりついたためで、やがて赤草は、そのバクテリアにほろぼされてしまったのだ。

テムズ川にかかったパトニー橋をわたると、そのさきの道には、あの黒いほこりがつもっていて、フラムの町にはいると、それがますます厚くなった。

通りは、きみがわるいほどしずかだった。わたしは、一けんのパン屋で、古くなったパンを手にいれた。すっぱくてかたくてカビがはえていたが、食べることはできた。

道には、ところどころに、死体がころがって、黒いほこりにおおわれていた。道ばたの家は、みんなかたくとざされていた。人がおしいった家もいくつかあったが、きまって食料品店か酒屋だった。

一けんの宝石店では、窓ガラスがこわされていたが、どろぼうはとちゅうでにげだしたらしく、たくさんの金のくさりや時計が、道にちらばっていた。しかし、わたしは、手をふれる気もしなかった。

ロンドン市内にはいっていくにつれて、しずけさはますますふかまった。

南ケンジントンの近くまでくると、通りには死体もなく、黒いほこりもつもっていなかった。

そのとき、わたしは、はっと立ちどまった。聞きとれぬほどかすかな声が、つたわってきたのだ。たしかに、火星人の声だった。二つのちがう声が、すすりなくようなちょうしで、たえまもなくよびあっている。

「うらあ、うらあ、うらあ。」

北へすすんでいくうちに、声はしだいにたかまってきた。どうやら、ケンジントン公園のあたりから聞こえてくるらしい。

わたしは、立ちどまって、公園のほうを見やった。あの奇妙な泣き声はなんだろう。

泣き声は、なおもつづいていた。

「うらあ、うらあ、うらあ。」

わたしは、ふしぎに思いながら、ハイド公園の鉄門のほうを見やった。博物館におしいって、塔のいただきから公園を見わたそうかと思ったが、いざというときにすばやくかくれることができるように、通りをすすむことにきめた。

公園にはいり、サーペンタイン池の橋をわたると、ほえ声はますますつよくなった。

「うらあ、うらあ、うらあ。」

リージェント公園のほうからひびいてくるらしい。そのきみのわるい泣き声は、心にしみわたるようだった。それまで、はりつめた気持ちでいたのが、なんとなく悲しくなってきた。それといっしょに、つかれがでて、飢えとかわきをかんじはじめた。

もう、正午をすぎていた。わたしは、なぜ、この死の都をひとりでさまよい歩いているのだろう。ロンドンじゅうが、黒い死のころもをまとっているようだ。わたしは、たえられぬほどのさびしさをおぼえた。

わたしは、ひどくほねをおって一けんの居酒屋にはいりこみ、食物と飲みものを手にいれた。食べおえると、どっとつかれがでたので、長いすの上で眠った。

目をさますと、まだ、あのきみのわるいほえ声が聞こえていた。

「うらあ、うらあ、うらあ。」

もう夕暮れがせまっていた。わたしは、居酒屋をでて、通りをさまよっていった。

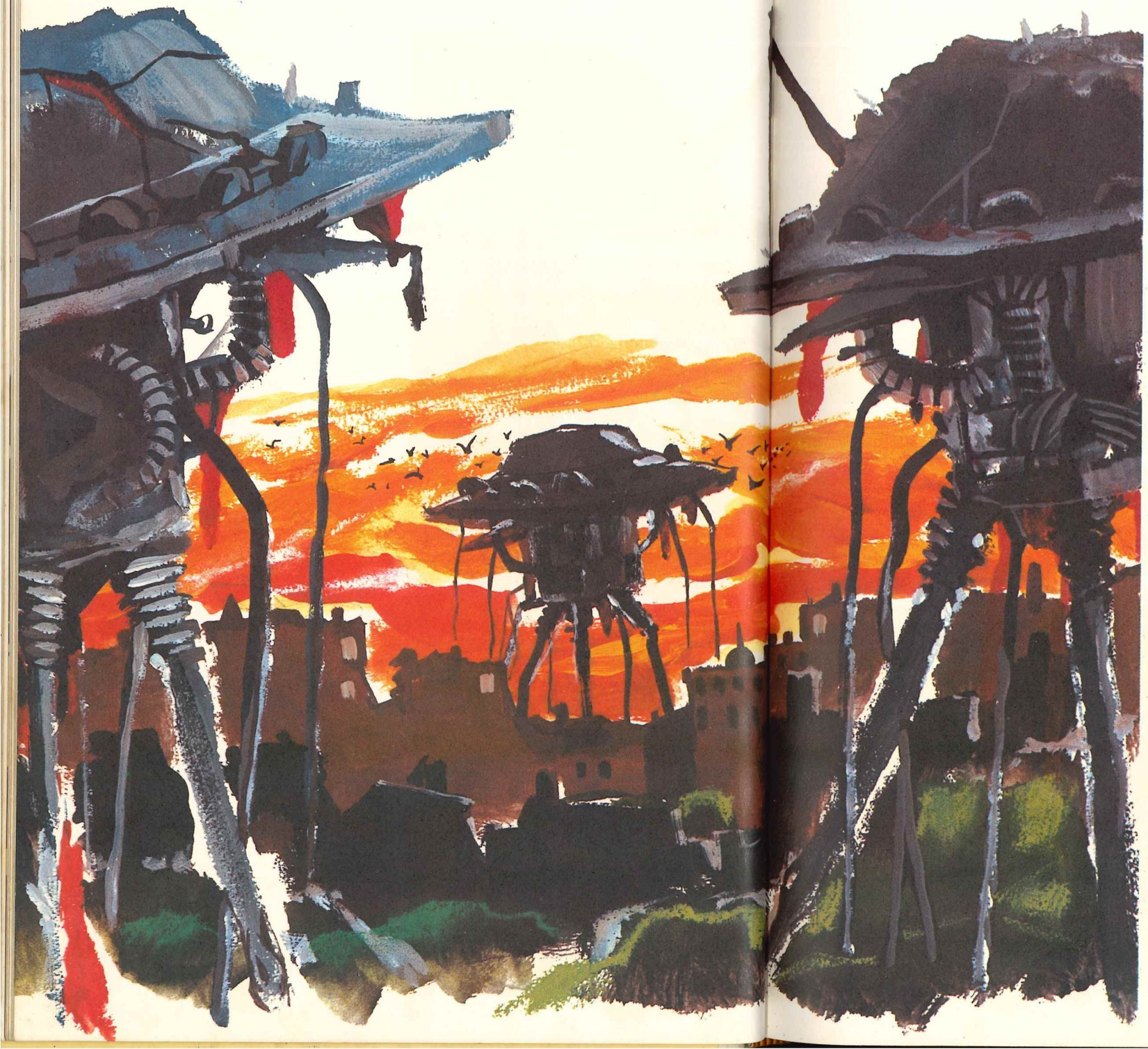
やがて、リージェント公園にでた。すると、晴れわたった夕空にそびえる木々のむこうに、あのほえ声のぬしである巨人機械の頭が見えた。

わたしは、おそれなかった。まるで、あたりまえのことのように、巨人とむきあった。しばらくみつめていたが、巨人はうごかなかった。どうしたわけか、立ったままほえているらしい。

わたしは、どうするかはっきりきめようと思ったが、たえまのない巨人のさけび声で、心が混乱してしまった。おそれなかったのは、つかれはてていたせいかもしれない。

たしかに、わたしは、おそれるよりは、この泣くようなさけび声の原因が知りたかった。そこで、公園にははいらずに、そのへりをまわりこんでいった。

二、三百メートルすすむと、たくさんの犬の鳴き声が聞こえてきた。つづいて、一ぴきの犬が、くさった赤い肉をくわ



えて、まっすぐわたしのほうへ走ってきた。
その犬は、わたしを競争あいてとでも思ったのか、わきへさけて、大きくまわりこんだ。犬のほえ声が遠くにきえていくと、巨人の悲しげな声がひびいてきた。
「うらあ、うらあ、うらあ。」
公園のへりをまわっていくうちに、家が通りにくずれているのにぶつかった。それをのりこえようとしてよじのぼったとき、わたしは、ぎょっとして立ちどまった。
あのカニのような工作機械が、がらくたのなかにたおれていたのだ。触手は、おりまげられ、うちくだかれ、よじられている。機械の前のぶぶんはくだけていた。めくらめっぽう家につきあたって、たおれてきた家の下じきになったようだ。機械が、火星人のさしずにしたがわなくなったので、こんなことがおきたのだろうか？
わたしは、がらくたのなかをはいよって機械をしらべてみる勇気はなかった。それに、夕やみがかなりこくなっていたので、機械の座席にこびりついている血のあとも、犬がかじりかけてのこしていった火星人の軟骨も、目にはいらなかったのだ。
わたしは、いま見たことで、ますますおどろきをふかめな

がら、なおもすすんでいった。

すると、公園の動物園のあたりで、木々のむこうに、第二の巨人が見えてきた。第一の巨人とおなじように、身うごきばかりでなく、ほえ声もたてていない。

そのときとつぜん、それまで聞こえていた第一の巨人の「うらあ、うらあ、うらあ。」という声が、ぱったりやんだ。あたりはしずけさにつつまれた。

わたしは、おもわずぞっとした。巨人の声がひびいているあいだは、自分のまわりのあれはてたさびしさも、まだがまんができた。あのさけび声のおかげで、ロンドンは、かえってまだ生きているように思われた。ところが、そのただひとつの命のしるしが、ぷっつりきえてしまったのだ。

ロンドンの町は、ゆうれいのようにわたしをとりかこんでいた。白い家いえの窓は、しゃれこうべのうつろな目のようだった。数知れぬ敵が、わたしのまわりを音もなくうごきまわっているように思えた。

わたしは、はげしい恐怖にとらわれた。もう前へすすむ勇気がなかった。通りを横におれると、このたえられぬしずけさからぬけだそうとして、まっしぐらに走りだした。

その夜は、ある馬車屋の宿舎にかくれていたが、しだいにいただきのあたりを、犬が一ぴき走っていって、たちまちすがたをけした。そのとき、わたしの心に、ある考えがひらめいて、しだいにつよまってきた。

わたしは、もう、おそろしくはなかった。身うごきもせずにつっ立っている巨人にむかって、丘をかけのぼりながら、気ちがいじみたよろこびでからだがふるえた。

巨人の頭から、茶色のぐにゃぐにゃしたきれはしがたれさがり、飢えた鳥が、それをつついてはひきさいていた。

わたしは、もり土をよじのぼって、そのいただきに立った。とりでの内がわが見えた。おどろくほど広くて、なかには大きな機械や材料がちらばっていた。

そして、そのあたりいちめんに、火星人のからだがちらばっていた。死んでいるのだ。ひっくりかえった巨人のなかにいくつか、こわれた工作機械のなかにいくつか、そして、一ダースばかりは、一列にならべられて。

赤草とおなじように、バクテリアによって殺されたのだ。火星人のからだは、バクテリアにたいして抵抗力がないからだ。

人間のあらゆる防衛手段が失敗におわったのち、神がこの勇気をとりもどして、夜明けまえ、まだ星が空にかかっているうちに、また、リージェント公園にむかっていった。

とちゅうで道にまよったが、やがて、長い並木道のむこうに、夜明けのうすあかりをあびて、プリムローズ丘のなだらかな線が見えてきた。

そのいただきには、うすれていく星空を背にして、第三の巨人が、ほかの巨人とおなじく、身うごきもしないでそびえていた。

わたしは、気ちがいじみた決心にとらえられた。死のう。それでおしまいだ。自殺する手間まではぶけるのだ。

むこうみずにも、わたしは、この巨人めがけてすすんでいった。近づくにつれて、空もだんだん明るくなってきた。

すると、巨人のぼうしのような頭のまわりに、たくさんの黒い鳥が、円をえがきながらむらがっているのが見えた。わたしは、胸をはずませて、通りを走りだした。

のぼっていく日の光をあびながら、丘をかけあがった。いただきのあたりに、土がたくさんつみあげられて、大きなとりでのようになっていた。火星人がつくった、いちばん大きなさいごの陣地だった。

そのもり土のうしろから、あわい煙が空にたちのぼっていた。

地上に生まれさせたいちばんつまらない生物が、火星人を殺したのだ。

これらのバクテリアは、世界がはじまっていらい、たくさんの人間の命をうばってきた。しかし、環境にてきしたものが生きのびるという自然の法則のおかげで、人間は、バクテリアにたいする抵抗力がつよまった。

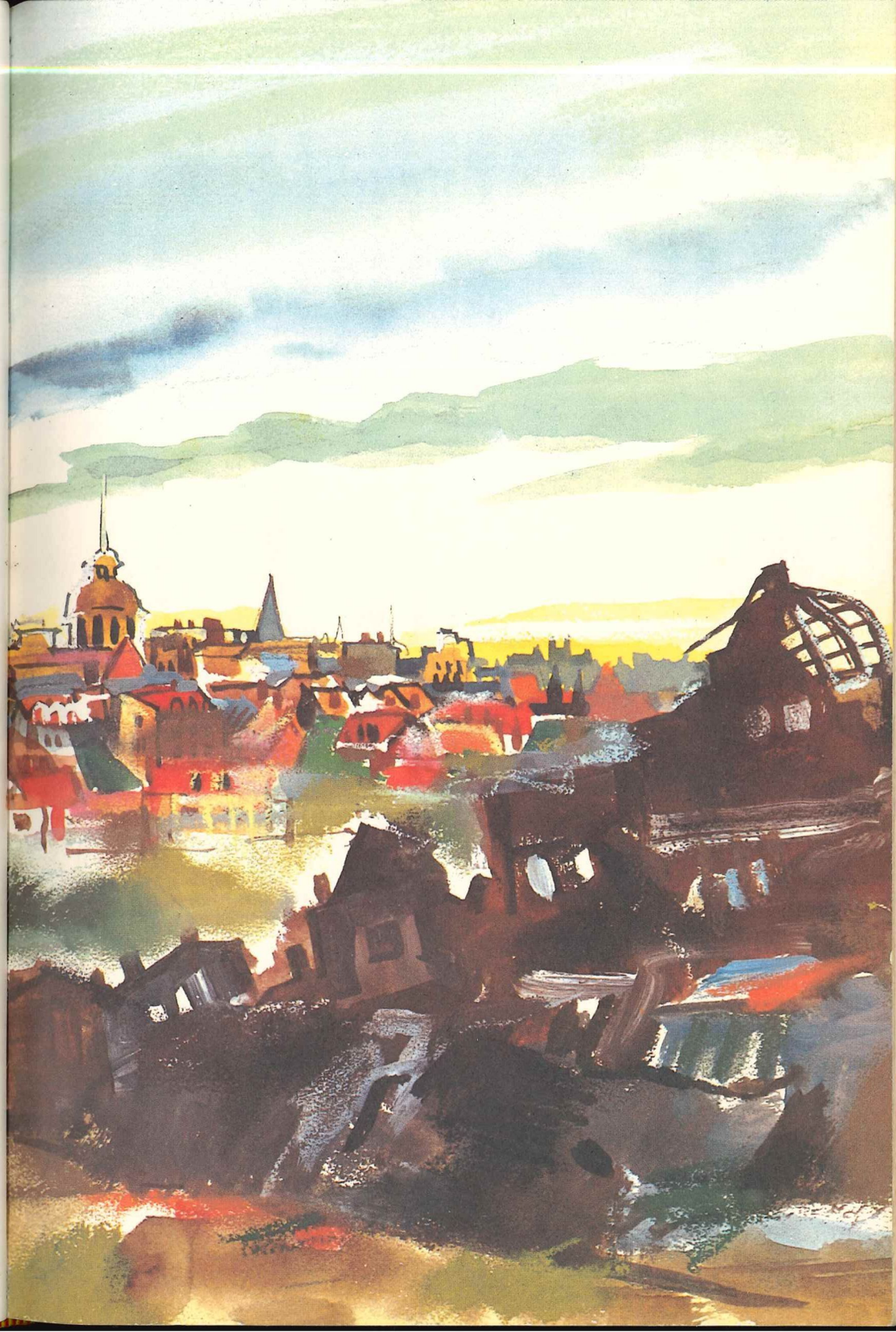
しかし、火星には、バクテリアはまったくいないから、火星人は、バクテリアにたいする抵抗力がまるでないのだ。

そういうわけで、火星人が地球に到着して地球の生物から栄養をとるやいなや、そこにひそんでいたバクテリアが、火星人にたいして攻撃をはじめたのだった。

この大きな穴のなかには、火星人の死体が五十くらいちらばっていた。火星人には、なぜこうして死ぬのかわからなかったにちがいないが、わたしも、そのときには、火星人がなぜ死んだのかわからなかった。

わたしは、穴のなかを見おろしながら、心がはればれと明るくなった。あたりは、朝日の光で燃えるようだったが、穴のなかは、まだうす暗かった。

犬の群れが、はるか下の穴の底で、死体をもとめてあらそう声が聞こえていた。穴のむこうのふちには、大きくてひら



9　ふみにじられた土地で

さて、この物語のなかでいちばんふしぎな事件をのべることにしよう。

わたしは、プリムローズ丘のいただきで、泣きながら神に感謝をささげたときまでのことは、すべてはっきりおぼえているが、それからの三日間のことは、なにもおぼえていない。

あとになってわかったのだが、火星人がほろびたのを発見したのは、わたしがはじめてではなかった。何人かの人たちは、まえの晩のうちに、そのことを知っていたのだ。

最初の発見者は、電報のうてる町にかけつけて、パリへ電報をうった。そして、そのうれしいニュースは、そこから世界じゅうにばらまかれたのだ。おそろしい不安にふるえあがっていた何千という都市は、よろこびにわきたった。

そういうわけで、わたしがプリムローズ丘の穴のふちに立っていたときには、イギリスじゅうのおもな都市が、そのことを知っていたのだ。

べったい、奇妙な飛行機械が横たわっていた。

カラスの鳴き声に上を見あげると、もう永久に戦うことのない巨人機械から、ぼろぼろにひきさかれた赤い肉のきれはしが、プリムローズ丘のいただきにたれおちていた。

むきをかえて、丘の斜面を見おろすと、あのふたりの巨人が、頭のまわりを鳥の群れにかこまれて立っていた。きのうの夕がた、わたしがこのふたりを見たときは、それにのった火星人が死にかけていたのだ。

丘のまわりには、奇跡的に破めつをまぬがれたロンドンが、広びろとひろがっていた。この大都市は、また、まえのようなにぎやかさをとりもどすだろう。そう思うと、なみだぐましいような感情が、波のように胸にこみあげてきた。わたしは、空にむかって両手をさしのべ、神に感謝の祈りをささげた。

それにつづいて、妻への思いが、おさえきれぬはげしさでわきあがってきた。希望ややさしい思いやりにみちたむかしの生活が、またはじまるだろう。

人びとは、うれし泣きに泣いて、よろこびのさけびをあげ、仕事の手を休めて、おたがいにあく手した。そして、ロンドンから避難していた人びとは、早くも汽車でロンドンにもどろうとしていた。

教会の鐘は、火星人のしゅう来いらいとまったままだったが、この知らせを聞くと、いたるところで鳴りひびいた。

ヨーロッパ大陸からも、アメリカ大陸からも、援助の食料がおくられてきた。まるで、世界じゅうのあるゆる船が、ロンドンにむかっているようだった。

しかし、わたしは、そういうことについて、ぜんぜんおぼえていないのだ。わたしは、気がくるったようになって、あちこちとさまよっていた。そのうちに、あるしんせつな人に助けられて、三日めに正気をとりもどしたのだった。

その人たちの話によると、わたしは、「おれだけが生きのこった。ばんざい。おれだけが生きのこった。」とかいうばかげたことばを、うたうようにさけびながらうろついていたそうだ。

その人たちは、自分たちのことで手いっぱいだったのに、わたしを家にとめて世話してくれたのだ。

わたしは、正気をなくしているあいだに、うわごとで自分の身のうえをしゃべったとみえて、その人たちは、わたしのことを知っていた。そして、わたしが正気にもどったとき、いたわるようなちょうしで、妻のいたレザーヘッドがどういう運命に見まわれたかを、知っているだけ話してくれた。

それによると、わたしがシーンの町でくずれた家にとじこめられてから二日めに、レザーヘッドは、火星人によって、住民もろとも破壊されてしまったのだそうだ。妻やいとこも、そのどさくさのなかで死んだにちがいない。

わたしは、ひとりぼっちになってしまったのだ。その家の人たちは、悲しみにひしがれているわたしを、やさしくいたわってくれた。

わたしは、正気をとりもどしてから四日のあいだ、その家にとどまっていたが、自分のささやかながらしあわせだった生活のなごりの場所を、もういちど見てみたいという望みが、しだいにたかまった。

その家の人たちは、そんなことをしても悲しみがますばかりだとはんたいしたが、わたしは、とうとう自分の望みをおさえきれなくなった。そして、しんせつな一家にわかれをつげ、メーベリーのわが家へむけて、悲しい心をいだきながら出発した。

もう、町なみはもどってきた人びとでいきおいづき、店をひらいているところさえあった。あれほどたくさんの人びとが殺されたとは思えぬほどだった。

しかし、ゆきあう人たちをよく見ると、肌の色は黄ばみ、髪の毛はもじゃもじゃ、目はくぼんで大きく見えるというような者ばかりで、ふたりにひとりは、まだきたないぼろを着ていた。いわば、ロンドンは浮浪者の都市だった。

馬の数はすくなく、その馬たちも、やせこけてあばら骨がうきだしていた。町かどごとに、白いバッジをつけた臨時警官が立っていたが、やはり、みんなやせおとろえていた。

火星人がもたらした災害のあとは、あちこちにのこっていた。ウォータールー橋の橋げたには、赤草がからみついていた。

橋のたもとには、一まいの紙が棒につきさして立ててあった。それは、最初に復活した新聞の広告だった。

わたしは、ポケットのなかにあった黒ずんだ一シリング玉で、その新聞を一部買った。新聞社の組織がまだもとにもどっていないので、ほうぼうに白地があった。

ある記事には、火星人の機械について調査がおこなわれ、一週間のうちにいろいろな知識がえられたということが、のべてあった。飛行機械の秘密も発見された、ということだった。

ウォータールー駅では、無料列車が、人びとを家にはこんでいた。最初の混雑はもうすぎさって、列車にはほとんど人がのっていないほどだった。

わたしは、列車にのったが、ゆきずりの人と話をする気分ではなかったので、ひとつの仕きりべやを、自分でひとりじめにした。

わたしは、車の窓をかすめるあれはてたけしきを、ぼんやりながめていた。ウィンブルドンは、とくにひどかった。大きな川も、小さなながれも、すべて赤草でおおわれていた。

ウィンブルドンのすこしさきで、列車から見える畑のなかに、六番めの円筒が落下して、土がもりあがっていた。たくさんの人びとがまわりに立ち、そのまんなかで、工兵が何人か、せわしくはたらいていた。穴の上には、イギリス国旗がひるがえっていた。

ウォーキング駅は、まだ修理ちゅうだったので、わたしはバイフリート駅でおりた。そして、わたしと砲兵が軽騎兵に話しかけたところや、あらしの晩に巨人機械とはじめてであったところをとおりすぎて、メーベリーへとすすんでいっ

た。

わたしがレザーヘッドからのってもどってきた馬車がどうなっているかと、ものめずらしい気持ちでひきかえしてみると、赤草がからみあっているなかに、こわれてねじれた二輪馬車と、食いあらされた馬の白骨がころがっていた。わたしは、しばらくそこに立って、そうしたものをみつめていた。

それから、松林のなかをとおって「まだら犬亭」の主人の墓ができているのを見つけたりしながら、メーベリー丘のわが家にもどってきた。

わが家を見たとたん、はっと希望に胸をおどらせたが、その希望は、たちまちしぼんでしまった。入り口は、むりをしてこじあけられたようすだった。かぎがかけられていず、わたしが近よっていくと、内がわからゆっくりひらいた。

しかし、ひとりでにあいたものとみえ、戸はまたぱたりととじた。わたしの書斎の窓はあけはなしで、カーテンがひらひらまいだしていた。あの窓から、わたしと砲兵とふたりして、火星人たちのようすをながめていたのだが、そのときいらい、だれも窓をしめた者はなかったらしい。

庭のしげみがふみつぶされているのも、四週間まえにわたしがたちさったときのままだった。

わたしは、よろめくようにホールへはいった。家のなかはからっぽだった。階段下のじゅうたんは、あのあらしの夜、わたしがびしょぬれでうずくまっていたところだけが、しわがよって色がかわっていた。階段には、わたしたちのどろだらけの足あとが、まだのこっていた。

その足あとをたどって書斎にいってみると、まだ、書きもの机がそこにあり、その上には、円筒がひらいた日の午後、わたしが書きのこしておいた一まいの紙が、そのままになっていた。

わたしは、あの朝のことを思いだした。あれから、まだひと月もたっていないのだ。あのとき、わたしは、とちゅうでペンをおくと、新聞配達から新聞をうけとるために立っていったのをおぼえている。庭までおりていって、『火星からきた人間』という奇妙な話を聞いたのだった。

二階からおりて、食堂にはいっていった。ヒツジ肉とパンがあったが、どちらも、くさりはてていた。それから、わたしと砲兵がたちさったときのまま、ビールびんが一本ひっくりかえっていた。

わが家は、あれはてていた。ながいあいだいだいていた、はかない望みも、きえてしまったのだ。

すると、ふしぎなことがおこった。男の声がしたのだ。

「むだですよ。この家は、見すてられたのです。この十日間、だれも、ここへはきませんでした。ここにいても、あなたが苦しむだけです。あなた以外は、だれも助からなかったのですよ。」

わたしはおどろいて、とびあがらんばかりだった。自分の考えが、声になって聞こえたのだろうか？

わたしは、ふりむいてみた。すると、うしろのフランス窓がひらいた。わたしは、そのほうに一歩近づいて、外を見た。

すると、そこには、わたしとおなじように、おどろきとおそれで、あっけにとられている、いとこ妻が立っていたのだ。

妻は、まっさおになって、かすれた声でさけび声をあげた。

「わたし、きましたわ。わたし、知っていました。知っていました。」

妻は、手でのどをおさえて、よろめいた。わたしはあゆみよると、しっかりと、妻をだきしめた。

10　エピローグ

火星人については、まだ、わかっていないことが、たくさんのこっているが、この物語が、それらの問題を解決するのに、なんの役にもたたなかったことを、わたしは、ざんねんに思っている。

戦いのすぐあとで、火星人のからだが調査されたが、そのなかで見つかったバクテリアは、すべて、地球上で知られているものばかりだった。

火星人が、自分たちのなかまの死体を、うめようともしなかったこと、むこうみずに人びとを殺したということは、火星人が、くさるということについて、まったく知らなかったことをしめすものだろう。

しかし、これは、あくまでも推測であって、けっして、はっきりした結論ではない。

あのようなおそろしい効果をもった黒煙の成分も知られていなければ、熱線の放射機も、なぞのままである。

黒煙の粉末をスペクトル分析した結果、緑の個所に三つの

線があらわれる未知の元素が関係していることがわかった。そして、それがアルゴンとむすびついて、ひとつの化合物になり、血液ちゅうのある成分に、おそろしい効果をもたらすらしい。

シェパートンの破壊のあとで、テムズ川をながれてきた茶色のかすは、そのときには調査できなかったし、いまとなっては、もう、手にいれることもできない。

火星人の死体は、のら犬が食いあらしてはいたが、それでも、できるかぎりこまかに、解剖がおこなわれた。その結果は、まえにのべたとおりである。

現在、大英博物館には、ほとんどかんぜんな標本が、アルコールづけになってのこっている。それをもとにしてつくられた、たくさんの写生図を、みなさんも見たことがあるだろう。火星人のからだの構造については、もっとくわしいこともわかっているが、あまり学問的になりすぎるので、ここではのべないことにしよう。

それよりも、もっとだいじな問題は、火星人たちが、ふたたびしゅう来するかどうかということである。この問題について、もっと注意をはらわなければならぬように思われるのだ。

現在、火星は、地球と、はるかにはなれているが、こんど近づいてきたときに、火星人が、また、しゅう来してくるのではないかと、わたしはしんぱいしている。

わたしたちは、どんなばあいにたいしても、じゅうぶんな準備をしておかねばならぬ。火星の、円筒の発射される砲の位置をたしかめて、火星のそのぶぶんを、つねに見はりつづけ、つぎのしゅう来を知ることはできると思う。

こうしておけば、円筒が地球についても、火星人が外へでてくるまえに、円筒を、ダイナマイトか大砲で破壊できるだろう。あるいは、ねじのぶぶんがひらくとどうじに、大砲をうちこんで、なかの火星人をみな殺しにすることもできるだろう。

天文学者レッシングは、火星人が金星に着陸したにちがいない、とのべている。もう七か月まえになるが、金星と火星が近づいたときに、特別な光をおびた点が、火星の光のあたらないぶぶんにあらわれ、それとほとんどどうじに、おなじような、かすかな黒い点が、金星のうえにあらわれたということから、そう推測したのだ。

火星人が、ふたたびしゅう来してくるかどうかはべつにしても、こんどの事件で、人類のしょうらいについての、わたしたちの考えは、すっかりかえてしまわなければならなくなった。いまや、この地球が、人類にとって安全な永遠の居住地だと考えるわけにはいかなくなってしまった。

いつなんどき、宇宙のかなたから、目に見えぬ幸、不幸が、ふいに、わたしたちをおそってくるかもしれないのだ。

宇宙ぜんたいとしてみれば、火星人のしゅう来は、人類にとって、むしろさいわいであったかもしれぬ。わたしたちは、人類の未来について、のんびりした自信をもっているが、火星人の攻撃で、その自信がうばいとられたのだ。

火星人の攻撃は、人類の科学に大きな利益をもたらしたし、人類がなかよくさかえなければならぬという思想をおしすすめるのにも、おおいに役だった。

火星人は、広い宇宙のかなたから、自分たちのあの先発隊の運命をみつめていて、その失敗をさとり、いちだんと安全な定住地として、金星をねらうことにしたのかもしれない。

それはともかく、これからのち、何年にもわたり、火星にたいするしんけんな見はりがゆるめられることはないだろうし、また、流星がおちるたびに、すべての人間は、なんともいえぬ不安にとりつかれることだろう。

火星人との戦いの結果、人間のものの見かたが広くなったことは、たしかである。円筒が落下するまえは、宇宙じゅうで、わたしたちのちっぽけな惑星以外には、どんな生命も存在していないと考えられていた。

いま、わたしたちは、もっと多くのことを知っている。もし火星人たちが、金星にうつり住むことができるのなら、人間にも、そういうことができるにちがいない。

また、太陽がしだいにひえていくにつれて、この地球に住めなくなったとき、ここにはじまった生命は、おなじ太陽系のなかのほかの惑星になどにながれこむかもしれぬのだ。

生命の種が、太陽系という苗床から、生命のない広い空間に、ゆっくりと広がっていくすがたを心のなかにえがいてみると、その光景は、ぼんやりとしてはいるが、すばらしいものである。

しかも、それは、とおいはるかな夢ではないのだ。

あるいは、火星人のおこなう破壊行為は、すこしひきのばされただけなのかもしれぬ。未来は、わたしたちのものではなく、火星人のものとさだめられているのかもしれない。

火星人のしゅう来によって、わたしの心には、永遠につづくような、うたがいと不安がのこされるようになった。書斎にすわって、ランプのあかりをたよりに書きものをしている

ときなど、とつぜん、下に見える谷間に炎がもえあがり、家のなかがからっぽになって、あれはててしまったようにかんじることがあるのだった。

わたしがバイフリート通りにでかけていって、車がわたしのそばをとおりすぎたり、肉屋の小僧が、馬車を走らせていたり、自転車にのった労働者や、子どもたちが学校にいくのを見たりしていると、ふいに、そういうすがたが、みんな現実のものではないように、かすんでしまうことがある。そして、わたしは、またあの砲兵といっしょに、暑い息づまるようなしずけさのなかを、道をいそいでいるかのように思われるのだった。

夜になると、黒煙がしずかな町を、まっ黒にぬりつぶし、ゆがんだ死体をつつんでいるのが見えてくる。ずたずたにひきさかれ、犬にくいちぎられたそれらの死体は、わたしにむかって立ちあがり、わけのわからぬことを話しあい、そして、その顔は、人間と思えぬほど、みにくくゆがむ。目をさますと、わたしは、夜の暗やみのなかで、つめたくなって、すっかりみじめな気持ちになっているのであった。

また、ロンドンにいって、活気のある群集を見ていると、この人びとは、ゆうれいなのだ、ゆうれいの群れが、しずかであれはてた町をさまよい歩いているのだ、と思えてくるのだ。

そして、ふしぎなことに、プリムローズ丘に立って、煙ともやのなかに青くぼんやりと見える住宅街が、かなたの空にかすんできえてしまうのを見ていると、まだあそこに立ったままの火星人の機械を見物している人たちをながめていると、それらの機械が、あのさいごの日に、くっきりとかがやいて、かたく、しずかに横たわっているのを思いだすのであった。

そして、なかでもいちばんふしぎなのは、妻の手をとるときである。わたしは妻を、妻はわたしを、おたがいに、死んだものと考えているのだから——。

●解説

名探偵シャーロック・ホームズ

長沼弘毅

ぼくが、シャーロッキアンになったのは、どういうわけか、自分でも、はっきりしません。大ざっぱにいえば、推理ということがすきであったからでしょう。また、旧制の高等学校の先生が、『シャーロック・ホームズの冒険』という単行本を一さつもってきて、それを、ただ翻訳してきかせるだけで、ホームズにかんする、いろいろな研究書があるのに、それを一さつも読んでおられなかったからかもしれません。

たとえば、ホームズが、日ごろつかっていたパイプは、どんなものがあったか、その当時、電話があったのかなかったのか、ホームズは、どこの大学に学んだのか、卒業したのか中退したのか、なぜ、女性の才能をみくびっていたのか、物語のなかに復しゅうの話が多いのはどういうわけか、日ごろたいした運動もしないのに、杖術、柔道、ボクシングその他の武術を身につけていたのは、どういうわけなのか。

まだまだ、問題が山ほどあります。ホームズには、はたしてモデルがあったのかどうか、いったい何年に生まれ（一八五二年生まれ説が通説）、たとえば、この本にでてくる「赤毛連盟」のころは、何歳ぐらいであったのか。ワトスンという助手兼通訳兼進行係とは、何年間、いっしょに探偵の仕事をしていたか、ホームズは、室内で、ピストルを乱射して、V（ビクトリア女王の頭文字）の字を書いているほどの名人なのに、なぜ、じっさいの事件のときになると、ほとんど発砲していなかったのか（発砲は、たった二かい）、ピストルを何種類もっていたのかなどなど、ホームズの周辺をあらってみないと、ホームズ物語のほんとうのおもしろさはわからないのです。

ぼくの先生は、そういう解説をしてくれる能力が、ぜんぜんなかったので、それなら、自分で研究してみようとおもいたったのが、ぼくが、世界のシャーロッキアンの仲間入りの資格をあたえられた動機といえば、動機でしょう。

ホームズは、どこからみても紳士そのもののような人物ですが、悪いことに、たばこをやたらにすいます。また、麻薬のコカインを、日になんども注射したりした時期があります。これは、あまり紳士にしてしまうと、人間におもしろみがないので、作者のコナン・ドイルが、ちょっと味つけをしたのでしょう。

シャーロッキアンのクラブは、イギリスとアメリカにあります。定例の会議をひらいたり、年にいちどは大会をひらいたりし、機関誌を発表したりしています。イギリスのロンドンのクラブは、The Sherlock Holmes Society といい、アメリカのクラブは、The Baker Street Irregulars といいます。

ロンドンのほうは、貴族や高官や学者の集まり、アメリカのほうは、やや開放的ですが、げんじゅうな試験をパスしなければ、入会できません。ぼくは、よく、アメリカで、演説をしますが、きいている人びとが、みんな世界的大家なので、うっかりしたことはいえません。

シャーロッキアンというのは、シャーロック・ホームズの活躍ぶりに拍手をおくっているばかりでは、とてもなれるものではありません。まえにも、ほんの一例をのべましたが、シャーロック・ホームズを土台（ジャンピング・ボード）として、当時の風物史を勉強しなければ、だめなのです。つま

シャーロック・ホームズの冒険
原題
『THE ADVENTURE OF SHERLOCK HOLMES』
名探偵シャーロック・ホームズが活やくするC・ドイルの作品のうち、一八九一～九二年に発表された短編十二をあつめた、最初の短編集。この本では、このなかから「赤毛連盟」「五このオレンジのたね」「青いルビー」「まだらのひも」「技師の親指」の五つ、ほかに二ばんめの短編集『回想のシャーロック・ホームズ』から「海軍条約事件」三ばんめの短編集『シャーロック・ホームズの生還』から「あき家事件」をおさめてある。

ドイル
Sir Arthur Conan Doyle
（一八五九～一九三〇）
イギリスの探偵小説家。若いころは医者だったが一八八七年『緋の研究』という小説を発表して、名探偵シャーロック・ホームズとその友人ワトスン博士をはじめて登場させた。以後、ホームズが活やくする探偵小説を多数発表し、探偵小説の分野を確立させたといわれている。

コナン・ドイル

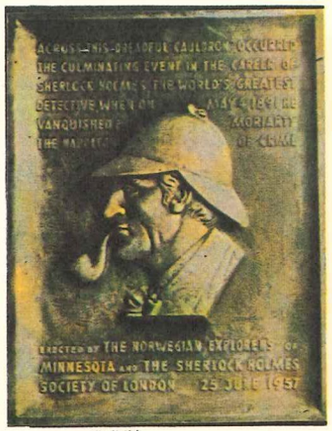
り、ホームズを軸にして、社会的な雑学の領域にふみこんでゆくのです。ここがかんじんなところです。

作者のコナン・ドイルは、エディンバラ大学の医学部を卒業してから、イギリス南西部のドーバー海峡にめんしたサウス・シーというところで開業しましたが、はじめのころは、さっぱり患者がこないので、税務署のほうも税金をとるのに苦心したようです。

そこで、長編の処女作『緋の研究』を書きあげましたが、それを出版してくれる出版社がなく、ずいぶん苦労をしました。ようやく、それが、「ビートンス」という雑誌のクリスマスの増刷版にのってからは、いちやく、大家の王座についてしまいました。

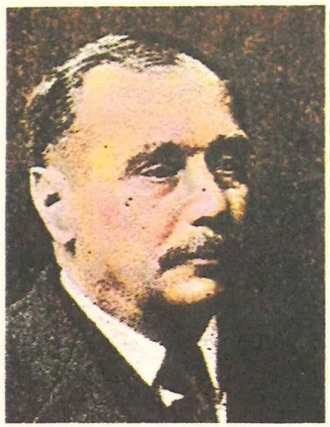
それから、やつぎばやに、長編合計四、短編合計五十六編を書かざるをえないところまで、出版社においこまれてしまいましたが、ドイルは、ほんとうは、歴史物を書きたくてたまらなかったのです。そして、いくつかのすぐれた歴史物をのこしています。

ぼくが、ロンドンをおとずれたのは、一九五八年ですから、いまから約十年まえのことです。例の

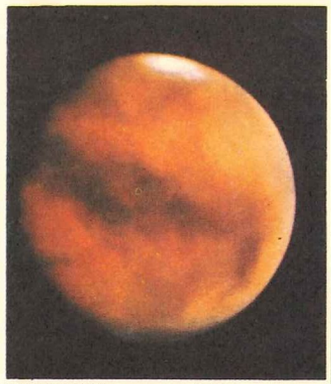


「あき家事件」のまえにおちたといわれる滝にかざられたホームズの像

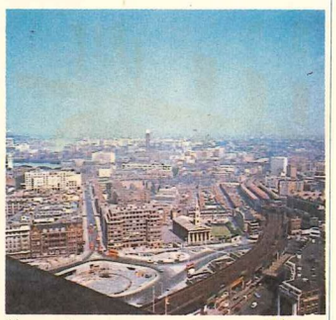
現在のベーカー街 221B
(「アベ・ハウス」の玄関)



H・G・ウエルズ



天体望遠鏡がとらえた火星のすがた
(ウィルソン山天文台撮影)



空から見たロンドン(右下がウォータールー駅、左上にテムズ川が見える)

宇宙戦争
原題
『THE WAR OF THE WORLDS』

一八九八年に発表されたウエルズの作品。空想科学小説の代表的な作品といわれている。一九三八年、アメリカでこの作品をラジオドラマとして放送したとき、人びとが、ほんとに火星人が襲来したと思いこみ、大さわぎをしたことがある。

リージェント・パークから、南にさがって歩くと、四、五百メートルもありましたでしょうか、右がわに、ホームズとワトスンが同居生活をしていたベーカー街の家らしきものがありました。それは、建物のかっこうが似ているというのではなく、番地の二二一Bが、どうもそのあたりらしいとおもわれるからです。

この場所は、地下鉄の駅からほど遠からぬところにあって、ベーカー街の西がわにあります。現在は、「アベ・ハウス」という四階、六階、九階と三種類の階数をもった、かなり大きな建物で、西がわにあるせいで、奇数番地になっていて(東がわは偶数番地)、建物は、二一五から二二九番地までにまたがっています。そのだいぶぶんは、「アベ・ナショナル・ビルディング・ソサイエティ」の本部事務所になっていますが、地階には、いろいろの店がならんでいます。

南から北へみてゆきますと、

二一五　番地表示あり。バークレー銀行支店。

二一七　番地表示なし。「アベ・ナショナル・ビルディング・ソサイエティ」の宣伝ショウ・ウ

ィンドー。

二一九　一九五九年までは番地の表示があり、紳士洋品店であったが、一九六一年現在では、番地の表示消失。やはり、ショウ・ウィンドーになっている。

二二一　番地表示なし。「アベ・ハウス」の玄関。

二二三　番地表示なし。同前。

二二五　番地表示なし。薬品店。

こうしてみると、二二一から二二三までが、「アベ・ハウス」の玄関の入り口になっているようです。

作品を読んでいると、ホームズ、ワトスンのへやは、二階にあり、地階から階段が、十七段あったということになっています（「ボヘミアの醜聞」）が、では、この地階は、どういう状態にあったのでしょう。下宿のおばさんハドスン夫人は、どこに寝ていたのでしょう。また、まれに他人を泊めてやっていますが、二階には、そんなへやはないのですから、三階にもへやを借りていたのでしょうか。ところで、ホームズ、ワトスンが共同でつかっており、そこで事件の依頼者にあっていたへやのなかのもようは、どんなふうなものであったでしょう。作品をよく読んで、メモでもおとりになったら、ぼんやりとようすがうかんでくることでしょう。

偉大なる探偵ホームズの銅像をたてようという意見が、いちじ、あちらこちらで、となえられたことがありましたが、銅像などというものは、死んだ人間をたたえるものである。しかし、ホームズは、こんにちでも、生きていて、世界じゅうの読者をひきつけている。銅像をたてることは、ホームズを殺してしまうものだ、という強硬論がもちあがり、とうとうとりやめになったことがあります。それほど、ホームズの生命は、長くつづいているのです。

ウエルズ

Herbert George Wells

（一八六六～一九四六）

イギリスの小説家、文明批評家。貧しい商人の家に生まれ、苦学しながらロンドンの理科師範学校を卒業、教員をしながら小説を書きはじめた。はじめのころは自然科学の知識と空想力とをむすびつけた作品『タイム・マシン』『透明人間』『宇宙戦争』などを発表、空想科学小説の分野を確立させたが、のちには『世界史大系』『生命の科学』など、文明批評の作品を多数発表している。